

---

# 悪の道奮闘記

うめぼし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪の道奮闘記

### 【Nコード】

N4721G

### 【作者名】

うめぼし

### 【あらすじ】

悪の組織の一員（かかし）であるサイカは今日も彼女を募集しつつ働いていた。敵は無敵の正義の味方、しかし未だ戦ったことは無し。いい加減バトルしたいし活躍したいしまともな職にも就きたいサイカは誓う。「俺、デルビルもらったらこの職場、ってか悪の組織辞めるんだ！」

## 登場人物紹介（前書き）

現在第24話までの登場人物まとめ。

登場人物のトレーナーが持っているポケモンについてはまとめては  
いませんが、機会があればまとめるかもしれません。

## 登場人物紹介

キャラクターを忘れてしまったとき用にでもお読みください。

オリジナルキャラがうまくっているので、誰が誰だか分からなくなつた人（と作者）用に作ってみました。

こいつ誰？ 覚えてないな。でも前の話に戻って探すの超めんどうしって時にお役立ちになってくれる（ことを祈っている）人物紹介です。

（全体的におそらくネタバレですのでご注意ください）

簡単すぎる人物設定

>サイカ

主人公。基本的に心の中でぎゃあぎゃあ騒いでいる。主人公なのに名前をあまり呼ばれない。

悪の組織のしたっぱ。したっぱの中でも更に下の地位に位置するししたっぱ。

悪の組織にいるくせにレンジャーの資格持ち。またどこか正義感が抜けていないので悪の組織の一員というより、どこにでもいる普通の人。

おそらく女運が悪い、そのせいもあってか彼女はいない。ので現在彼女募集中。

不遇の存在である悪タイプをはじめ、ゴースト、毒、電気（は不遇ではないが）のタイプを持つポケモンを愛し、彼の持っているポケ

モンは常にこのタイプの内のどれかを兼ね備えていてある意味とても弱点をつかれやすいパーティ構成となっている。

エスパーを非常にライバル視していて、ミラクルアイの登場に胸を痛めている。

ところどころ跳ねている特徴的な黒髪で、男にしては大きめの目をしている。身長は平均よりやや高めだが猫背なためそうは見えない

(マシ口談)

>マリリン

サイカが出会った10歳くらいの女の子。姉に対してコンプレックスを持つ。

いろいろと無茶をしたり暴走したりするのは姉譲りの性格、そしてその暴走にサイカが巻き込まれる形であった。サイカにとってはトラブルメーカー的な存在。

リクに対して甘酸っぱい感情を抱いている模様。

肩くらいまでのストレートな黒髪、目はぱっちり大きくて見た目的には子供だが、どこか違和感を覚えずにいられない雰囲気がある。お嬢様っぽい雰囲気かも。(サイカ談)

ガーディのディオが彼女の唯一のパートナー。

>リク

エンペルト使いの凄腕トレーナー。10歳前後に見える年齢からは想像できないほどの腕前。

サイカが仕事をしている「悪の組織」のダミー基地やら支社やらを

完膚なきまでに潰しているため、サイカからは「正義の味方君」と心の中で呼ばれている。  
強い相手とバトルをするのが好きで、たとえ相性が悪くともごり押しで勝ちに持っていけるほどの実力を持っている。マリンとは甘酸っぱい雰囲気をかもし出す仲。

生意気そうにつりあがっている目が特徴的（おそらく眼力がハンパなくある）

また彼の相棒のエンペルトは、皇帝のオーラを身にまとっている（サイカ談）

>アクア

マリンの姉。重度のシスコンでよく無茶をしたり暴走したりする。二十歳でサイカと同年。

リクを含めた仲間と共に旅をしていて、最近悪の組織の本社がある街に帰省したらしい。

リク達と旅をしているせいか、彼女の持つポケモンはかなり強くジムバツジもいくつか持っている（ただし本人はリクより弱いと自己評価している）

顔立ちや目つきは妹であるマリンと似ているが、雰囲気は活発的な感じで妹とはまた違うタイプ。

だが中身は一緒（サイカ談）

彼女の持つポケモンにはニックネームがついており、そのニックネームは全て香水の名前からとってきたもの。

>マシロ

サイカが所属する「悪の組織」の幹部で紅一点、ミスをしないう完璧主義者。

とある街に住んでいたが、一番の友人でもあったトゲキツスのゆきを得体の知れない男たちに奪われ、男たちからゆきを奪還するために旅立つ。

その後ゆきを取り戻すために今いる組織に潜入するがいつの間にか性格が歪んでしまい、ゆきを取り戻すという目標は変わっていないものの、ポケモンと人との絆を壊したくてたまらなくなってしまった。

「氷のお姫様」と呼ばれているらしいが本人はそう呼ばれることを嫌がっており、またたとえ同僚といえども名前を呼ばれることも嫌がる。

一週間後のある計画のために、サイカの上司としてチームを組むこととなった。

白い髪は雪みたいで透明なイメージを与えるのに、彼女の鋭い目つきや「寄らば斬る！」みたいな雰囲気やらキツめの口調のせいで冷たい印象（サイカ談）

>イチカ

サイカが所属する「悪の組織」の幹部でマシロの同僚。

マシロが失敗するところを個人的には見てみたいという、なんかアシな人。おもしろいこと大好き。

どんなに冷たくされても気にせずにマシロに話しかけている。

人に変なあだ名をつけているが、本人は自分のセンスを悪いものだとは思っていないらしく悪意はない。だがそれが余計に人を苛立た

せる。

燃えるような赤い髪をしており長身で人並み以上の顔をしているが、目つきが悪いため睨んでいるように思える（マシロ談）  
ガールズトークにちよくちよく出てくる男らしい。

>リーフ

サイカが所属する「悪の組織」の一員。通称インテリ君。  
ポケモンバトルが得意ではなく、組織ではもっぱら作戦係を担当。  
ポケモンの知識はあまりない。

過去、マシロのおかげでしばらく檻つきの病院で過ごすことになったらしく彼女が大の苦手。

いつも敬語で、ひよろい。男なのだが言動のせいで女っぽく見えてしまう。（そのため一部からオカマ疑惑がでている、らしい）

青い髪に眼鏡をしていた、いかにもなインテリ系が漂っているがなぜか髪は青。どうしてか青。絵の具かペンキでもぶっかけられたんじゃないかってほどの青。（サイカ談）

>図書館で出会った男

サイカの知っている（がどこで知ったのか思い出せない）香りの香水を身にまとった男。

ストレートで首近くまで伸びている茶髪で、目や鼻や口のバランスも整っているイケメン。

やんわりとした雰囲気と口調のせいか凄く優しいそうに見える、遠目から見たら中性的で女に見間違える可能性もないことはないが、かな



り男より。保育士とかしてそんな感じ（サイカ談）

>サイカの従兄弟

時々サイカの考えの中だけに現れる従兄弟。サイカよりいくつかが年が上。

サイカがポチエナ（現在のグラエナ）とパートナーであり最初のポケモンになるきっかけを作った張本人。現在は牧場を経営しているらしい。

チートを使って出来たような存在で、バトルやコンテストなんでもござれで将来を期待されていたが、ある日突然牧場主になるため家族と縁を切ってまで家を出て行ってしまった。  
番外で活躍予定だが今の所出番無し。

## 登場人物紹介（後書き）

そろそろ必要かと思いついて、簡単な登場人物紹介です。  
とりあえずキャラを誰か忘れたとき用となっておりまして、あま  
り詳しいことは書かれていません。  
キャラが増え次第追加する予定です。

## 第1話 青年とグラエナ

空を見上げれば、ギラギラと太陽が照りつけ雲ひとつない晴天模様。おそらくはこの近くにいるトレーナーの指示でポケモンが「日本晴れ」を使ったに違いない。でなければ先ほどまで雲があつた空がここまで綺麗に晴れるものか。

今の季節を考えれば暑くて暑くて仕方がない。

……のだがグツジョブだそのトレーナーとポケモン！もしくは自分の意思で技を使ったのかもしれない野生のポケモン！

この天気は俺にとってまさに有利に働く状況を作ってくれる。ありがたい天気この上ない。

汗のせいか少しだけずれた右耳のイヤホンを直しつつ、俺のいる場所からは少し遠くにいてこちらにはまったく気付いていない一匹のヤドランを指差す。

まだ狙っているのがバレちゃまずいからな、声には出さず指で標的確認。

その俺の動きに、俺の隣にいたグラエナが姿勢を低くし唸り声をあげ攻撃姿勢を整えた。

少し毛を逆立てているのはこれからの戦闘を予想しているからだろうか。

そうしていつでも走り出せる準備をした後グラエナがちらりと俺を見、俺もグラエナと目を合わせて頷いたところでグラエナに指示を出す。

「グラエナ、噛み砕く！」

俺の命令を従順に聞いたグラエナが、野生のヤドランへと向かって大きく口を開いて走り出す。

一直線に相手に向かって走っていく姿は遅しくもあり、太陽の光を浴びて長い毛がキラキラと輝いて綺麗にも見える。

1mはあるグラエナがこんな風に一直線に向かってきたら見惚れる前に恐怖が襲うだろう。

なんとたつてグラエナは噛み付きポケモン、その名のごとく鋭い牙でどんな奴だろうが容赦なく噛み砕く。

それに対して緩やかに、だが噛み付こうと走り出してきたグラエナに気付き、逃げようとヤドランは動き出した。

だがいかんせん鈍い動きだ、もともとぼけっとしているヤドランに素早さを求めてもどうしようもないのかもしれない、あるいはこの日本晴れの天気暑さに参ったのか。

ヤドランは水タイプであり、普段なら水の中で生活しているポケモンだ。体温も低いはず。

それなのにこの暑さ、行動を鈍くさせるには充分だ。それに水タイプの技の威力も落ちる。

まさに俺とグラエナにとって有利な状況。

素早いポケモンではないが、決して遅くはないグラエナがそんなヤドランに対し先手をとることなどたやすい。

グラエナはあつという間に距離をつめてその鋭い牙で遠慮なくヤドランに噛み付いた。

だがヤドランもただ単に噛み付かれるほど馬鹿じゃないのか、間一髪のところではエルダーが変形したと言われている巻貝を盾にすることでそれを防ぐ。

しかし、それで怯むような俺のグラエナじゃない。

「グラエナ、そのまま噛み砕け！」

俺の声と共に顎に力を入れたグラエナは、巻貝の固さもなんのその牙を立てる。

それにマズイと思ったヤドランが逃げよう噛み付かれた尻尾を振りまわしグラエナを振り落とそうともがくが、もともと攻撃力の低いヤドランがもがいたところでグラエナに力負けするのがオチだ。

案の定グラエナは尻尾を振り回すヤドランの体を顎と牙の力だけで浮かせる。

そしてそのまま地面へと叩きつけ、ヤドランがそのダメージに怯んだところで更に顎と牙に力を込めた。

やがて、そのダメージに耐え切れなくなった巻貝に小さなヒビが入る。

「よし！このまま……！」

一気に決着をつけてしまおうとグラエナに命令しようとしたところで、不意に地面が陰りだし始めたことに気付く。

先ほどまでは晴天だったから地面は眩しい太陽の光で木陰を探すほうが難しかったはずなのに！

慌てて空を見上げれば、そこには先ほどまでの天候とは打って変わって暗雲がたちこめ始めていた。

日本晴れ、の天気ではない。むしろこれは逆の……

「っ、グラエナ！距離をとって身代わりだ！」

慌てて指示を出せば、グラエナは噛み付いていた巻貝から牙を離して距離をとる。

そしてそのまま身代わりを作った途端、空から大粒の雨が降り始めた。

だあああああつ！！誰だ日本晴れを雨乞いで打ち消したやつ！

おかげでこっちは軽くヤバイ状況になってきちゃった！よりによって雨乞い、こっちの不利になる天気だ！

ヤドランもそれを悟ったのか、巻貝のお返しだといわんばかりにグラエナに対し水の波動を放つことで応戦し始めてくる。  
雨乞いの効果のせいで威力のあがったそれは、グラエナの身代わりなど一発で壊してみせる。

雨が降っているときに効果を発揮する特性が無いのと、ヤドラン自身が高威力のハイドロポンプを覚えないのが不幸中の幸いか…。  
どちらにしても不利な状況にはかわりないけどな！

「くっ、グラエナ、不意打ちから身代わり！」

身代わりを壊され威力の高い水の波動の威力を見たグラエナはそれでも怯むことなく、冷静に俺の言葉を聞き動いてくれる。

俺の方が焦っているくらいだ、本当に頼りになるよお前って奴は！  
先ほど離れた距離を詰めて、もう一度水の波動を放つ体制に入ったヤドランを不意打ちで攻撃し、ヤドランがぐらついて攻撃するタイミングを損ねたところで身代わりを作る。

すぐに攻撃態勢に戻ったヤドランに身代わりを消されてしまうが、  
こればかりは仕方が無い！

だがこれ以上身代わりを続けると体力が厳しくなってくる、その前に決着をつけなければマズイだろう。

身代わりを出せるのは最大4回まで。あと2回、ヘタをすれば1回が限度だ。

だが…！

「もう一度身代わり！そして背後に回って噛み砕く！」

だからといって水の波動に盾もなしに突っ込むのはまずい、ただでさえ身代わりで体力を半分近く消耗しているグラエナにそんなことさせるなんて虐待だろそりゃもう。

なのでここは身代わりを囿としてグラエナにはヤドランの背後へとまわってもらおう。

ヤドランの方はグラエナの身代わりに気を取られ、そっちに向かって攻撃してくれたので失敗することなくもぐりこむことが出来た。本当なら早足で素早さをあげた後やるのがベストなんだが、まあ今回の場合ヤドランが元々鈍足のせいもあって素早さをあげなくともしっかりとまわりこめた。

そして今度はヤドランが巻貝を盾にする暇を与えず、本物のグラエナを探しているヤドランの柔らかい背中に強烈な噛み砕くを見舞いする。

この攻撃の前に巻貝への噛み砕くと不意打ちのダメージがあったおかげだろう、固い防御力を持っていたヤドランも流石に効果抜群の技には耐えられず目を回して倒れた。

「よし、これで…！」

最後の仕上げに、気絶しているヤドランに対しモンスターボールを投げれば俺のやるべきことは完了だ。

すっかり気を抜いて腰のホルダーからモンスターボールを取り出し投げつければ気絶しボールから出る体力もないヤドランは簡単に捕獲されてくれた。

ボールを投げるのは苦手だったんだけど標的が動いてなかったからなんとか当てられたもんだ。

あー、当たってよかった。外れたらそのボールをグラエナに銜えてもらって目を回しているヤドランの体に直接ボールを当ててもらったことになってた。

うーん、情けない。

ゲットの様子を眺めていて俺がミスった時のことを考えてその場にいたグラエナも、戦闘が終わったことを悟ったのか俺の傍まで駆け寄ってきて、喉を鳴らしながら俺の脚へと体を巻きつけてくる。

雨で濡れているためズボンがちょっとあれなことになったが、…まあいいか。

「お疲れ様、グラエナ」

そんなグラエナの背や喉を撫で、俺は今日も頑張ってくれたグラエナの体をケアしていく。

直接的なダメージを受けていないとはいえ、身代わりを何度も使ったのだ。

この間買ったミックスオレをバッグから取り出し飲ませ、グラエナの体力回復を確認した後俺は一応のことを思っただけでグラエナの口を開けさせ牙の方の調子を見る。

あの固いといわれているヤドランの巻貝に噛み付いたのだ、傷がつ



いていてもおかしくはない。

だが尻尾を振って機嫌を表すグラエナの口を覗けば、傷ひとつなくキラリと光っている鋭い牙が見える。

どうやらグラエナにとってあの巻貝はたいした脅威ではなかったらしい。凄いで俺のグラエナ！

今なら、あのラッタにすら牙勝負で勝てるんじゃないかと思えてくる。

さすがは俺のグラエナ、イカス。超クール。

俺のグラエナに勝てるグラエナなど存在しないだろう。特に牙で。

ああよかった、ヤドラン相手に勝負してみてもよかった！

おかげでまたひとつグラエナのいいところが知れた！ビバグラエナ！

もう俺の気分はハイ、絶好調ってやつだ。

今なら四天王さえ倒せそう、そんな気分だ。実際は倒せないだろうけど、気分はチャンピオン（偽）

そんなハイテンション野郎である俺の名前はサイカ。今年で20になる、誰もが認めるイケメンだ。

……え、いやまじで。イケメンだよ、性格が。

顔？ ……人間、顔より心だよ中身だ！結婚するなら顔より傍にいて安らげる人を伴侶にしたいだろ！

そついう意味では俺はイケメン。

彼女は現在募集中。出来ればポケモンが大好きな子がいいです。  
……いや、高望みはするまい。

そんなイケメン（いい加減痛い人だな…）な俺は少々特殊な職業についている。

一見すると一般人なだけどな、中身は違う。ただしスーパーマンとかそういうんじゃない、もっと悪い方向。

そう、俺は悪。警察に一発で捕まるような職業……所謂、悪の組織の一員だ。

まあかつこいいのは名前だけだけどな。

悪の組織、どうしてなのかいつの時代にも正義のヒーローには弱いのだ。

どこかのロケットやらマグマアキラやらギンガよろしく、正義の味方には弱い。

同じ正義を掲げている警察からは簡単に逃げられるが、正義の味方（それも子供、10歳くらいのは）には非常に弱い。

なにこの弱点、可笑しくないか？

でも弱いだから仕方が無い、毎度毎度負けるのは事実だし。

警察敵にまわしてもななんとかなってるのに、子供を敵にまわした途端に破滅する組織。

普通ありえないよな、でも悪の組織に限ってはありえる。それが恐ろしいところだ。

R団から始まり、名のある悪の組織は大抵子供に破壊されてる。最近の子供って、恐ろしい。

俺はしたっぱ（両親も今俺が所属しているこの悪の組織のしたっぱ

同士、そして社内（組織？）結婚をした仲だ）なので組織が潰れてもさっさと逃げられるからいいけど。

そもそも俺がこの組織にいるのも他に働き口がないか……いやなんでもない。

人生可笑しすぎる、なんで俺が悪の組織以外の職業に就けないんだ。ポケモン関連の職業に就けども3日も経たずに辞めてくれと言われるってどんな才能だよ。

俺、頑張ってるのに。超頑張ったのに。何がいけないというんだ。初めて長続きしたのがこの悪の組織ということに涙する。なんだこの運命。

頑張ってるのに、俺頑張ってるのに。他で働いていた時の方が100倍は頑張ってたのに。

まあその組織も今は壊滅の道へ一步步近づいているんだけどな。

最近正義の味方が現れて俺らの組織を潰そうと頑張ってるから、そして組織は喧嘩売られるたびに負けるから！

ちなみに俺はその正義の味方君に俺は負けたこと無い。

いや負けたこと無いというか、勝ったことが無いというか、戦ったこともないというべきか。

なんとというかこの組織、俺がまるで活躍できないんだよね。なにこの嫌な組織。

それはお前がしたつぱだからだろうと言われればそれまでなんだけど。

俺のやる気を削ぐ原因はこれが多大にある。だから頑張れないんだよ。

評価される前にまず評価の対象になることが出来ない。

だって幾つかある内の一つのダミー基地に正義の味方が乗り込んできて戦おうとしても

『よく来たな、ここでお前の運命もつき』

『貴様が、仲間から連絡が来てるぜ！貴様はここで俺が倒す！』

『え、ちよ、俺がたたかっつて』

『お前はボスに報告してくれ！なあに大丈夫さ、俺一人で倒せる！』

といわれ仕方なくボスに報告している内に仲間は破れその基地は崩壊するし。

折角俺報告に走ったのにね！俺が戦えばよかった！

…とは思わなかったけど。どうせ俺負けるし。

その時の仲間はジュンサーさんと一緒に地獄への片道キップをゲットだ。

そしてまたその次に任務であった時は

『お前は！ここでお前を倒せばすべてが』

『侵入者だ！くそつ、ここは俺が出る！』

『おま、俺がたたかお』

『大丈夫、俺が防いで見せるさ！』

その仲間は今防げなくて牢屋の中で生活しているけどな。簡単に捕まるんじゃないやええええ！！  
どいつもこいつも俺の活躍の機会を奪っていくんだよ本当に。いや、活躍というよりは仕事をか。

俺、組織に入ってから一度も任務とかでバトルしたことないし。  
やったことといえば報告とか報告とか調査とか調査とか報告とか…  
…。

今回のヤドランゲットだつて月イチで組織に献上しなきゃいけないポケモンを捕獲しておくためだ。

このヤドランは組織経由でちよつと遠い所にあるカジノの景品にされる運命。

俺の所属している組織はカジノも運営しているから面倒なんだよな、こういうノルマがあつて。

でもこのノルマ達成しないと即クビだし。さすがにそれはまずい。さすが悪の組織、厳しいぜ。

まあ実際のところ悪の組織の一員がカジノの景品になるポケモンをゲットしているなんて聞こえは悪いが、実をいうと逮捕されることをしているわけじゃないんだよなこの行為。

なんとかキャンペーンに参加してくれた人の中から抽選でポケモンをプレゼント！なんて企画が普通にあるこの世の中、カジノの景品にポケモンがいたつてなんら可笑しくは無い。

まあさすがにカジノの景品はないだろつてことで反対派は存在するらしいが、まあ今のところ違法つてことにはなつてない。

だからタマムシにあるゲームセンターだつて未だ（一時期はR団が関わつてるといふ噂まであつたのに！）つぶれて無いし。むしろ大繁盛中だし。

ただ悪の組織でカジノを運営しているからこういう仕事も必要なだけつてこと。

俺の組織が悪いことしてらつてバレてなきゃ警察も何も言つてこないお仕事だ。

本当に悪人つぽくねえな俺。

だから俺したつぱのままなんだと思う、いい加減少しだけいい地位にあがりたいて。

……いや、幹部とかになつたら組織が潰れたとき逃げ切れなさそうだからそれより下で、でもそこそこの地位につければ充分だけど。したっばって給料も少なくて嫌になる。おまけで休みの日には日雇いのバイト三昧だ。

誰か給料あげてくれ、まじで。よくこの給料で両親暮らしていけたよ。

「つかこの給料でなんで結婚して俺を生んだよ。明らかに金やべえじゃん。」

金欠になつた二人は組織から足洗つて今はまともな職についてるし。ちなみに、なら最初から就いてればよかつたじゃんなんて前に言つたことがあるけどその時は「じゃなけりや母さんに会えなかつたから俺はあの組織に感謝している!」「あなた!私もよ!」と惚気られたし。

両親の惚気ほどきつついものはないよな…俺アレで反抗期になつたもん。

そんな組織にいま俺が就職しているっていう可笑しな状況なんだけどさ。

いや他に長く続いて給料がいい職があるんならやめるよ? 今は無いただけで。ああ、何故無いんだ…

「グラエナ、俺あとどれくらいしたっばやればいいのかな…」

思わず弱音を吐けば、大丈夫だといわんばかりにグラエナが俺の手に甘噛みしてきた。

あはは、励ましてくれてるんだな!わあ嬉しい、けど痛いから放してくれ。

あの鋭い牙が手に当たるあたるあたるあたつてるからああああ!!

「グラエナ、口あけて！お願いあけて痛いから！」

そう指示してグラエナの口を開けさせ、慌てて自分の手をそこから抜き出す。

手にはしっかりと歯型がついていて、おまけにちよつと血まで出ていた。泣ける。しかも涎っぽいのもついてるしこりやないぜグラエナ……。

そりゃグラエナの口内に俺の手が入ってたんだから当然っちゃ当然なのか。

でもグラエナは俺を思っでしてくれたんだらうと感動して、強く出れない俺を誰か許してくれ。

甘噛みレベルで済ませてるし。本気なら間違いなく手とはおさらばしてるし。

ポケモンのしつけはちゃんとしろ？ 他人には迷惑かけてないんだらいいだろ少しくらい甘やかしても！

ああ、いつそ正義の味方になればこんな不幸なことばっかりにはならなかったんだらうか。

思わず今敵対している少年を思い出す、あの少年は見た感じ非常に生意気なガキっぽかった。

目は釣りあがってるし俺らを睨んでくるしパートナーっぽいポケモンはあの有名なシンオウの御三家とも言われるエンペルトだ。

超ヒーローっぽい。エンペルトつかってくる辺りがなんかヒーローっぽい。

ロケット団とかを倒した正義の味方たちはその土地の御三家がパートナーだつて聞くし。

なんだ、ヒーローには何か条件でもあるのか。なんだ、なんなんだ本当に。

でもま、ここはシンオウじゃないんだけどな。でもテレビで話題になるような新種のポケモンもない。

シンオウから海を挟んでちょっと離れた場所で、一応シンオウとは違う島なのだが距離もそんなに離れてないしほとんどシンオウと言ってもいい。

ちよつとな波乗りすればすぐにシンオウ地方に辿り着くレベル。

だからある意味エンペルトもこの土地の御三家なんだろう。

だからエンペルト（笑）なんて思った途端ハイドロポンプでサヨナラだ。さすが御三家、パネエ。

いやエンペルト（笑）なんてことはなすないけどな。エンペルト強いし。

でも水には電気だろ、なんて突っ込んだなら高速移動で詰まれてサヨナラ。

オマケに鋼がついてるから硬いこと硬いこと。アクアリングで体力回復しまくることしまくること。

……ま、俺は戦ったこと無いからいつも見物するしかないんだけどな！

皮が向けて血が出ている手にポケットから出したバンソーコーを張りつけながらため息をつく。

相変わらず組織じゃしたっぱだし、もうすぐ潰れそうな予感ハシバシするし、正直もうこの仕事をやめたい。

でもやめられない。

やめられないのはもうしばらく経ったら組織から新しいポケモンをもらえるからだ。

所謂ポーナスというやつだ。したっぱにまでポーナスなんて優しい



ぜ悪の組織！

ちよつと財布が潤うくらいの金なら未練を残しつつ辞めることも出来たんだが、ボーナスは残念なことに金じゃない。俺は嬉しいがな！んげならボーナスはポケモンだからだ、それもこの地方では珍しい部類に入るデルビル！デルビル好き、悪タイプ大好きな俺からしたらどうしても欲しいポケモンだ。

やっぱポケモンは悪タイプが一番だ。時代は悪、でもゴーストと毒と電気も捨てがたいよな。

シンオウにいけばデルビルなんてすぐに手に入るからしたっば仲間には皆ボーナスに期待なんてしてないけど、俺は違う。

悪タイプのポケモンがもらえるのならばたとえそれが既に持っているポケモンだろうが大喜びでもらう！

だから今の俺はデルビルのために悪の組織をやっていると言っても可笑しくはない。

むしろそれが正解だ、早くこい俺のデルビル！

幹部とかにはもつといいポケモンがボスからもらえるらしいけどそんなの関係ねえ！

悪タイプでないのなら（ゴーストと毒と電気も捨てがたいけど！）興味ない！むしろしたっば万歳！

まあ俺が目指すちよつといい地位でも貰えるのはデルビルだから昇進しても問題ないんだけどな！

昇進して給料高くなってデルビルもらいてー。でもデルビルもらったら昇進の有無に関わらず辞めてちゃんとした仕事に就く！

ああ、早くボーナスこいボーナスこい。

もらったら立派なヘルガーにしてやるう、どのヘルガーよりも強い

ヘルガーにしてやろう。

遠い地方の悪タイプの四天王はヘルガーをエースにしてるって話だし、ああもうカッコイイよなヘルガー！

はやくもらえないかな、とテンションがあがってきて高揚している気分を持って余していると

『侵入者だ！配置に着け！繰り返す、侵入者だ！』

突然耳につけていたイヤホンから聞こえてきた声に高揚が一気に下がる。

ちよ、侵入者とか。どう考えても正義の味方のあのちっちゃい少年しか思いつかない。

そこまで思ったところで、実は俺、基地の警固をさぼってノルマ達成しにここまで来ていたことを思い出した。

あああやっちまった普段ヒマだから油断してたああああ！！

え、なにこれ。俺の留守を狙ったってこと？　それはないか。まあ俺の職業怠慢がいけないのは百も承知だが。

バレたら即クビ、バレたら即クビ、バレたら即クビ！

クビということは即ちバイバイデルビルになってしまう！

ヤバイヤバイと心の中で叫びながらグラエナを戻し、ベルトにつけていたダークボールを投げる。

そして投げたダークボールの中から出てきたドンカラスの両足を素早く掴んでそのまま「空を飛ぶ」を命じた。

俺のドンカラスは背中には乗れないという欠点があるから両足に捕

まるしかないのだ。

普通のドンカラスでも背中は無理っぱのに、俺のドンカラスは普通の奴より一回り小さい。

どう考えても俺を乗せるのは無理、だから足に捕まる。

後は俺の腕力とドンカラスの気合いでどうにかするしかない。

最近ドンカラスの足が太くなっているのはそのせいだろう、体力までついてきてるみたいだ。

いいんだか悪いんだか分からない、おかげで俺も腕の筋肉は凄いことになってるが。

「行くぞ、ドンカラス！」

どうせ俺が着いたころには基地は全滅してるだろうけどね！

あの少年やること早すぎるのだ、きつと基地中水浸しで使い物にならなくなっているはず。

あいつのエンペルトやることひどすぎ、前に潰された基地の中では泳げる状況になってたとかどんだけだよ。

でも今回雨乞いで濡れてしまった俺にはちょうどいい！運がよければサボリがバレない、かも…！

そんな些細な希望を胸に、高確率で即クビを言い渡される可能性があるある基地へと向かった。

## 第2話 青年とドンカラス

朝起きて、家で支度を済ませた俺が外へ出て一番に向かう場所は「みたまのとう」と呼ばれるへんてこな石が飾つてある場所である。借りているアパートから決して近くはないものの、俺は飽きることもなく毎日通う。

そこでお祈りをし、その後で今日一日にするべきことを始めるのが俺の日課なのだ。

幼い頃からの習慣だ、逆にやらないと変な感じになる。

ところでみたまのとうってどう書くんだろうな。正式な漢字は実は知らなかったりする。

それはこのとうの名前が突如変わってしまったせいでもあるんだけど…、いや名前が変わった後俺も調べようとはしていないから結局俺の勉強不足か。

ちなみに最初は岩のとう？ とかいう名前だったんだよな、たしか。

でもある日、探検の途中で見つけた変な石をとうのくぼみにはめたら名前が変わった。

近所に住んでたじいちゃんが「みたまのとうだ」って言ってたから変わったんだと思う。実際はじいちゃんが勝手に名付けたのかもしれないが、とにかく変わったのだ。

石一つで名前まで変わるとか、すごいとうだ。

でもとうってまさか、塔じゃあねえよな？ 塔つつーよりは、石を固めて出来たもんみたいだし。

でも祈るときに漢字うんたら前の名前うんたらは関係ないのでこの際無視しておく。知らなくても忘れていても困らない。

子供の頃にここを発見して以来当たり前のようになんて祈りをしている俺、なのだが特に深い意味はなかったりする。

それなのになんで毎日ここで祈りしてるんだらう俺。時々不思議に思うこともある。

信仰深くはないし神様とかそういうのは信じてないはずなんだけどなあ。

なんていうか、子供の頃何かの真似事でやったごっこ遊びがここまで続いちゃったというか。

ところで聞いてくれよみたまのとう。

正義の味方君のことを止められなかったからって俺上司に怒られちゃったんだよ、おまけに水浸しの基地の掃除までさせられそうになった。

俺は何もしてないのに！……あ、何もしていないからマズかったのか。

でもあの水のおかげで雨乞いを思いっきり受けたことばバレなかった。ここだけは救いだ。

しかし掃除って、あの水の中を掃除って。

信じられん、まああの基地は使い物にならないって判断がついたからしなくてすんだけど。

あれでまだ使おうってことになってたら掃除を命令された俺含むしっばが過労死してもおかしくないと思うんだ、うん。

しかし上司だって正義の味方君を止められなかったくせにしたつぱばかりに責任を押し付けられないでほしい。

俺は見えないが基地が潰されたってことは多分負けたんだろう、それなのに掃除するハメになるのが俺たちしたつぱのはずだったって、どういうことだ格差社会かこれが。

まあ結果それは無くなったし、仕事のサボリもバレずにこうしてクビにもならず今日も元気に出勤してるんだから結果オーライというものが、それとも不幸中の幸いというものが。

仕事さぼってたなんて知られたら……うん、今頃どうなってるんだろう。

きつとデルビルを貰えずにニート状態だったと思う。本当にバレなくてよかった……。

それにもともと今回駄目になった基地はいつも働いている職場じゃなくて、たまたま人数が足りなくて派遣みたいな感じでいっただけ、に後始末が大変だった。

だって仲いい人いないし（まあそのせいで結構堂々とサボれたんだけど）片付けとかもずっと一人ぼっち。時々したつぱの人と雑談とかするけどやつぱ派遣だからすぐ他に行くって皆知ってんじゃない？だからアウェイってやつですよ、皆優しくくないの。

そしてそんなぼっちで可哀想な派遣に、正義の味方に基地を潰された八つ当たりを幹部の人がするのはやめてほしいの、ホント。

でもその幹部の人が美人なお姉さんだったので文句が言えない俺、ヘタレかもしれない。

決してそういう属性があるわけじゃない、だが美人にや弱いだけだ。

みたまのとう、俺ってダメ人間なのかな？

……悪の組織の一員である時点でもうダメ人間だよな……うん、分かってた……。

パン、と一度手を合わせ音を鳴らす。今日のお祈りもこれで終了だ。そういえば最近なんかみたまのとうがおかしい。なんつうか……なんだろ、よくわかんないけど。

なーんか可笑しいんだよなあ、別に調べてみても変わったところはないんだけど、でも何かが可笑的い。

勘っつーかなんつーか、ざわつく感じ？ うーむ…。

ま、どうせ気のせいだよ。最近ストレスが多いからそう思うだけで……有給、とろうかな。どこかの温泉に癒されにいきたい。フエン行きたいなフエン。

あそこ温泉が有名だし、ポケモンセンターが経営している無料で入れる温泉もあるそうだし。

フエン煎餅も安いのに美味しいって有名だから金ためたら有給でもとって、

あ、したっぱに有給なんて大それたもんねえや。

みたまのとうからドンカラスを使って空を飛んだ俺は、そのまま仕事場へと向かう。

水浸しになったところは使えないから、今日からまたいつもの仕事

場に復帰だ。さよならアウェイ！こんにちはホーム！

しかしやることといえば普通に働いている人のように書類だったり雑用だったり。

だからなのだろうか、悪の組織に入ってるって気がぜんぜんしない。ポケモンの誘拐だとかはしたつぱの中の時つぱ、つまりエリートしたつぱがやってるし。

俺やりたくないから助かるけどさ、ああいう仕事をやってるやつらが後々偉い地位にいたりするんだよなあ。

でも高望みも野望もない俺としてはエリートよりちょっと下のしたつぱを希望したい、誘拐とかやりたくないし。

給料それなりによく、でもバリバリ悪の組織の仕事をしなくらいの地位。

まあ今のしたつぱの中でも下の俺がやることは雑用なんで辛くもなるともないからそれはそれでいいけど。

悪らしいことってなんだよ、やつぱり景品のためにポケモンを捕まえるノルマ？

けどそんなこと悪の組織以外でもやってるつちゅーの！なんなんだよしたつぱ！

だがこんなしたつぱでも辛いことがある。それは自分のポケモンにニックネームを付けられないことだ。

グラエナもドンカラスも、種族名以外に俺が付けた名前があるんだが組織にいる以上その名前では呼べない。

ニックネームつけてるとなにかあった時に警察とかにバレる可能性が格段に増えるからなあ……。

なので組織にいる以上仕事場から日常生活のときまでニックネームでポケモンを呼ぶのは禁止されている。

せっかく三日三晩寝ないで考えたニックネームだというのに、これ



のせいでここしばらく俺はその睡眠すら削ってこれだ！とつけたポケモンたちのニックネームを呼べていない。  
まあそれもデルビルもらえるまでの辛抱だけだな！デルビルさえいただければこの組織ともお別れさ！

早く俺の元にかわいいデルビルがこないかな、なんて考えていると腰につけているポケッチから着メロが鳴り響く。

この音はメールだ、それも上司から。

昨日の報告がいつてその続きか何かかよ、と思いつながら思いながらポケッチを腰から外してメールを確認する。

こういう空を飛んでいる時にメールをもらうの、実は結構きつい。だって片手で全体重ささえて、もう片手でポケッチ操作してメールを読むのだ。

軽く死ぬる、今もドンカラスが軽くバランスを崩して大きく右へ傾いた。

ごめんなドンカラス、つい声もかけずにメールをとっちゃって。

ドンカラスに聞こえるように謝れば、それに対して「心配すんな」と答えるようにドンカラスは俺の視線を向けて鳴いた。

そんな優しいドンカラスの苦を少しでも減らせるように、となんとか左に重心を持っていつて俺なりにバランスをとる。

ああ、メールだけでこんな一苦労だなんて。でもドンカラス以外で空を飛ばうと思うことは今のところ無い。

まあもしドンカラスがキツイってんなら交代するけど、そうなった場合この地方に生息する他に飛ぶポケモンに限定して……俺好みでいけばフワライドとかクロバットか、やっぱ。

悪もいいけどゴーストや毒もいいよな、ってそういうことを今考えている場合じゃなかった。

上司からのメールは早く読まなければ。

緊急メールの回数は少ないが、だからといっていつも雑用系のメールばかりとは限らないのだ。

突如収集がかかったりするから、メール気づきませんでしたじゃすまされない可能性もある。

なーんて、これで小言だったらどうしようか。バランス崩してまでとった俺もドンカラスも可哀想だ。

でも収集もめんどくさくて嫌だなあと矛盾した思いを抱えながらポケッチを操作して今きたばかりのメールを読む。

……………うん、あー、えっと。

小言じゃなかったがこれはキツイ。なんてことだ。これなら収集の方がずっとマシだった気がするぞ。

非常に残念というか非常事態というか悲しいことに、俺の職場がたつた今なくなったらしい。

またあの正義の味方か！あの超生意気っぽい少年め！

本拠地じゃないにしたってあの場所は俺の勤め先でもあったというのに！

今からそこに向かっていたのに何故つぶしたんだ！

つつかこの短期間で基地二つをぶっ潰すって凄いな、どこの漫画のヒーローだよ！

しかもまた水浸し！お前はそれしか能がないのかっつーかこの少年

はそんなに水タイプが好きなのか！？

おかげでパソコンとかそういう繊細な機械系のものが全て壊れたらしいし、ああもうアレ高いんだぞ子供には分かんねえかもしんねえけどさあ！

あああもう！なんて憎たらしい正義の味方なんだ、どこまで悪を破壊すれば気が済むんだ！

これで給料さっぴかれたらどうしよう、それだけが心配だ。

機材そろえるから給料ダウンな、なんていわれたら死ぬる。軽く死ぬる。

せめてもう少し、デルビルが俺の手元にくるまで正義の活動は待っていてくれよ！

しばらくしたら俺は悪の組織のメンバーから抜けるから、その後ならいくらでも破壊していい！いいから！！あともう少し待っていてくれ！

「…もう、俺辞めたい。ドンカラス…」

でも正義の味方君は待ってくれないんだよな、泣き言のように呟けば、ドンカラスはまた一声鳴いて俺を励まそうとしてくれた。

本当に俺のポケモンたちは優しい、昨日だってグラエナに励まされたばっかりだ。

誰だ悪タイプのこと「暗い」「感じ悪い」だなんて言った奴は。こいつらはこんなに優しいというのに。

光や明るい場所がちょっと苦手だっていいだろ！そりゃ個性だ。

暗いところやじめじめしたところ大好きだっていいだろ！これも個性だ。

あーもう、本当悪タイプはいい子ばかりで癒される……。

そう、こんな俺の大好きなタイプはいつだって悪タイプだ。  
それ以外だと電気、ゴースト、毒ってとこだな。あいつらは本当にいい。

ちなみに好きなジムリーダーはそのタイプを使っている人だ。素敵過ぎる。

悪タイプを専門に扱っている人は少ないが、少なくとも構わない！

エスパーに対して優位に立てる悪はマジすごい。え？ ミラクルアイ？ ちよつと意味わかんない。

エスパーは悪タイプに跪いていればいいんだよ、あいつらちよつと強すぎだから。

なんだよ昔つからエスパーは反則的なまでの強さ持ってたさ、超能力とかちよつと待てよそれって話じゃないか。  
でもそんな超能力効かない悪タイプは素敵過ぎる。

エーフィよりブラッキー（進化的な意味で）

サーナイトよりノクタス（緑的な意味で）

エルレイドよりバンギラス（色的な意味で）

大体エスパーは伝説のポケモンが多すぎるのもアレだよな。悪タイプには最近存在がほのめかされ始めたダークライしかないのに！  
エスパーはシンオウに住む3つの泉の主にあの有名なミュウツーに伝説のミュウにジラーチにまだまだたくさん……少し分けて欲しい、マジで。

ソレに対して悪タイプはやつと最近になってダークライという存在がいるかもしれないという噂が流れたばかりだというのに……まだまだ悪タイプの復旧には遠くおよばないのだろうか。

まあ伝説と呼ばれているポケモンをもっているやつなんていないからほとんど関係ないけど。

姿かたちも知らないしな、実際にいるのかどうかも不明だ。

目撃証言だって曖昧だし、どんな鳴き声なのかどんな技を使うのかも分からない。

そういう本は出ているがそれが事実だという保障もない。

まさに伝説、それが都市伝説。

でも神秘的、畜生エスパーだけ優遇すぎる！こんな世の中いやだ！

大体悪タイプにおかしな偏見を持つ輩が多すぎるのがいけないんだと俺は思う。

そのせいで格差社会っぽいのか、悪タイプに嫌なこと押し付けようとする輩が増えてきたんだよ。

その例がアブソルだ、あいつはまったく悪くないのに。ここ最近まで本当に不幸を呼ぶポケモンみたいに言われ続けてきた。

もうアブソルの悪口いった奴百回ぐらい土下座すればいいよ。

いや土下座じゃ足りん。

まったくもうそういう奴等は一体何でアブソルを迫害するの？ や

だやだ悪党の俺よりよっぽど悪党だよそいつら。

悪いことは全部アブソルのせいにするとかねえよ、どこの宗教だよ。だって災害とかアブソルが起こせるんなら今頃人間なんてほとんど死んでるんじゃないの。

と悪タイプ大好きな俺は怒り心頭だ。悪だからってこの扱いはひどすぎる。

額から血が出るまで地面に顔こすって土下座しろ。

そのあとジュンサーさんに捕まればいいと思う、マジで。  
むしろ俺が捕まえてやるのか、悪の組織だけだ。だから俺が捕まっ  
ちやうけど。

そんな不穏な俺の考えを停止させるように、俺を運んでいたドンカ  
ラスが鋭い声で鳴いた。

その声で考えていたことが全て消え去る。つまりはビックリした。

「え？ なに？ あ、ついたのか？」

どうやら俺が考え事をしている間に基地である大きめのビル（現在  
水浸し中）に着いたらしい。

意識がどこかへいつてた、しかもその間馬鹿なことに片手でドンカ  
ラスに捕まっていたもんだから手が…手が……。

ドンカラスが水のない、基地から少し離れたところへと俺を降ろし  
てくれる。俺まで水浸しになるかもしれないから配慮してくれたん  
だろう。

すっかり感覚の無い片手をぷらんとさせながら、俺はそんな心優し  
いドンカラスに礼を言ってボールへと戻す。

俺の職場はちよつとでかいビルなのだが、ビルの周りにはまるで大  
雨が降ったかのような水たまりがそこらかしこにと出来ている。

昨日雨は降っていない、そのため水溜りがあちらこちらに出来てい  
るビルとその付近の光景を見た一般人が「なにこれ？」という不信  
顔で水溜りを避けて歩いていた。

俺の事情知らなかったらその一般人みたいに見てたと思う、絶対。

しっかし、あー……行きたくない、帰りたい。

でもここで帰ったらデルビルがもらえない、それだけは勘弁だ。行かなかつたらクビ、だろうしな。

ああもう、デルビルさえいなけりやすぐに辞めてやるのにこんな安月給な仕事！

心の中で悪態をつきながらも仕事場までのそのそと歩く。

見た目普通のビルなので、あくまで出勤する人を装いながら何気ない風に。

だが進めば見えてくるガラス張りの自動ドアの奥の様子。

なんか、凍ってたり水があつたり氷が浮いてたり。

なにこれ巨大な冷凍庫？ これから氷が出来上がる感じ？ ちょっと自動ドアに氷が張り付いてるし。

ああ行きたくない、でも行かなくては。

はあ、とため息をついて自動ドアの前につく。

もしかしたら開かないんじゃない、と思った俺の予想とは裏腹に自動ドアは正常に作動した。

そのせいで水があふれ出てくるあふれ出てくる。

すぐに靴がぐちゃぐちゃになった、安物だからいいけど。

つかドンカラスの心遣いを全て踏みにじってしまった。申し訳ない。

呆然とその光景を見ていた俺は、ふとまわりの人が驚いた様子であふれ出た水とビルを見ていることに気づく。そりゃ見るわ、だがこれ以上怪しまれて警察に通報されちゃマズイと感じた俺は仕方なくその水でプールのようになっているビルの中へ入ることにする。

ざぶざぶと建物に入っていく音じゃない音を立てながら進んでいけ

ば、正面玄関に備え付けられている自動ドアが閉まった。すげえ、水浸しだったええずあふれ出てくる水をものともせずちゃんと閉まる自動ドアすげえ。

しかもちよつと凍ってるのに動く自動ドア。凄すぎる。

しかしこれはひどいぜ正義の味方、外もなかなか水浸しだったが中はさらにヤバイことになってる。

つーかこれ水浸しってレベルじゃねえよ！

部屋内にあるビルの扉をひとつでも開ければとたんに溢れ出してくる水、水、水！時々したっぱ！

ちよつとした……というかプールじゃねえか、またあの正義エンペルトか。

この間も他の基地をプール状態にしたくせに懲りない奴だなアマジで。

ちよつと部屋を開けただけで腰まで水がくる状態になっちまったんだが。なんだこれ。なんだこれ！

どんだけ水タイプの技で応戦したんだ。

つかどんだけエンペルト体内に水を持つてるんだよ、明らかに一匹で出来る量じゃねえだろ…！

これはたしかにメールの通り、機械系のものは一つ残らず全滅だろう。無事なのは自動ドアくらいだろうか。

というか俺にメールをよこした張本人であり目的の幹部のいる部屋までどうやっていこう、服や靴は入った瞬間にびしょぬれになったから濡れることに対してはもうどうとでもなれ状態だけど。

ただ服がまわりつく気持ち悪さはいかがなものか、靴の中に水は



入るしズボンはびしょ濡れだし拳句に下着も今、ひどい状態です…。

泳いでいこうかな、俺の手持ちのポケモンであるサメハダーの波乗りでいくのもいいがあいつまっすぐに進むのが好きだから間違いない曲がり角でぶるかる。それはいやだ。

一度経験したことがあるが、俺までぶつかって死ぬかと思った。額を針で縫う経験までしてしまった、もう針で縫いたくは無い。

しかしまっすぐに進むのが大好きってお前はマツスグマかと言いたくなる。前世はマツスグマだったんじゃないの？

おかげで俺のサメハダーの顔は傷だらけ、身体も傷だらけだ。虐待とかじゃないからな！

しかもそれをサメハダーは男の勲章みたいに思っているのがもう…。

それじゃあランタンを、とも思うがあいつ電気タイプも持っているからあんまりこういう場所を出したくない。

変にはしゃがれて電気を流されてみる、死ぬぞ。俺もビルの中にいる奴も。

「…歩くか」

面倒がる自分に渴を入れるためわざと声に出して進む。

一步步けばザブンという水の音、そして水が多すぎてあまり進まない自分の足。

泳いでいこう、そうしよう。

上着を脱いで濡れないように近くの高い台に置いて、クロールで基地の中を泳ぎだした。

もうこんな経験二度としたくない……。

後から気付いたのは、屋上まで飛んでもらってそこでおろしてもらえばよかったってことなんだよな。

幹部の部屋は上の階なんだ、そして上の方が被害は少ない。幹部の部屋は正義の少年に応戦したせいで酷い感じだったけど、それ以外はまあ悪くなかった。

……こんなマヌケだから、俺はいつまでたってもしたっぱなんだよ。結局この基地は使い物にならないみたいなんで本拠地に転勤することになったし。

あれ？ でもこれってもしかしてこれ昇進フラグなんじゃないか？  
と思っただらさっそくしたっばらしく基地の警固を命じられた。

あれ、これって正義の味方に負けフラ……。

負けフラグが本物になってしまうその前にデルビルもらって退職したいです、心から。

### 第3話 青年とガーディ

転勤したせいで朝、家（つーか借りてるアパート）から仕事場へ行く時間が早くなった。

今までの職場から更に遠くになったせいだ。

朝苦手なのに困る、しかも俺低血圧なんだよな。朝辛い。

低血圧がどれほどキツイか仕事場の皆、きっと分かっている。起きるのがマジで辛いんだぞ。

それどころかちゃんと頭が働くまで余裕で一時間はかかるっていうのに……。

まあ今時学生でも持っているメジャーなもんなんですけどね、そんなにひどい低血圧じゃないし。

でも俺が低血圧だってこと、少しは思い出して欲しいんです、優しくしてください。

みたまのとうにそのことを愚痴って、今日もせつせと仕事だ。

え、仕事なのに甘えるな？

いいじゃないか声には出さずみたまのとうにそう心の中で愚痴るくらいなら。

俺だって仕事場についてそのことを言ったりしないぞ、そこまで馬鹿じゃない。

つかそんなに低血圧でヒドイんだったら辞めればって話だしな。

悪の組織の仕事が夜だけの活動だと思っただら大間違いだ。

しかし最近その悪の組織の本拠地へと正義の味方が近づいているのが怖いぜ、来るならばデルビルをもらった後に来てくれよ正義の味方。

なーんかどんどん本拠地近くの基地が潰れていつてるんだよな……  
本拠地まで正義の手が伸びるのも時間の問題か。

というか正義の味方はどこで基地の情報を手に入れてるんだ。

裏切りものがあるのか？ 裏切り者がいるんだな？

そして物凄い情報屋がいるとみた。さすが正義の味方……チートな  
んてもんじゃない。

転勤して初めての仕事は基地の警固だった。実は前の職場と変わら  
なかつたりする、これ。

本拠地に行ってもやることは一緒か、まあ所詮したつぱだしな。し  
たつぱのやることなんて限られている。

警固以外の仕事は基地が襲ってくる奴がいないか外の見回りだ。警  
固と見回り、これだけ聞くとなんか警察っぽい。

組織のものとばれないように私服で（ロケット団やマグマ団とかみ  
たいに見たら一発で分かる服は着ない、あれはナンセンスだ。警察  
にすぐばれるじゃないか、なんであんなのをいつも着てたんだろう）  
セールスマン装いながら町の中を歩く。

本拠地のビルは表向き商売をやってるので結構でかい会社なんで、  
その宣伝マンと見せかけるのだ。

本当に職場が変わっただけでしたつぱのやることは変わらん。

なんかむなししい気持ちになりながら俺は私服で町を歩いた、なんか

散歩している気分なんだがこれも一応仕事。

しっかしさすが大手企業というか、儲かっている本拠地のビルがある町はそれなりに栄えていて、俺の住んでいる所にはまずないであろうデパートまであった。凄いぜ本拠地の町。

デパートに入ってみたんだけど本当に凄いな、品揃えよすぎ。屋上でミックスオレとか買ってみた。

美味しい水もあるしもういい傷薬いらすだなこれ、でもあんまり美味しい水ばっか飲みすぎてたら腹膨れそうだなあ。あれか、食い物がなくなつた時の一つの手段にしろつてか。

ちなみにミックスオレ大好きなグラエナも大満足そうにしていた。俺も大満足。

うーん、なんか仕事つつうよりも田舎から都会へ遊びに来たみたいだ、だって正直なところ見回りなんて正直ほとんどやることないし、明らかに不審者がビルの周りにいるときは警戒するけどさ、忍び込もうつてやつがそんな雰囲気を持つわけ無いじゃんか。

忍び込んだ正義の味方君が行動を開始するまで気づかなかつた基地が潰れまくつてんだから間違いないね。

見回りなんて気休めだ、だから手を抜く。給料に響かないくらいに手を抜く。

にしたつて、やっぱり大きい町つていいなあ、俺の住んでるところやこの前まで働いていた所が田舎に思える。

ここに住みたい、都会万歳。

品揃えはいいし、ただ家賃はやっぱり高いんだろつな。俺には夢の都だ。

今住んでるアパートはボロなだけあって破格の家賃だからな……ボロは除くとして、あんな安いアパートなんて都会どころか田舎にもなかなか無いだろうし。

あー鬱、俺がもう少し金を持っていればここに住むことが出来たのに。

まあこんなこと思っても無いものは無いんだから仕方が無いんだけど。

ある程度見回り（という名の観光のような気がしないでもない）も終わってミックスオレ片手に「さあ休憩」と言わんばかりにふれあい広場のベンチに座りながら、そんなどうでもいいような今日の興奮した出来ごとだとかをつらつらと考える。

これ、仕事しているっていうんだらうか。言わない気がする。

こんなサボリ気味の俺がどうしてまだ仕事続けていられるんだらうか。

前の仕事では一回もサボらなくてもクビになったというのに。何この空回り。

でも早くデルビルもらって違う仕事をしたい。レンジャーに再就職なんてどうだろう。

一応レンジャー養成学校は卒業して資格持ってるんだよな俺。

……うん、最初は一人前のレンジャーになろうと思ってたんだけど仕事は三日でクビになったよ！

やりすぎとか言われた、なにやりすぎって。俺は普通に人とポケモンを助けてただけだ。

資格までは剥奪されなかったけど、アレが切欠でレンジャーの夢は諦めた。

未だ納得はしてないけどな！やりすぎって言われた意味が分からな

い。

嘘です分かってますアレはやりすぎでしたごめんなさい。

アレは当然の判断だと思えます、若い頃の俺は「なんでだあああ  
！！」って思ってたけど今となったら当たり前前だよなあと思う。う  
ん。

だあーあーあーあー、嫌なこと思い出した。

休憩中なのに逆に精神を追い詰めるのはマズイと思い頭をゆるく振  
つてあたりを見渡す。

昔の女と仕事は思い出さないほうがいい。精神的にマズイ思いをす  
る。

ぐったりとベンチに背を預け、俺は賑やかなふれあい広場へと意識  
を戻す。

しっかしさすがはふれあい広場と呼ばれているだけのことはある、  
見渡してみれば老若男女関係なく色々な人たちがポケモンと一緒に  
遊んでいた。

ちびっこから大人に人気なピカチュウだとかピッピだとかかわいら  
しいポケモンもいれば、カイロスやオニドリルなどのカッコイイポ  
ケモンまでいる。

あまりにもでかいポケモンなどは広場には入れないらしいが、それ  
でも大繁盛しているのはこの賑やかな祭りに近い気分を共有したい  
からかもしれない。

まあ入場料は無料なんだから金的な繁盛は何も無いけど。

でもこのふれあい広場で商売する人もいるからそういう人からは金とってるんだろ。当然の権利だ。

俺もこういふ広場には屋台的な店があつたほうが嬉しいし。賑やか万歳。

それにしてもいいなあここ、ほのほのする場所だ。

ここで昼飯とか食べるのもいいかもしれない。明日から昼はここで食べるかなー。

だなんてボケつと考えると突然頭に衝撃が走つた。少し世界が揺れる。

何かか俺の頭にぶつかったらしい、痛くはなかったが何事かと思ひ警戒して咄嗟に辺りを見回す、だが誰もいない。

なんだつたんだと地面を見れば青いボールがころころと転がっていたから、これが頭にぶつかったんだろ。

かがんで手に取れば子供が使うようなふにゃふにゃした感触のボールだ、ちっちゃな子供が遊びに使うようなボール。

ああ、これが柔らかいやつでよかった。野球とかに使うようなものじゃなくて本当に助かった。

野球のボールとか頭に当たつた途端ヨノワールたちに導かれて一緒に違う世界逝きだよな。

マジでよかった…。

「わうっ！」

「うおっ!?!」



なんてすっかり気を許しながらぶつかってきたボールを手に持ちただけつと安堵していたら、横からオレンジ色の何かがボールを俺の手から掠め取った。  
さつきより驚いて思わずベルトにあるダークボールに手をかける。

悪の組織としての癖、というよりも小さい頃からレンジャーの訓練やらなんやらをやっている身についた癖だ。磨かれたのは悪の組織に入ったせいもあるけど。

本当にいやだなこの癖。

内心「そんなに警戒すること無いんじゃないの？」とか思いながらも身体は勝手に動く。

ベルトからボールを外しそのまま投げ、いつ襲われても対処可能なようにベンチから立ち上がり警戒心丸出しで辺りを見回し、逃げる準備を整える。

そんな俺を守るかのように、ボールから出てきたグラエナが俺の真横に立って唸り声をあげた。

俺の慌てた様子を悟ったのか、ボールから出て俺を見た瞬間にすでに攻撃態勢だ。

野生のポケモンか、故意に襲ってきたトレーナーのポケモンか、それともただの事故か……。

「わんつ！」

「え、ま、ちょ！」

なんか俺、今カツコイイ感じだったのに！

警戒態勢だったはずなのに、そんなことはお構い無しにオレンジ色の物体は俺にじゃれかかるようにとびかかってきた。敵対心なんて

欠片もない。

おかげでこっちの警戒心が一気に削がれる、それは明らかに俺に敵意を持つわけでもなく完全に遊び状態だったからだ。

なかなかの重さのせいで飛びかかれた一瞬はよろけるかと思ったがそれはなんとかこらえた。

しかしさっきの緊張感、どうしてくれるんだ。

しかも……グラエナ出した意味ないじゃん。

ちらりと横を見てみればグラエナが驚いたようにオレンジ色の物体を見ていた。

そうだね俺も驚いた、自分がこんなに無駄に警戒心が強いのにも驚いた。

にしても、俺のおかれている今の状況がイマイチよく分からないので、俺の胸にダイブするようにして飛び込んできたオレンジ色の物体が一体何なのかを確認するためにそつと下を見た。

つやつやと整ったオレンジ色の毛。背中模様。

結構ずっしりとくる重み、人懐っこい性格、そしてこれくらいの大きさで仔犬みたいな奴となると……。

ガーディ、か。

そう認識したとたん炎タイプ独特のぼかぼかとしたあつたかさが触れている場所からじんわりと広がっていく。

視覚の効果は素晴らしい、炎タイプだと思った途端勝手に「あつたかい」という思い込みが……いや実際あつたかいんだけど、見たあとだとその考えがさらに強くなるというかなんというか。

そういや飛び掛ってきたときちょっと熱気を感じたもんな。

でも俺、ガーディって言ったらジュンサーさんのイメージが強くてあまり近づきたくないんだけど。

ジュンサーさんの持つてるガーディは本当凛々しい、まあこのガーディからは甘えたな雰囲気しか出てこないからジュンサーさんのじゃないんだろうけどさあ。

しかも何この人懐っこさ。尻尾がもの凄い勢いでブンブン振り回されてる。

それが身体にビシバシ当たって痛い何の。ミミズ腫れになったりはしないだろうな？

つかガーディが人懐こいのは事実でもここまでじゃないだろ。

離れさせようとしてもびくともしない、どころか俺の服にしがみついて離れない。

ぶらん、と器用に手先で服にしがみ付いていて、まるで洗濯物みたいだ。

マヌケで笑える、でも尻尾は相変わらず痛い。そして服も伸びる伸びる。

「誰のガーディだよこいつ……」

野生ということはありませんだろう。何せふれあい広場にいるポケモンだ。

どうせ親であるトレーナーが余所見しているに違いない、人様に迷惑かけるなよと悪の組織の一員が思ってみる。

実際問題人に迷惑かけまくってるのは俺らなだけだな。

隣で呆然と俺とガーディを眺めていただけのグラエナも今の微妙な空気が伝わりなんとなく状況が分かってきたのか、不機嫌そうにじろりとガーディを睨み付けている。

まあガーディに劣らずグラエナも忠誠心が高いからな、ポチエナの頃はそうでもなかった（むしろ俺より早く早く逃げることもあった）というのにリーダー気質のグラエナに進化した途端、見違えるように態度が変わった。

いまやガーディといい勝負の忠犬っぷり、進化って本当に凄い。

子供の頃に本を読んだりして調べてみたのだが、グラエナになると優れたトレーナーの命令には絶対服従になるんだとか。え、俺優れたトレーナー？ とその説を聞いたときに舞い上がったのは俺の黒歴史。

その時の俺はきつとウザかっただろう、超絶にウザかっただろう。あの時の言動を思い出すだけで顔から火がでそう、むしろ口から火炎放射できそう。

実際は優れてませんでした、って結果だからな。それでもグラエナはそんな俺を放っておけないのかこうして俺の傍にいてくれるわけだけ。

まあつまり何が言いたいのかっていうのかというと、グラエナは俺に忠実でいてくれるってこと。

そしてその忠実故に、ちょっとばかりし独り占めにしたがるタイプと  
いうか。

本能なのかね、仲間には嫉妬なんて欠片もしないくせに野生だった  
り他のトレーナーのポケモンが俺に懐いた日にはグラエナの自慢の  
牙が大活躍する。

俺もついでとばかりに何回ガブリとやられたか。手加減してくれる

と分かっけていても痛い。

ポケモンの牙に俺が勝てると思うなよ！

今回もそんな事態になる？ そんなのは勘弁だ、というかどうして俺はグラエナのボールを選んでしまったのかと今更ながら後悔……。

「お前はどこのガーディだ？」

「わんっ！」

「……聞いても分かるわけが無いよな」

未だに上機嫌なガーディ。対して段々と不機嫌さが増していくグラエナ。

そろそろ目つきが飛び掛るそれになってきている、おいおいこんな平和な広場で一騒動起こそうっていうんじゃないだろうな！？

そればかりは止めなければ。ここで騒動なんてもんを起こして警察がきちゃったりしたらどうするんだよ！

これ以上機嫌が悪くなるようだったらボールに戻さなければならぬい。

……たとえそれが、よりグラエナの機嫌を落とすという非常に後が怖い選択で、次にボールから出した時が地獄になるものだとしても。

それが最善の道、というかそれしかない。

ああ、後でポケモンセンターで事情を話して包帯か何かもらわなくてはいけない事態になりそうだと自分の不幸を呪っていると、俺の服にぶらさがっていたガーディがもそもそと動き出した。  
なんだなんだ、帰ってくれるのか？

「ディオ！」

そんな俺の期待に答える様にして聞こえた、まだ小さい少女のよう

な声。

それに反応してガーディはわん、と鳴いてさっきまでしがみついていた俺の服を簡単に離し声の方へと走り出した。

ついでとばかり助走をつけるように体を蹴られたような感覚はあったが、まあいいだろう。地獄がなくなるんならな。

でもそんなにすぐに離れてくれるんなら、さっき離れてくれればよかったのに。

そう思いながら服を見ればちょっと泥がついていた。……仕事さぼったってばれるかな。

転んだって言えば誤魔化されてくれる…わけないか。服はたいたくらいでとれるかこれ。

そんなことを考える俺のことなど露知らず、泥の原因であるガーディは尻尾をぶんぶん振りながらその声の主の方へと一目散に駆けていつている。

それを横目に、グラエナが俺へと身体を摺り寄せて構ってほしそうに鳴いた。頭をなでてやれば機嫌もすぐに元通りになる。

うーん、こいつもこいつでなぜにここまで仲間以外の連中を嫌うのか理解できないな。

忠実ってそういうもんか？　なんか違う気がする。

でも助かった、これ以上グラエナが機嫌を損ねたならただ頭を撫でただけでは機嫌を元に戻してくれなかったと思う。

あの鋭い牙で甘咬みを何度もガブガブとやられることになっただろうな……。

ああ、そんなことにならずによかった。

元はと言えばトレーナーが目を離れたのがいけないんだけどな！

俺に関してはとぼつちりもいいところなんじゃないだろうか。

「デオ、また人様に迷惑をかけて！ごめんなさい、お怪我はありませんか！？」

これが大人だったら一発文句を、と思っていたのだが、しかしどうやらそれは出来無そうだ。

ガーディが思い切りダイビングした相手を見てみれば、そこには俺より明らかに年下の女の子が凄く不安そうに俺を見ていたからだ。

「少し目を離している間に駆けて行ってしまつて！ごめんなさい」

どうやらガーディが俺にじゃれているのに気付いて慌てて止めに来てくれたらしい。

少女（10歳かそこらに見える、それにしちやよく出来た子供だ。言葉遣いが）が思い切り頭を下げ謝ってくる。

じゃあ最初から目を離すなよ、なんて子供に言えるわけがなく。

俺は苦笑い気味で「いえいえ」とだけ言った。ああ服マジでどうしよう。

一方少女の（だよな？ 声を聞いた途端に走り出したということは多分そうだろう）ガーディはご機嫌そうに少女の腕の中だ。

おいおい、と思わなくてもない。が、まだ小さい少女に対して色々というのもアレだ。

これが俺くらいの大人だったらもつと辛辣なことも言えたんだがな……。

子供だしなあ。はしゃいでポケモンから目を離すことになるのは正直仕方ないかもしれない。

うん、ここは俺が大人になろう。いちいちカリカリすんな俺。

「次からは目を離さないようにね」

「はい、ごめんなさい！」

お嬢様のようには見えないが、それにしてはやたらと言葉遣いが丁寧だ。

子供っぽく言うのではなく、……こう言うてはなんだがマせている。

黒い髪はストレートで肩までの長さ、目はぱっちり大きくて顔や体系だけ見れば子供らしいのに、少女の言葉遣いと雰囲気がつつかり大人なのだ。

違和感を感じずにはいられない。なんだこの子、本当に子供なのか。いやに慣れている丁寧語に大人っぽい雰囲気、ところどころに感じる違和感。

無理、してる？ いや緊張しているだけか？

どちらにしても何かが可笑しい、でもその何かがまったく分からない。つかめない。

警戒しすぎだろうか、こんな子供に。

そんなことを思いながらも可笑しさはぬぐえない。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい！」

「いや、そこまで謝らなくても大丈夫だから」

何を警戒してるんだろう、何が俺をそんなに警戒させるんだろう、こんな小さい子に。

……新しい環境に置かれて、自分でも分からないうちに気を詰めているのかもしれない。

だからこんなに過剰に反応するんだろう、きっと。



なんにしてもこの少女を引き止めておく理由は無い。疲れているのならベンチで少し寝て休めばいいのだから。それじゃあ、と手を振って少女に別れを告げる。少女はぺこりともう一度頭を下げると、そのままガーディを抱きしめたまま走り去っていく。だんだんと遠くなる後姿を見ながら、それでもまだ残る謎の違和感に（これは本当に疲れてるだけか？）と首を傾げつつグラエナを戻そうと腰にあるはずのボールに手を伸ばした。のだが、

無い。

あるはずの俺のポケモンが入ったボールが、無い。

「え、な、な……!?!?」

腰にあるはずのボールを確認する。だが無い。6つあったはずのボールが、グラエナが入っていたボールまでも無くなって3つまでに減っている。なんだこれなんだこれなんだこれ。

おいちょっとまで、これって、もしかして……

「ド、ドロボー……!?!?」

やられたやられた、悪の組織の一員がまさかの泥棒にひっかかってしまった!

畜生さつきのガーディがなんらかの手段でボールを盗みやがったんだ!なんてことだ!

俺のパートナーが！俺の大切な仲間が！

さっきから感じてた変な違和感はこれか、これなのか！

泥棒はどこか様子がおかしいと聞くが、これだったのか！この違和感だったのか！

慌てて遠くを走っている少女を追う。

俺の叫び声に気付いた少女が自分のポケモンらしいギャロップをボールから出して、それに乗って逃げようとしているのが見えた。ちよ、逃げることになれすぎだろ！

慌てて残りの3つのボールの内の1つに入っているポケモンをボールから出す。

「マルマイン！あのギャロップを追ってスパークだ！」

些細な衝撃で爆発しやすいマルマインが俺の言葉に従ってももの凄いスピードで転がり始める。

ゴロゴロ、なんて優しいもんじゃない。傍にいたら轢かれそうだな。マジで。

マルマインを刺激してはたまらないと他の人たちが慌てて距離をとってくれる、正直凄く助かる。

でもあの泥棒を捕まえて欲しかったよ、みんな傍観者かよ。

だが途中で大爆発されてはたまらない、俺のマルマインはそこまで爆発しやすいわけではないのだが、不安要素は少ないほうがいいのだ。

傍観者なら傍観者らしく邪魔をしてくれなければもうそれでいいや！

「畜生めが！俺のマルマインを舐めんなよ泥棒娘！」

捕まえて警察に突き出してやる！

もの凄いスピードで泥棒少女を追いかけるマルマインを更に追いかけるような形で俺はひたすら後を追った。

たとえ結構な差であろうともギャロップごときがかつて最速のポケモンとまで呼ばれていたマルマインに勝てるものか！

思い知れ、マルマインの凄さを！

#### 第4話 青年とヤミラシ

ギャロップの後ろを猛スピードで追跡するマルマイン。そしてそれに遅れながらも必死で走る俺。

俺とマルマインの差はどんどん開いていくが、マルマインがギャロップに追いつけるならそれでいい。

ただマルマインは走るのではなく転がって移動をするために上り坂が来たら失速し、しかもしれだけではすまされずにそのまま逆戻りで俺の方へ……なんてこともありえてしまうのだが、こちらとしては嬉しいことにポケモン広場にはそれほど急な上り坂がない。あっても緩やかでスピードに乗ったマルマインにはまったく関係無いもの。

そしてもう一つ嬉しいことに、少女がギャロップに乗ったままこの広場から無事に出るのも一苦労だろうと俺は考えている。

本当なら空に飛んで逃げられるならばそれが一番よかつたのだろうが（そして多分それが出来るならば少女もそうしていただろう）、その行為はこの広場では禁止されている。

泥棒をしているくらいなのだから禁止事項くらい破るだろう、とか思う無かれ。

ふれあい広場といえど泥棒などの防犯のためにこの広場は一定距離以上飛べないようになっていたのだ。

エスパタイプが空に見えない透明な壁を作ってそれを阻止しているからな。

ああくそ、それに助けられている今の立場で言うべきじゃないかも

しれないがエスパータイプは本当に器用すぎる、もう優遇されまくってるよなエスパー。その優遇っぷりを悪や毒に分けてくれないかなぜそんなに特殊能力がいっぱいなんだ。

超能力つて卑怯すぎんだよなんだよ手をかざしただけで壁作ってんじゃねーよ！

バリヤードやフーデインがいい例だ、しかもフーデインときたら素早いに強いときた！（まあ打たれ弱いけど！）もうやってらんねえよ気合い球とか聞いてねえよ！

悪タイプに有効な技を当たり前のように使ってるんじゃないっつーの！くそ！

って今はそんな苛立ちを抱えてる場合じゃないか。

まあとにかくそういう防犯があつていかなる理由でも空へは逃げられないわけで、でもギャロップに乗ったまま広場からも飛び出せない。

なぜならば飛び出してしまえば最後、警察が出動するからだ。

広場の禁止事項その2、安全のため出入りの際には必ずポケモンはボールの中にするうこと。これを怠ればたとえ子供だろうが老人だろうがジュンサーさんのお説教コースは免れない。

一度それで大変な事件が起こったのか何なのか、ポケモンを使って飛び出せば白バイを使ってまで追っかけてくるし問答無用でポケモンを使って拘束しようとするらしいのでギャロップに乗ったままここから出るのは得策ではない。

ふはははは、全部広場に入るときにもらった広場の案内図の中の説明書に書いてあったのさ！

暇だから読んでて正解だった！

物凄いスピードで俺の遙か前方に行くマルマインとギャロップを見ながら俺は新たなボールを手にかける。

このままマルマインがうまく捕まえてくれればいいが、万が一逃がしてはたまらない。

あの少女は今、俺の大切な仲間を持っているのだ。

仲間がいなくなったら俺はどうすればいい。あの少女を地の果ても追っかけて復讐しなければ気がすまなそうだ。俺は確かに悪人だけどそこまでやる人間にはなりたくない。

今でも怒りで何発かあの少女をぶん殴ってやりたいけどな、ポケモンはトレーナーにとって家族でもあることを同じポケモントレーナーである少女が知らないとは言わせない。

こういう考えは、悪の組織の一員としては可笑しいんだろうけど。だから俺昇進出来ないんだよな。誘拐も出来ないし密輸も出来ないし何も出来ない。

まあもうすぐやめるから関係ないけど。

やめたらやっぱ、真人間になろう。そうしよう、うん。

「行くぞ、ヤミラミ！」

ボールを投げて、手元に残っていた一匹であるヤミラミを外へと出す。

ボールの中から外の様子を観察していたのだろう、ヤミラミは俺が走り出していることになんの疑問も抱かずに俺の隣に並んだ。

右にボールに戻せず一緒に走っているグラエナ、左に今ボールから出したヤミラミというような状態で並んで走る。

本来ならばもっと早く走れる二匹なのだが、どうやら俺のペースに

合わせてくれているらしい。

ありがとう二匹とも、でもこれが俺の精一杯なんだ。

別に俺が遅いとかいうわけじゃない、むしろ俺の運動能力はおそらく仕事の関係上普通よりは上だと思っている。

ポケモンと人間じゃまずづくりが違うのだ、こればかりは仕方が無い。

それにしたってどんだけ広いんだふれあい広場。

都会だと思っていたがここまで都会だったとは。広すぎだろマジで。未だマルマインとギャロップは逃走劇を繰り返しているし広場に終わりは見えてこねえし。

まあマルマインとギャロップの間の距離はだんだんと縮まってきたので、広場の端につく前に逃走劇は終わるだろうけどな。

だが完全に追いつく頃には俺の指示が届かない場所に行っているだろう、もう限界だ。

電撃が届く範囲に入ったであろうことをいいことに、俺はマルマインに指示を出した。

「マルマイン、10万ボルト！」

もうすっかり米粒くらいの大きさにしか見えないマルマインに大声でそう命じる。

少女が乗っているのに鬼畜じゃないか？ 仕方が無いだろう取り逃がすよりマシだ！

それに死にはしないだろ多分、うん多分。相手にはギャロップもいるし恐らくはこの状態をうまく切り抜けるはず。

この技は足止めのための技だ、決して相手をダウンさせるための技じゃない。

だが相手はそう思わないだろう、なにせこっちは当てるつもりで命令してるしマルメインも勿論そのつもりだ。  
だからこそ少女はこの電撃をうまくかわさなければならぬ。  
だとすると足を止めずに避ける？ いや、背を向けて避けられるほど10万ボルトの命中率もギャロップの回避率も高くはない。  
となるとここは…

「ポプリ、火炎放射！」

さすがに10万ボルトを受けるのはマズイと思ったのか少女はギャロップで逃げるのを止め、背に乗ったままそう命令する。狙い通り！ポプリ、というのはギャロップのニックネームだろうか。なんともかわいらしい名前だ。  
その名づけセンス通り中身もかわいければよかったものを。

ギャロップは少女の命令を聞いて背を向けることをやめマルメインを正面から見つめ、灼熱の炎を吐く。  
狙いはマルメインではなく、マルメインが放った10万ボルト。  
まあ打倒な判断だ、マルメインを攻撃しても10万ボルトはギャロップと少女に当たっちまうからな、それしか判断出来ないともいうか。

マルメインの10万ボルトとギャロップの火炎放射がぶつかり合っ  
て相殺され、そのエネルギーのせいで辺りには砂埃が舞い上がり視  
界が一気に悪くなる。

傍観者たちが咳をしたりするのが聞こえたがそんなしつたこつち  
やない、手を貸してくれないのにどうして傍観者の心配をするんだ



っていう話だ。

そして、俺は泥棒とはいえ当たるかもしれない10万ボルトを命令したことについて外野からの非難が聞こえてきても後悔はしていない。つーかしない。

それよりここでこの少女を逃したほうが俺にとっては大事件だ。後で禁止されている場所でのバトル、人間の乗っているポケモンに攻撃という2点についてジュンサーさんから色々お説教されそうだけどな。ちなみにこの場合相手が悪いのでたとえ人間を乗せているギャロップに攻撃をしても逮捕まではいかないだろうと踏んでいるので出来た行為でもあるのだが、まあそれはそれ。置いとく。

砂埃が視界を悪くする間も俺達は走り続ける。

マルマインたちに追いつくには今しかチャンスがない、砂埃が舞い上がったときで足を止めてなどいられない。

目に埃が入ってしょぼしょぼしたり口に入ってじゃりじゃりしたりむせたりするが構うものか！

つーかこの砂埃でカムフラージュされて逃げられたらそれこそたまったもんじゃない！

今一番大切なのは盗まれた仲間のことだけだ！

それだけを考える、後始末はその後ですればいい！

「マルマイン、絶対に逃がすなよ！スピードスター！」

「ポプリ、守る！」

視界が悪いので絶対必中の技であるスピードスターを命じれば、守るでかわされる。

だが構わない、こうして戦っている間は少女は背を向けて逃げるこ

とは出来ないだろうからな。

背を向けた途端さっきのように10万ボルトか必中のスピードスターをくらくらうつてことは小さくても分かるだろうし。

そうなればギャロップはともかく、その背に乗っている少女がどうなるかということくらい子供でも分かるはずだ。

むしろ子供である分、恐怖かもしれない。

ただギャロップでスピードスターをかわさず他のポケモンを出すかもしれないので、それとこちらの隙をついての逃亡には十分に注意が必要だったのだが、少女はそうした様子もなくただ守るでスピードスターをかわしていた。

2匹以上のポケモンがいないのだろうか、ちらりと先ほどボールを盗んだのであろうガーディを見るのだが、少女の腕の中にいるガーディは何も行動しようとする素振りは見せない。

それならボールに戻せばいいものと思うのだが少女はそうしない。

……ワケが分からない子供だな。何かガーディにも役目があるのか？

そう考え続けている間にも技は止むことを知らない。

星型をしたエネルギー弾のようなものをギャロップがひたすら守る、守る、守る。

攻撃を仕掛けようとしてもスピードスターがずっと続けている状態なのでなかなかチャンスをつかめないのだろう。

長引けばこちらが圧倒的に有利になるだろうな、守るはそう何度も使える技ではないから。

スピードスターの連射と守るのせいで砂埃はおさまることを知らない。

その中をひたすら走り、そのおかげで息をきらせながらもマルマイ  
ンがスピードスターを打ち続けて足止めしている間になんとか近く  
まで来ることになった俺は何度か大きな咳をした。  
少し無理をしすぎたか、全速力で走りすぎたせいで体に酸素が行き  
届いていない。

身体は汗だくだ、こんな距離を全速力で走ったのは何年ぶりだろう。  
キツイ。

ヤミラミに命令しようと思っても、最初は息しか出なかつた。  
どっぴり運動不足なんだ俺は。  
心配するヤミラミとグラエナに大丈夫だと頷くことで伝え、その後  
息をなんとか整えて未だ戦い続けているギャロップとマルマイン  
を見る。

どちらもまだ大きな変化はない、あつたとしたらそれはギャロップ  
が守れなくなつたときだ。

だがもう、それを待つ必要はないだろう。

こっちはとっておきの技があるんだからな。

「ヤミラミ、黒い眼差し！」

「っ、しまった！」

ややかすれ声だったが、息を整えた結果かしつかりと言葉を発して  
ヤミラミに命令することが出来た。

その言葉に反応して、ヤミラミの瞳が不気味に光る。怪しい光とは  
違う種類の光を放つた瞳は、相手を束縛するためのものだ。

普段は逃げやすい野性のポケモンに使うが、何もそれが全てじゃな  
い。

その眼差しは相手のポケモンをボールへ戻すことさえ不可能にする。

どうせ逃げられるんなら意味がないんじゃないか？　と思うかもしれないがそんなことはない。

黒い眼差しはポケモンを一定の位置以上動けなくする技でもあるのだ、だからこそ野生のポケモンが逃げられなくなると言われている。ここで少女が逃げればギャロップをおいていくことになる、それは少女には出来ないことだろう。

たとえ泥棒でも、自分のポケモンを置いていくことは出来ないだろう。

人のものは盗むから、自分のものを盗まれてもいいという泥棒なんて存在しない。

だから手塩をかけて育てたポケモンを、そう簡単においていけない。

そういうことで、これで完全に相手をとらえることが出来るワケだ。黒い眼差しはそれなりの発動距離があるのでマルマインの傍までくることが出来て本当によかった。なにせ眼差しだ、ヤミラミの目が届く場所にいなけりや意味が無い。

もしかしたらギャロップがフェイントを何度かしたりして走っている俺達に向かってくることもあるかもしれないと踏んでわざわざ一緒に走ってきてもらったんだがなあ……。

まあ、無かったので良しとしよう。だったらマルマインの後をさっさと追わせただけど、それは結果が分かったからいえることだ。

「よっし、ナイスだ！」

俺の声に反応した少女がこちらをキツと睨みつける。

だがこつちだつてそんなことを気にしてはいられない、大切なポケモンたちが少女の手の中にいるのだ。

だいたい少女の一睨みなんて怖くもなんともない。

今の俺にはこの少女からポケモンを取り返すことにしか頭に無いんだから。

「観念して俺のポケモンを返せ泥棒！」

「煩いな、諦めなよ！」

「煩いとは何だこの泥棒女！ そっちがその気ならこっちだってなあ！」

黒い眼差しで相手を縛りつけたヤミラミが攻撃態勢をとる。

俺の隣にいたグラエナも俺を守るように（いや、実際に守ってくれているのだ）俺の前へと壁のように立ち、威嚇をしながら少女を睨みつけた。

こっちはいつだって戦う準備はバッチリだ、少女が抵抗するなら無理やりにでも取り返すまで！

「それなりの対処をしてやるってんだ！」

大人気ないと言わないで。だって泥棒相手だよ？ ヘタしたら俺のポケモン盗られちゃんだよ？

だから悪党の俺だって必死なのです。

仕方ないだろ悪党だって自分のポケモンを盗まれるのは嫌なんだよ此畜生！

## 第5話 青年とドラピオン

とりあえず先手をとりよう、と俺は少女が口を開くより早く命令を下した。

「ヤミラミ、どくどく！分かってると思うがあの子には当てるなよ！」

「シトラス、お願い！」

とりあえずは逃げ足として使われているだけではなく戦力としても充分だろうギャロップをなんとかしようと思えばヤミラミに命じる。

「どくどく」を食らえば早期決着で片付けなければどんどん不利になっていく技だ。

それに相手はヤミラミを集中的に倒そうとする可能性もある、なんとって黒い眼差しをかけたポケモンを倒せばその技は効果を無くす。

だから長期戦に持ちこんだとしても、確実にこちらの有利にしておきたい。

そしてヤミラミにも瀕死にならないでいてほしい、そのために長期戦にはもってこいな状態異常技をここで使う。

ヘタをしたら少女にも当たってしまう可能性があり外野がざわめいたが、俺のヤミラミのコントロールを馬鹿にすんなよ。

少女には当てずにギャロップだけに当てることなんて容易だ。

だからこれをギャロップに食らわせられることが出来れば、逃げ足と主力にギャロップを使っている少女が負けるのは時間の問題。

だったのだが、俺の指示を聞いた少女は途端に腰らへんにあったボールから新しいポケモンを出しギャロップの手前へと出現させる。

あー…やっぱりギャロップとガーディだけじゃなかったのか。  
2匹だけだったらこれで戦闘は終わったようなものだったのに。  
にしては、どうして2匹しか出さなかったんだ……？

少女にはかからないようにヤミラミが注意しながら攻撃したとくどくは、ギャロップに届くより前に少女の出したポケモンによって阻まれた。

紫色の体にサソリのような手足、ボールから地面に着地し大きな音を立てながらギャロップの前に立ちはだかったそいつは大きな体を駆使してヤミラミのとくどくを受けきって、その後毒に犯される様子もなく何事もなかったかのように俺達をギラついた目で睨みつける。

どくどくが効かないってことは毒タイプか鋼タイプ。だがこいつは間違いなく毒タイプだ。間違いない。

何故なら俺は、このポケモンを知っている。

ここらでは滅多にお目にかかれない毒と悪のタイプを併せ持つポケモン、ドラピオンだ。

生息地は進化前のスコルピ共々シンオウの大湿原（入場料500円、時間制限とボール制限付、バトル禁止）にしかない上になかなか出会わない、その癖になかなか捕まえられないし何より日替わりで出るとかいう噂もあるなかなか希少価値があるポケモン、それがドラピオン。

まあなかなか、っていう程度だから俺もトレーナーが連れてきているドラピオンを何度も見たことがあるし、戦ったこともある。

だが俺はその度に思うんだよ。

くっそう、いいポケモンもってやがる！俺も欲しかったんだよドラ

ピオン！つてな！

ああもういつか金をためてシンオウまで行ける余裕が出来たら是非とも大湿原に行つて捕まえようと誓っているドラピオンにこんな夕イミングで遭遇するとは思わなかった…！

野生だったらどんなに欲しかったことか！

畜生超絶に欲しい！だが今は欲しいんじゃない、返せと叫ぶぞ俺は！あーもう！

「さつさと俺のポケモンを返せ泥棒！」

「いや、これはもう私のものなんだから！」

「そんなわけあるか！」

ええいジュンサーさんはまだか！本当に使えないなここにいる連中は！

さつさと乱闘なり泥棒なりあったことを警察に伝えるべきなのに、関わり合いになりたくないのかそうする様子は一向に見られない。

なのに野次馬根性だけは旺盛でやたらじろじろと俺たちを眺めている。

少なくとも今見た人物からすれば怒り狂った男に少女が襲われているというのに、だ。いやこの少女が悪いことをしたから俺はおっかけて追い詰めているまでなんだけど。

けど、これって可笑しくないか？

どんだけ都会冷めてんだよ、これが田舎だったら……身内だったらともかくよそ者は助けねえな。うん。

なんだいつもの風景だった、泣ける。

ああもう頼りに生らない奴等め！

味方もいないここでは俺自身の力でバトルで泥棒娘を負かしてポケ



モン達を取り返すしかねえってことだろ！上等だやってやる！

「いくぞ！マルマインはギャロップに10万ボルト、ヤミラミはドラピオンにシャドークロー！」

「ポプリは火炎放射で対応、シトラスはシザークロスで防いで！」

逃げるのを諦めざるおえない状況からか、少女はついにギャロップから降りて命令をする。

まあ妥当な判断だろう、少女が乗っていたらギャロップはどうしても少女を気にして本気を出せないだろうからな。

俺にとつては本気とかはご遠慮願いたいんだけどな！出来れば気づかないでいてほしかったがそれも無理な話なんだろう。

俺の命令を聞いたヤミラミがシトラス、と呼ばれたドラピオンに向かって伸びた爪を振り上げる。

だが勢いをつけて振り落としたはずの腕はガギン、という金属同士がぶつかったような音をたててドラピオンの尾に防がれた。

つまりは互角！？ 嘘だろ、おい！

俺のヤミラミはそこらの宝石は簡単に碎けるほどの強固な爪を持つてるっていうのに互角！？

どんだけ硬い体をしてやがるんだこのドラピオン！

カツコイイ！欲しい！さすが毒と悪を兼ね備えるポケモン、たまんないなあ本当に！

って今はそんな相手を褒めてる場合じゃないっての！

ぶんぶんと頭を振る俺と互角状態で力比べをしている二匹の横で、マルマインとギャロップもお互いにダメージを食らわせようと放つ

た電撃と炎で応戦している。

こっちもほぼ互角だろう。……マジかよ、こんな小さい子の持つポケモンと互角とか。

俺トレーナーとしてどんだけ弱いんだよ、そしてこの子どんだけ強いんだよ。

やばい、ああこれはやばい。思っていた事態よりずっと深刻なものになってきている。

少女の持つポケモンだからどうせレベルもそんなに、とか思っていた俺の予想がすっかり外れてる。

こんなに強いなんて、この年で有り得ねえだろオイ。

どちらも互角、これじゃあ終わりはなかなか見えてこない。決定打を与えられないまま時間だけが過ぎていく。

だがこれで不利になるのは少女の方だ、時間が経て経つほど通報を受けたジュンサーさんが来る可能性が増えていく。

それはなんとしても避けたいのだろう、互角だというのに少女の顔色はよくない。

だがこっちはジュンサーさんに来てもらわないと困る、困るんだよ！困るが、困るんだが…！

「グラエナ！」

俺を守るように立っていたグラエナの耳がピクリ、と動く。

次の瞬間、グラエナはヤミラミとドラピオンの爪と尾の下を潜り抜けて少女の所まで走り出した。

とりあえず少女を捕まえればバトルは終わるだろう。ならば強制終了でもいい、終わらせる！

出来ればこっちだって早く終わらせたい気持ちは一緒なんだ、ばれ

はしないと思うが警察のお世話になるのは悪の組織としてはタブーに近いのだから。

まあバレなきゃ平気なんだけどな、だからこうしてジュンサーはただかまだかと待ってるわけだし。  
しかしそれは最終手段なわけで。

……俺だけでなんとかなりやそれで万々歳なんだけど。  
なりそうにないよなあ、コレ。ジュンサーさんにバレないように今から心を決めておくしかないのか。

「取り戻して来い！」

「させない！シプレ、こっちも噛み砕く！」

大口を開けて少女からボールを取り戻そうとしたグラエナを、少女は新しいポケモンを出すことによって防いだ。

つだああああ！！結構持つてんじゃねえかギャロップとガーディ以外のポケモンをよお！

出し惜しみしやがって、おかげでこっちはどれだけのポケモンを相手にするのかという計算が出来なくて困るってのに！

あまり一匹一匹に体力をかけすぎでは、数によっちゃこっちが負ける可能性は充分にあるんだ。

いい加減にしてくれ、というかもうそいつで最後にしてくれよ！

シプレ、と呼ばれたのは俺のグラエナよりずっと体の大きいドダイトスだった。

背中にある大樹のような木をざわりと揺らめかせ、低い咆哮で俺とグラエナに対して敵対心を表してくる。

その重い図体でグラエナに向かい、そしてグラエナよりもでかい口

をあけて襲い掛かってくる姿はかなりの迫力だ。……だが、

「引くなよグラエナ、威嚇してやれ！」

「シプレ、そのまま倒して！」

低く唸るグラエナに噛み付こうと開いていた大口が一瞬だけ止まる。だがすぐに少女の声に反応して行動を再開させる。

それならそれで結構！噛み砕く対決で負ける気は微塵も無い。

本来なら気をつけるべき大技の地震もギャロップたちが出ている今では使うことも出来ないだろう。

むしろ気にすべきはガーデイ、ドラピオン、ギャロップ、ドダイト以外の2匹がいつ出てくるかだ。

6匹、つまりフルメンバーを持つている可能性は否定できない。

それに対してこっちはグラエナにヤミラミ、そしてマルマインの3匹と一応まだ出していない1匹。

あとの2匹はあのガーデイに盗まれて少女の方にいる。

フルメンバーで挑まれる前にボールを取り返すかジュンサーさんが来てくれるといいんだが……。

てか本当に遅いなジュンサーさん。普通気付かないか？ こんな派手なバトルがあったら！

「ヤミラミ、身代わりから自己再生！グラエナはドダイトスに不意打ちのあとドラピオンに恩返し！」

俺の命令を聞いたヤミラミが素早くドラピオンから離れ身代わりをつくり、その間のフォローをするべく噛み砕こうとしたドダイトスに不意打ちを食らわせたグラエナがドラピオンの近くまで一気に距

離を縮め攻撃を開始する。

完璧に乱戦だ、ダブルバトルとは到底言えない（大体3対3なんてありえない）

そして相変わらずマルマインとギャロップは互角状態。どちらも一歩も引いていない。

しかしこの少女、バトルにはなれてないんだろうか。盗みは鮮やかだったのにバトルは後手後手どころか守ることしかしていない。

俺のポケモンたちはまだダメージの1つも受けていないし、少女が動くのはたいてい俺のポケモンへの指示を聞いた後なのだ。あちらから攻撃をしかけてくることはまずない。

それにしても嫌にポケモンの方は戦いなれているんだがなあ、すぐに命令通りに体を動かすし。

本当にわけのわからない少女だな。

強いんだかそれとも弱いんだか。

まあバトル慣れしていないのは助かるけど。それだけこっちに勝機が出来るってことだからさ！

「グラエナ、噛み砕け！」

「シトラス、もう一度ポイズンテール！シプレは葉っぱカッターよ！」

「ヤミラミ、身代わりは完成してるな！？ よし、葉っぱカッターを鬼火で燃やせ！」

今度はグラエナがドラピオン、ヤミラミがドダイトスと対峙する。

お互い決定打が入れられず殴り合いの泥試合になりそうだなこれ…。相性のいい技をお互いに持ってないからどうしても長引く。

またどくどくをやってもかわされそうだし。

ジュンサーさんまだこないし、ていうか本当にジュンサーさんって存在するのかとまで思えてきた。  
実は俺の幻想？ そんなまさか。  
だがあんまり引つ張りすぎると相手がどんどんポケモンを出してくる可能性が…

……しょうがない、出来ればこの手は使いたくなかったんだが。

「マルマイン！」

未だにギャロップとお互い一步も引かぬ勝負をしているマルマインに片目を閉じることで合図を送る。

つまりはマルマインに向かってウインクをしただけなのだが、その行動が何を指示しているのかを知っているマルマインはニヤリと笑った。なんとという男前。

これはマルマインに対して辛い行為だろうに…だが礼は言うが謝ったりはしない。

命令を出したというのに謝るなんてバカにする行為だろう。マルマインのプライドにもきつと傷をつける。

「シトラス、シザークロス！」

「グラエナ、守れ！」

マルマインが準備のために放電することをやめる。そのためにギャロップの炎が直撃することになるが、マルマインなら耐えてくれるはずだ。

準備が整うまで、俺は自分が出れることを精一杯やらなくては。

「ヤミラミ、身代わりを盾にドダイトスの背中めがけて鬼火！」

「シプレ、ストーンエッジでかわして！」

攻撃力を下げてやろうとした攻撃はストーンエッジで容易くかわされる。

グラエナとドラピオン、ヤミラミとドダイトスは互角状態。

本当に強いなこの少女、というかポケモン。トレーナーがバトル慣れをしていたらこのメンバーじゃ勝てなかったかもしれない。

だがこの勝負、俺の勝ちはまだ決まったようなものだ。

炎を受けた状態のマルマインが白く光り始める。

グラエナは守っている状態、ヤミラミは特に何もしなくてもゴーストタイプだから大丈夫だ。盾に使っていたはずの身代わりはいつのまにか俺を守るようにヤミラミから離れ俺の前に立っていた。

俺が指示したわけでもないのに、俺のやりたいことがわかって自主的にやってくれたのだろう。本当に良く出来たポケモンたちだ。マジ愛してる！

俺が何も言わなかったのにやりたいことはしっかりと伝わってる。

バトルの瞬間で一番嬉しくてゾクゾクすることだ。正直勝利よりも嬉しいかもしれない。

俺はヤミラミの身代わりに感謝しつつ、息を吸い込む。

技名を言わなかったのは、相手に防御する準備を与えないためだ。

そのためのジエスチャーは子供の頃に学んだ、それがこうしてバトルに生かされることになるなんてその時は思ってもいなかったけれど。

「マルマイン！」

俺が叫ぶように言った名前を引き金に、マルマインはまぶしいほどに体を白く光らせ……

そして次の瞬間、マルマインを中心に大爆発が発生しその威力と暴風が俺たちを襲った。



## 第6話 青年と少女

大爆発で舞い上がった砂埃が落ち着いた頃。

まるでバトルが終わるのを見計らったかのようにジュンサーさんが白バイに乗ってやってきた、その時の鬼のような形相といたら。そうして俺と大爆発に巻き込まれ気絶した少女（といってもギャロップやドラピオン、ドナイトスが少女の周りを取り囲むようにしていたからダメージはなく、ただのショックでだろうが）を警察署へ連れて行く。

その後つたらもう。一言で言うならアレだろう。

ジュンサーさん怖すぎだろ常識的に考えて。

あの泥棒少女を大爆発で無理やり気絶させたのだがそれがいけなかつたらしい、やっと駆けつけてきたジュンサーさんは俺に対して怒りを爆発させた。

いや泥棒しなければそもそもこんなことにはならなかつたし第一何度も返せだとかは言ってたのに聞かないあっちが悪いじゃないか。

…まあ俺も大人げなかつたけどさ。

ポケモンたちがかばったからいいもの（というかあの戦いなれた様子ならむしろそうするのは目に見えていたし、少女とマルマインの距離も計算していたんだが）もしものことが無いわけじゃない。暴力とかも殴った方が悪いモンなあ、過剰防衛って言われても反論できないかもしれんねえ。

ポケモンを盗まれたからって頭に血が上って常識的な判断が出来なかつたっていう点も今考えればあるし。うん。

ジュンサーさんは特に弱いものの味方っていう感じだからたとえ泥棒だろうと無理やり気絶させたのが「正義」に反してたんだろう。つーか相手子供だもんなあ。これがまた大人の男だとかだったら対応が違ったんだろうけど、相手は女の子。それもまだ小さい子。

そんな子に対して大爆発。

たとえあっちが加害者でも、同時に被害者みたいになっちゃうんだろっなあ。

実際大爆発の被害者か。そして俺も被害者であり加害者と、畜生。

ああでもそういう考えだと俺、絶対警官にはなれないな。俺は普通に犯人ばかり責めそうだし。

女子供とか関係なくポケモン泥棒とか絞め殺す勢いで責めまくりそう。いや自分のこと棚に上げて何言ってるって感じ何だけどさ。

でも悪の組織で俺がやってることって今だ警護だとか調査だとか雑用だとかで…なんていうか警備員のバイト感覚なんだよな。

だから俺の正義感覚を惑わしてるのかも。

盗らなきゃいいや、みたいな感じで。だってこの仕事やめたら俺食っていけねーもん。

デルビルもらったら就職先また捜し歩くけど。それまでニートになるけど。

今はデルビルの件があるから勤めてるけど、うん、目的を達成したら辞めることにしている。

給料もいいもんじゃないしなー。普通にバイトしてたほうがもしかしたら稼げるかもしれないっいうね。

それに悪の組織、俺はどちらかという会社と会社の正社員として入っている感じなので、もしもあの組織が壊滅されて残党が捕まってしま

つてもその時に抜けてさえいれば、悪の組織に乗っ取られていたビルの正社員をしていた被害者になれる。

そういう「特典」みたいなものがついているしたっばだから数が多  
いんだよあの組織。

したっばやてつてて事務処理が上手いとそのまま表向きの会社に引き抜かれるらしいしな。いいな、本拠地大手だからそれ凄いいいな。羨ましい。

とまあレアなケースはおいといて、俺たちは派遣に近い正社員と変わらない。

あの会社は悪事をやっている奴は大勢いるが、カモフラージュのためなのか表の優良企業の顔しかしらない社員も結構いるのだ。

その社員のフリをすれば被害者でいられる、したっばのまままで辞めれば捕まることはまずない。

悪の組織つて世間に露見するまでは就職覧にも大手優良企業に勤めてたつて書けるしな。そういう意味じゃしたっばも捨てたモンじゃない。

まあ正社員としては給料酷すぎだけだな！

それでも実際悪いことはしたっばつてほとんどしてないし、俺みたいな甘っちょろい考えの奴も多いしちょうどいい扱いなのかもしれない。

そんな、まあ悪いことばかりじゃない職場なのだが、果たして一体皆どこからこの職場を知って入ってくるのか正直謎だ。

俺の場合は両親がこの悪の組織で勤めてたつてというのがあってほぼ親の七光り的な感じで入れたけど、他のしたっばはどうやって知ったんだろつなあ、この仕事。

求人案内には載せられないよな悪の組織のしたっばなんて、じゃあどつて。

したつぱには名ばかりの悪の組織、でも入ってくるしたつぱは俺よりちょっと年上くらいの若い人が多いんだよなあ。

そんなに楽しい仕事じゃないのにさ。

だって俺したつぱの仕事だって言われて何をやったよ、警護と掃除と野生のポケモン調査と…。

やってることは本当に悪じゃないからなあ……騙されたと通用できるのがなんとも。だってこんなの正直どこの会社でもやるぞ、ポケモンの調査はどこのってわけにもいかないけどさ。

こういう悪に直接結びつかないところがしたつぱ中のしたつぱのいいところだが、それに合った給料だというのが痛い。

まあこれくらいの活動じゃないと確実に辞めて警察に言いそうな奴いるもんなあ、したつぱなんて。

逆にこれくらい悪から遠ざけることで一般的な感覚を持つ奴をそこで満足させようという手段なのかもしれない、そして一時的な金稼ぎとかじゃなく悪として活動するために頑張ってる奴だけ上の階級にしていくっていうね。

ま、そんな俺の会社のことは今はおいといて、と。

正直こんな考えたって意味が無い、もうすぐ辞める会社だ。少しでも給料高くするために上にはいきたいと思ってるが幹部になりたいわけじゃない。

そんな会社のことを考えているよりこれからのことを考えるほうが大事だろう。

とりあえず事情聴取だけされて俺はあの女の子の意識が回復するより前に警察を後にした。

されたのは注意くらいだったし、おしまいっちゃあおしまいなんだ

けど…。

「ジュンサーさんが早く来てくれたらもつと被害も少なく穏便に解決出来たんだろうにね（なにやってんだよ職務怠慢かよ）」  
と言ってやりたかったくらいには腹が立った。

だって最初は俺の方に疑惑と非難の目が凄い向けられたぞ、その気持ちは凄い分かるけどさ。

でも俺被害者だから、被害者！

でも最大の理由はきつと駆けつけてきたジュンサーさんが男だったからだ。何故女の人じゃないんだ…！

男には容赦しないぞ俺は。だって男は守られる生き物じゃないからな。

男に正義語られたらウザすぎる。こっちが悪くない（と思っている）から余計に。

しょうがないだろポケモンが凄く大事だったんだから。

そんなに注意するくらいならバトル開始になる前に来いって話だよなまったく。これだから最近の警察は…

いや、悪の組織の一員である俺が警察を語るのもおかしいか。

手ごわいジュンサーさんたちがこれ以上手ごわくなっても困る、むしろこれくらいがちょうど良いのか。

……なんか複雑だなこれ。

とりあえず職場に戻らなきゃ。戻ったら警護だ。

俺が警護しているときに正義の味方がやってきませんように。

職場に戻った後、さすがに悪の組織の一員が「警察に厄介になっちまいました、テヘ」なんて言うわけにもいかないのが適当にやけに見回りにかかった時間を誤魔化し伝えて今日一日の仕事を終える。本部のしたっぱだというのに給料はどうやら上がらないし仕事も変わらないみたいだ。ただ家までの距離が長くなっただけ。

なんとという悲劇、だが我慢だ我慢、デルビルを貰うまでの我慢だ！会社から出てドンカラスが入っているボールをいじりながら今日のことを振り返り俺はため息をつく。厄日だった、かつてないほどに。てかもう俺本当に何やってるんだらうか。親不孝者……ではないがなんだか釈然としない日々だ。もうすぐ沈みそうな夕日を見て一人鬱状態になる。そろそろ根暗になりそう。

全速力で走ったせいで明日筋肉痛になりそうな感じがビシバシとしているのでさらに鬱。もう全部鬱。

思わず猫背になって地面を字を書きいじけようとすると、ぐいっと

服の裾を引つ張られた。

そこまで力が入っていなかったのでもよけることはなかったが、こんなことをしてくる奴と俺は知り合いになった記憶はない。

誰だ俺の服に悪戯する子供かポケモンは。

礼儀がなっていないぞと言いながら振り向いて、俺は目を丸くした。

「さっきぶりだね、お兄ちゃん」

「は？」

そこにいたのはかわいらしい女の子。どこかで見たことのある顔だ。つっつかこの顔は間違いない。昏間にマルマインの大爆発で気絶させたはずの少女で。

更に言うならば今の俺の鬱の原因の張本人で。

もっというならば許しがたき泥棒だ。そうだ泥棒だ、悪だ！俺も悪だけど！

慌てて自分のボールの数をチェックする。1、2、3、4、5、6

…よし揃ってる！

いや声をかけられたからには盗られてるってことはまずないだろうけど念のため念のため。

昏間もガーディに気を取られててやられたんだからな。

つか被害者の前に堂々と泥棒が出てきてどうすんだよ。

俺は何もしないけど他の人は何するか分からないぞ、短気な人間なんて腐るほどいる。

てか警察もさっさとこの子を保護者の付き添いもなしに外に出したとかもうあの男ジュンサー！今度会ったらエビワラー並のキックを味あわせてやる！パンチじゃないのが悲しいけど。

「何しに俺の前にこのこと」  
「泥棒のことは謝ります、ごめんなさい。ちょっとヤケになってたんだ、それでお兄ちゃんに酷いことをいっばい言っただしいっばいしたから謝りたくて」

俺の言葉をさえぎっての謝罪にさらに驚く。

いや、泥棒する前は確かに礼儀正しい子だったけどさ、故意に自爆に巻き込まれて謝れる子なんて珍しい。

だって大爆発を故意的に巻き込んだ男だぞ、そんな男に謝りに行くんだぞ？

怖いに決まってる、保護者がいたって絶対に怖い。それなのになんで一人で……。

俺だったらあんな大爆発に巻き込まれたら逆に謝って欲しいとか思う。

自分のやったこと全部棚にあげて。

それが女の子なら尚更だろう。それにこの子は子供で女で、悪いことを確かにしたけれどここまでされる筋合いは…いや俺の中にはあるのだが一般的にはないだろう。

あの時は頭に血が上っていて考えることが出来なかつたけれど、あの自爆に巻き込まれたら顔に傷くらい出来ても可笑しくはない。

小さな女の子に傷を残すのはよくないだろう、よくなさ過ぎる。

ヘタをすれば一生ものの傷になったかもしれないんだ、幸いポケモンたちが守ったおかげで傷一つなく気絶だけですんだみたいだけど。

あんな爆発に巻き込まれて、気を失うほど怖い目にもあつただろうに。



それが分かっていたから男ジュンサーも怒った。だから俺もそのことは深く反省している。

でもそれでも俺は男ジュンサー、お前を許さん。今度サワムラーのようなパンチで殴ってやる！

「……………これまた、随分な変わりようだな」

「あの時は本当にどうかしてたんだと思う、無関係な人のポケモンを盗ろうとするなんて」

頭を下げて、今にも土下座せんというばかりの謝りっぷりに内心俺は慌てる。

こんな光景誰かが見たら間違いなく俺が悪者です、本当にありがとうございます。

社内での評判悪くなること間違いなし！あ、でも悪だからそれはむしろプラスなのか？

人間的には間違いなくマイナスをたたき出すが。

「で、なんで俺のポケモンたちを盗ろうとしたんだ？」

「……………お姉ちゃんたちに、一泡吹かしてやりたくって」

「はあ？」

「お母さんもお父さんもすぐにお姉ちゃんと私を比べてお姉ちゃんばっか褒めるし、私には厳しいことしか言わないのにお姉ちゃんのこと褒めてばっかりだし……………だから……………」

「だから？」

「お姉ちゃんのポケモンを借りて、ポケモンを捕まえてあつと言わそうと思ったの」

それでつい……………とまで言っつて、少女は再び俺に頭を下げた。

泣いているのか肩が振るえ、鼻をすすする音まで聞こえてくる。

そんな様子の子供に俺は怒りをどこにぶつけていいのか戸惑ってしまふ。

怒る前に謝られたら、もう怒れないみたいな。しかも相手は子供だし。

しかし泥棒の原因って……つまりは家庭内のことだったと思ってもいいのか？

よくある出来た姉と比べられる妹、というもんなんだろうか。あるいは反抗期？

俺には兄は姉、弟や妹のいない一人っ子だからその気持ちは分からないのだけれど。

唯一兄弟のような関係の従兄弟がいるがあの人次元が違うから、あの人本当マジすげえし。

牧場主になりたいと夢に向かって突き進んでいる最中けどもう、次元が違うすぎる。

まあ俺もそんな従兄弟と比べられてばかりだったりしたら日中イライラすること間違い無しだな。

その境遇を思えば少女が見返してやりたいという気持ちにも共感が出来る。

しかし借りた？ 借りたってまさか…

「じゃあ俺が戦ったあのポケモンたちは…」

「お姉ちゃんのポケモン」

「…ああ、なるほど」

だから防戦一方だったのか。自分のポケモンじゃないからどう命令していいのか分からず、相手の出方を伺うしかない。

実際技も姉のを見よう見真似で指示したのだろう、それにしては結構なセンスがあったと思うが。将来は結構いいトレーナーになりそうだ。

そんで姉を主人としているポケモンもトレーナーの妹だから命令を聞いてあげちゃったのかもな。

普通はバッチを持っていて人間や、認めた人間でない限り自分のトレーナー以外の人間の命令なんて聞きもしないもんなあ。

ただし家族ならばそれは別だろう、命令というよりお願いに近いそれをポケモンたちは聞いてくれることがよくある。

まあ忠誠心が強かったりプライドが高かったりするポケモンだと聞いてくれないんだけど、この少女が指示していたポケモンはどれも忠誠心やプライドが特別高いポケモンじゃない。

妹の命令を困惑しながら聞いたのだろう。そしてトレーナーの妹だからこそ指示がなくとも体を張って守った。そういうことだ。

しかし、あれで戸惑いながら命令を聞いていたとしたらこの子のお姉さんのポケモンはどれだけ強いんだって話になる。

お姉さんと戦ってたら負けてたんじゃないか俺。どれだけ強いんだっただけ。

「本当にごめんなさい……」

「…もういいよ、腹が立たないって言ったら嘘になるけど。次からもうしないって約束できて、お姉さんにちゃんとポケモンを返せばそれで」

「お姉ちゃんにポケモンは返したしもうしない！もう絶対しないよ！」

「じゃあ、もういいから」

そういうと、少女は泣くまいと必死で堪えるような顔をして、でも泣き出した。

多分ほっとしたんだろうな、そして泥棒をしたことを悔やんでいたし罪悪感も持っていたんだろう。

この年頃で泥棒なんて、するにしてもよっぽどの度胸がなきゃ出来ない。

しかし簡単に許す俺も甘いよなあ、未遂だったのとまだ子供だったというのが効いたのかねえ。

これがあの男ジュンサーだったら泣き顔を見て笑ってやる自信があるってのに。

「ほらもう泣かない、ハンカチ貸してやるから」

「ひぐつ、ずびつ、んー…！」

ズボンからまだ使っていないハンカチを出せば、少女はそれで涙を拭く。

…ついでに鼻水も拭いてら。おま、ちょ、…まあ子供だから仕方ないだろう。

高いもんじゃないし、ハンカチの1枚や2枚。

「泣き止んだら、家に帰れよ？」

「……もう、帰らないもん！」

「は？」

ぐしぐしとハンカチで涙と鼻水を拭いた少女は俺を見て言う。

「私、もうあの家には帰らないって決めたの！ぜ、ぜつえんなんだからー！」

## 第7話 青年と少女その2

なんでこんなことになったんだ。なってしまったんだ。

俺は思わず横にいる少女を見る。

少女はにこにこして「私にサイカお兄ちゃんみたいなお兄ちゃんがいたらよかったのに、お姉ちゃんじゃなくて」と言っでご機嫌な様子だった。

なんてこつたい。

俺は妹を持った記憶などない、と思いながら先ほどまでのことを振り返る。

ああなんてこつた、今日は厄日中の厄日だ。

「絶縁？ 泥棒をしたから怒られたのか？」

そりゃ親なら怒るだろう。怒らないほうがどうかしている。

けれどこんな小さい子供に絶縁、というまでじゃないだろうと思う。怒っているが誠心誠意謝って毎日親の言うことをちゃんと聞いていれば許す、までとはいかなくともいつもとかわらない日常に戻れると思うんだが。

悪いことをしたのなら反省をして次からはしないと自分の中でしっかりと誓って、それを守ればいい（と悪の組織の一員である俺が言うのもおかしい話だが）

大人ならばアレだが、子供ならまだ矯正もきくдар。むしろ今親が

矯正してやらなくては大人になっても盗みを働くような子供になつてしまう。

それなのに……絶縁？

おそらくえらく叱られたから飛び出してきた程度だとは思うんだが。

まあまだこれくらい小さいとそのことが分からないのだろう、だからつい絶縁なんて言葉が頭の中に浮かんだんだろうな。しかし小さいのによく絶縁なんて言葉を知ってたな。

「いけないことをしたんだから怒られるのは当たり前だ、だがな」

「違うの！」

「ん？」

「お父さんにもお母さんにもいっぱい怒られたけど、それは当たり前だもん！いけないことをしたから怒られたんだから、反省はしたけどそれにむかついたりしてないもん！私がつ、私つ、わたし……！」

感情が溢れかえったのか、さつき止まったはずの少女の涙がまたぼろぼろとあふれ出てくる。

仕方がないな、と思いつつ鼻水のついていない綺麗なところで少女の顔をハンカチで拭く。

溜め込んでいるより吐き出したほうがいい、それが小さい子ならば余計に。

ただなんで被害者の俺が聞く側にまわってんだろうな、マジでなんでだ。

だが泣いている子供を知らん振りして帰路に帰ることは出来ない。

自分が話しかけられている途中で泣かれていると、尚更。

あれ、もしかして俺子供に弱いんじゃないのか？

い、いやいやいやいやいや。俺くらいの年頃ならみんな子供にはこ

んな接し方だっつーの。

「ゆっくりでいいから」

「う、う〜…っ!」

痛くならない程度の力で顔を拭いてやれば、少女は特に嫌がることもなくされるがままになる。

人に対してこういうことやったことないから力加減が心配なんだがどうやら痛くはないようだ。

しかしここまで俺に警戒心無いって…俺は一応お前に大爆発を食らわせた男だぞ？

凄い危険だろ。

仮にそうじゃなくとも俺が年下の子が趣味だっっていう趣向を持ったりしたらどうするんだ。

いや俺は同年代からちょっと年上くらいがストライクゾーンでこんな年下にはまったくカスリもしないのだが、世間にはロリコンという危険すぎる男達がだな…

「…お父さんもお母さんも、どうしてお姉ちゃんみたいになれないんだって、お、怒ったの!」

「うん」

「私っ、怒るんならちゃんと怒って欲しいのっ!だって、だっどどうして怒られるときですらお姉ちゃんと比べられなきゃいけないの!私は私なのに!う、ひっぐ、ぐず、うっ…」

「それをお父さんとお母さんには?」

「言ったよ!でもお父さんもお母さんもお前がお姉ちゃんみたいになれな、いから…っ!」

そこまで言っついに完璧に泣き出してしまった少女に俺はどうす

ることも出来ず、ただハンカチでその濡れた顔を拭うことしか出来なかった。

こりゃ多分明日は目が腫れるだろうな、子供だから出来る素晴らしき大泣きっぷりだ。

俺がこんな風に泣いたのはいつだったけな、人前でこんだけ大泣きできるのはある意味子供の特権だよなあ。

感情に流されて感情のまま泣いているんだろう。

それにしてたって、子供がこんなに大泣きするのはケガをして痛いときがほとんどだろうに。

多分今まで抱え込んでいたものが爆発してしまったんだろう、泣き止む様子を見せない少女に俺はただ傍にいてやることしか出来なかった。

ここで慰めの言葉をかけてやるべきなんだろうが…正直言って、なんて言ったらいいのかわからない。

どうせ一時的な慰めにしかならないだろうし。

子供だからその一時的な同情やらなんやらで騙せるかもだけど…なあ。

おそらくは…こんな気持ちを今まで誰にも言ったことがないんだろう、この様子からじゃ。

今までずっとずっと一人で溜め込んできたんだろう。

それが泥棒をさせるほどになって、結果としてその泥棒を行った相手に気持ちを吐き出すまで追い詰められてしまったのか。

普通赤の他人以下の男にこんなことを話したりはしないもんな。たとえまだ幼い子供だって誰に言ってもいいのかわからないのかとか、そういうのは分かっているものだ。

よっぽど追い詰められてる、どこるか危険な状態なんじゃないのか？



小さな子がここまで追い詰められるってよっぽどだろ。親は本当に何やってるんだ。

いや、親もこんなに追い詰めるつもりはなかったはずだ。

ただ姉が優秀だったから、あるいは手がかからなかったから。二人目の子供もきつとそうだと同じような教育をし、姉を見習えといったのかも知れない。

そこに悪気なんか一つもない、あるのは姉のように立派になって欲しいという願いだだけだ。

……姉が出来すぎているっていうのも、大変なもんなんだな。

姉のときと同じような子育てをしても姉のように育ってはくれず。苛立ちもあつたんだろ。

そしてこの子にける期待も当然のようであつたと思う。

この子がいうくらいの出来た姉ならば。

多分この子は愛されてないわけじゃない。わけじゃないと思うんだが、この子にとっては姉が愛されていて自分がオマケのように感じるんだろ。

俺はこの子の家族を知っているわけじゃないからなんともいえないんだが、服も綺麗なものを着てるし髪の毛だつてかわいい髪留めで留めてる、見た目だつてガリガリ痩せてるわけじゃない。

おそらくは普通の家庭で普通に愛されてるんだと思う、これで見ただ目ボロボロでガリガリに痩せてたら虐待を疑うが、そんな見た目をしていないし第一警察が保護者が来てこの子を帰したつてことはそんなことないんだと思う。

多分、本当に親子の行き違いなんじゃないかなあ。うん。

「お姉ちゃんもっ!」

「ん？」

「あ、んまり帰ってこないのに何かにつけて「私はお姉ちゃんなんだから」って言うって…！冒険とか、そういうの知らない、けどっ！お姉ちゃんが冒険してるから何なの、私より年上で何でも出来るからって何なの！キラ伊だもん、みんなみんなキラ伊だもん！」

キラ伊って。んなこと俺に言われても仕方が無いのだが。

しかしここまでキラ伊キラ伊連呼されるとアレだな、この子の両親知らないのに結構酷い奴に思えてくる。

俺なんか悪党だけど。

しかしこれくらいの年の子は両親に甘え、兄弟に甘え喧嘩して、っていう関係を築くはずなんだけどなあ。どこで歪んだんだか。

いやこれも姉妹喧嘩の一種？ 兄弟いないから俺にはちょっと分からないな、従兄弟はいるのだが年が離れてるし。

姉妹喧嘩ってこんなんなの？

俺が思ってたのは「おねーちゃんのバカ！」「おねえちゃんにバカついていけないの！」みたいな平和なものだったんだが、なんか違うっぽいなあ。

そんだけ姉に対してコンプレックスがあるということなんだろうか。

あるいは両親の期待がこの子の知らないうちにストレスになっているとか。

姉と比べられることがそんなに辛いことだなんて、きっと両親は知らないに違いない。

それをためた結果が「嫌い」……うーん、我慢しすぎたんだなあこの子。

些細な不満が、両親や姉を嫌いと言わせるにまで発展しちまってる。

俺なんか親が悪の組織に入ってたって知った時ですら喧嘩せず「どうやって父さんと母さんは警察の目を欺けたの？」なんてのほほんとしてたからなあ。嫌いとかいう感情を両親に持ったことねえや。俺が昔っから悪役好きだったせいもあるかもだけど。

まあ、嫌いっていうのは今感情が高ぶっているから出る言葉だと思っただけさ。

嫌いだけじゃないと思う、色々な感情が混ざって嫌いだとしか言えないだけで。

だって嫌いならこんなに傷ついて泣かないもんな、多分大好きだからこそこんなに追い詰められて泣いてるんだ。

反抗期にちよつと近いかもしれない、でも子供にはそんな感情理解しろって言っても難しいだろう。

それに実は子供って両親に嫌いって言うつてるとき、全員が全員じゃないけどほとんどの奴は構ってつてサインを発してるんだよな。

私に「嫌い」って言われたくなければもつと私に構って、つてそういうサイン。

それを無意識にやってるのが子供だ。大人の愛情を知っているからこそ言える言葉。

だけどそれだつて、大人になってから振り返ると分かるものだ。今分かれと言つても難しいだろう。

あるいは外に出て頭を冷やせば嫌いだけじゃない感情も子供ながらに見えてくるかもしれない。

そう考えればこうやって一人になって（まあ俺と出会っちまったから二人なわけだけでも）泣いて自分の感情を吐露するのも、まあ

ひとつの解決策かもしれない。

しかしだなあ、この年頃で家を飛び出すのはマズイって。

「でも帰らないと今日寝る場所もないだろう?」

「のじゆくする!」

「いやそれは駄目だろ、危なすぎる」

「ディオがいるから平気!」

「ディオ?」

聞いたことある名前だな、と思っていれば少女が腰につけていたモンスターボールの開閉スイッチを押しした。

そうすれば中からオレンジ色の物体が飛び出してきて、ワンと犬のように吼えた。

ああ懐かしき今日の昼頃の記憶、泥棒の記憶のガーディが出てくる。そういえばこいつのニックネームはディオだった。

こいつの泥は未だ俺の服についていますよ、ええもちろんクリーニングに出すような金はないですよ。なのにどうしてくれるんだまったく!手洗いなんだぞ!…落ちるかな泥。

ガーディはさっきのように俺に飛び掛ってくることも無ければ騒ぐことなく、少女の傍に寄り添い慰めるようにべろりと濡れている少女の頬を舐め始める。

どうやらこいつは姉のポケモンではなく、少女のポケモンらしい。通りでバトルに参加しなかったわけだ。

「ディオがいれば大丈夫だもん」

「大丈夫なわけあるか。いいか、野宿なんてしてみろ、野獣が出る」

「やじゅう…？ ポケモン？」  
「いや、ポケモンより怖い」

だから野宿だなんて言ってくれるな。

野獣が出るぞマジで、人間は時にポケモンよりよほど恐ろしいもの  
に変わるんだ。

しかし警察に行っても意味はないだろうな、この子逃げ出しそう。  
そして俺誘拐とかそんなんで捕まりそう、それにあの正義感たっぷり  
の警官に出会ってみるよまたグチグチ言われるんだぜ…。

それに警察は託児所じゃないし。なら他にどこへ、と考えても普通  
にいけばやっぱり家しか…でも俺この子の家知らないしな。

家知らなきゃ送れないし、この子が家まで案内してくれると思えな  
いし、でも放っておいたらマジで野宿しちゃうしそうだし。

悪ならばここでバイバイするところだろうが、俺はそこまで悪に染  
まった気は無い。

…さて、どうしようか。

ちなみにディオこそガーディがいるから大丈夫という言葉は無視だ。  
こんな人懐っこいガーディに番犬のようなマネが出来るか。仮にし  
たとしてもバトルに慣れてないんじゃないじゃ返り討ちにされる可能性の方  
がずっと高い。

「大丈夫だよ、ディオが守ってくれるもん」

「あのなあ、ディオだけじゃどうしようもならんと俺は思うぞ。デ  
イオがやられちゃったらどうすんだ、一人で自分の身を守れないだ  
ろ？」

「それは…」

「な？ 家にいるのが一番だって。帰ろう？」

そう言っても今は家に帰ってくれないだろうけど。

それでも他にこの子が行く場所はないんだ、あるいは友人の家に泊めてもらう……ってことも可能かもしれないけど、泥棒した日くらいは両親のケアが必要だろ。

なんて被害者ながらに考えてしまっわけですよ、はい。

だが事態は思わぬ方向に行くこともあるというのを、俺は忘れていたらしい。

泣き止めた少女は俺を見て、そしてなぜかにつこりと笑ったのだ。

これは家に帰る決意をした……顔じゃないよなあどう考えても。

「おにーちゃん」

「ん？」

「なら私、お兄ちゃんの家の子になる！」

「は？」

いやそんな、海賊王になるみたいなことを言われても。

ていうか、なして？ ねえ、どうして？

何故そのような結論に達しちゃったの？

ただの被害者と加害者の関係が、どうしてこう複雑なことに。

## 第8話 青年と少女その3

(今までのあらすじ)

主人公は悪と霊と電気タイプ好きの自称イケメン(性格が)、未だ名前で呼ばれたこと無し。

「デルビルもらったらニートになります！したつば給料少なすぎだし」

正義の味方登場、基地沈没

「基地で人間が波乗りできる状態っておかしいと思います、てか正義の味方強すぎ」

本拠地に転勤になりました

「給料上がらないのに仕事場が遠くなるってどんだけー」

サボってたら泥棒にあう、ある意味自業自得。

「ボールがない！泥棒！」「これは私のだもん！」

警察(正義)に言葉のフルボッコを食らわされる。主人公(悪)、イライラ鬱鬱。

「お兄ちゃん、さつきぶり」「てめ泥棒娘じゃねえか！」

家族と絶縁宣言、お兄ちゃんの家族になる宣言

「お兄ちゃんの家族になる！」「なん…だと…？」 いまここ

お兄ちゃんの家族になるって。

俺にどうしろと？ え、なに、幼児誘拐しろって？

保護者に何の連絡もとってないのに知らない男（俺）の家にこんな小さい子供を泊まらせるとか警察まっしぐらコースじゃねえか！

変態扱い決定じゃないか！俺はたしかに悪人だがこういう異様な道にそれた悪人にはなりたくない！

悪の中でも明らかに敬遠されそうじゃないか。

さすがに親も悲しむ、お前いつからそんな年下趣味のロリコン野郎になったんだと。

俺はなつたつもりないけどおおお！！

「れれれ冷静になれ少女よ！お前は俺に犯罪者になれと言うのか！」

「お兄ちゃんの妹になるのがどうして犯罪なの？物を盗ってもいいのに」

「お前だつて両親の許可なしに勝手に「今日から家族だから家においで」みたいなことになってみる社会の制裁が俺を待っているに決まっている…！」

「せいさい？」

「地獄つてことだ」

そうなりや世間から冷たい目線を受けるのは確定事項だろう。

終わった、俺の人生終わった。

頼むからそうなる前に自分の家に帰るといつてくれもつ今すぐに！

俺はたしかに悪の組織の一員だ！一員だけれども！



こういう形で悪の一員になってるわけじゃないんだ、もっと普通なんだ良心つてもんがあるんだ…！

「大丈夫だよ！」

「馬鹿大丈夫じゃないから焦ってるんだろ俺！」

「わんっ！」

「わんじゃねーよ少しお口チャックしてるガーディ！」

人が焦っている時にKYのように鳴き声をはさんできたガーディの口を軽くおさえる。

するとガーディは何を勘違いしやがったのか嬉しそうに尻尾を揺らした。

…違うから、俺お前と遊んでるんじゃないから。じゃれるなよこんなときに。

はああああ、とでかいたため息をこぼせば少女の顔が歪んだ。

あ、泣きそう。また泣くのか、お前の涙は無制限にあるのか。

「…なあ、家族一緒にいられる時間って今しかないんだ。俺なんて親元離れてるし、俺の従兄弟の…まあ俺の兄ちゃんみたいな人はさ、今まさに家族と絶縁状態だよ」

「…ん」

「でもその人も絶縁したのはもっと年とってからだったし。絶縁するとかしないとか、そういうのを決めるのはまだまだ先でもいいんじゃないかと思う。キライとか好きだとかもな。今はお前の小さいし、こんな小さい頃から絶縁しちゃったらきつと寂しいし辛いぜ？  
もっと大きくなって、一人で生きていけるようになってからそういう言葉を使うべきだ」

今は親の金で食べて遊んで暮らしてるんだからな、と言えばわけが

わからないというような目をされた。ま、そりや当たり前か。でも子供の仕事はそうやって毎日幸せに健康に過ごしていくことだ、あと犯罪に手を染めないこと。

…まあ後半はこの子にやアウトなんだが。

でも子供ってというのは誰かの保護があつて初めて生きられるものだから弱いからな、ちょっとしたことで体は壊すし免疫力だつてない。

すぐに死んでしまうから、大人が守つてやるべきなんだ、子供つてたとえ子供に守られているって実感が無いとしてもな。

「今はもつとまわりを良く見てみるってこと。見落としている所が無いかちゃんとして見てみるって。それから好き嫌いを決めるのも遅くは無いいし、そこからまた家族を好きになつたつて構いやしない」

「…キライだもん」

「今はな。だがこれから先はわかんないだろ。キライなままかもしれないし、好きになるかもしれない。ただ今は様子見をしとくべきだ。つまり何が言いたいかつていうと家に帰ろうぜ！」

いや最後の一言に俺の全ての思いがこもっているわけだが。

だつてそうだろう、この年でロリコン趣味だなんていわれるなんて嫌過ぎる。

とりえあらずあつたまよさそうで理論的っぽいことを言つてこの子を納得させて今日は家に帰らす！

この町広いし、今日別ればそうそう会うこともないだろう。

とりえあらずもうやりすごそう、今日だけでもやりすごそう。それが一番だ。

「今日は家に帰ろう？ な？ 俺が家まで送つて行つてやるから」

「でも…」

「全部今決めなくていいんだって。まだまだ時間はたくさんあるんだから、一日一日ゆっくりと考えて決めていけばいいんだって！今日だけの感情で絶縁なんて、そんなの寂しすぎるだろ？」

ガーディの口を押さえていた手を離して、少女の頭にぼんとのせて子供にするのと同じようにぐしゃぐしゃと撫でる。俺が小さいころ、親にやってもらったみたいに。

赤の他人にこんなことされんのはいやだろうけれど、ここまで話した仲だ。嫌と思っても嫌とは言わせん。」

少し納得していないように、けれども頷いた少女を見て俺は安堵の息を吐いた。

もうさっさとこの子送って帰って、ポケモンたちと触れ合いたい。

今日の疲れを癒したい…。

「んじゃ、帰るか！家まで案内してな」

「……本当に、家までついてきてくれる？」

「もちろん！」

にっこりと安心させるように笑って、少女の頭から手を離す。

まああれだ、一時は親のこと嫌いななんていつてるけど、今はそれしか目がいかないだけで好きな部分だっていっぱいあるはずだ。姉にしてもな。

だから家出だの絶縁だの今日だけの話だろう。

そんなことを思いながら俺はこのドタバタが今日だけであることを強く願った。

「お兄ちゃん、名前は？」

「サイカ。お前は？」

「マリンっていうの！宝石のアクアマリンからとった名前なんだって！」

「へえ」

「お兄ちゃんは？」

「俺？ 俺は…知らないな、自分の名前の由来なんて」

少女…もといマリンを送る帰り道、そんなことをぼつりぼつりと話しながら少女の家へと案内してもらった形で歩き続ける。

マリンからの要望で繋いだ手は、子供体温のせいかマリンの方が温かい。

「つかこれ犯罪じゃないよね？ 親にみつかったら警察に突き出されないよ、なあ…？」

「……………今から怖くなってきた。もうぐるっと逆方面を向いて自分の家に帰らせてえ。」

「サイカ、サイカ、サイカ…なんだろう、サイカって」

「あー、なんなんだろうな」

「サイカお兄ちゃんはそういうの気にならないの？」

「ならないな。由来があってもなくても、サイカっていうのはもう俺の名前だし。今更過ぎ」

由来なんて有ってもなくてもどっちでもいい年だしな、もうさ。

これが子供の頃だったら名前の由来とかで盛り上がるのかもしれないけどなあ。ほら、俺もう成人年齢だから。

ビールもタバコもパチンコだってやっていい年齢だ。やんねーけど、金ないし興味もないから。ああでもタママシのパチスロは一度やってみたいな…ポリゴンは無理だとしても生で見たこと無いから見てみたい。

「まあ、マリンはいい名前を付けたもらったんだから大切にしな」

「うん！してるよ！」

「そっか。ならいいや」

正直子供と話す話題なんて見つからないんだが、そんな俺を知ってか知らずかマリンは名前の由来の話から今度は好きな食べ物についてだとか、最近あった出来事だとかをどんどん話してくる。

さすがというべきか、こういうのは子供と一部の話し上手な大人の特権だよな。

俺には二度と戻ってこないものだなと思いつつ、頷いたりしゃべったりしながら確実にマリンの家まで歩いていった。

「バカマリン！探したぞ！」

そう、この声を聞くまでは。

## 第9話 青年と少女と少年

声のしたほうを振り返れば、そこにはマリンと同じくらいの男の子がこっちに走っている様子が見えた。…あれ？どっかで見たことあるような…。

後ろの方からこっちにくる子供をじっとみつめる。…が思い出せない、多分気のせいだろう。

「リクくんっ！」

「バカマリン！お前のとーちゃんとかーちゃん、すっげー心配してたぞ！」

そうして俺たちに追いついてきた子供は、ポカリとそんなに痛くないくらいの力でマリンの頭を叩いた。おお、じゃれとる。

これくらいの子供たちのじゃれあいっぷりを見るのは久しぶりなのでちよつと自分の子供時代を思い出してしまう。微笑ましいなあ。叩かれた（といつてもたいして力など入っていない）マリンはそうされたことに対して不服そうだが、こういうのは今しか出来ないんだからいいじゃないかと思う。

大人になったらこういうじゃれなど到底出来ん、それも男と女でなんて…。

「…別に、いいもん」

「いいもんじゃないっ！それにオレだつてなあ！」

「？ オレだつて、なあに？」

「っ、なあ、な、なんでもないっ！」

子供の頃はよくじゃれてたなあ、なんて昔を思い出している俺を置

いて二人（マリンとリク君：だっけか？）はいつのまにかどんどんと甘酸っぱい雰囲気になっていく。あれ、じゃれあっているっていうよりこれなんか漫画の恋愛シーンみたいな気がする。

あれあれ、俺子供のころこんな甘酸っぱいことなかったよ……

しかしこんな子供の頃からこの雰囲気かよ！マセすぎだろ最近の子供はよ！

俺なんて…俺なんて……ああ、軽くブルーになりそうだ。落ち込みそうだ。

「…ちゃんと帰ろうとしてたもん。ね。サイカお兄ちゃん」

え？　ここで俺にふるの？

慌ててうんうんと頷けば「ほらね！」とマリンは自慢げに言った。

いやお前は帰るまいとしてただろうさっきまで。軽くツツコミを入りたい。

マリンが俺に話を振ったことでリク君も俺の方を見る。

生意気そうに見えるのはつりあがっている目のせいか、この頃の年頃特有というか。あれやっぱりこの子どっかで…？

「……おにーさん、誰？」

「俺はサイカだ。その、この子を親御さんの所まで送っている途中なんだ」

「ふーん……」

俺の言葉を聞くとリクくんはじとり、と「何コイツ不審者？」みたいな目を俺に向けてきた。

その気持ち、分からないでもない。いきなり仲のいい友達（というか片思い相手？いや両思いなの？）がこんなワケのわからん男と手

を繋いでいたらそりゃ不審者だと思っよな。

質問の答えもどことなく怪しいしな……もうここでこの子に任せて俺帰りたい。

帰っていい？　むしろ不審者扱いされないためにも俺はここで帰るべきじゃない？

「お兄ちゃんはね、バトルも強いんだよ！」

「は？」

「マジ！？」

なんでそんな話になるんだ唐突に。子供の思考わけわからん。

だいたいマリンとバトルといえるバトルなんて……あ、あの泥棒戦のことを言っているんじゃないよなまさか。

あれはマリンが不慣れなせいでそう感じたんだろ。大体あれはバトルっていうより乱闘だしなあ、ルールも何もあつたもんじゃない。本当のポケモンバトルっていうのはシングルバトルかダブルバトルの二つだ。あれは3対3なのでポケモンバトルとは言わない。

他の地方では3対3のバトルがあるらしいが、この地方ではないのでバトルとして扱わないことにしてる。

「強いんだ、バトル！」

「え？」

冗談きついぞマリン、と軽口を叩こうとしたら、ソレより前にリク君が乗ってきた。

いや乗ってくるなよ、ここは「強いわけねーじゃんこんな奴が」と突き放してくれよ！

俺は怪しい男なんだぞ！そんな「バトル強い」という（しかも実際に強いかどうか見たわけでもない）言葉に反応するの？



「バトル強いんだよお姉ちゃん、だからちょっとバトルしない？」  
だなんて言われてほいほいついていかないだろうなこの子…なんか誘拐されそうで怖い。

もつと危機感を持つんだ！俺から離れるんだ！

そして嫌な予感しかないから何も言っただけ何も言ってくれなな！

「じゃあ俺とバトルしようぜ！いいじゃんトレーナー同士目と目があつたらバトルつてもんだし！なあバトルバトルバトル！」

「いや、俺はマリンを送るだけ…」

「お兄ちゃんは強いよ！リクくんも危ないかもね！」

「オレは負けないよ！見てろよマリン！」

見てなくていいよ帰ろうよ。目と目が合ったらってそんなの不良じゃないか。

そういうルールが適用されるのは街の外だけだ。そしてここは街だ。街中だ。適応外なんだ。

何二人でもりあがつてんだもういつそ二人で家に帰れよ。

しかし思うだけで言えない俺はヘタレだ。仕方ないだろこういう子供に暴言なんかを言うのは俺のポリシーに反するんだ！泥棒の件は別として。

子供は大人を見て育つから出来る限り突き放したくはねーんだよばーか！そんなこと考える俺のバカ！いつそもつと悪に染まればいいのに。だって俺したつぱでも一応悪の組織の一員なんだから…もつとこう、極悪非道的なものを…。

「…あのさ、俺」

「それじゃあ空き地でバトルな！」

「忙しいから…ん？」

「頑張ってお兄ちゃん！」

「負けないからな！」

あれ？　なんかこの流れは嫌な感じが……

「それじゃあ一体一でバトルな！」

ああ、この流れか。やっぱり。どうして子供相手に断れないんだ俺。思わずため息をついてしまいたくなる、今日何回目だ。どれだけ幸せを逃しているんだ俺。

もうとつとと勝ってマリン送って自分の家に帰りたい。

今日の夕飯何にしよう、もう時間無いからカップラーメンとかになるかな…帰りサラダか何かでも腹の足しに買って帰ろうかなあ。

「どっちかのポケモンが戦闘不能になったらバトルは終わり！いいよな！？」

「ああ、いいけど。もう何でもいいよ…」

「俺、強いから驚きすぎて腰抜かすなよ！出て来い、エンペルト！」

もう帰りたい……ん？俺のトラウマがなんだって？

思わずリク君の方を見れば、そこには俺が散々水を被り上司の愚痴やら八つ当たりを受ける原因になったポケモンがそこにいた。いや、同じ種族なただけだ。

にしてはやけに「俺皇帝だから跪けよ愚民ども」みたいなオーラがにじみ出てるけど。なんかもの凄い強そうだけど。

こんなオーラのエンペルトをつい最近室内丸ごとプールで見たような気がする。

いやまさか。そんなバカな。

嫌なポケモンと被っただけだな、だけなんだよな、と思いながらリク君を見る。

……………あれ。

あれ、この子見たことあるって思ってたけど。あれ、どうしてかエンペルトが隣にいと正義の味方君にそっくりに見える。

……………いやまさか、そんなまさか。子供なんて皆似てるって。マジで。

「俺とエンペルトは悪の組織の基地を水で沈めたこともあるほどなんだからな！」

お前かあああああああああ！！！！

勝てるわけねえだろ何がもうとつと勝ってマリン送って自分の家に帰りたいだこれは明らかに警察行きフラグじゃないかバカヤロオオオオ！！！！

## 第10話 青年と少年

人は負け戦だと知っているとときに、その戦に全力を出せるか。答えは否である、出せるわけが無い。

というわけで早くもヤル気はゼロになりました。もうおうちかえりたい。

「お兄ちゃん！リクー！頑張れー！」

少し黙ってようねマリソ。君が元凶だから。

というかこの子トラブルメーカーか何か？この子に会う度に何かしら厄介ごとが降りかかってくるんだけど。何これ天性のものなん？

…この子に関わらなければよかったと、今思ってももう遅いのだろうか。

というか関わってきたのはこの子が先だ。避けられない、どうすればよかったんだ？

……サボらずに仕事をまじめにこなせばよかったんですよね本当にごめんなさい。

あーもうやってらんねー！

そんなことを思いながら目の前にいるリク君を見る。あーあー、戦えるからって目を光らせてよ……俺のこと強いつて勘違いしてるよ。これだから子供は。基地をプールに出来る奴と互角な実力なんてもっているわけないだろ。

かと言って手を抜けば「手を抜いたもう一回！」なんてことになりかねない。それは困る。

負けるにしても全力を出さなければ。負けるの前提で考えるのは悲しいけど。

それじゃあ誰を戦わせるかだよな問題は。

グラエナは論外。何かあつたら俺はいつもグラエナに頼るから(多分今)リク君は俺が悪の組織の一員だつて気付いてないのに、いつも頼るポケモンを出したら次どこかの基地であうときに一発でばれる可能性がある。

何かとあると俺はグラエナばかり出すからなあ…常に横にいる場合だつてあるし。

グラエナつてメジャーなポケモンじゃないからそこまで手持ち(しかもメインメンバー)に入れている可能性が高くないから顔とか隠してもすぐに俺だつてわかるかもだし。

それは困る、とても困る、死ぬほど困る。そろそろ更生するんで逮捕は免れたい。

じゃあドンカラス? やめろあいつが今ここで戦闘不能になったら何か緊急事態があるときに飛んで基地にいけないじゃないか。

それはマズイ、ドンカラスも駄目だ。

ちなみにヤミラミは攻撃よりサポートの方が得意だからこんな一体の戦いにはむかない、マルマインも一番の決め技の大爆発が一体一では負け確定の技になるからな…。

サメハダーは同じ水タイプで、しかも防御面が弱いときた。奴は特攻隊長だからこういう戦いには向いていない。

それじゃあもう一体に絞られてんじゃん、と腰のベルトにあるダークボールを撫でる。

そういえばダークボールで統一しているトレーナーって少ないよな。

俺もいつか使おうかな、ダイブボールとかゴージャスボールとかプレミアボール。  
今はダークボール一筋だけど、こういう青いものや白いものを入れるのもいいだろう。

戦う相手はエンペルト、ならば俺がいつも使うタイプのポケモンの内毒と悪とゴーストは相性が悪すぎる。軽く天敵状態だ。

あれ、俺今までエスパーばっか天敵だと思ってたけど実は鋼の方が…？

い、い、いや！まさかまさか！！

俺の天敵はいつだってエスパー！それに間違いはない！！

「…もう、仕方が無いよなあ」

そういつてベルトにあったダークボールを外して手に取る。

出来れば水があるところでやりたかったのだが残念だ、あとで睨みつけられることになるかもしれん。だがあの正義の味方のエンペルトと一番相性がいいのはこの子しかいないだろう。

もうどうにでもなれだ、どうせ負けるし。ならばいつか戦うであろうこの正義の味方君と戦って実力を確かめておくのも悪くない。

再戦の機会がめぐってくる前に辞職出来たら一番嬉しいんだけどなあ。人生思うようには進まないから一応保険で。

「お兄ちゃん、決まったみたいだね！…それじゃあバトル、スタート！」

マリンの明るくはじけた声と共に、俺はボールを放り投げた。

ああもうこのトラブルメーカーめ！今日送り届けたらもうマリンには近づくまい！

「いくぞ！」

「こい！」

負けてやるよ、とか思いながらダークボールから出てきた俺のポケモンへと命令を送る。

こいつがエンペルトを倒せなかったら、多分他の俺の手持ちは全員倒せない、と思う。

いきなり陸地へと出された俺のポケモン……ランターンは少々不機嫌に俺を見ながらも頭上にあるふたつの灯火をちかちかと光らせた。それは問題ない、というランターンなりの合図。

陸地でも全力を出して戦ってくれるらしい、頼もしい奴だ。

「ランターン、蓄える！」

「エンペルト、草結び！」

エンペルトが放ってきた草結びを、蓄えている状態のランターンが受ける。

ぎしぎしと放たれた草がランターンを絡めとり締め付けるが、蓄えるによって防御・特防ともが上がったランターンならたとえ弱点だろうと一撃では瀕死にならない。

そもそも草結びは体重によって威力が変わる技だ、20キロちょいくらいしかないランターンはそこまで大ダメージを受けない。

これで俺のランターンが他のランターンよりもメタボだったりしたら話は変わっていたが、生憎俺のランターンは体重も身長も標準中の標準だ。運が良かった。

「げっ！オレの苦手な感じの奴？もしかして……」

「ランターン、10万ボルト！」

「やばっ！エンペルト、高速移動でかわせ！」

出ました高速移動、あのトラウマ技その1だ。  
巨体からは想像できない速さでエンペルトは地を駆ける。海の生き物なのになんでそんなに陸を走るのが速いんだ。

それに引き換え俺のランターンは陸の上でややいずらそうに（そして海に入りてー！陸に呼び出すなよー！みたいなことを思っているに違いない、絶対に）10万ボルトをかわして陸地を走り回るエンペルトを必死に目で追っている。

エンペルトとランターンの素早さはそこまで変わらないのだが、高速移動をされてしまえばどちらが速いかなど一目瞭然だ。目で追えるスピードじゃない。

この状態じゃあ10万ボルトで攻撃してもかわされ続けてしまうだろう。畜生。

さらに俺のランターンは放電を覚えていないので10万ボルトよりも広範囲の電気技は出せない。

畜生習得しておけばよかった！10万ボルトの方の習得を優先したのがまずかったか！

「エンペルト、ハイドロポンプ！」

「後ろだランターン！こっちもハイドロポンプ！」

エンペルトが駆けることを止めてランターンへとハイドロポンプを放つ。

それを相殺すべく俺もランターンへとハイドロポンプの指示を出す  
が、丁度ランターンの後ろから不意をつくようにハイドロポンプを放つ形になったエンペルト（こいつ絶対これ狙ってやったぞ絶対！）  
へと対応が遅れる。



俺の声でエンペルトが後ろにいることに気付いたランターンが慌ててハイドロポンプを放とうとするも、それより早くエンペルトのハイドロポンプがランターンを直撃する。

たとえ半減でも痛いものは痛い。このまま高速移動とハイドロポンプのコンボされまくったらギリギリ体力削られて何も出来ないまま負けるんじゃない？

勝てる保障がひとつもないから当然の結果なんだけどな、と思いつつ俺はなんとかここから反撃する策を考える。

正直子供に負けるのはごめんなのだ、きつと負けちゃうだろうけど。くそう普通に悔しい。

俺のプライドスタボロになるしこんにかくみたいなのは切り刻まれる。きつとな！

## 第11話 青年と少年2

とりあえずあまりランターンが攻撃を食らうのはマズイ。

いくら蓄えたて能力が上がったからといっても攻撃を食らいすぎてはいつか体力がなくなる。

それだけでなくもこの正義の味方君のエンペルトはレベルも高い感じなので何度も何度も耐えられるものじゃないだろう。

早くケリをつけなければ負ける。いやだからといって俺が勝てる勝率なんてゼロだけだよ。

「エンペルト！高速移動でかく乱！」

「ランターン！今の内にもう一回蓄えとけ！」

10万ボルトを食らわないようにエンペルトがまた地を走り出し、俺の指示をうけたランターンはそんなエンペルトには目をくれず蓄え始める。

だがこの機会を逃すほど目の前のエンペルトも、そのトレーナーのリク君も甘くは無いだろう。

「エンペルト、もう一回ハイドロポンプ！」

蓄えた隙を狙って、エンペルトがもう一度ランターンに向けてハイドロポンプを放とうとする。やっぱりか！

先ほどと同じように背後に回って狙いを定めるために止まり、ランターンを見据えるエンペルトを見て内心拍手喝采した。読みがあたつた！

「ランターン！怪しい光！」

「っ！？エンペルト、見ちゃ駄目だ！」

ハイドロポンプはその威力故かなか目標に当たらない技だ。なので目標に当てようとするとする時は動きを止めて、しっかりと相手の位置を確認しなければならぬ。だからどうしても、相手を見ることに集中してしまう。

そこを狙う、というかそこしか狙いどころが無い。

案の定しっかりとランターンを見ていたエンペルトに、ランターンが頭上にある灯火を何度も点滅させ揺らし、怪しく光らせる。

ソレを見たエンペルトがどうなるかなど、多少の経験を積んだトリーナーなら分かりきったことだ。

ぐらり、とエンペルトの体が揺らめくのが俺にもランターンにも、そしてリク君にも分かった。

あちゃあ、とリク君が頭に手を当てたのをちら見してから（この瞬間だけちよつと勝ち誇ってみる。うわ俺おとなげねえ！）ランターンに指示を出す。

ここしか勝機がない！ここで決める、ってか決めたい！

「ランターン、10万ボルト！」

「エンペルト、高速移動で避けてくれ！」

ビリ、とランターンの全身から電気がもれる。エンペルトの方は混乱してリク君の声が届かないのか瞬間移動をすることもなく突っ立っているだけだ。

なんという好機、運が俺に向いてきてるんだらうか。これももしかして本当に勝てちゃうんじゃないか？あの俺が所属する組織をポッコボコにしている正義の味方の少年に。

相当な実力者の少年に。何ソレ超嬉しい。

「エンペルト！」

リク君の必死そうな声が聞こえる。が、俺の命令を受けたランターンはエンペルトが正気に戻る前にと10万ボルトを浴びせる。先ほどのハイドロポンプのせいで水浸しになった地面にも電気が流れ、バチバチという音をたて電気がエンペルトまで伝わっていく。これは予想外だ、と慌てて審判をしていたマリンを見れば、マリンは水の被害のないところでバトルを見守っていた。よかった、感電する心配はなさそうだ。もしこれで感電なんてさせてしまったら殺人犯じゃないか俺。そこまで悪に染まりたくない。染まっただまるか！

「全力でハイドロポンプ！」

「うっええあ!？」

いつのまにかバトルからそれてしまった意識を慌ててバトルの方へ戻せば、ランターンの攻撃を耐え切ったエンペルトがお返しとばかりにランターンにハイドロポンプを食らわそうとしているところだった。

10万ボルトを受けて耐えたどころかその衝撃で混乱も治っていたらしい（しかも運がいいことに麻痺もしてない）。ああああ油断してた！一発で倒せると思ってたのに！レベルが違いすぎるだろこれ！

「ちょッ、ランタ」

「いっけええええ!!」

いっけええええ!!じゃねえええええ!!

俺と同じように油断していたランターンがハイドロポンプをまともにくらってしまう。

指示を出す暇も無く先ほどよりも威力が強くなっていたハイドロポンプの威力と勢いにまけたランターンはそのまま吹き飛ばされ、地面に叩きつけられるようにして倒れこんだ。

「そこまで！エンペルトの勝ち！」

「いよっしゃあ！」

審判であるマリンの声と、勝ったことに喜びの声をあげた正義の味方のリク君の声を聞きながら俺は負けたことに一人納得していた。レベルが高くないと、俺の入っている組織を片っ端から潰していくなんて不可能だもんな。

これくらいのレベルはあつて当然なのかもしれない。

それでも負けたことは悔しい、電気技をあてた後にエンペルトの特性を警戒しなかった俺のミスが一番の敗因であつただろうから余計に。

そう、どうやらエンペルトの特性の激流でハイドロポンプの威力が上がっていたみたいなんだよな、さすがにダメージを受けていた俺のランターンにこのハイドロポンプは耐えられない。

逆に激流が発動するくらいダメージを受けていたんだから…とも思うが、そこから先どう頑張ってもやっぱり勝てないような気がする。だつてこの子強い、強すぎてどうしようかと思うくらいだ。

この子と戦うことになったら俺余裕で負けるな。相性的には抜群だったはずなのに、蓋を開けてみれば負けているのはこっちだし。

「…………お疲れ様、ランターン」

すっかりと目を回してしまったランターンの傍まで行き、ハイドロポンプを受けた場所の傷を確認する。

ポケモンセンターにお世話になることは分かっていたが、傷や怪我の度合いによつては今すぐすつとんでいかなくてはいけない場合があるので、バトル後はなるべく攻撃を受けた場所の傷を見ることにしている。

まあ素人判断だからあんまり信用できないんだけど。

今回は特に怪我もなく瀕死だけですんだランターンを見て安堵の息が出る。

負けてしまつて申し訳ないというように俺を見るランターンの頭をなでて、そつとボールの中へ戻した。

いや悪いのはランターンじゃなくて余所見しちゃった俺だし。アレが無ければもうちょっといいところまでいけたのかもな。結局負けてただらうケド。

それにしても、正義の味方君のエンペルトのレベルがはんぱない。混乱もしてたし上手くいけばそれなりに戦えると思つただけだなあ。

まあこればかりは仕方が無い、年の離れた子供に負けるっていうのは色々あれだけど、実力の差つてことで納得するしかないだろう。

「バトルお疲れ様！楽しかったぞ」

エンペルトと勝利を喜んでる正義の味方君にそう声をかける。

これだけ見ると普通の子供なんだけどな……あのプライドが高いエンペルトが素直にこの子の言うことを聞いてるってだけでレベルが高いのはなんとなく察せられたりはするけど。

「お疲れ様！おもしろいバトルだったな！」

「なんだかいよいよにやられただけな気がするけどな」

二人とも凄かったよ！と興奮で頬を赤く染めながら駆け寄って俺たちのバトルについて話し始めるマリンを見ながら、俺は小さくため息をついた。

俺、どうして正義の味方君と泥棒ちゃんの二人と仲良くしてるのかなあ。どっちも天敵だろ常識的に考えて。

特に正義の味方君、今度からこの子に会わないようにしたい。是非ともしたい。

もし俺がああ組織の一員だつてことがばれたら即刻牢屋行きのような気がするからな、俺まだ悪いことひとつもやってないのにそれはあまりに酷すぎる。

あの組織、本当に動くのは幹部で情報集めがしたつぱつて感じだからな。

だから給料も低いし、したつぱはそこまで悪に染まった仕事をしない。情報集めて、資料まとめて、基地守って……くらいだ。それで情報集めとかバトルとかそういうのが上手かった奴がどんどん出世していくらしい。

R団とか、したつぱばかりに任せてたから組織が壊滅したんじゃないかって上の人たちは言ってるからなあ、そのせいでこんな普通の悪の組織とは違うような形になったのかもしれない。

数が多いだけのしたつぱよりも、数が少ないながらも強い幹部が作戦の要になる。

したつぱを連れて目立つ行動をするよりも、数人で行って警戒されないうちに叩き潰す、それが俺らの組織のやり方だ。

下見はしたつぱまかせだけだ。

だからR団とかのように目立たないしニュースにもなりやしないんだよな。

俺たち悪の組織！とか名乗らないでひたすら叩き潰すだけだし。ま

あだから今まで生き残れてこられたんだろうケド。

でもこの正義の味方君がこの街にいるんじゃないかももう生き残れないかもな…。

「…かどうやって正義の味方君が俺らの組織の存在に気がついたかも謎だけど。いや裏でそれなりに動いてるんだ、警察だってバカじゃないんだから俺たちの組織のことを調べているんだろう。」

「そっから知ったのか？ 警察に知り合いでもいるのかな？ でもこの子に知られたのはマズイよなあ…。」

幹部のバトルはあんまり見たことが無いけど、ほとんどの幹部の連中よりこの子の方が実力があるだろ。俺は戦ってみてそう思うね。

「やっぱりデルビルもらって即仕事を辞める、が一番いい気がする。」

「よし、マリリン、リク君、帰るぞ。というかりく君、マリリンをおくって。」

「あ、そうだった！ 俺お前の親からもねーちゃんからも頼まれてたんだよ、見つけ次第連れて帰ってきてくれって！ 皆凄い心配してお前のこと探してたんだぞ！」

「…う、うん」

「お前のやったことは怒られて仕方ないことだけど、でもきつと許してくれるって！ な、帰ろう」

「おお、正義の味方っぽいなその言葉！」

「と俺は思ったのだが、どうやらマリリンはその言葉にはそこまで反応せずにもしろその前の言葉がひっかかったらしい。」

「ちよつと躊躇ったあと、リク君から顔を背けて小声でぼそりと呟く。」

「…お姉ちゃんも頼んだの？」



「ああ！」

「リク君に？」

「ああ、そうだけど」

「……ふうん」

あ、これジェラシーじゃね？ と俺は思ったのだが、リク君はそう思わなかったらしい。

「家族だから当たり前だろ！」って笑ってマリリンを見てる。これは将来女泣かせになる予感がするぞ。

というかこの年で嫉妬やら片思いやらか……最近の子供って凄いだな。

こう思う辺り俺もおっさんなのかもしれないけど……。

俺がこれくらいの年の頃は男女関係なく遊びまくった記憶しかないんだけど……最近の子供はどこまで進んでるんだ。もしかや最近ポケモンリーグで少年チャンプが続々と現れているのとか関係があるのか。

「なっ、帰ろうっ！」

「……………」

女は何歳であつても女っていう誰かが言つた言葉は本当らしい。幼いのにマリリンの奴、すげー拗ねてる。これって完全にアレだよな、アレしかないよな。なんだか二人の周りが桃色に見えてきた、おじさんそんな甘酸っぱい世界についていけないよもうどろんどろんに汚れた人間になるよ……。

そっぴやすっぴかり忘れてたけど、マリリンは姉にコンプレックス持つてるんだっけ？

それなのにお姉ちゃんに言われたから探したみたいと言われたら（それも好きな子に）ムツときちゃうんだろう。しかしここまでするとマジでお姉ちゃんがどんな人物か気になってくるな……。

「マリン！ なあ帰ろう？ 俺も、その……すげー心配だったし、マリンが家飛び出して帰ってこないって知ったときは、凄く不安だったんだ。だからだから、その、あのな……」

「……うん、なあに？」

「いや、その……お前のかーさんやとーさんたちも凄い心配してて、勿論ねーちゃんも心配してて、でも俺だって何かあったらどうしようってすっげー不安だった。俺、旅してからマリンとあんまり遊べてないし、電話ばっかだし、でもその時は寂しかったけどこんなふうに不安になったりはしなかったんだ。帰ればマリンがいるって分かってたし」

「うん」

「でも今日飛び出したって聞いて、もう戻ってこなかったらマリンには二度と会えなくなっちゃうんじゃないかって思ってた……だから、もう家に帰って俺の不安を消して欲しいんだよ！」

これなんてラブコメ？ 甘酸っぱいし胸が痛い。

リク君の言葉は支離滅裂な感じだがそこがまだ等身大の恋愛っぽくて……ああ俺も恋愛したいです。

俺にも彼女が出来ればなあ。

子供にさえ負ける俺、恋愛でもポケモンでも。

「……わかった」

「よし！それじゃあ帰ろう！」

「うん。それじゃあお兄ちゃん、またね」

バイバイ、と手を振る二人に俺も手を振り返す。

もう二度と会いませんように、特に正義の少年君には。次に会ったらフルボッコの予感。

フルボッコされる前に（というか牢屋へご案内される前に）職場をやめよう、そうしよう。

そう思って俺は未だ手元にこないデルビル君が早く支給されることを願った。

もうあいつがいれば俺はいつだって職場をやめるのに！

## 第11話 青年と少年2（後書き）

随分と久しぶりの更新となります。そして前の話を若干改稿しました。

ストーリー的にはとくに変わっていないので（若干付け足した部分があります）変更点は今のところありません。

バトル描写がもうちょっとうまくなるように頑張りつつ、なんとか完結まで頑張っていきたいと思います。

## 第12話 グラエナと青年

私の名前はグラエナ。

ニツクネームはあるけれど最近はそれで呼ばれることはないので、今の私の名前は「グラエナ」ひとつ。

そんな私はなんてことはない、どこの草むらにでもいるような貴重でもない種族のポケモン。

オタチやポツポがいる草むらで普通に生活しているし、人前にだつてよく現れる。

しかしポチエナのときの執念深くしつこい性格が原因なのか、それともグラエナに進化してからリーダーとして躍起になっているせいかわ、どちらかという嫌われていてオタチやポツポの方が人気が高い。

そんなところを除けばどんなところにもいる普通のポケモン。

もつとも、私はポチエナの頃から草むらで生活していなかったので野生のポチエナやグラエナの嫌われっぷりが理解できないのだけだ。

私が生まれたときには、そこは草むらではなく人間の家で、眩しさを感じながら目をあければそこには主人であるサイカがいたのだから。

そう、私が彼と出会ったのは私がタマゴから外にでたまさにその瞬間。

今よりもずっと幼かったサイカは、生まれたてのポチエナの私を見てそれはそれは嬉しそうにしていたわ。

思えばこの頃からサイカの「悪タイプ好き」は始まっていたのかも

しない。

親の顔は知らないけれど、サイカはそんな私を本当の親のようにかわいがってくれた。

といってもサイカもまだ幼かったから、親というより兄に近い感じかしら。

ともかく、サイカは私が初めてのポケモンだったということもあってとっても可愛がってくれたわ。

まだポチエナだったときはしつこい性格が災いして玩具を取り合って喧嘩しちゃったり、サイカにちょっかいをかけようとした近所の悪ガキを泣くまで追いかけて続けたったり。

まだバトル慣れしていない自分とサイカで、野生のポケモンとバトルをしてどうにかこうにか勝ったのも今ではいい思い出。

そうして、少しずつ野生のポケモンと戦ってバトルを覚えていってトレーナーとのバトルでも最初は負け続きだったけれど、だんだんと勝てるようになって。

そして今の「グラエナ」の姿に進化するまでの経験を一緒に積んだ、私の自慢の主人。

たとえサイカが悪の道へ行こうとしても、やっぱりサイカは私の自慢の主人なの。

私は悪タイプのポケモンだから、サイカが悪の人間になってもかわないしね。

「今日は厄日なのか…?」

そんなサイカが困ったような顔をするようになったのは、二人の子供に出会ったときから。

片方は昼間サイカのポケモンを盗ろうとした子供、もう一人はよく基地で出会うエンペルトを連れた子供。

もともとあのエンペルトと戦ったことは無いけれど。戦うときはいつも邪魔が入るから。

でももし戦ったとしたら私の牙であの鋼の体を貫くことが出来るのかしら。

鋼タイプを牙で攻撃するのは苦手なのよね、岩タイプよりもずっと固いから。

サイカが私が鋼さえも噛み砕けると期待してくれるのならば頑張れるけれど。

でもサイカはその子供とバトルする気はもうないみたい。

ポケモンセンターでランタンの傷を癒した後、サイカはとても疲れた顔をしてドンカラスに捕まり今日から通う職場の近くにある商店街まで飛んだ。

そしてどうやったらその子から逃げられるのかとぶつぶつ呟きながらお夕飯の食材を買いに行く今の姿は、ちょっとだけ哀愁が漂っている。

まあ夕方頃にやったエンペルトとのバトルでランタンが戦闘不能になってしまって、結果負けてしまったのだから仕方ないことかもしれないけれど。

「だいたいあのマリンから正義の味方君に繋がっていくなんて分かるわけ無いんだよね…分かったら声かけられた時点で速攻逃げたの。くそ、どうして今日はこんなに嫌なことが大量に起こるんだ…」

！」

ぶつぶつと呟くサイカを通り過ぎた人たちが不思議そうに見ているけど、今のサイカにはそんなことはどうでもいいみたい。

サイカの隣を歩く私は涼しげにふく風を満喫しているというのに、サイカときたらひたすら今日の出来事を思い返しながら後悔を滲ませている。

起こったことに対していつまでも後悔していても仕方が無いのにな、バカなサイカ。

そんなところも、嫌いじゃないけれど。

実力差で負けてしまったサイカは、もうすっかりあの子供とエンペルトに勝つのを諦めていた。

相性がよくて、ランターンが有利な状況で負けてしまったのだから仕方ないのかもしれないけれど。

でもいずれ戦うときがくるかもしれないっていうのに、随分弱気だわ。

その前にあの組織からやめちゃう気なのかもしれないわね。

「とにかく俺があの正義の味方と出会ったことは上司にはバレないようにしないと……！バレたらアレだよな色々まずいよな、うん俺があの子を手引きしたって思われる……！」

そうしたらクビだ！なんてサイカが叫ぶけれど、もし手引きしたと思われたらクビどころじゃ済まされないとと思うのは私だけかしら。悪の組織って、そんなに甘いところじゃないと思うのだけれど。

それにそんな簡単にあの子を手引きしたって思われるものなのかしら。

……でもサイカはよくあの子供と基地であってるから、手引きしていると思われる可能性は無きにしても非ずよね。



その時には私がなんとしてでも悪の組織からサイカを守ってあげるけど。

けど出来るのなら、そういう事態にはならないほうがいい。

「それだけは…！あともうあの子と基地で会わないようにしないと！」

そう言っただけはサイカはグッと拳を作って宣言する。

…にしてもサイカ、そろそろ独り言はやめにしない？ 情報漏れもいいところよ。

ここに私たち以外の悪の組織の一員がいたり、あの子供たちがいたらどう言い訳する気なのかしらこの人。

そう思っただけはサイカの服の袖を軽く噛むことで引っ張って、意識をこちらへと戻した。

早くお夕飯を材料を買って、帰りましょうよ。

独り言をやめたサイカがお夕飯の材料を買って、ドンカラスを使わずに帰り道を歩く。

ドンカラスには仕事場への往復しか乗らない（乗るといふより捕まるかしら）から、こつやって食べ物を買うときは歩いて行って歩いて帰るの。

特に帰り道はビニール袋を持っているから、落とすことを防ぐために歩き。

そしてそういう時のはいつも私がお供。

他の子は水がないと動けなかったり、空を飛ぶほうが得意だったり、大きすぎたりするから必然的にこうなる。

本当ならゴーストタイプと悪タイプを兼ねてるヤミラミでもいいのだからうけれど、壁をすりぬけられるゴーストタイプは盗み目的の人がよく連れ歩くらしいので、警察の目につきやすいからサイカは買物の時には連れ歩かないようにしているみたい。

つまり、こうした買い物のお相手は必然的に私一匹になるの。なんだか特別な感じがして、少し嬉しくなるわよね。

今日もそんな気分でサイカの隣を歩く。尻尾が揺れるのはしょうがないわ、嬉しいんだもの。

ガサガサと揺れるビニールの袋に合わせるように私の尻尾がゆらゆらゆらり。

そしてそんな私たちに合わせるように、近くにある草むらの葉っぱも揺れている。

その葉を踏み鳴らしたりしながら、私たちは帰路を歩く。

家に帰れば、お夕飯の前にお風呂が待っているわ。

わしゃわしゃと石鹸でサイカに体を洗われるのがスキだから今から楽しみ。

バトルはしなかったけれど、今日は暑かったから少し汗もかいてしまったしね。

早く帰ってお風呂に入りましょう、と喉を鳴らしてサイカに早く帰る意思を伝えようと一歩踏み出して。

けれど、不意に感じた嫌な臭いに私は慌ててそのままサイカを守る

ように彼の前へ立った。

「ん？ グラエナ、どうかしたのか？」

異変に気付いていないサイカが少し目を見開いて私に聞いてくる。そんなサイカを私の背中へ押しやって、姿勢を低くして相手を威嚇するために唸り声を出す。もちろん、後ろから狙われてサイカに何かあつてはたまらないので360度警戒は怠らない。

辺りを見回しながら何があつてもすぐ飛びかかれるような体制をとり続けていれば、さすがに何かあつたと気付いたのか、サイカは目を吊り上げて持っていたビニール袋から手を放す。

手が塞がっている状態は、何かと不利な状況を作りやすいものだから。

けれど軽い音をして落ちるはずのそれは、有り得ない速度と音で地面に叩きつけられるようにして落ちた。

「重力か！」

そうサイカが叫ぶか叫ばないかで、私の体も地面にひきつけられるような感覚を覚えた。

サイカが言ったように、恐らくこれは重力というポケモンの技。でもこんな不意打ちのようなこと、一体誰が…！

喉を低く鳴らして、重くていつもより動きにくい体を無理やり動かす。

バトルでは攻撃力や防御力よりも素早さが勝敗を決めることがある、ここで俊敏に動けないのは私たちにとって不利。

それに私は重力なんて技、受けた記憶なんて一回か二回くらいしかないから対処の方法が良く分からない。

「グラエナ、嗅ぎ分けるで相手の位置を探れ！」

サイカの命令を聞いて、私は神経を鼻へ集中させる。

先ほど感じた嫌な臭い、それを他の臭いと嗅ぎ分けながら位置を特定させることに全神経を集中させる。

重力のせいかだるくてやりにくいけれど、これをやらなければ相手の姿を確認できないまま攻撃態勢にとられてしまう。それだけは阻止しなければ！

「探れたら噛む砕く、いけるか!？」

辛い嫌な臭い（という名の、敵意をもった生き物の臭い）が他になかったから位置の特定はすぐに来た。

私はサイカの命令にまかせてと一声鳴き、その方向へと全速力で向かっていく。

そして噛み砕けといわれたとおり、いつかのヤドランに向かったときのように口を大きく開けて草むらに突っ込み、臭いの元に対し容赦なく噛み付いた。

たとえ草むらに隠れていても、臭いまでは隠せはしまい。

このまま噛み砕いてしまおうとさらに力をこめれば、相手は焦ったように体を捻った。

「っ！トワレ、目覚ましビンタで噛み砕くから逃げて！」

トワレ、と呼ばれた私が噛み付いている生き物はそういわれると、今まさに噛み砕こうとしていた私の顔を思いきりはたいてきた。

さすがにこの一撃でやられるわけがないけれど、相性が悪い格闘タイプ  
の技だけあって痛みから牙を離してしまふ。

その瞬間慌てて距離をとるトワレという名のピンク色の物体、だが  
動きは早くない。

重力を受けている私よりもずっと遅い、この技は全体技だからこの  
ピンクも遅くなっているのかもしれないけれど、それでも遅い。

それにしても、トレーナー付きのポケモンだったなんて。

今ピンクに指示した人間をちらりと見れば、その人間は私たちから  
少しはなれたところで指示を出していた。

スカートをはいているし声の高さから言って、おそらく性別は女。

でも見たことのない顔、どうして私たちをいきなり襲ったのかは分  
からない。

しかし幸いなことに格闘技を受けて私はそこまでダメージを受けな  
かった、威嚇のせいもあるかもしれないけれど。

でも威嚇を受けてこのダメージならば、おそらく相手はそこまで攻  
撃力を持たないポケモン。

トレーナー付きだったとしてもこれならばいけるかもしれない、と  
再び姿勢を低くして飛び掛る姿勢を見せれば、私の後を走ってきた  
らしいサイカが草むらをかきわけ、私の無事を確認する。

「グラエナ！」

おそらくトレーナーの声がサイカにも聞こえたのだと思う。

目覚ましビンタを受けた顔やまだ怪我のない背を見て、そこまでダ  
メージを受けていないと知ったサイカはほっと息をつく。

そしてその後にはピンクと女を視界に入れ舌打ちをした。

「あんたら誰だ、何で俺とグラエナを狙った!？」

「はあ!？ そんなことも分からないなんて、どんだけ悪党なのよ貴方!」

「あくと…!はん、それがどうした!」

そうね、私たちは悪の組織の一員なんだもの。悪党だなんて今更よね。

「開き直り!？ あったまきた、もう泣くまで許さないんだから!」  
「誰が泣くか!グラエナ、まだいけるな!」

サイカの確認に、私は頷いて目の前にたつピンクを睨みつける。

何がどうなっているのかは知らないけれど、売られた喧嘩は買うのが当たり前。

完膚なきまでに倒してみせるわ。

少しおどおどしたように私を見るピンクに、私は鋭い牙を見せることで戦う意思があることを示した。

## 第12話 グラエナと青年（後書き）

初めてのサイカ視点以外の話でしたが、いかがだったでしょうか？  
実験的にサイカ以外の視点で書いた話ですが、ポケモン視点という  
のはいささか突っ走りすぎた気もします。

しかし何話かけても一日が終わらないとはどういうことか。  
ピンク色のポケモンについては隠す気がないため分かりやすかった  
ですかね…。

### 第13話 グラエナと青年とトレーナー

「とりあえずそっちがやる気ならこっちも容赦はしない！グラエナ！」

サイカの一声にあわせ私は遠吠えをし、未だにおどおどとしているピンクに対して宣戦布告のようにニヤリと笑う。

バトルをしかけてきたのはあっちからだというのに、おどおどした姿勢でい続けるとはどういうことか。

やる気がないのならそれでもいいけれど、どっちにしても倒すまでだし。

「岩砕き！」

サイカの指示にあわせ、私は鋭く尖った爪を相手に振りかざす。

遅い動きのピンクを捕らえることなど私にとっては簡単、逃げようと体を捻らせたピンクのわき腹にキツイ一発をお見舞いし、そこから連続の岩砕きへと繋げる。

岩砕きは相手の防御を下げるためにいつも使っている技だから、何度も当ててこそ意味がある。

岩砕きの技自体は弱いけれど、その効果はバカにはならないのだから。

「っ、トワレ、ハイパーボイス！」

「しまっ…！グラエナ、そいつから離れて守れ！」

何度目かの岩砕きをピンクに当てたとき、ピンクのトレーナーの指示が下る。

それに反応したサイカが私に命令を下し、それに従うべくピンクが



ら距離を離そうとするのだけれど、重力でいつもより鈍く感じる体と突然響いた爆音にそれはかなわなかった。

鼓膜が破れそうなほど大きい音に思わず地面へと崩れ落ちる、重力のせいもあってか重い体は私のいうことを聞いてくれない。

それでもピンクを睨みつけるけれど、そんな私にはおかまいなしでピンクは爆音を放ち続ける。

肉体攻撃されているわけじゃないのに、この爆音だけでどんどんと体力を持っていかれ、このままこの状態が続けば自分が気絶してしまふのは目に見えていた。

思わず指示を求めてサイカの方を見るけれど、彼は彼でこの爆音に耳を傷めているようだった。

苦痛に歪んだ顔は明らかにこの爆音の効果を受けている、鼓膜が破れないように耳を両手でふさいではいるけれどそれでもキツイらしい。

けれど私はそんなサイカを助けることは出来ない、なんと忌々しいことか！

どうすればいい、と苦しんでいるサイカを見つめ続ければ、そんな私に気付いてくれたのかサイカは私の方を見て、それから私に対して声を張り上げて何かを叫んだ。

けれども爆音のせいで何を言っているのか聞こえない。

耳をすまそうとしてしまえば途端に鼓膜がやられてしまふ。

それでもサイカが言っている言葉をなんとか知りたくて、彼の口の動きにひたすら注目する。

サイカもそれに気付いたのか、顔を歪ませながらゆっくりと私に分かるように口を動かしていく。

最初はほ、次がえ、そしてその次が……

こくり、と頷いて私は地面に体を伏せた状態のまま、仲間を呼ぶときとはまた違う声で高く咆哮をあげる。

喉をならし、大きく口をあけて。

この声がピンクにすっかりと聞こえてくれるか不安だったけれど、ちゃんと届いたのか（どうやら耳がいいらしい）ハイパーボイスで私を圧倒していたピンクは丸い目を涙で潤ませ、トレーナーの命令も行動もないというのにモンスターボールの中へと戻っていく。

その途端に終わる爆音。技が成功したことを知った私は慌てて体制を元に戻した。

「つく、『吼える』ね！」

「声がそっちの専売特許でも思ったのかよ！一昨日きやがれ！」

サイカの方も耳は大丈夫なのか、とんとんと方耳を叩いたりもしながらも苦痛に歪んでいた表情をいつものような顔に戻し、トレーナーを睨みつける。

私も姿勢を低くし唸ることでもまだ戦う意思があることを見せ付けていれば、吼えるの効果でモンスターボールから別のポケモンが出てくる。けれど

「思ったよりはやるじゃない。…でも私の方が強いって知って、後悔しないでよね！いこう、ポプリ！」

「……ポプリ!？」

現れたポケモンとそのニックネームに、私は目を見開いた。

サイカの信じられないというような声色の叫び声も響き、ああサイ

カも私と同じようなことを思ったに違いないと確信する。  
しかしどうして……、と私はこの展開に理解が追いつかないまま戦闘態勢をとかず今モンスタールから出てきたポケモン……ギャロップを睨みつけた。  
ポプリという名のギャロップに出会うのは、本日二度目だ。  
一度目は不本意な形で。そして二度目は今ここで。

「それ、マリンの……」  
「私のポケモンよ、マリンには貸しただけ。つまりどういふことが分かるわよね」

女トレーナーはそう言って勝ち誇ったようにサイカを見る。  
一方サイカの方は、そんな勝ち誇っているトレーナーを見て意味が分からないというように顔をしかめた。  
しかしトレーナーにはその表情は違う様子にとられてしまったらしい。

「思い出した？ あんた、よくも私の妹を傷つけてくれたわね！」  
「……はあ！？ なんだよそれ！？」  
「とぼける気！？ あんたが大爆発の技を使ってマリンを巻き込んだって、私聞いたんだから！」  
「何その完全に俺だけが悪者な情報！」  
「俺だけもなにも、あんたが悪者よ！ポプリ、火炎放射！」  
「だからちが……っ、グラエナ、雨乞い！」

否定の言葉も聞かずトレーナーはギャロップに攻撃命令を下す。  
何の戸惑いもなく放ってきたギャロップの火炎放射に一瞬回避するかどうするのかと判断に戸惑ったとき、否定しようとしてやめたサイカの声が耳に聞こえてくる。

今から雨乞いって、そんな無茶な！ 間に合わせてみせるけれど！  
慌てて雨雲を呼んで雨を降らし、火炎放射の威力を弱める。  
けれど、雨を速攻で降らせようとしたためその他の面が疎かになっ  
てしまった私は、弱くなったとはいえそれなりの高温を保っている  
火炎放射をまともに食らってしまった。

「グラエナ！」

サイカが私を呼ぶ声をどこかで聞きながら、私は火炎放射の威力に  
吹き飛ばされ地面へと激突する。

激突した瞬間襲ってきた痛みに一瞬息を止め顔をゆがめるけれど、  
まだ戦闘不能になるほどじゃない。まだ私は大丈夫。戦える。

げげげほと咳をしながら空気を取り込んで、雨をわずらわしそうに  
しているギャロップを見据える。

そうして飛びかかろう、と姿勢を低くしたところで背中が疼き痛ん  
だ。それを認識したと体が軽くなる。

「っ、火傷か！」

「雨乞いでダメージを軽減したのはよかったけど、それだけじゃポ  
プリの攻撃を抑えるには足りなかったみたいね！だから言ったでし  
よう？ 私の方が強いって！」

「るせえ！グラエナ、一旦引け！」

今なら早足でギャロップ程度の素早さなんて圧倒できるのに。

そう思ったけれど、今のダメージでさらに火傷状態だとさすがの私  
でも厳しいかもしれない。

それに、リーダーであり主であるサイカの命令に逆らうことは、し  
てはならない。

彼の言葉通り、反攻することなく彼の方へ走って戻っていけば、彼はそんな私の頭を少し撫でて「ごめんな」と悲しそうに言った。おそらく予想外の火傷のことについて言っているのだろう。

私はそれに首を振ることで大丈夫だと答え、そつと彼の隣に立つ。たとえ疲れていても、横になりはしないしモンスターボールには戻らない。

だってそうしたら、もしもの時にサイカを守れないじゃない。

「まだやるの？ 今降伏して負けを認めるんなら、まあ話くらいは聞いてあげてもいいけど」

「当たり前だ、ここで黙って引き下がれるわけがねえだろ！ いくぞランターン！」

もう勝ちは決定した、というような表情をしているトレーナーにサイカは怒鳴って交代のポケモンをフィールドに出す。

雨が降っているから、そしてギャロップは炎だからセオリー通りにいこうということか交代したポケモンは先ほどポケモンセンターで回復したばかりのランターンだった。

ざあざあと振っている雨に、ランターンは嬉しげな声をあげる。

「悪いなランターン、今日二回目のバトルを頼む！」

「相性通り…でもそれで勝てるほどバトルって甘くないのよ。ポップリ、恩返し！」

「返り討ちにしてやれ、ハイドロポンプ！」

雨ではしゃいでいたランターンはサイカの声を聞き、全速力で攻め込んでくるギャロップにハイドロポンプを放つ。

雨のおかげで技の威力が増したそれは、いつも見るハイドロポンプより強烈だ。

「なんのっ！ポプリ、高速移動でかわして！」  
「ならこっちは波乗り！広範囲で攻めるぞ！」  
「っ、守ってポプリ！」

ハイドロポンプから波乗りへと攻撃をかえたランターンは、呼び寄せた大津波に乗ってギャロップへと突っ込んでいく。  
けれどトレーナーの言葉からこの波乗りは守るで防がれた。  
守るはそう簡単に何度も連続で成功できない技だから今の内に水タ  
イプでもう一度攻撃しておくべきだけれど…

「ランターン、吹雪で足元を凍らせてやれ！」  
「なっ！？」

吹雪、それは広範囲の技で威力も高い分なかなか命中率を上げるこ  
とが出来ない、そんな技。  
それをわざわざ選んで、サイカはランターンに指示を送った。  
また水技がくると踏んでいたトレーナーはそれに焦った様子を見せ  
たけれど、サイカはこの焦って何も出来なくなる一瞬が欲しかった  
みたい。

サイカの指示を受けたランターンが吹雪を「地面に」当てていく。  
波乗りによって水浸しだった地面は簡単に凍りつき、水を伝ってギ  
ャロップの所まで当たり前のように凍らせていく。  
いくら高速移動で早くなっても、地面に足をつけているのならばラ  
ンターンの餌食…ってことかしら。

「ポプリ、飛び跳ね」  
「させるか！ランターン、波乗り！」

しかしさすがは炎ポケモン、足の氷を自らの体温で溶かしトレーナ

「の指示に答え空へと飛び上がる。  
雨なのにおかまいなしなところは、トレーナー思いつてところなの  
かしら。」

けれど飛び跳ねるは次に空から勢いよく踏みつけるまでの、いわば  
攻撃手段。

そんな最中に守るはつかえないし、回避する技もない。  
そして今は重力、飛び跳ねるは普段よりずっとジャンプする高さが  
低い状態になるから波乗りの範囲内になっている。

「しまっ！」

「一撃で沈めるぞ、ランターン！」

サイカの声に、ランターンが嬉しそうにこたえた。

### 第13話 グラエナと青年とトレーナー（後書き）

ピンクVSグラエナ、ギャロップVSランターンでした。

前回いいようにされたランターンですが、今回はちょっとは活躍出来た…かな？おいしいところは全部グラエナがかつさらった気がします。

トレーナーの正体はあっさりと。何故サイカだけ悪者状態になっているのかはバトル終了後に理由を書いていきたいと思えます。

まずはバトルが終了しなければ……。



## 第14話 グラエナと青年とトレーナー2

強烈な水タイプの技がギャロップに、そしてその余波が私たちに襲い掛かる。

火傷を負った体に冷たい水は心地よくも、少しばかり痛い。

その感覚に顔をしかめながらランターンがギャロップの攻防戦を見る。

波乗りで押し切れるかと思っていたけれど、ギャロップは波乗りが直撃する前に口や背中から火炎放射よりも火力がある炎を噴出して、まるで炎の渦を自分へと巻きつけるようにして炎をその身にまとった。

おそらくは防御のつもりなんだろう。だけどこの相性の悪いタイプと天候でそれがどこまで持つのか。

さすがに厳しいんじゃないかしら、と思っているところにギャロップに波乗りが直撃する。

その波乗りの何割かはギャロップの身にまとう炎をせいで水蒸気と化してとんでいったけれど、全部を相殺できたわけじゃない。

雨のおかげで威力の高まった波乗りは炎を消し去り、空中に飛んでいたギャロップに容赦なく襲い掛かる。

しかしあのギャロップ、凄いなものね。

トレーナーの指示なんてなかったのに、自分の考えでここまでやってのけた。

おそらくは相当の経験を積んできたのだろう、そう簡単に瞬時に判断し行動できるものじゃないから。

でも相性が悪すぎよ、とランターンの勝ちを確信しながらギャロップが波に飲まれていく光景を見てそつとサイカに寄り添った。炎をまとうことでしか防御体制を整えられなかったんだもの、これで戦闘不能になってもおかしくない。

むしろ相性を考えれば戦闘不能になつて当たり前。それなのに、

「……まずいかな」

サイカがぼつりと言葉をこぼす。

その言葉に反応してサイカを見上げるけれど、サイカは厳しそうにランターンが攻撃している姿を見るだけ。

これで決まりじゃないかしら、と私は思うのだけれどサイカはそうは思わないらしい。

「ランターン、波乗り終了後に蓄えとけ！」

いつそ慎重すぎるサイカの命令がランターンへ飛ぶ。

それを受け取ったランターンはちらりとサイカを見て、顔を少し曇らせながら頷いた。

その表情はこの命令が不満という感じではなくて、もっとこう、違うものだと伝わってくる。

……ランターンも、戦闘不能までのダメージを与えられたと思っていない？

手ごたえを感じていないのかしら？ あの波乗りで？ まさか。

やがてランターンの放った波乗りが引いて、周りは水と雨を吸って泥となりところどころ削られている地面が姿を現す。

そしてそのぬかるみの上に、大ダメージを受けながらもまだ立って

いるギャロップの姿も。

いづらか相殺したとはいえ、まだ立っていられるだなんて。

波乗り終了後に蓄え始めたランターンと、敵しそうな表情をするサイカを交互に見て、私はこの戦いが思ったよりもずっとキツイものになるのかもしれないとその時初めて勘付く。

そういえばあの泥棒娘の時にも、バトル慣れしていないのに私たちと互角並に戦っていた。

それが今は正規のトレーナーの元にいるんだもの……敵しくて当然なのかもしれない。

「…グラエナ」

不意に名前を呼ばれてなあに、とサイカの方を見れば、にいつと笑っているサイカの口元が軽く動く。

小声で伝えられた言葉は雨が地面に落ちる言葉で消えかかっていたけれど、口の動きもあり正確に読み取った私はこくりと頷き雨の中を駆け出す。

サイカに命令された通りランターンとギャロップのバトルフィールドとなった場所の横を駆け抜け更に先へ進む。

バトルに夢中のランターンとギャロップは、そんな私のことなど気付きもせずひたすらにらみ合っていた。

おそらくはお互いのことしか見えていないんだろう。

「まさかこの天候で波乗りをここまで防がれるとは…」

「私のポプリを甘く見ないでよね、これくらいの経験は何度だっっているのよ。…さて、一気に追い詰めるわよポプリ！」

「させるかランターン、ハイドロポンプ連射！」

「高速移動でかわして、角ドリル！」

ぬかるんだ足元が走りにくく、重力のせいもあってスピードは思うように出ないけれど確実にサイカの命令にこたえるために。

口を大きく開けて、確実に成功できるように背後から近づいていく。

「っ、ポプリ！」

「ランターン！」

どずん、と二匹のポケモンが倒れる音が聞こえたけれど、それは今は関係ない。

牙をむき出しにして目の前を見据える。そこには、ちょうど彼女が倒れたギャロップを戻すため手にかけてモンスターボール以外の5個がしっかりと腰元についていた。

「…悪いけど、俺の勝ちだ」

「はあ？ 勝負はまだこれから」

「グラエナ！」

サイカの一声に、私は彼女の腰元についているボールを全て銜え盗った。

手のひらサイズではなく、まだ小さいボールはたとえ5つだとしても充分銜えられる。

そのままそのボールの開閉スイッチを噛み砕くように牙を立てれば、私の役目は終わり。

「ちょ、なにするのよ!？」

「いきなりバトルをしかけてきて、人の話も聞かず力で負かそうとしたのはそっちだろうが！少しは俺の話を聞いたらどうなんだ！」

「だから、あんたが謝ったら言い訳くらいは聞いてあげるって言う

てるでしょ!？」

「だあかあらあ!まずそこから可笑しいんだよこのバカ!馬鹿!!」

「なっ!年頃の女の子になんてこと言うのよ!」

「俺だつて年頃の男の子じゃいポケ!」

牙を立てたボールを地面へと吐き捨てて、そのままトレーナーの肉体へと威嚇のために牙を向く。

そうすればサイカに威勢よく喧嘩を売っていた彼女は、さすがに自分のおかれている状況が分かったのか唾を飲んでそのまま黙った。

まるでこつちが悪者みたい。

まあ、サイカは悪の組織の一員だし、私は悪タイプのポケモンだけれど。

「…さいつてい」

「俺もまさか自分がこんな手を使うだなんて思っても見なかったぞ、お前が現れるまではな。…：あんだ、マリンの姉なんだよな?」

「そうよ、そうじゃなかったらあんだに奇襲かけるわけないでしょ」

ふん、とそっぽを向くトレーナーは…：本当に自分の置かれている状況が分かっているのかしら。

さっき思ったことにもうケチをつけなくなつたわ。

あの泥棒した女の子といいこのトレーナーといい、どこか似ている所があるわね。

姉妹だからかしら。ああもうやってらんない。

「よし、じゃあまずは話し合おう。あんたは誤解してる、俺は被害者なんだ」

「マリんに大爆発しかけておいて被害者!? 嘘も大概にしなさいよ!」

「最後まで聞けこの馬鹿！もうなにこの子！」

あちゃあ、というように顔を片手で隠すサイカを不憫に思いながら、私はそつと彼女の手を甘噛みした。

ビクリ、とトレーナーの体が跳ねる。

これは警告、いつでも噛み付けるのよっていうね。

……これで、自分の不利な状況に気付いてもらえたかしら？

「あーもう、だからマリンが俺のポケモンを盗んで、俺が反撃したら結果的にそうなったんだよ！なんならお巡りさんに説明してもらおうか！？」

「……………は？」

「そのことについて詳しく話してやるから、とりあえず口をチャックしろ！」

そう怒鳴ってサイカはトレーナーに対しビシツと人差し指を向けた。子供の頃、そういうことはしちゃいけないってお母さんに散々言われていたのに、こんなところでそれをやるなんて子供っぽくて笑っちゃうわ。

それに成人を迎えている男が、いきなり奇襲をかけられたからとはいえこんな風に女の子を怒鳴っている光景は、明らかに女の子が不憫で男が加害者に見える。

まあそれは第三者から見た意見であり、私たちは無関係なわけがないのだから他の人の目なんて関係ないこと。

でもサイカは人間関係とか色々あるのだから、そういうことにも気を使うべきじゃないかしら。

それだからバイトがいつもいつもクビになっちゃうのよ、目の前のことに一直線なんだもの。

もう、本当にサイカって本当っぽいよね。こういう場面で冷静にもなれず感情に突っ走ってしまうところが特に。幼い頃から何にも変わっちゃいないわ。

少しは大人になっただろうとは思っけれど。

悪の道に進んでいるとは到底思えない、だから彼女だって出来ないのよと一人心中で呟いた。

……作らせるつもりも無いけれど。

## 第14話 グラエナと青年とトレーナー2（後書き）

フルバトルなんて何話かかるか分からないので強制終了。

開閉スイッチ色々はポケスペからヒントをいただきました、今回はボール全体を壊しているのですが開閉スイッチピンポイントでもよかったです。

でもそれだと衝撃でポケモンが出てきそうだ、ということでも銜えたまま開閉スイッチの確認もなしにそのまま壊してみました。

次回でやっところ名前とか誤解の理由とかに入れます。毎度毎度バトル長すぎる…。



## 第15話 青年とトレーナー

なんでこんなことになっちまったんだろう。

俺何かした？ …いや悪の組織に入ってる時点でやっちゃいけないことしてるか。

俺はデルビルをもらえればいつだって正義の道に入っても構わないのに。

「つまり俺は被害者でマリンは加害者。ただ俺も大爆発でバトルを無理やり終了させた形になったことは悪かったと思ってるし、その後本人とあってお互いに和解してる。もうこの件は解決してるんだ、分かるか？」

「……………」

「つかあんたはなんで大爆発の件しか知らなかったんだ」

興奮しているマリン姉を何とか説き伏せて事情を説明し終わったところ、マリン姉はやつと事件の真相を分かってくれたのかさっきまでの勢いをなくしてうなだれた。

まあ普通はそうだよな、勘違いでしたすみませんで済むレベルじゃねーもん。

まあ俺も出来ればジュンサーさんに再びご厄介になりたくないから通報するつもりなんて欠片もねえけど。

にしたってマリン姉妹はこんなばっかりかよ（といっても二人にかあったことないけど）。まさか家族全員こうっていうんじゃないだろうな。

「…父さんと母さんが、そう言ってる…」

俺の言葉に対して、マリ姉は俺から目をそらしながらぼつぼつと話し始める。

父さんと母さんがって…おい警察どんな説明をしたんだと一瞬腸煮えくりかえったが、

「他にも何か言ってた感じだったけど、マリ姉を大爆発で気絶させたなんて聞かされたらいてもたってもいらなくなっちゃって…」

すぐに収まる。人の話を最後まで聞けなかっただけかいな。

そして中途半端な情報で一人突っ走ったと。男勝りというか、猪突猛進といつかなんといつか。

子供向けのポケモンスクールに通うような年齢かお前は。そうツッコミを入れたい気持ちをなんとか抑えて俺は改めてマリ姉を真正面から見た。

顔立ちや目つきは確かにどことなくマリ姉に似ている（この場合マリ姉が『似ているんだろっけ』が、背中まで伸びた髪を一まとめにしどことなく活発そうな格好をした姿ではマリ姉のような、所謂お嬢様みたいな雰囲気は感じられない。

マリ姉をしつかりした子だとたとえるならば、このマリ姉は活発な女の子だろうか。

…中身は一緒のようだけどな！まだ幼いマリ姉の方が許せそうな気がする。悪いことしたのはマリ姉だけど、そこはほら、子供だからって魔法の言葉で。

「それで、だって、あの、私……」

土下座したらまあ許してやってもいいかも？ 的なことを言ってい

た先ほどまでとは偉い違いだ。

おどおどと言葉を詰まらせながら、一度俺を見て、視線を地面に落として、そっとグラエナの方を見て、そんでまた俺の方に視線を戻した。

さっきまで釣りあがっていた目は多少潤んでいる。…なんかひどいことしてる気分。

「…ごめんなさい、いきなり襲い掛かって」

「……おう」

ここで「謝って済むんなら警察はいらねえんだよアアアーン!!!?」くらい言ったら悪党の仲間入りが出来たのかもしれない。

しかし心の中に潜んでいる良心的なものが「ここまで謝っているんだからいいじゃん、許せよどうせ警察にいけない悪党のくせに」と言い、ついでに悪魔的なものが「ここで争っても意味無い気がする、あんまり騒ぎを大きくして正義の味方君が駆けつけてきたらお前牢獄もんだよな、笑える」とか追い討ちをかけてくれたのでその言葉はすぐ海の底に沈んでいった。

俺は、そこまで大冒険をしてマリン姉にひどい言葉をぶつきたいわけではないので。

「つかお前、いつもこうなの?」

「…いつもは、止めてくれる人がいるから。今日はその、私一人しかいなくて、それで…」

つまり暴走したと。いつも止めてくれる奴どうした!何故こんなときにいらない!

いやいつもいつも止めるなんて面倒な作業だとは思うが、今回はやはり止めて欲しかった!

結果的になんとかなったからいいけど、これで俺バトルに負けてたら一体どうなってたんだよまったく…。

「マリンはいい子だし、あの年で気配りだって出来るかわいい女の子だし、そんなマリンが大爆発で気絶させられたなんて、相手は血も涙も無い冷血漢だって思っちゃって…」

「あー、まああれだ、俺も大爆発はやりすぎたとは思ってる。あの時はポケモンを盗られたこともあって俺も頭に血がのぼってた、相手は小さな女の子だったのにな…すまない」

「うづん、全体的に暴走して突っ走った私が悪い…です。理由も聞かないでいきなりバトルをしかけたし、酷い言葉もいっぱい言ったし。…それに、大切なポケモンを盗られたら私だってそれくらいのことしちやいそうだから」

むしろお前の場合はオーバーヒートで犯人に突っ込ませそうだよな。そう思ったけどやめた、まあつまりポケモンはそれだけ俺たちにとって大切なパートナーってことだ。

そしてマリン姉って、ひょっとしてシスコンじゃね？俺の気のせいかな？

普通この状況で「私の妹はこんなに凄くてかわいい」なんて自慢めいたことは言わないよな？俺には兄弟とかがいないから分からないけど。従兄弟くらいだし、いるの。

…ああ、やっぱりシスコンか。初めて見た。

「本当に、ごめんなさい」

「…おっ」

まあ誤解がとけてもう俺に襲ってこないっていうのならいいです。

そしてもうマリン共々俺に関わらないでくれるともっといい。

そして正義の味方君が関わってくれないでいてくれれば、これほど

素晴らしいことはないんだが。

このままの状況で話し合っている（というか謝らせている）こともないので、マリ姉をずっと威嚇していたグラエナを呼び戻し俺の横へと座らせることで再び待機状態にさせ、とりあえずマリ姉を自由にした。

まあ襲ってこないしバトルもしかけてこないっつーんならグラエナに威嚇させ続ける理由はないしな。

マリ姉も自由になったからどうかしようって様子もなく、落ち込んだ様子のまま俺の傍へと戻ったグラエナの様子を見ていた。それからおそろおそろ、というように俺に話しかけてくる。

「…その子、大丈夫？ さっきやけどしてたわよね？」

「ん、あー…後でポケセンに寄っていく」

「よかつたらこれ、使って。ポケモンセンターまでの気休めだけど」

罪悪感からか、そう言ってマリ姉は彼女が持っていたポシエツトから薬つばいものを取り出して俺の方まで投げる。

それを見事にキャッチして（一瞬取り落としそうになってヒヤッとしたのは俺だけの秘密だ）みれば、それはフレンドリーシヨップでも売られているなんでも直しだった。

…あの高いやつ。俺は時々発売される（それも期間限定で数量も決まってる！）フエン煎餅だとか木の実だとかで節約してるのに、マリ姉は何でも治し！

くそ、これが格差社会か。金のある奴と無い奴の差だというのはか！

「サンキュ、悪いな」

「ううん、もとはといえば私が仕掛けたバトルで受けたやけどだもの。…もし、ポケモンセンターまでの足がなければ謝罪の1つとし

て送っていくことも出来るけど、どうする？ 私も一度ポケモンを預けたいし」

「あー、…それじゃ、頼むわ」

「お安い御用よこれくらい。…出てき」

そこまで言つて、マリ姉は固まった。

何故だ、と俺はそんな彼女を見るが理由はすぐに分かる。ギャロツプの入っているモンスターボール以外は、全て俺（の命令を受けたグラエナ）が噛み砕いて壊したからだ。

開閉スイッチにまでヒビが入っているソレはいくら押してもポケモンは出てこない。

「……………」

「……………」

「……………うん、歩いていこうぜ」

こればかりは俺のせいでもあるので、俺は歩きを提案した。

さすがに「じゃあ俺は一人乗りのドンガラスで行くんで」なんて言う神経は持ち合わせていない。

そしてそんな俺の誘いに、マリ姉はこくりと頷いた。

「そつえば、自己紹介がまだだったわよね。私の名前はアクア、知っていると思うけどマリ姉の姉よ」

「俺はサイカ、今日この街のとある会社に転属になったんだ」

歩いている最中、お互いの名前も知らないのは可笑しいだろうということになり、簡単な自己紹介が始まった。

ちなみに火傷を負っているグラエナにはボールの中に入れてもらっている、さすがに火傷状態が治っているとしてもかなりのダメージを受けているグラエナを連れまわすほど俺は悪い奴じゃない。いい奴でもないけど。

「転属って…年はいくつ？」

「今年で二十歳」

「あら、私と一緒にじゃない。それなのにその年で働いてるなんて立派ね、私なんてまだまだトレーナー修行の最中よ」

「ふうん」

まあ二十歳くらいならば会社に勤めるよりもトレーナーとしての腕を磨いたり、ポケモンに関わっている仕事関連の資格を取るほうが普通だからなあ。

仕事なんて、やるとしてもバイトくらいだ。それも会社勤めなんて、普通はポケモンには興味ない人間がやったりする仕事（まあポケモントレーナーってだけで稼げたりするからなんだろうけど）

ポケモン関連といえばレンジャーにナースにジュンサーに……かなりの数だ。そしてその職業はどれも人気だし、バイトをしながらその資格を取っていけばなかなか就職の幅が広がる。

二十歳なんていったらバイトをしながら資金をためて資格を手に入れたり、トレーナーとしての腕を磨いてそれで食べていけるかって判断を付け始める時期だ。

それなのにもう会社に就職して、ポケモンとは無縁の事務仕事やら

なんやらをする若者はどうも少ないらしい。以前何かのテレビでやってた。

まあ事務仕事が好きでこの仕事を若いときから選ぶって奴も中にはいるけど……それでも人気があるのは、ポケモンと力を合わせてやっていく仕事だ。

だが事務作業は基本的に人の手でやる、電力やら力仕事やらはポケモンに頼んだりもするが、基本は人の手だ。

そしてそれが不人気の理由、でもあるらしい。

食べ物関連にしてもポケモンの手を借りるし、漁業でも大工でもポケモンの力を借りる職業は多い。

ポケモンと人間が助け合って生きている、というだけあってどんな仕事にもポケモンがつきものだ。

だが一般的な事務の作業をする会社にはソレがない、あるとしたらそれは研究員か何か。

だからアクアが珍しい目で俺を見るのも分かる。

俺も最初は旅に出て自分の腕を磨いていた時期があったし。今ではすっかり悪の組織の一員しゅっぱとしておちついちまったけど。

「バトルもあんなに出来たのに、トレーナーとして稼いだりしようとは思わないの？ サイカならジムバッジも何個か手に入れられそう」

「ジムかあ、俺には無理だと思う。買いかぶりすぎ」

「でも、私もジムバッジをいくつか持つてるけど、その私と互角並みに戦ったんだよ？ そんな腕を持つてるのに会社員なんて、もったくないよ」

「そうか？ まあ俺も満足してるってわけじゃないけどさ」



もうそろっとしてデルビルをもらったら退職しようと考えてるし。つかジムバツジまで持つてるのかよアクア、通りで強いワケだわな。

そんな奴にバトルふっかけられてなんとか勝ち（というかなんというか）を掴めた俺の運に感謝したい。おめでとう俺！

まあ、それは置いて。ポケモン関連の仕事かあ。

そういう仕事も好きなんだけど、ただポケモン関連は本当に……なんていつたらしいのか分からないが、長続きしないんだよな。

レンジャーだつてあんなに早くクビになるとは思わなかったし。おかげで従兄弟が「お前レンジャーになるの？ んじゃあ支援してやつてもいいぜ」なんていう軽い言葉で出してくれた金もそれでなんとかがゲットした資格も意味ないものになった。

しかもレンジャーの養成所つてべらぼうに金かかるんだぜ…それを知った時は全身が震えたね。

従兄弟にこんな金払わせたのかつて。まああの人は有り余る才能のせいで大会やなんやらをいつも勝ち上がっていたから、その金について文句を言ったりはしてこなかったけど。

言われてたら引きこもりになってたかもしれない、もう自分に絶望して。

でもあの人は一度もかかった金については話そうとせず、俺をいじる1つのネタくらいとして時々俺にレンジャーの話題をふってくるくらいだ。

すげえよなあ、あの人。俺もいつかちゃんとした職について、そんな養成所でかかった金、返すんだ。

「ならトレーナーになってみるのはどう？ なんなら私の仲間も紹

介するし、気が合つんなら一緒に旅に出てみるのもいいと思うの」「え、あ、いや、そんないきなり……」

というか俺たち、さっきまで険悪っぽい仲でしたよね。

こういう切り替えの早さもマリンと似ている、ある意味いい性格してるぜこいつら。

「リクもサイカくらいの強い人なら喜んで歓迎すると思うし」

「……リク？」

「あ、うちの仲間の中で一番強い子の名前。まだ子供なんだけどね、これが凄い強いんだ。才能あるよ絶対、あの子はいずれ大会を勝ちあがって名のあるトレーナーになるって私は思ってる」

「……へええ」

知ってますよ、憎らしいくらい。

とはいえなかったが、ひとつはつきりした。……こいつと一緒にいては、マズイ。

まさかマリンの姉が正義の味方君の仲間だなんて、誰が知っているというのか。いや可能性はあったのか、気付かなかった俺が馬鹿だったんだ。

「リクの強さを知ったら、サイカもビックリするわよ」

もう充分ビックリしましたが。あのエンペルトの皇帝っぽい雰囲気にはやられましたか何か。

とは言い出せず（つか言わなくてもいいことだよな）俺はへらへらとした愛想笑いを浮かべた。

心は今すぐにもドンカラスの足に捕まって空を飛んで逃げたい気持ち一色だ。ただしそれだと怪しまれるのでそれも出来ない。

「それは、うん、楽しみだな…」

「この街にいるのなら会えるかもね、私たちもしばらくこの街にいるつもりだから」

「へえ…」

それはなんて嫌なニュース。聞きたくなかった。

やっぱりデルビルが俺のところに来たら即辞職な。そんでもってどつか別の地域に行く。

この際イツシユ地方なんていいかもしれない、いやもうこの地方じゃなければどこでもいい。ハウエンでもカントーでもジョウトでも。ただしシンオウ、お前だけは駄目だ、近すぎる。

「…あ、ポケセンが見えてきたな」

「本当！それじゃあ急ぎましょ」

「おう」

急いでいってポケモンを預けて早めに帰らないとな。

そう思い俺たちは早足で見えてきたポケモンセンターへと向かった。

## 第15話 青年とトレーナー（後書き）

名前が単純すぎて申し訳ないような気がします…。

サイカがちよっとだけ強い人に見えたでしょうか？したっばにしては強い方という設定なのですが、中途半端に強くなってしまったような気がします。

一応終わりまでのことは考えているのですが、いつそこに辿り着くのかまだ不明です。ですが無事に最終話まで辿り着けるよう、頑張ります。

## 第16話 青年と扇風機

なんだかんだあってポケセンに行ったあと急いでいるからとかもつともな理由をつけてアクアから解放（というか逃げてきたというか。…後者が相応しい気がする）された俺は、今日一日の濃密すぎる出来事にくたくたになりつつも、無事に家まで戻った。

バトルの際にビニール袋を投げたせいで卵は割れるし痛んだ食べ物はあるしで散々だったが、とにかく今日一日を無事終われることだけで良しとしよう。そうしよう。

自分の中でそう妥協しつつ、夕食を食べ風呂に入ったりと寝る前にやることを終えた後、コロボーシやコロトックたちの奏でる鳴き声を聞きながら夜を過ごす。バイオリンにも近い音色を奏でるこのポケモン達は、虫タイプが苦手な人たち以外からは好評なポケモン達だ。

秋ならば他の虫ポケモンもこの音楽に混ざるように鳴いたり、ダンスを踊ったりするのでかなり見ごたえも聞きごたえもあるものだ。

だがこの地方の夜は長く、いささか…というか、かなり暑い。それが観光客があまりこない理由なのかもしれない、少なくとも俺はこら辺で観光目当てにきた人間を見たことはない。もったいないが、暑いんじゃないか。

夏場は扇風機やクーラーなんかがないと寝付けないほどだ、もしくは水タイプや氷タイプのポケモンと一緒に寝るとか。ただ起きた時布団がビショビショになってる可能性があるため、基

本的にはクーラーや扇風機で夜をやりすぎず。これが野宿だとクーラーや扇風機なんてないためポケモンになんとかしてもらおうしかないんだが、それは今関係のないこととして。

まあとにかく、俺が言いたいことは普通に考えるならばそういう現代の進歩である機械に頼ることこそが当たり前といたいわけだ。

そう、普通ならばな……。

「だあああああ、あっちい！」

生憎その普通に入れなかった俺は、ランターンのひんやりとした体に寄りかかりながら、暇を潰すために読んでいた本を床に放り投げた。

1ページたりとも頭に入ってこないのは暑さのせいか。

バサリと音を立てて（もしかしたらどこか折れたかもしれない）俺の手を離れてどこか哀愁漂う姿で床に落ちた本を眺めぼーっとしていたが、すぐに暑さに根を上げた。

肩にかけていたタオルで額を拭いても拭いても、すぐに汗が吹き出る。

ああ暑い、暑すぎる！

「ランターン、俺に冷凍ビームをしてくれ、今すぐに！」

暑さのせいでトチ狂ったことを口走れば、ランターンは（何言ってるんのお前？）というようなジト目で俺を見たあと、つまらなさそう

に尾で床をたたいた。

ピタンやらバタンやらよく分からない音が鳴る。

ただでさえ水のないところに出されていい気分ではないランターンもやっつてられないんだろう、ごめんランターン。

でも俺が夜を過ごすにはもうお前がいないと……！サメハダーは鮫肌  
の特性のせいでよりかかったらそれこそ死ぬし。熱中症とかそうい  
うんじゃないくて、多分失血死する。

ちなみに普段ランターンが尾で床を叩くなんて下の部屋に思いつき  
り音や振動が響くことをすれば、速攻で下の部屋に住んでる人に「  
煩いんだけど」とか言われかねんのだが（それを言うならさっきの  
俺の叫び声も充分に隣の住人への迷惑になるんだけど）今日は俺を  
除きここのアパートの住人は全員実家に戻っているのでそれを気に  
する必要は無い。

大家さんだけはさすがに実家に戻ってこそいないが、今日は仕事が  
片付かなくて残業だとか言ってた。ヘタをすれば会社で一日を過ご  
すかもしれないから何かあったらポケギアの方に連絡してくれとも  
そんな大家さんはまだアパートには帰ってきていない。  
イコール今このアパートにいるのは俺だけなので、多少騒いだとこ  
ろで誰も来ない。

それはありがたいのだが、今の生き地獄状態な俺には正直関係ない。  
むしろ誰かいて、その人の部屋にご招待してもらいたい気分。

ああ、ああ、どうして……！

「なんで扇風機壊れてんだよ馬鹿野郎……！」

昨日まで活躍していた扇風機が、今日に限って壊れてしまったのか！  
よりによって、初めての本部の職場に行って仕事して（ちよつとサ  
ボったけど）泥棒にあつて正義の味方君に会つて泥棒姉にいちゃも  
んつけられてバトルしまくつて疲れた今日に！

風呂入つて飯食つてテレビ見て、ある程度くつろいでさあ寝て今日  
の疲労をとろつて思つたら扇風機が作動しないって…今日ってマ  
ジで厄日だ。

何度扇風機のコンセントを入れて回そうとしてみても、ガタゴトと  
音を立てるだけで羽はまわりやしねえ。イコール涼しい空気もちっ  
とも送られてこない。

はああああ、と重いため息をついて体にこもっている熱を吐き出す  
ようにしながら、俺はひんやりとしたランタンの体を唯一の涼み  
どころにしてこうして夜を過ごす

正直眠れる気がしない、いっそ外に出てランタンに水鉄砲でもぶ  
っかけてもらおうかと思つたが、そんなことしたら今度は風邪を引  
く。

かといってこの熱帯夜に眠れないのは辛い。どれもこれも扇風機が  
働かないせいだ。

ちなみにドンカラスで風を起こしてもらつて扇風機のかわりに働い  
てもらつてのは無しだ。

あいつに風を起こしてもらつたら部屋の中のものもんが飛び散る、後片  
付けだけですめばいいが明らかに色々なものが壊れてしまう。なん  
てこつたい。



「もう、いきなり部屋にユキメノコが現れてこの空間を冷やしてくんねえかなあ」

もしくはニューラやマニューラでも可。むしろ大歓喜、冷やしてくれるのならば。

そんなことを思っくらしいには暑い、ランターンがいることによつて少しは涼めているはずなのに次から次へと汗が流れていく状態だ。汗っかきなわけではないのに額なんて汗で濡れまくってる、髪なんて言わずもがなだ。

もう何回か汗でしめつた服も取り替えている、明日は洗濯物が大量発生だ。

「…扇風機さえ壊れなければこんなことには…」

「…」か昨日までしつかりと作動していたのに。壊れる気配なんて微塵もなかったのに。

これだから電化製品ってやつは。いつ壊れるのかなんて分かったもんじゃない。

もう一冊手元にあつた本を八つ当たりで扇風機に放り投げれば、うまい具合に扇風機にあたってそれはガコンと後ろに倒れた。これで直れば儲けもんだが、そう上手くいかないだろうけど。

はあ、とため息をついてぼーっと扇風機と今放り投げた本を見る。

本の方は少し折れ曲がっていたが、どうせ無料だと手渡されてたま手に取った就職雑誌だ、捨てる予定だったし構わない。

そして倒れたはずの扇風機は、自力で起きあがり何事もなかったようにその場に鎮座した。

「……………は？」

なんだ俺は、夢でも見ているのか。

一瞬夢を見ているのかとも思っただけで今放り投げた本を見るが、先ほど見たときと同じく折れたまま床に無造作に落ちており、しかも扇風機の傍に落ちていたのでさっきの扇風機が倒れたという事態は夢でもましてや妄想でもなんでもないはず。では何で起き上がった。

扇風機って自動で起き上がる機能なんてついてたっけ？

たとえあつたとしても、中古で安く買った扇風機にそんな機能がついているはずがない。いらねえしなそんな機能。

しかもこの扇風機は壊れてるんだぞ？ そんな機能だけ生きてるわけあるか。

そう、つまりこの事態は…

「…どういふことなんだよ」

うん、正直よく分からない。

分からないなりにもう一度試してみるかと、今度は近くにあつたシンオウガイドブックを扇風機に放り投げてぶつけようとすれば、今度は扇風機は動いてそれをかわしやがった。（そしてガイドブックは俺が思った通りにはいかず、やや右側よりはずれて扇風機に当たることなく床に落ちた）

そう、扇風機にくせに勝手に動いてひらりと身をかわたのだ。

たと思つたより右側はずれたとしてもまだ扇風機に当たる範囲だ

つたというのに。  
そして扇風機はかわした後、また何事もなかったように元の場所に鎮座。

……え？ は？ つまりなんだ？ これ

「…ランターン、電磁波」

呪いの扇風機ってか？ そんな馬鹿な。

でも気色悪いのはたしかなので、俺は混乱した頭でランターンに電磁波を命じた。

電化製品になんてことをしているんだ、と言った直後に気付いたが、ランターンはいつものように俺の命令に従ってしまったため、当たり前のように放たれた電磁波が見事に扇風機にヒットする。

だが、（やべえ壊れる爆発する！）とランターンと共に遠くに逃げようとした俺の耳に聞こえてきたのは、爆発音でもなければ扇風機が壊れるような音でもなかった。

甲高い、といえはいいのか、扇風機が決して鳴らさないような音。なんだこれ、と顔をしかめて扇風機を見ていると、こともあろうに扇風機はそんな俺の目の前で宙に浮き出した。それはありえないことだ、扇風機が宙に浮く？ 頭可笑しいんじゃないか？

…誰の頭が？

「おいおいおい、俺の目はおかしくなってるのかよ！」

さすがにそれを見てじっとしてはいられない。俺知らない内にラリつてたのか！？

先ほどとは別の意味でかいた汗を腕で拭きとりながら扇風機から距離をとる。といってもボロくて狭いアパートの中だからとれる距離なんて限られているわけだが。

とにかくとれるだけ距離をとって、俺は近くのテーブルに置いてあったボールからグラエナとヤミラミを呼び出す。

え？ 扇風機一台にポケモン三匹は卑怯？ そんなの知るか！

「とにかくあの扇風機を壊すぞ、皆！」

もう壊れてるって！？ 確実に壊すってことだよ！

そういつてみんなに指示を与えようとしたところ、壊されてはたまるかと思っただのか扇風機が突然風を起こし始める。

先ほどまでうんともすんともいわなかったはずで、先ほどの衝撃でコンセントも抜けているのに問題なく動いている（そして浮いている）姿はもはやホラーだ。

なんだこれ、ポルターガイスト？

暑さと混乱でやられた頭は咄嗟の扇風機の行動に判断が追いつかず、俺たちは扇風機の風にやられ壁に叩きつけられた。

一瞬痛みと衝撃で呼吸が止まり、ボロいアパートの壁は簡単に亀裂が入る。

そしてテーブルの上にあつた食器やグラスは扇風機が起こした強風により床に落ち簡単に割れ、他にも壊れたものがちらほらと。

あああ大家さんになんて言えばいいんだよこれ…！

「っ、クソが！ヤミラミ、猫騙し！」

とりあえず怯ませて（扇風機が果たして怯むのかは分からないが）体制を整えようと、俺はヤミラミにそう命じる。

俺と一緒に壁に叩きつけられたヤミラミは、それほどダメージを受けていないらしく迷うことなく俺の命令に従うまま扇風機へと駆ける。

そしてそのまま強風を起こして満足したらしくヤミラミの行動に反応できなかった扇風機に猫騙しを打って時間を稼ごうとしたその瞬間、

「は、ああ！？」

俺の思惑は見事にはずれ、ヤミラミの猫騙しは扇風機に当たることなく、扇風機の体を通り抜けた。

まるでゴーストタイプにノーマル技を間違えてしかけてしまった時のように。

そのことに俺もヤミラミも驚いて動きが止まる。

それをチャンスと見たのか、扇風機はヤミラミに対してもう一度強風を叩きつける。

あっと思う暇もなくそれを受けたヤミラミは、しかし咄嗟の判断で壁に叩きつけられる前になんとか体制を整え激突を防ぐ。

そして俺に指示を仰ぐようにヤミラミは俺を見るが、俺の頭は混乱したままでそんなヤミラミの期待に答えられない。だって扇風機に猫騙しが通じないだなんて、そんな馬鹿な話があるか。

俺の混乱をヤミラミは感じたのか、とりあえず技を避けておこうと次々くる扇風機の強風からテーブルやそこらへんにある家具を使い身を守っていく。

俺と言えば、そんなヤミラミと扇風機の戦いを見ながらただ立ちつくすばかりだ。

「おいおい、マジかよ…」

こんな相手にどう立ち向かえっていうんだ。いつその部屋…いやアパートから逃げるべきなんじゃないか？

次の行動が決まらず迷う俺の不安が伝わったのか、俺の傍にいたグラエナとランタンがそつと俺の脚に体を寄せてくる。多分だが、俺を落ち着かせようとしてくれてるんだろう。

その心遣いに感謝しつつ、俺は一度大きく深呼吸をした。早くヤミラミに指示をしなくてはならない。

ひとしきりの扇風機の強風攻撃がとまった後、ヤミラミは自慢の爪で扇風機に切りかかるが、それすら体を通り抜けてダメージにはならない。

俺が指示をしてこの状況を打開しなければ。どうする、戦うか逃げるか。戦うたつて、こんな得体の知れない機械とどうやって。

じゃあ逃げるか？

だが俺の手持ちに逃げ足の特性を持つポケモンはいない、逃げられるかどうかは分からない。

あの浮いた扇風機はアパートを出てもついてきそうだし…ああもう！

「こうなりやもうヤミラミ、みやぶるだ！」

自棄になった行動だがやってみる価値はあるよな！？ あるといつてくれ！

みやぶって相手の正体が分かればめっけもん、駄目でもともとだ。少し戦って状況が打破できないようならば逃げよう、海を越え空を飛び逃げ続ければ相手は扇風機だ、やがて力尽きて…くれるだろう。それを祈る。

俺の指示を聞いたヤミラミは目を鋭くし、扇風機へと睨みつけるように視線をぶつけた。

その瞬間、扇風機の姿が変わり始める。それはみやぶるの効果が出た証だ。

みやぶるという技はゴーストタイプの正体を特定したり、回避率の上がったポケモンに対しその効果を無効とする能力を秘めた技だ。

これが結構重宝する。

そんでこのみやぶるが聞いて姿が変わるということは、ゴーストタイプのポケモンだったのかよこの扇風機！

あれ、でも昨日まで動いていたしいつポケモンにすり替わったっつーんだ！？

「勘弁しろよマジで…」

俺たちの前で扇風機は姿を変えていき、やがて扇風機に良く似た、しかし顔も目も口もある明らかに生き物の形をしたポケモンへと変化した。

……知らないぞこんなポケモン。

おそらくはゴーストタイプなんだろうが、こんな扇風機に近い姿をしたポケモンなんて聞いたことがない。

悪タイプや電気タイプ、毒タイプやゴーストタイプは俺の好きなタイプだから基本的に知らないポケモンはいない…と思うし（これも一応好きなタイプについては色々調べている、あとライバル的な意味でエスパーも少々）、こんな奇妙な姿をしているポケモンならテレビでも話題になっていてもおかしくないというのに。

……だがみやぶるの効果で正体が分かった以上、ポケモン、だよなあ？

それでもゴーストタイプの。そのはず、なんだが…。

「…いや、今は考えていても仕方ないよな！こうなりやバトルをして戦闘不能にさせるぞ！ヤミラミはだまし討ちで確実にダメージを与えて、グラエナはヤミラミの援護を頼む！」

俺の言葉を聞いて、俺の脚に擦り寄っていたグラエナが扇風機（偽）の方へと駆け出していく。

ヤミラミは特性上、後だしがあるため相手より先に攻撃できることはまず無い。



だが俺のメンバー内でゴーストタイプに効果抜群で尚且つ必中技を持つているやつはヤミラミしかない。

俺あのふわふわ浮いている扇風機（偽）に翼を持たないグラエナ達が接触技を当てることは難しいし、だからといって遠くから当てる技だと他のものまで巻き込んで大災害になりかねない、主に借りている部屋がヤバイことになる。

俺の傍にいて、いつでも俺を守れるように体制を整えているランターンも遠距離から当てられる技を持つているが、水や電気といった確実に扇風機（偽）だけでなくこの部屋を痛めつけてしまう技ばかりなので今回は戦闘に参加させることはなく俺の傍にいてもらう。今日は一日ずっとバトルで頑張ってくれたからな、これ以上戦わせるのも可哀想だし。

つまりあの扇風機（偽）に対しては接触技でなおかつ必中技のたまし討ちで攻めるしかない、そのヤミラミのサポートにはグラエナがもってこいだ。

ドンカラスでという手段もないわけではなかったが、あいつだと強風対決になりそうで怖いんだよな。部屋のものが全部壊れそうでもグラエナとヤミラミならば大丈夫、なはず…。

「グラエナ、不意打ち！」

また突風攻撃を仕掛けようとした扇風機（偽）に対して先に牽制を放つ。

たとえ当たらなくとも効果抜群で威力を高い技を見せられてはそう簡単に攻撃できなくなる。つまりはプレッシャーをかけるのだ。

ふわふわと浮いている扇風機（偽）はその言葉に驚き、慌てて空中に逃げるため不意打ちは当たらない。

がこれでそう簡単に攻撃できないというのは分かったはずだ。…しかし、電磁波を受けて麻痺しているのになんと空中に浮いているなんてよっぽど我慢強いやつなんだろうか。

麻痺したせいで安定感がなくなって床におりたとしても可笑しくはないというのに。

そんなことをする仕草はひとつも見えず、空中に浮いたまま扇風機（偽）はグラエナの攻撃があたらない場所まで逃げる。

そこから遠距離攻撃もありえるっちゃありえるが、今の不意打ちを見てまた強風を起こすとは考えにくい。

…となると不意打ちをさけるために回避率を上げるか状態変化技でこちらの動きを封じ込めるかのどちらかとなるが…ここはどちらがくるとしても！

「そこから身代わり！」

技が貫通しない身代わり相手にしてもらおう！だまし討ちは回避率が上がったところで意味がないからな！

俺の読みの通り、扇風機（偽）は不意打ちを警戒して体から電気を放出し、電磁波を放ってくる。だが身代わり相手にそれは意味の無い行為だ。

そうやって無駄うちしている間に、ヤミラミが強風で倒れてしまった家具を使い空中にいる扇風機（偽）後ろに回りこみ、思いつきりのだまし討ちを食らわす。

その瞬間扇風機（偽）が嫌な音を立てるが、こいつ扇風機じゃないしな。大丈夫だろう。

そしてこのチャンスを逃す俺ではない！

「噛み砕く！」

身代わりを押しつけて、グラエナが扇風機（偽）に噛み付く。

ゴーストタイプにだまし討ちと噛み砕くの連続攻撃はキツイのだから、扇風機（偽）は甲高い鳴き声をあげてぐらりと体制を崩した。

よし、これならばいける！このまま押せば戦闘不能に出来る！

そのことにほっと肩の緊張をほどきつつ、汗をぬぐう。終わりはもう見えている。

さてこのまま倒すか、と自分の中では勝利を確定させていたところで、傍にいるランターンの尾が俺の頭にあたる…というか、あてられた。

なんだろうかとランターンの方を見れば、ランターンの尾には器用にもこの間特売品として買ったダークボールが乗っていた。…つまり？

目があったランターンが茶目つ気たっぷりにウィンクをする。

それでなんとなくランターンが言いたいことを察する。つまりは、そういうことだろ？

「……そうだよな、倒すにはもったいない相手だよな」

ヤミラミとグラエナと交戦している扇風機（偽）を見る。

なにせ見たことのないポケモンだ、この先会える可能性はないかもしれない。

先ほどあてたランターンの電磁波にグラエナとヤミラミが食らわせた攻撃のダメージ、おそらくこれならばいけるだろう。

ランタンからボールを受け取り、どこも壊れていないことを確認する。先ほどの風のせいで開閉スイッチが壊れていたら使い物にならないなと思ったが、頑丈に作られているボールは傷1つついていなかった。これで1000円（特売品だからもつと安いけど）とは最近の科学の進歩は目覚ましい。つて、そういうことではなく。

「っし！やるか！」

きよろきよろと辺りを見渡し、すぐに先ほどの風により床に落ちたボールを運よく発見し、中からドンカラスを呼び出す。そうして現れたドンカラスの嘴くちばしに、空のボールを銜えさせた。

残念なことに俺はボールを投げることがあまりうまくない。それなのにふわふわと浮いている扇風機（偽）に一発でボールを当てられるなんて芸当が出来るとは思っていない。

これがまた違った場面であったならば俺はへたなりに自分の腕で投げただろう、だが今回は別だ。

でもこの場では一匹のポケモンに対しこちらが何体だしても非難されることはない、何故ならここには俺と扇風機（偽）と俺のポケモンたちしかいないのだから。そんな俺が有利な状況でもつとも確実な方法がこれならば、俺はこの方法を選ぶ。

「頼んだぞ、ドンカラス！」

何を頼んだのかと言わなくとも俺の意図を読み取ったドンカラスは、しっかりとダークボールを嘴に銜えた後大きな翼を広げ扇風機（偽）のところまで猛スピードで突っ込んでいく。

電磁波で素早さも下がっていて、ヤミラミとグラエナに注意をむけ

ている扇風機（偽）に突っ込んできたドンカラスをかわせというのは無理な話だろう。

グラエナとヤミラミが空中に浮いていないのをいいことに扇風機（偽）に絞ったドンカラスは、簡単にくわえていたボールを直接ぶつけるようにして扇風機（偽）にあてる。

その瞬間、赤い光とともに扇風機（偽）は吸い込まれるようにダークボールの中へと強制に入れられる。

ダークボールの性能は、暗い場所（つまり洞窟や深夜帯など）で効果を発揮するボールだ。

そして今の時刻は深夜、ダークボールは最大限の効果を発揮しているはず。

普通に売られているモンスターボールの何倍も効果的。

だがドンカラスの嘴からこぼれるように落ちたボールは開閉スイッチの丸い部分を赤く点滅させ、ごろごろと床の上を抵抗するように動く。

もしこれで開閉スイッチを内側から壊して出てきてしまうことがあったなら、更に攻撃を加えてもう一度ボールをぶつけてゲットしようと警戒態勢を解かないままであれば、ごろごろと動き回っていたボールはやがて動きを止め、開閉スイッチは点滅をやめた。

そのことに最初に歓声をあげたのは誰だったか。

それはゲットできたという何よりの証で、そのことを実感した俺たちはこのアパートに誰もいないことをいいことに声を抑えることなく騒いだ。

グラエナとじゃれあつたり、ランターンの冷えた体に抱きついたり、ヤミラミと手を握り合つて踊つたり。何しろ久々の（個人的な意味での）ゲットだったもんで。

床に落ちてゐる扇風機（偽）入りのダークボールを拾い、新しい仲間をこれからどう育てようかだとか結局こいつはなんだつたんだとか思いつつ、俺たちはひたすらはしゃぎまくる。

近所迷惑何ソレ美味しいの、みたいなはしゃぎっぷりを誰をとめることもなく（何故ならアパートには誰もいないので）、そして散々はしゃいだ後にふと正気に戻つて窓の方を見れば、窓からは綺麗な朝日が顔をのぞかせていた。

……完徹かよこん畜生。

そんなことを思いつつ、でも嬉しさを隠せないまま部屋を見渡せば、そこには悲惨としかいえない状況が目映った。

これ、マズイ、マズすぎるだろ常識的に考えて……。

## 第16話 青年と扇風機（後書き）

V S扇風機（偽）、新しいポケモンをやっところさゲットです。

とりあえずゴーストや電気タイプが好きだという主人公にしたのだからこいつはゲットしておくべきだろう、ということ。

やっところさ一日が終わりました。最初から最後までバトルな一日で  
なんだか申し訳ないです。

## 第17話 青年と図書館

結局一睡も出来ないまま夜を明けることになってしまった俺は、そのまま寝ずに仕事に出ることになってしまった。なんてことだ、こんなはずではなかったのに。

散らかってしまった部屋を元に戻すことも出来ず、とりあえず仕事に必要なものだけを鞆につめて仕事場に行くこととなった俺は、帰ってきたら大家さんにどう謝ればいいのかと泣きそうになりながらドンカラスと共に空を飛ぶ。

ちなみに強風のせいか、強風で何か物が飛んでぶつかったせいか、ドアノブが壊れて鍵がかからなくなっていた。弁償、という言葉が俺の脳裏に過ぎる。

うわああ俺そんなに金ねえよ馬鹿あああ！！

しかし起きてしまったことはもうどうにもならない。徹夜から帰ってきた大家さんがドアノブに気づかないことを祈る。…部屋の鍵が開いていたら泥棒に入られないかという心配なら要らない。何故なら、あそこに金目のものは存在しないからである。自分の貧乏っぷりに泣きそうだ。

これからのことを考えて鬱になりそうな心情を、どうにかしてポジティブにしようと半ば無理やりテンションをあげ（アパートを追い出されませんように追い出されませんように！）、いつもの日課でみたまのとうでお祈りする。



もう神頼みでもなんでもいい、なんかいい展開になってくれることを望む。

そっぴやみたまのとうは何を祀<sup>まつ</sup>つてあるとうなんだ？ 俺本当にこの塔のこと何にも知らないな。べつにいいけど。

知ってても知らなくてもいい情報だ。多分あれだ、神話的なポケモンを祀<sup>まつ</sup>つてるんじゃない？

そうして神頼みをした後またドンカラスに捕まって空を飛び、仕事場に行く途中にあるポケモンセンターに夜中捕まえた扇風機（偽）を預ける。

もう昨日から何度お世話になってるだろうこのポケモンセンター。この様子だとこのポケセンのジョーイさんといい関係になれそうな気がする、だって昨日今日あわせてそろそろ片手を越えるような回数通ってるし。

でもジョーイさんはクールに対応してくれた。脈などないのではないか。  
いやまさか、それはジョーイさんが俺のことを良く知らないから、それだけだ。

俺のことを知ってくればもうメロメロ状態だろ。……妄想じゃないよ、本当だよ！

しかし当たり前のようにジョーイさんに預けたけれど、ポケセンのマシンで回復出来るんだろうか扇風機（偽）：これ電化製品なんですけどとか言われたらどうしよう。

明らかに悪ふざけとか頭弱い人に思われる。まだ可能性のある脈も時空を越えてどっかに飛んでいくって話だ。

そう思いながらも、とりあえず仕事が終わったとまたセンターにきて引き取りにくることをジョーイさんに説明して、仕事場へと急ぐ。仕事場に行つて働こうつて思つても完徹のせいでまともに動いてくれない頭でちゃんと出来るのか疑問だが…。

まあ風邪もひいてないし、何より給料低いし有給なのに休むとかありえないモンな。

お金のためだ、頑張らにやなるめえよ。

そうして仕事場へ行く前にしたかったことを全て済ませた後、ドンカラスの足に捕まつて職場までひたすら飛んだ俺は「新入りおはよう」「おはよー新入り」なんていう同僚の暖かい声に迎えられながら、仕事（つつつても警固だが）を始めることになった。

ドンカラスに捕まつている腕が痛いのはいつものことだ。だが徹夜明けのボーっとしていいる体と頭のおかげで若干麻痺しているように感じる。

これなら仕事してても疲れなどたまらないかもしれない。

……と思つたがこの仕事、ずっと立ちっぱなしだから意外にキツイんだよな、体力以外のものが。

それに似合つた給料が欲しいってんだよまつたく。

けれども、体を使わないだけまだマシなのか。侵入者がこない限りいたつて暇な仕事だし。

寝不足の俺でも普通に出来る仕事、これ割りと珍しいんでない？

口を開けばでそうな欠伸をかみ殺しつつ、俺は今にも落ちそうな瞼を必死に持ち上げながらそう思うことにした。

……今日に限っては、暇なこともキツイんだけどなあ。でもしゃべってたら怒られるし。

でもこのままでも危ない気がする、寝ちやいそうぞ。

腕をつねったり、頬をつねったりしながら俺はそんな退屈な時間を過ごした。

この仕事やりがいもクソもないな、これだから悪の組織のしたっぱの仕事は……。

そうしてなんとか寝ないで昨日と同じ仕事でもある本拠地の警固をした後、見回りをするために交代にきた上司的なたっぱにその場をまかせ、俺は働かない頭のまま見回りのため基地から外に出た。見回りがたら昼食もとって休憩時間は外で過ごすつつであるから、次の交代時間まで俺が基地にいなくても何も問題はないだろう。

本来なら見回りすらサボって家で寝てしまいたい。寝てしまいたい、が……！

「やっぱ、調べなきゃだよなあ」

昨日（つーか今日？）の深夜捕まえたポケモンを思い出してため息をついた。

あいつがどんなポケモンかも分からなきゃ、夕飯も食わせられない。

それはポケモンによって人間と同じものでいいのか、ポケモン専用の餌でいいのか、牧草に近いものを食わせるのか、はたまた電気や炎などちよっと特殊なものを食べさせるのかが変わってくるからだ。

ポケモンの体に合わないものを食べさせてしまえば、最悪拒絶反応を起こしてヤバイ状態になりかねない。

ジョーイさんに相談してもいいんだが、果たしてあんな変なポケモンをジョーイさんですら知っているかどうか。

ポケモンのことに関してはプロフェッショナルだとは分かっているが、あのポケモンはそのプロフェッショナルでさえ惑わすかもしれない。

ゴーストタイプの知識には自信がある（素人だけどレンジャーの資格まで持っていて一応それなりの知識もある）俺ですら混乱に落とし入れた奴なんだから。

でももしジョーイさんが知らなくて、なんのアドバイスもないまま引き取ることになったら。

そうだったら、捕まえた俺がなんとかしなきゃいけないのだ。

それがポケモントレーナーとしての責任のひとつだ。

自分で捕まえたポケモンなのだから、そのポケモンを守り育て共に生きるのがポケモントレーナーとしての責務。…だと俺は思ってる。

だから今回捕まえたポケモンについても出来る限りのことはしたい、と思っっているのだが。

働かない頭でなんとかなるのかと若干の不安を抱かずにはいられない、徹夜なんて普段は絶対にしないせいで体調は明らかに絶不調だ。立ったまま寝られそう、いや眠れるなこりゃ。ちよっと油断すればどこでだって眠れる。

そんな具合。

それでも調べないよりはマシだろう、と俺は見回りという名のサボ

りをする場所を図書館に決めた。

図書館になれば、何かしらあのポケモンのことについて書かれている本もあるだろう、多分。

……あるといいなあ。

ポケモンの名前も分からないで、多分ゴーストタイプだろうっていう（しかもこれは確定していない）情報だけで探し出せるのか。深く考えれば穴だらけだ、だがやるしかない。

図書館の位置を地図で確認しつつ、俺はもう一度ため息をついた。たかが一日寝ないだけでなんでこんなに頭が回っていないんだか。世の中には何日も徹夜する人だっているっつーのに。なんでこんなに疲れているの自分、体力無さすぎだよな常識的に考えて。

そう思いながらも図書館に行くために、地図の通りに広すぎる町を俺は歩き始める。

サボりはきつとバレないだろ、うんきつと大丈夫。……たぶん。

「うわ、でけえ」

図書館の前に立った俺が口にしたのは、まずその言葉だった。全体を見ようとしたら首がいたくなるほど高く、広い。

すつげえでけえ、少なくとも俺はこんなんでかい図書館なんて見たことは今までにない。

これならあのポケモンについての資料もありそうだ、……見つけれたららの話になるけど。

図書館の人に聞いてもいいが、とりあえず聞くにしたってどんなキーワードを使えばいいのか。

扇風機みたいなポケモンのことについて詳しく書かれた本はありますか？ とかか？

……ないな、普通じゃない。

頭イカれてる人扱いされるオチが見える、これは最終手段にとっておきたい。

時間はそれなりにあるんだ、出来る限り自分の足で探そう。

そんなことを思いながら図書館に入れば、涼しい空気が一瞬俺の眠い意識を呼び覚ます。

それと同時に受験生やらの放つピリピリとした空気が体を包み、私語など許さないという雰囲気思わず背筋が伸びた。

ああ、俺、こういう場所って苦手。

静かな場所より騒がしい場所が好きだ、賑やかな場所の方が居心地がいい。

俺にとって足音ひとつすら響くような図書館は、とてもじゃないがずっといたいと思える場所じゃない。

何より体質的に駄目な感じがする。この張り詰めた空気とか、俺マジ嫌い。

さっさと見つけて帰りてえなあと思いつながらカウンターにある案内図を見てみれば、そこに書かれている異常に広い図書館の内部に眩暈がしてくる。

どうやらこの図書館はそんじょそこらの図書館とは一味も二味も違うらしい。

なんてこった。

ミオの図書館も有名だが、この街の図書館はその上をいくということとで有名なんだそうだが、そんなことまで案内図に書いてある。

そんなことを書くより案内しろよ、案内関係ないだろこの情報。

思わず目を逸らしたくなったパンフレットをなんとか眠い目で必死に見ていけば、この図書館はどうもその広さを生かして総合的なものは下のフロア、ポケモンの種族やタイプのものは上のフロアという構図になっていることが分かった。

総合的なものはポケモンそのものの生態についてや、生息地についてのものから神話関連のものまで多種多様だ。

そしてその上のフロアにある種族的なものやタイプのものは言わずもがな。

今回俺が調べるのは、当然上のフロアだ。

でもこの構図だと2タイプあるポケモンの資料はどうすんだ、と思っただがそこは偉大なる図書館。

資料を置く優先順位がタイプにより決まっっていて、下の階にあるタイプほどその順位が高いらしい。

たとえば5階に水・炎タイプ関連の資料がおいてあり、その上のフロアである6階に電気・草タイプの資料がおかれている場合。

この場合を前提に、水タイプの草タイプの2タイプを兼備している  
ルンパツパの資料を探したい、というときには優先順位がより高い  
水タイプのある5階で探せばいいということだ。

ちなみに名前が分かれば検索システム、というものでどこの階のど  
こらへんにあるのかが一発で分かる。

ルンパツパというキーワードを入れれば迷うことなく資料を見つけ  
ることが出来るだろう。

だがそれは名前が分かっていた場合の話。

残念なことに俺はあの扇風機（偽）の名前を知らないなのでこのシス  
テムは使えず、ゴーストタイプという唯一の手がかりだけで探さな  
くてはならないのだ。

うーん、後者のシステムが使えれば一発だったのに。

しかもこの前者のやり方で調べると、あの扇風機（偽）がゴースト  
タイプともう一個タイプを持っていた場合ぐつと探しにくくなる。  
何故なら案内図を見たところゴーストタイプはかなり高い階にあっ  
たから。

といことは優先順位は限りなく低いつてことだ。

これがまだゴーストタイプより上の階にあるタイプと複合している  
なら問題ないが、ゴーストタイプより優先順位が下の階にあるタイ  
プを複合していた場合、どんだけ下のフロアを探せばいいのか。

……見つかる気がしない。マジで。

それでも人に聞くのはなんとなく気が引けて（頭可笑しい人扱いさ



れたくないっていう、ね）僅かな奇跡を信じて、エレベーターを使いゴーストタイプと悪タイプについての資料が置かれているフロアに行く。

ミオの図書館より、と案内図に書くだけあってどちらのタイプの資料もハンパなくある。個人的にあまり優遇されていない悪タイプについての資料がかなりあるのが嬉しいところだ。

こんだけあるんならあの扇風機（偽）の資料もこのフロアにあるんじゃない？ あるよな？

そういう期待を持ったが、残念なことにその期待は儂く崩れ去った。儂い夢だった。

コーナー分けされているゴーストタイプの本棚を調べれば、ゲンガーやヤマミラミなど知っているポケモンは大量に見つかるが（なんてたって俺はゴーストと毒タイプも好きだから）あの扇風機（偽）についての資料などひとつも見つからない。

ゴーストタイプのまとめ的な本も流し読みでパラパラと目を通してみたが、そこにも扇風機に似たポケモンに関する情報は無し。こうなると俺は家電製品をゲットしたんじゃないかと思えてくる。

マジでそうだったらどうしよう、世界初ポケモンと間違えて扇風機をゲットした男なんていう欲しくない称号をもらってしまうのではないだろうか。

嫌だ、そんなの絶対に嫌だ。

でも見破るが特に回避率を上げる技やこちらの命中率を下げる技を使っていなかった扇風機（偽）に効いたっていうことは、可能性と

してはゴーストタイプだったからってことしかないんだよな。  
でもこの図書館にはそれらしきものは置いてない、ということとは…。

「……積んだ」

そういうことだ。もうこれはジョーイさんの知識に頼るしかないんじゃないだろうか。

ジョーイさんがあの扇風機（偽）について知っていることを祈って人頼み。もうこれしかないんじゃないか？ トレーナーとしては無責任だけど。

しかしせっかく苦手な図書館まで来たのに、こんな結果。  
なんてこつたい。俺はもう死にたい。

いつそこで寝たら永眠できるんじゃないの、そんなくらいには眠いし。もう寝ようか、寝てしまおうか。

思わず諦めにも絶望にも似たものが込み上げてくる。

とりあえず最後の悪あがきで適当にゴーストタイプのポケモン系のものを何冊か借りて…あとはなんか強風起こしてだし、扇風機っぽいし、飛行タイプの資料を漁ってみるのもいいかもしれない。

というかもうそれ以外に手がない、泣きたい。

今日は泣きたい出来事ばかりだ。

はあ、とため息をついてゴーストタイプのポケモンを多く取り扱っていきそうな本を何冊か見繕う。

この中であつたらいいけど…そんなに上手いこと物事を運べるといふのだろうか。この俺が。

でももう他に方法もないし。

ゴーストタイプの総合資料と本を何冊か手にとって、俺は下のフロアにある飛行タイプのポケモンについての本も漁るかとエレベーターに向かおうと悪タイプのコーナーを通り過ぎようとする。が、その瞬間、どこかでかいたことのある香りがして思わず立ち止まった。

(…あれ？ この香り、どっかで…)

臭くない、むしろいい香りとも呼べるべき匂いは、前にどこかでかいたことがあるような…そんな気がする匂いだ。

だがどこでかいたのかまったく思い出せない。俺はこの匂いを、どこで…？

「そこ、いいかい？」

「へ？ ああ、すみません」

ぼさつと悪タイプの資料が詰まっている本棚の前で立ちつくしていると、俺が邪魔だと感じたらしい男の人に声をかけられてしまう。まあこんなところで突っ立っていれば迷惑もいところだろう。

慌てて本棚から離れれば、男が俺のいた場所に立つ。

その瞬間また例の匂いが強く香り、俺の鼻を刺激した。

なんだろうこの香り、どうやらこの男の人がつけている香水か何かのようだが、香水にまったく興味の無い俺にはそれがどんな名前なのかは良く分からない。

ただ分かるのは、俺がこの香りを知っているということ、それだけ

だ。

うーん、思い出せそうで思い出せない。知っていることは確かなんだけど…でも香水なんて普段気にかけていない俺がなんでこの匂いだけは覚えてるんだろ。

誰か知り合いがこの匂いの香水をつけていた？ いやそうじゃない。

じゃあどこで？ 確実に俺が知っている匂いなのに思い出せない。分かるようで分からない、あとちょっとヒントがあれば分かりそうなのに…。

そんなもやもやした気分を持ちながら男の人を見続けていると、その視線に気づいたららしい男の人が俺を見て苦笑した。

…うわ、徹夜してるから頭が働いていないとはいえ失礼なことをしてるな俺。

知らない人をじろじろ見るだなんて。

つーか今のは徹夜関係ないか、徹夜のせいにしちゃったけど。

「俺の顔に何かついてる？」

「あ、すみません。香水の香りがかいだことのあるような気がしたんで、つい」

「ああ、そっか。…鼻につく？」

「いえ、そんなことは」

確かに強い香りではあるが、嫌な気分にはならない。

男の質問に対して首を振れば、男は安心したように笑った。なんか笑ってばっかりだ、この人。

「ならよかった。この香水は気に入ってるんだけど、少量でも強い香りみたいでさ、この間は同僚にそのことについてお小言をもらっ

「ちゃったから」

そう言つて男の人がにっこりと満面の笑顔で笑い、それに俺もつられるようにして笑つた。

しかし先ほどまで匂いにしか注目して顔なんて口々に意識してみていなかったが、改めて見るとこの男、なかなかの美形だ。

ストレートで首近くまでまっすぐに伸びている茶色の髪、目や鼻や口のバランスも整つていて、やけにやんわりとした雰囲気と口調のせいか凄い優しそうに見える。

保育士とか、ブリーダーにいそうな感じ。顔はともかく、雰囲気は俺よりも華奢でひよろつちい体つきとやんわりとした雰囲気、男っぽくない顔立ちのせいで中性的にも見えなくも無いが、それはあくまで遠くから見た時のみだろう。

まあ運動まで出来たらアレだもんな、神様恨むよ俺は。

でもたとえ運動が出来なくて男らしくもない、けど女の子にモテそうで子供やポケモンにも好かれそうな雰囲気を持つ美形、ああ俺もこんな感じに生まれたかった！

やっぱり神様恨もうかな！今日神頼みしたばかりだけど！

そんなことを思っていると、男は満面の笑みを苦笑めいた笑みに戻して（どうでもいいがこの人は笑う以外の表情がないのか、さつきからずっと笑つてばかりだぞ）独り言のようにぼつりと呟いた。

「まったく、同僚にも困っちゃうよ」

子供大好きです、そんなオーラを身にまとっている（ように俺には

見える)男は、それだけ俺に言うとは本棚から一冊の本を取り出す。ちらりと見たソレは、「悪夢とポケモンの関連性について」というなんとも嘘っぽい感じの本だった。

悪タイプが不幸を呼ぶだとかあんまりいい感じに書かれていないことはよくあるが、悪夢まで悪タイプのポケモンにせいになされたくない。

「でもま、あいつの実力は認めてるんだけどね」

それだけをやっぱり独り言のようになると、男は笑顔のまま「じゃあね」と俺に手を振ってさっさと他の場所へ移っていった。

俺も別にこの男と話したいわけでもないのに、彼にさようならとだけ言うとはエレベーターの方へと向かっていく。

その途中ちらりと腕時計を見ればすでに昼休みの時間で、結局見回りの時間をすべてサボってしまったことを知った。まあ仕方が無いね。

警固の時間までには本を借り、昼食をとって戻らなければ。やることはたくさんある。

「ああ、でも…」

あの男がつけていた香水は一体なんだったのか。間違いなくかいだことのある香りだったんだけど。

聞き忘れてしまったことに気づいた俺は後ろを振り向くが、そこにはもう男の姿はない。

たかが香水のことで今来た道に戻って聞きに行こうとも思えない。

ただでさえジロジロ見たり不躰なことをしてしまっただばかりだというのに。

立ち止まった足を再び動かし、俺はエレベーターに乗ってまずは飛行タイプのポケモンの資料を探す。

昼休みはあつという間に終わってしまっし、昼食を買って食べる時間も必要だから資料にはるくに目を通さず、ゴーストタイプの資料のときと同じように総合的なものだけを何冊か借りる。

ちなみにカウンターで扇風機に似たポケモンの話をしても、そんなポケモンは職員も知らなかったのかしばらく考えていた後「…ああ！」と思いついたように呟き、俺をノーマルタイプの資料が置かれているフロアに連れて行き、そつとメタモンの資料を俺に渡してくれた。

いや違う、明らかにメタモンじゃねえんだよ、メタモンじゃ…。でもこれを否定するとイカれた男だと思われるので、素直に受け取った。

多分、というか絶対に読まないけど。

そして何の实りもないまま、とりあえず何冊かの本を借りた後、さして昼飯を買いに行こうかと図書館を出て近くの弁当屋によるうとした俺の足を、突然の同僚（したつぱ。だがまあ当然ながら俺より上の地位ね、俺はしたつぱの中でも下だから）の連絡が止めた。イヤホンから流れる昨日同僚になった奴の声が、俺の耳に一字一句こぼさず入ってくる。

『サイカ、今すぐ戻って来い！』

そんな焦ったとも怒っているともとれる声色とともに。

休憩中だろうが何だろうが、仕事が終わるまでは付けているということでも付けてある耳のイヤホン。もしも時はポケギアではなく、このイヤホンから連絡が入る。

そのイヤホンから俺に直接指名ということは余程のことがあった場合だ。基本的にはポケギアに連絡だし。ただポケギアは絶対に出られるという保障がないから、大事なときにはイヤホンでっていうのが俺らの組織のやり方。

つまりどうということ？ ……そういうことだよ！

図書館で散々涼んで、まだ外に出て時間もたっていないので暑くない（むしろ肌寒いくらいだった）体が突然冷や汗をかきだす、そして連絡前まであんなにすいていた腹も空腹なんて訴えなくなつた。

そう、つまりこれ、コレは…

バレた？ ……もしかしなくてもサボリばれてるよな？ ……これ…。



## 第17話 青年と図書館（後書き）

ここから物語がやっと動き出す気がします。

しかし30話までくらいには完結できる、そう思って書いていたのですが物凄く伸びそうです。30話までには終われない。

今回から続々と新キャラ登場予定です。おそらく次回も新キャラ登場。  
場。

ごっちゃんごっちゃんにならないように頑張ります。

## 第18話 悪党と幸福の鳥

私が子供だった頃。

私の隣には一匹のポケモンがいた、雪のように白い体毛だったから私は「ゆき」と呼んでいた。

いつ出会ったのか忘れてしまったけれど、私が覚えている一番古い記憶の中でゆきは既に存在していて、渡しの傍にいた。

本当の名は知らなかった、いつの間にか傍にいたポケモンだったから。

でも知らなくとも構わなかった。

私にとってそのポケモンで「ゆき」で「ゆき」以外の何者でもなかったのだから。

たとえゆきの種族名が分かってても、私はゆきをゆきと呼ぶのだから関係もなかった。

「ゆき、行きましょう!」

私がそういえば、ゆきは嬉しそうに鳴いて私の後をついてきた。

白くて綺麗な翼を羽ばたかせながら。

晴れの日も雨の日も、ゆきのようなまっしろい雪が降る日も。

雪の日は外に出ると真っ白な空間になってしまって、同じく白いゆきはその色に隠れるような形になってしまう。

けれどゆきのおなかにある青と赤の三角みたいな模様のおかげですぐにゆきがどこにいるか分かったし、ゆきの頭はつんつんと髪の毛

みたいに少し細長く三つに分かれていて、そのうちの二つはおなかと一緒に青と赤の色をしていたから完璧にまぎれることもなかった。だから雪の日だって私は当たり前のようにゆきを連れた。

ただゆきは寒いことが苦手だったみたいだから、いつものように一日中外で遊ぶわけではなかったけれど。

でも晴れた日にはゆきの背に乗って空と一緒に散歩したり、雨の日には二人でひとつの傘を使いながら長靴をはいて普段と景色が変わるお散歩を楽しんだ。

そう、私とゆきはどんな天気の日も一緒にいた。

私にとってゆきは誰よりも親しい友人だった。

一応私がトレーナーとして捕まえたけれど、モンスターボールに閉じ込めてしまるのが嫌で、よっぽどの理由がなければいつも連れ歩いていた。

もともとゆきをゲットしたのはボールに閉じ込めたいからではなくて、私の一番親しい友達を他の人に盗られることが嫌だっただけなもの。

いつだってゆきと一緒に。だから私とゆきはご近所さんからも二人で一人って扱いになった。

でもそんなふうになって私がいくら他の人たちにゆきのことを話しても、誰もゆきがどんなポケモンかを知らなかった。

それが私の少しの自慢でもあった。

珍しいポケモンを持っている、誰も見たことのないポケモンを持っている。

それが子供の心を満たすなんて、よくある話。そして私もそんなよくある話のよくいる子供の一人。

でもきつと、ゆきが珍しいポケモンじゃなくても私はゆきが大好きだったと思う。

大好きで、自慢のポケモンなんだと心から思っていたのだ、そう確信できる。

それから時は過ぎ、私が子供から少女になった頃。

私は小さな恋をした。それは私の住む町に引越してきた、かっこいい男の子。

つんつんと尖っていて触ると痛そうな髪の毛も、少したれ目で、でもバトルの時にはキツとつりあがる目も、私よりちよつとだけ低い声も。

どれもこれもが大好きで、私はゆきにいつのその男の子の話ばかりをしていた。

その男の子が今日何をしていたか、どんな風に笑ったのか、どんなに素敵だったのか。

ゆきは誰よりも親しい友人であったから、何も隠す必要なんてなかった。

そしてゆきはいつだって、私を応援してくれた。

バレンタインデーで頑張って作ったチョコを渡しそこなつて落ち込

んだ日も。

その男の子が私じゃなくて違う女の子が好きなんだと噂になって泣いた日も。

私が初めての恋に破れて泣いた日も。

いつだってゆきは私の傍にいてくれた。そして私もいつだってゆきの傍にいた。

ゆきが大好きだった、ずっと一緒だって思ってた。ずっとずっと、私が死ぬまで。

そしてさらに時は流れて、私が少女から女になった頃。

ゆきは、

昔のことを思い出していた。あの優しい日々たちを。

思わず感傷に浸ってしまいそうになりそうだったところを、首を振って気持ちを入れ替えることで阻止する。

これから仕事なのに、こんな気分でしたら成功するものも成功出来なくなってしまう。

意識を昔から過去に戻して、楽々と私を乗せて空中で一点を見つめ止まっているフライゴンにそっと目を向ける。

いつでも行動に移せるよう集中をきらしていないフライゴンは、私よりよっぽどよく出来た子だと思う。

それに比べて、私は駄目だ。トレーナーなのに、こんなに集中力をなくしてしまっているなんて。

ふうつと呆れにも似たため息をついて、それからゆったりとフライゴンに声をかけた。

「いけるわよね、私たちなら」

私の声にくくりと頷いたフライゴンの緑色の背をそっと撫でて、それから私は空中からフライゴンの視線の先でもある、草むらで楽しそうにじゃれているポケモンの群れを確認する。

数はざっと50前後、何事もなければ捕獲用に支給されたボールで充分に足りる数。

腰にあるポーチに手を伸ばせば、確かにそこにはボールが存在する。ボールの種類はハイパーボール、特殊な能力こそないものの頑丈に出来ていてモンスターボールよりずっと信頼できるボールだ。

ただしその分値段はかかる、それがこのポケモンの群れを全て捕まえられるほど支給されたのだ。

つまりそれだけ私が信頼されているということ。

だから失敗は許されない、ここで失敗したら上から何を言われる分らないし、誰よりも私のプライドが許してくれない。

だから、いつだって全力で、

「……さあ、いくわよ！」

私を乗せているフライゴンに指令を送り、空から草むらに突っ込んでいく。

突っ込む瞬間に砂嵐を巻き起こせば突然の天候の変化に野生のポケモン達は慌てだす。

そして群れを崩し、ポケモン達は我先に逃げようと四方八方を走り出す。だけどこれくらいなら読んでいた。

「フライゴン、砂地獄！」

その言葉にフライゴンが地面を揺らし、翼を大きく羽ばたかせて草むら全体に大きな砂地獄を作り出す。

飛行タイプや浮遊の特性を持っていない野性のポケモン達は突然現れた砂地獄に足をとらわれ、全員が見事に砂地獄へと嵌っていく。

ここまでくればもうこちらのものだ、あとはある程度ダメージを与えて捕獲するだけ。

フライゴン、と声をかければ分かっているというように声をあげ、仕上げをするために私を乗せたまま砂地獄の中に突っ込んでいった。そしてそこからは、私たちの独擅場。

思ったより早く終わった。

野生のポケモン全てを捕獲し、なおかつハイパーボールを1つの壊さなかったことに満足しながら私は組織本部の廊下を歩いていた。報告はすでに終わり、あとは帰るだけという段階になっている。

腕時計で時間を確認すれば昼食から少し過ぎた時間だ。

今日はこのまま帰って眠ってしまうのもいい、最近の仕事続きで口々に眠れなかったから。

そんなことを考えながら歩いていると、少し先の廊下の壁に寄りかかっていた男が「おつかれ」と片手をあげて私に話しかけてきた。それに対して何の反応もせずに見向きをすれば、男は特に怒るでもなく更に話しかけてきた。

「相変わらず、ミスしない女だなお前」

「お褒めにあずかり光荣だわ」

「ボス直属の部下が相変わらずお前のこと褒めてた、さすがは幹部の紅一点ってな」

「あらそう」

別にそんなことを褒められたって嬉しくもなるともない。

いつも直接捕獲成功したものをボス直属の部下に渡すことになっているから、本来ならばよく知る上司のお褒めの言葉として喜ぶべきものだろうけれど。



まったく嬉しいという気持ちがないのだから仕方が無い。

そんな私の考えに気づいたのか、男は「まあお前にとってはどうでもいいことか」と簡単にこの話題を斬り捨てた。

分かっているならば最初から話さなければいいというのに。

そう思いながら壁によりかかって話しかけてくる男：イチカを見た男だとしても長身に入る部類の身長に目つきが悪いせいで睨んでいるようにも見える目。

だけど顔立ちは人並み以上……というのが周りの評判だ。

正直私にはどうでもいい話なのだけれど、どうしてかこういう話によく耳に入ってくる。

それがイチカだろうが他の誰だろうが、とにかく関係なく。

悪の組織に所属していても、女の人たちが話す話題はそう変わりない。そういうことなんだろう。

私としては容姿には興味はない。

強いてあげるならばイチカは燃えるような赤い髪をしていて、それは悪の組織の一員としては目立ちすぎるのではないかというくらい黒にすべきだとは思っけれど、それは彼には今まで一度も言ったことがない。

だってわざわざ言っただけあげるほどの仲でもないし、私は親切な人間じゃないもの。

「でもなあ、ボスの直属の部下はそう言うし組織の一員としてはすげーいいことだと思っけど。…俺個人としては一度お前がミスしたところも見てみたいね」

「ありえないわね」

馬鹿みたい。ありもしないことを望んで。

イチカの期待のこもった声も目もバツサリと斬り捨てて、私は彼の横を通り過ぎる。

失敗なんて、許さない。私のプライドと人生にかけて、だって失敗こそが私の最大の汚点になるのだから。

そのままもう話すことは無いと私は思ったのだけれど、イチカは壁から離れて私の横に並び、にこにことおもしろそうに歩幅をあわせてついでくる。

何がおもしろいんだか私には分からない。

こんな男の傍になんていたくないからととどこかに消えてほしいのだけれど。

話すことさえない。

「あーあ、相変わらず冷たくて凍えちゃいそう。さすが氷のお姫様」  
「やめて、その呼び方。悪の組織の一員のくせに姫だなんて、笑わせるわ」

「でも本当のことだし？ マシロちゃん、美人だから」

「お世辞をどうも」

にこにこ軟派な態度で私に接してくるイチカを睨みつけ、私は先へ急ぐため歩みを早くする。

自分の顔が人並みだということは毎日嫌でも鏡を見るのだから知っているし、お姫様って顔も性格もしてないことは自分が一番分かっている。それに何より

「名前で呼ばないで、気持ちが変わるもの」

恋人でも家族でも友人でもない男に「マシロちゃん」なんて呼ばれて鳥肌がたった腕をさすりながら、私はそう言った。

それを聞いたイチカは怒るでもなく悲しむでもなく、やはりおもしろそうに笑ったまま。

そうしてそのまま満足そうに、口を開いた。

「そんな不機嫌なマシロちゃんに、俺から重大ニュースを教えてあげよっか」

……気持ち悪い。嫌いよこんな男。

イチカから聞かされたのは、なんてことはない、一週間後にある計画に部下を一人つれていくというものだった。

普段部下を連れて行動しない私にはあまり歓迎出来ないことではあるけれど、重大というほどでもない。

私が部下一人も扱えない女とも思っているのかしら。

「ま、あんまり部下をいじめちゃだめだよ」

そんなことを言い捨ててとっとと退散するように私から離れていったイチカを思い出しつつ、私はこれから共に仕事をする事になる部下を迎えに廊下をひたすら歩く。

本来なら家に帰って寝る予定だったというのに。何も任務明けにいきなりこんなことをさせなくたっていいはずだわ。

決して口には出さないことを心の中で唱えつつも、私の足は休むことなく先へと進む。

本来ならば部下が上司である私の元へ来るのが当たり前だけれど、どうも今回は部下の方へ連絡が上手く行き届かなかっただけ、私がその部下を迎えに行く形になってしまったらしい。

面倒なことね、まったく。

目的の部屋の前についた私はノックも無しにその部屋のドアを開ける。

その部屋はしたっぱ専用とも呼べる部屋で、開ければ途端に無数の視線がこちらを向くけれど、私が服の胸ポケットにつけているバッジに気づいたのかすぐに頭を下げる。

私のつけているこのバッジは、組織で幹部の地位にいることを表すものだ。

組織の本社にいるときにしかつけていないけれど、この本社の中でバッジをしないとしないでは対応がまるで違う。

バッジがなければ女だと舐められるけれど、バッジがあれば簡単に尊敬の眼差しを集められる。

なんて便利な道具。…私にはこんなもの、どうだっというものだけだ。

「サイカ、という人物はいる？」

私がそう聞けば、したっぱの一人の男が慌てて「サイカ、幹部の人が！」と部屋の隅で椅子に座り本を読んでいた男に声をかけ肩をたたいた。どうやらその男がサイカと呼ばれる人物らしい。

本に没頭しているあまり私が部屋に入ってきたことに気づいてないのか、一度もこちらに顔をあげなかったけれど、同僚である人間の言葉にやっと反応し本を閉じた。

そして私と計画を共にする男。使えるしたっぱならばいいんだけど。この様子じゃ無理かもしれない、と軽い失望のようなものを覚える。

同僚に呼ばれた男：サイカは何事だというような視線を肩を叩いた同僚に向け何かを話した後、同僚に言われるがままちらりとドアの前にいる私の方を見た。

そのことによつて、サイカと呼ばれる人物の顔がはっきりと見える。

ところどころ跳ねているのが特徴的な黒髪、男にしてはやや大きめの瞳、やる気のなさそうな猫背。

座っていて尚且つ猫背だから詳しくは分からないけれど、おそらくは平均の男よりはやや高くくらいの身長。

本を読んでいる姿は似合わない、アウトドア系に見える。

第一印象は、そんなようなもの。

そんな観察めいたことを私がしているとは思ってもいないであろうサイカは、不思議そうに同僚と私を見比べた後、眉をよせて

「……………はあ？」

とだけ言葉を発した。

ああ使えないかもしれない、それが私の男に対する第一印象だった。

時の流れは無常だと気づいたのが、少女の時代が終わりを迎え始めた頃。

それはずっとずっと時が流れて、私が少女から女になり始めた頃。ゆきは突然町にやってきた得体の知れない男たちに連れ去られてしまった。

どんなに抵抗してもゆきを助け出せなくて。今考えると自分の身も危なかったのだろう、けれどそんなことを考えられないくらい私はゆきを助け出すのに必死だった。私が無事だったのは、まだ女になりきれていなかったからに他ならない。

そして町を逃げるように出て行った男たちが、所謂「悪の組織に加担する人間」だと知ったのはすぐあとのこと。

そしてその人間たちはゆき…と私が呼んでいた、種族名で言えばトゲキツスと呼ばれていたらしいポケモンを捕まえるためにこの町にきたんだということも。

そのことを知った私は、一生出ることのないと思っていた町を捨ててゆきを取り戻すために旅に出ることを決めた。

だって私がいけないんだ、私がゆきを見せびらかしたりしたから。もっと大切にすればよかった、ずっと一緒に家において、他の人たちから存在を知られないようにすればよかった。

だから私が、誰でもないゆきの一番の友達であり今回の事件の原因となってしまうた私がゆきを助けるの。

そう心に決めて、家族や友人、近所の人たちの制止を振り切ってただゆきを取り戻すための旅を始めた。

幸いなことにも私はゆきの他に友人と呼べるポケモンを何匹か持っていて、その子たちと一緒にならば初めてで右も左も分からないような旅でもなんとかなった。

けれどゆきを取り戻すと決めて旅に出ても、そう簡単にゆきにも「悪の組織」と呼ばれている連中にも会えなくて。

その時私はようやく自分の甘さを知ったんだ。探せばすぐに見つかるわけ無いのに、心のどこかですぐに見つかるって思ってた。

いや違う、見つからないだなんてそんなこと考えたくなかったんだ。

どこを目指すのかも分からなくて、途方にくれて、それでも諦めきれずに様々な地方を旅を続けていた私はある日偶然……いいえ、偶

然じやない、運命的にこの地方にあるとある組織の一員として働く機会を得た。

その組織はジヨウトヤカントー、ホウエンといった地方で今はなくなった大きな組織に入っていた一員の人間も混じっていて、たとえここにゆきがなくなるとも、これ以上ないくらい情報集めにはもってこいの場所だった。

そう、これは紛れも無いチャンスだった。

だつてもしかしたらここにゆきがいるのかもしれない！  
たとえいなくても、ここから芋づる式に他の組織の情報を手に入ればいずれはゆきの元へと辿り着けるかもしれない！

そう思った私は情報を手に入れるためだけに悪の組織の一員となり、仕事をし、順調に地位を上げていった。

地位を上げていけば上げる旅、ゆきに近づけるような気がして。

それなのに、私はいつたいどこで間違つてしまったたというのだろう。  
ねえ、ゆき、

気づいたら私の憎しみは、悪の組織だけではなく幸せそうにしているポケモンと人間を見ても膨らむようになってしまった。

私とゆきは離れ離れになってこんなに苦しいのに、それなのにどうして貴方たちはって思つてしまう。

その幸せを崩したくなってしまう。

最初はゆきのために嫌々やっていた仕事なのに、今は罪悪感なんて



欠片も感じないの。

私と同じようなめにあえばいいって、そう思ってしまうの。だって私がこんなに苦しんでいるのに、他の皆が幸せなんて、そんなの許せない。許しちゃいけない。

私とゆきにだって、共にいる権利はあつたはずなのに。

それなのにあんなに簡単に引き離されて。そんなこと誰にもする権利はなかったはずなのに。

もうゆきに会う資格なんて私にはないのかもしれない。

それでも私はゆきに会いたい、そして誰かの幸せを壊したい。だから私は悪の組織の幹部として仕事をする。

私が仕事をする理由なんて、そのふたつ以外に存在なんてしない。

そうして時は可笑しな方向に進んで、私は女になりきれなかった少女から、ただの悪党になつたんだ。

## 第18話 悪党と幸福の鳥（後書き）

青年とくが一番最初についていない場合は他の人、あるいはポケモンが視点の話となります。

なので今回もサイカではない人が視点の話。

マシロの視点が過去や現在におもしろいように変わるんですが、空白部分を多めにとるだけじゃ分かりにくい気がします。

なので他にいい方法に気づいたらそちらに修正する予定です。

そしてやっとこさ組織の人間が登場です。しかしサイカとイチカ、名前かぶっちゃっかな…。

## 第19話 青年と幹部

俺、この仕事クビになったらリク君の旅についていくんだ…。

そう遠い目をしながら思い、俺は仕事場へとドンカラスの足に捕まりながら上司（という名のしたっぱ）から言われるクビ宣告にそなえ心を落ち着かせていた。

アクアにも誘われたし、ついていったって、いいよね？

しかし俺もついに無職か。いや逆に考えろ、悪の組織から俺は足を洗えるんだと！

……アパートの修理代とかマジどうすんのこれ。借金だけには手を出さないで今まで生きてきたんだけどもうそういうこと言ったられないよね？

明らかに請求されるよね？ アパート代。どうしよう、俺貯金なんて持ってないから借りないと…。

あれ、でも俺無職になるのに銀行から金を借りられるわけ…

え、あ、ヤミ金がある？ というかヤミ金しかない？ そういうこと？ もう俺の人生ズタボロじゃん。

未来に希望のきの字も見えない。さようならデルビル。

お前のために頑張った俺がここで散るといふ悲しい結末に涙してくれ。あああデルビル欲しかった！

仕事をサボるんじゃないかった、あんなに堂々としながらサボって図書館に行くんじゃないかった。

警固はちゃんとやったけどこの二日間、見回りなんてしてないもんなあ。

なんて悔やんでも遅いことを今更後悔しつつ、俺の何かを感じたらしいドンカラスはいつもより急いで仕事場まで俺を足に捕まらせて空を飛んでくれた。

ありがとうドンカラス、でも仕事場に着きたくなかったんだ。

ドンカラスをボールに戻して、そのまま顔を上げれば見える悪の組織本社という仕事場を見て回れ右をしたくなった。

せっかくドンカラスが空を飛んでここまで運んでくれたけど、正直またドンカラスの足に捕まってUターンしたい。是非に。

だって待っているのは死刑宣告以外の何物でもないから。

クビ宣告以外の何物でもないから。何度クビ宣告されても嫌なんだよ。

いや過去に何度もクビ宣告されているから余計に嫌なんだ。

でも、ここで逃げて脱走者扱いされても困る。

何故ならばちゃんとクビなり自主退社なり正規の方法で悪の組織を辞めないと、裏切ったただ警察側に寝返っただとか言われかねないからだ。なんてシビア。

しかも言われるだけならばまだしも、危険な存在として排除するかそついうものになったら、それこそたまったもんじゃない。死ぬ。

くそ、給料少なくてにこついうところはキツチリしてやがって！

まあ悪の組織なんだからこれくらいしなないといけないんだろうけどさあ。

命の心配に比べたら無職ニートになるくらいお安い御用だろってか！？

就活しろってか!?

まあクビになったら問答無用ですけどな、就活。

お金がなかったら生きていけないもん。

そうだったら純粹正義なトレーナーとしてリク君の旅についていきながら就活していい仕事先、みつけるんだ。……みつかれば、いいなあ……!

ちなみにみつかるまではきつとリク君たちの世話になるんだぜ、俺。10歳の子供に面倒をもらおう大人おれ、ああなんて駄目な大人なんだよ俺……!

しかしそこまでしてもらっても、果たして俺にいい就職先なんて見つかるのだろうか。

今までの俺の人生を振り返ると限りなく無理に近いような気がする。いや気がするだけだ、可能性はある!諦めるな!

諦めたらそこでバトル終了じゃないか!

「新しい任務だそうだ、サイカ!」

そんな絶望中で瀕死状態の俺を救ったのが、したっぱに充てられている部屋のドアを開けて重い空気をかもしだしながら(俺はクビですか、クビなんですか)部屋に入った俺に、したっぱ上司が顔を輝かせて(以後したっぱリーダーと呼ばせていただこう、したっぱ上司って言うのはなんかおかしいな。普段は先輩って呼んでるけど本社にいる人全員俺の先輩だし)言った一言だった。

言われた瞬間頭がフル回転しはじめる。

新しい任務。…新しい、任務だと！

任務 仕事 つまり悪の組織のしたっぱのまま クビじゃない サボりばれてない！

ヤミ金いらない！無職じゃない！子供に面倒をみさせる駄目な大人にならない！

およそ1秒の間にこの考えに辿り着いた俺は、安堵からか全身の力が抜けて持っていた荷物を全て床に落としてしまった。

それを見たしたっぱリーダーが「ここに来て初任務だからな。だけどそんなに緊張すんなよ！」と俺の肩を叩いてきた。

それを受け止めながら俺は笑う。やった、俺はやったぞ！  
まだ俺の運は尽きてなどいなかった！悪の組織バンザイ！

「よかったなあ、サイカ」

そう言って自分のことのように言っしたっぱリーダーに礼を言いながら、俺は知らぬ間にかいていた冷や汗を拭いて自分に当てられた椅子に座る。

よかった、本当によかった…！

ここでクビになったらデルビルにかけた時間全てが無駄になってしまおうし、何より今お金がいくらあっても足りない時期だから、本当に助かる。

あとは大家さんに給料日まで修理代を待ってもらおうということだが…これは頼み込むしかないだろう。

大丈夫、運は全て俺に向いている！

そして、あの時なんであんなに慌てていたともとれる様子で俺に連絡してきたのかというのは、新しい任務に俺が加わることが突如決まって色々慌しい状態になってしまったから、なんだそうだ。

休憩時間に俺が本部を離れているのを知って慌てたしっぱリーダーの動揺が声に伝わってしまったらしい。

なんだそうなのか。まぎらわしいですリーダー、いや俺にやましいことがあつたせいなんだけど。

しかし急遽決まったその任務は、他のしっぱは参加できない、かなり重要なものだとか。

「…大げさに言ってる？」と聞いたら「馬鹿、マジでだよマジで！」としたっばリーダーが言ったのでどうやら重要なのは本当のようだというかリーダーがやけにフレンドリーだなあ。テンションが俺に似てる気がする。

……で、なんでその任務に俺？

したっばリーダーなら分かるのに、どうしてここにやってきたばかりの俺が？

今までそんなにこの組織にも貢献していない俺がどうして。

ビックリするくらい最低限のことしかしてないよね俺、だから出世してないんだし。

意味がひとつも分からない。まったくもって意味不明。

俺の参加は何かの間違いだっただ、という方がまだ分かる。

だって、ねえ？ 何で俺がそんな重要な任務につくの？ 他の人に回すべきじゃないかと思うんだが。俺以外も絶対思ってるって。

だってリーダー以外のしたっばが俺に向ける目線、凄い厳しいもん。

わずか二日でこんなギスギスした現場になるだなんて…。

まあデルビルまでの辛抱と思えば、耐えられるか。……あ、そっか、デルビルもらったら俺はもう無職なんだ。

デルビルを無事もらった後、退職して給料もらってリク君の旅についていこうかな、やっぱり。

俺が悪の組織の一員だとバレなかったら、の話になっちゃうけど。

ちなみに、したっばリーダーに俺に回ってきたという任務は一体どんな任務なのかと聞いたが、したっばリーダー本人も任務の内容はまだ知らず、しかも急遽俺の参入が決まったため上の方も対応やらなんやらがあるらしく、俺はこのしたっばルームで迎えが来るまでまっぴらにいらしい。

説明も後々しつかり他の人（おそらく結構地位が上の人）がしてくれるそうだ。

そんな偉い人ばかりの中でしたっばは俺一人か…。なんだろう、胃が痛くなりそう。

それにしてもわざわざ迎えが来るとは、したっばなのに凄い待遇である。

あとで上司からのイジメが待ち受けていそうだ。「お前なにしたっ



ばの癖にいきがつてんだよ！」みたいな。ドラマの見すぎか？

しかし本当に何故俺にそんなヤバそうな任務が…考えても考えても理解できない。

いや、考えても分からないということとは分かったか。でもそれ意味無いじゃん。

とりあえず迎えがくるまでの時間は部屋にいれば何をしてもいいそうなので、俺は安堵のために一気に重くなった瞼をこすりながら先ほど図書館から借りてきた本を読むことに決めた。

この状態でも眠れそうとか、俺、もしかすると神経が相当図太いのかも知れない。

さつきから色んな人たちの負の感情の目線がくるけど、昨日の徹夜の眠気には負けるっていうね。

俺、こんな人間じゃないと思ってたのに。

悪の組織に入っている間にちょっと性格がおかしな方に曲がったかもしれない。

しかし暇つぶしに本とはもってこいだ。今日図書館行ってよかった、仕事の後に行こうとか思わないでよかった。

ただもしかしたらポケモンセンターに行くの遅れるかもなあ…後でポケセンの方に連絡を入れておかなければ。これも昼間行っておけばよかった。

そうだ、行っておけばあの扇風機（偽）について何か分かったかもしれないじゃん！

そこまで頭回らないとか馬鹿すぎる俺。ああいや違う、だから俺は寝不足だから頭の回転が遅いだけで、今日はたまたまなんだ。たま

たま頭が回らない日なだけなんだ…！

しかししたっぱの中でもかなり地位が低い奴なのに、迎えを待ちながら本を読むなんていささか優雅すぎるか？

でも今は呼び出しがなければ休憩時間でもあるし、本を読むくらいなら許されるだろ。

あ、

「先輩、ちなみにいつ頃迎えの人がくるって行ってみましたか？」

「悪いけど分からないんだそうだ。早ければ10分くらいでこれるが、遅ければ2時間3時間まちだよ」

「……そう、ですか」

マジ本借りてきてよかった。

そんな何時間も椅子に座ってじっと迎え待ってるなんて、俺には出来ない。

昔から落ち着きの無い子って言われてたし。つまりアウトドアなわけだし。

しかし3時間は待つかもしれないのか…昼飯を買ってくればよかったな。こんなことなら。

でももう食べられないだろうし、買いにもいけないので（先輩をパシるのはマズすぎるだろうし）空腹はなるべく無視するようにしつつ、俺はまずゴーストタイプのが書かれてある本を開いた。

知りたいのはあの扇風機（偽）の情報だ。

それ以外は今の俺には必要が無い。

ヌケニン関連のことや裏世界という場所に住むのではないかと呼ばれているギラティナに関することを読みとばしつつ俺は扇風機（偽）について書かれてるページはないかとひたすら手を動かす。

ただヌケニンとギラティナのことは気になるので後で読み直そう、今度はじっくりと。

だってギラティナといえばあの伝説とも呼ばれているポケモンだしな。一度シンオウで目撃情報があっただけで、その後は何の情報も入ってきていない。

ついこの間まで誰も目撃することの出来なかった、ゴーストタイプを専門に扱うトレーナーならば涎もののポケモン。

いいなあ出会った奴。俺も会ってみたかったよギラティナに。

でも伝説なんて呼ばれるくらい目撃情報が低いポケモンに会える気なんてしない、野生の色違いのポケモンに一度も遭遇したことのない俺が言うんだから説得力はかなりあるだろう。

まったく自慢にもならない悲しい話だが。

いやでもほら、伝説のポケモンに会える人だなんて一握りなんだからさ、俺みたいな人間なんていくらでもいるよ。

俺はむしろ一般人、特に希少価値の高いポケモンなんてもってないけど、そんなの一般人だから当たり前だ！

ドラゴンタイプとかそんな希少価値の高いポケモン、テレビの中だけ見たことねえよ！！

……話がずれた。

違う違う、今はギラティナのことでもヌケニンのことではなく、あ

の扇風機（偽）のことだ。

ゴーストタイプということは間違いないと思うんだけど……うーん、  
だけどゴーストとかそういう一般的なポケモンとは違うんだよなあ。  
そういうのならすぐ分かるし。

仮にそいつらが物に取り憑いてるってんなら話は別だけど、その場  
合憑くものごと（この場合扇風機）ボールの中に入ってゲットされ  
る、なんてことは出来ないだろうし。

モンスターボールの構造は良く知らないが、あれはポケモンの持つ  
特殊なものを利用して成り立っているってことを前に聞いたよう  
な気がする。

ポケモンをデータ化することで……とかなんとかかんとか。  
だから自分でデータ化できない扇風機がボールに入れるワケがない  
んだよなあ。

だからそういう一般的なポケモンじゃない、つまりは俺の知らない  
ポケモンについて調べればいい。

だが一通り読み終わっても、俺が知らないゴーストポケモンについ  
ては一言も書かれてはいなかった。  
と、なるとなあ……他の方法で調べるか。

扇風機に見えるという外見的特徴をいかして、まずはジユペツタ  
みたいに人形に見えるポケモンなど、一般人が一目みただけではた  
だのどこにでもある物などに間違えてしまいそうなポケモンについ  
てまとめられているページを開く。

見た目は明らかに扇風機だから、ここに書かれているのが相応しいよな。

読む進めていけば、まず代表的なポケモンがジユペッタについて書かれているページになる。

まああいつは人形に怨念が集まってポケモンになったんじゃないか、なんていわれてるから先頭にきてもおかしくないよなあ。

ジユペッタを知らずにゴミ捨て場にあった人形を拾ってきたらそれが…って話を聞いたことがあるくらいだし。

ジユペッタのページを軽く読み飛ばしつつ進めていけば、次に紹介されていたのが吹雪の日の雪山で会うと着物を着た女性…所謂雪女に見えるといわれている（実際は知らないが）ユキメノコ、さらに風船に見てるフワンテ、身を隠した状態だとただの石に見えるミカルゲ、そして……

「……………」

ロトム、と書かれた文字に俺の目は止まった。

はて、ロトム？

脳裏でロトムの姿をイメージしてみたが、ロトムと何かが似ているとは思えない。

一体何と勘違いするんだ、とロトムに関しての項目を読もうかと思っただが、ロトムについては現在調査中ということで詳しいことは何も書いてなかった。

調査中もなにも、ロトム以外の何物にも見えないっちゅうねん。それくらい俺でもわかる。

あれに似ている道具なんてなあ…なんだろう、何かあるか？…俺

がイメージ不足なだけか？

いやいやでも、ロトムが他の何かに似ているだなんてそんな話、聞いたこと無いぞ。

まあどつちにしてもこれはあの扇風機（偽）には何も関係ないだろうからいいけど。

ロトムだったら外見を知っているから分かるし。

まあ電磁波使ってきたし電気タイプって可能性が無いわけじゃないけど、あいつは飛行タイプっぽい技も使ってきたし、第一ゴーストタイプでも10万ボルトを使えるゲンガーや鬼火を使えるムウマがいるんだから、電磁波ってだけで電気タイプと決め付けるのはよくない。

個人的に凄い好きなタイプの組み合わせで、そうだったら凄い嬉しいけど。

ロトムも違うだろう、と更に俺はページをめくったが、ロトムが人が見間違えそうなゴーストポケモンの最終ページだったようで、次のページからはヨノワールと黄泉の国についての話になっていた。

もしかして読み飛ばしたか？ ともう一度確認してみるが、いくら読み直しても他に間違えそうなポケモンについては書かれてる文は発見できない。

ただどこの中には確実に扇風機に似たポケモンはいなかったしなあ。いるのは人形だとかそういうポケモンばかりだ。

となるとあの扇風機（偽）はゴーストタイプではないの？

いやいや、見破るが効いたんだからゴーストタイプだろ。まさか新種ってわけでもあるまい。

この地方のポケモンについては随分と前に研究つくされているのだから。

じゃあ新種じゃなくて本にも載っていないゴーストタイプって何なんだよ、と聞かれるとまったく分からないけど。

なんだろう、あいつ一体なんていうポケモンなんだろうなあ。やっぱり最終的にジョーイさん頼りになっちゃうかもしれない。

なんか扇風機（偽）についての情報が1つも得られない予感がバリバリしてる。

…願うのは、本当に暑さで頭がイカれて扇風機（本物）をボールでゲットしてしまったわけじゃないってことだ。

「…い、サイカ。おい、サイカ！」

そんなよく分からないことを考え始める俺の思考を、したっぱリーダーのやけに小声で内緒話をするような声と俺の肩を軽く叩いた手が止めた。

本から目を離してしたっぱリーダーを見れば、なにやら焦ってる感じ。なんでだ？

それに呼ぶならば普通に呼べばいいのに、したっぱリーダーは明らかに小声で話してる。

…つまり？ なにごと？

「どうしたんですか先輩」

「お前の迎えの人！」

「ああ」

そういえばそうだった。迎えの人が来るんだったよな、案外早いご到着だ。

扇風機（偽）のことを調べるのに集中しててそっちを忘れてた。なんてしたっばリーダーには死んでもいえないな。あと他の同僚のし たっばさんにも。

多分同じしたっばさんかちょっと上の地位の人とか、まあそこらへんの人が迎えに来てくれたんだろうなあ、としたっばリーダーの言葉に分かりましたと頷いてドアの方を見る。

そこにいたのは、幹部のバッジをつけた明らかに位の高い女の人でした。

……うん、俺よりずっと上の立場の人だよな。  
普通ならお近づきにもなれない人だよな。

「……………は？」

そんな人に何故迎えを頼んだ！したっばごときに何故幹部が迎えを！

フリーズしたまま俺はその幹部の女性をただ見つめていた。どうしよう、こんな凄い人に迎えに来てもらっちゃってどうしよう。これ夢？



夢じゃなかった。

誰にも見えないようにと、背中辺りに腕をまわして思いっきりつねったせいで痛む下腕を押さえながら、俺は幹部の人に言われるがまま部屋を出て「会議室」という主に作戦会議を開く所へ行くために組織本社の廊下を歩いていった。

したっばの警固役なので、たとえ昨日やってきたばかりと言っても本社のどこに何があるのかくらいは把握している。だが実際に会議室へ行ったことはない。

なんたつて会議室は重要な場所だから。

いや、会議室というより会議室があるフロア？かなり上の方にあるんだが、そこは幹部から上の人間でないと入れない場所だからしたっばが足を踏み入れるなんて許されていないのだ。

警固するのもしたっばじゃなくて、幹部の中でも下の位置にいる人たちとか。所謂悪の組織のエリートが集う場所。そんな、俺には一生縁もないだろうフロアなのに。

……やっぱり夢か？ 現実とはとても思えない。

「あー…つと、先輩、質問よろしいでしょうか？」

「なに？」

そんな俺の疑問を解消するべく、俺は少し先を歩くようにしている（つまり俺は彼女より少し後ろの位置を歩いている、ということだ。

隣を歩かないの？ とか思われるかもだけど、幹部さんの隣なんて恐れ多くて歩けないっつーの！（幹部の人に声をかける。

そうすれば無視はされないものの、鬱陶しそうに幹部の女性が俺を見るために振り返った。

…明らかに俺、歓迎されてくないか？

いやしたっばだし当然かもしれないけど。でもやりきれないっつーか。

同僚にも上司にもいい感情もたれないとか、本当に、もうね。

なんだかなあ、と思いながら俺は彼女の「なに？」を肯定と受け取って口を開いた。

「何故俺…いえ、こんな一介のしたっばを、普通では参加など到底できないであろう計画に使うこととなったのでしょうか」

「…さあ？ 私も詳しいことは聞いていないの、それも含めてこれから説明されるわ」

そう言っつて幹部の女性は口を閉ざして前を向く。あまりしゃべりたくはないようだ。

俺も幹部の機嫌を損ねるのは嬉しくない事態なので、「分かりました」と言っつて口を閉じた。

でもこの幹部が無口つてのは外見からのイメージ通りかもしれない。そう思っつて後ろから幹部の人の姿を見る。少し足のスピードを速めて首をかしげるようにすれば、彼女の横顔が少しだけ見えた。

腰まで伸びているだろうかというくらい長く白い髪と、滅多におめ

にかかれない緑色の目。

たしか雪の振る地方に住んでいる人たちがこういう感じの容姿だと聞いたことがあるが、その地方の人たちは滅多に自分の土地から離れたりしないから見たことが無い。

この人も雪国出身なのだろうか。だとしたらなんでわざわざ雪国を出て、悪の組織になんてなったんだろうか。

俺のように稼ぎで、とか？ まあ俺には関係のないことなのか。

そんな詮索をしながら、俺は無言で廊下を歩く。

お互いに話すことが無いため沈黙が痛い。仕方が無い。会議室まで我慢だ。

…いや会議室でも無口でいかなきゃ普通に駄目だよな。

再び飛んでいった眠気のかわりにやってきた居心地の悪さにテンションを下げながら、俺と幹部はひたすら会議室までの廊下を黙って歩いた。

今起こっていることが現実だと、正直なところまだ思えなかった。

## 第19話 青年と幹部（後書き）

18話のサイカ視点を含めた話。

とりあえず大きな仕事を任せられました、サイカ。何故まかされたのか（したつぱなのに大仕事）は次のお話で。

一人あたふたして一人安堵して一人驚いて一人鬱になる。そんな話です。

まったく先に進んでないなあ…。

## 第20話 青年と会議室

連れてこられた会議室の中は、凜とした空気で雑談など許さないような雰囲気だった。

円卓になっているでっかいテーブル（ピカピカしてる、絶対高級品）は汚れ1つないし、備え付けられている椅子には既に幹部や偉い人が座っており、挙句の果てにそのお偉いさんたちの視線を浴びた俺は今にも死んでしまいそうだ。  
プレッシャーがハンパない。

円卓の中心には何台もの何も映っていないテレビ（縦にも横にもでない、もうハンパない高級品っぽい）があり、どの角度からでも見えるようになっていたため、おそらく時間になったらここからボスの映像が流れるんだろうということがなんとなく予想できる。  
つまりここにはボスがこないってことか。いや俺ボスの顔見たことないから、この中にボスがいたとしても分からないんだけどさ。

しかしなんだ、ここの敵かで居心地の悪い空気は。

雑談したらすぐさま殺されそうな雰囲気は昼間行った図書館とかそういうレベルじゃねえ。はるかに越えてる。

図書館レベルで無理とか思っていた俺には、ここはもはや拒絶反応さえ起こしそう。

もう帰りたい、帰って昼寝したい。俺にはもつと賑やかな場所の方があってる。

そう思ったがここまでできて回れ右してすっぱかせば、確実にクビが

飛ぶ。

クビが飛ぶだけならまだしも、裏切り者として追われた日には全てが終わるだろう。

引きつりそうな唇をなんとかおさえて、俺は幹部に言われるがまま会議室の椅子に座った。

……高級感ただようふかふかな椅子だった、俺が座っていい代物じゃない。

もう座り心地がいいのか（心境のせいで）悪いのか分からない。神経が麻痺してきた。

内心悲鳴を上げていると、どっからか現れた人が俺の前にそっと紅茶を置いてくれる。…明らかに俺より地位のある人なのに。

したっぱが偉い人にこんなことさせるとかもう、もうね…

ああああもう、居心地超わりい帰りてええええええ……！！！！

異常に早い心臓をなんとか普通のペースに戻そうと（落ち着け俺！たとえこの場で俺だけが異常に浮いていても！）（そして俺だけがしたっぱだという事実を知っていても！）人にばれないくらいの深呼吸をして、そっと辺りをうかがう。

俺のようになんかしたっぱばい雰囲気持つてる人いないかな…なんて。

そんな淡い期待を持って周りを見渡すも、俺の期待はすぐに裏切られた。

隣に座る女の幹部さんはすでにもうオーラが違うからそれ以外の人を、と思ってもどいつもこいつも余裕っぽい感じの雰囲気だし、場慣れしてそうだし、何よりしたっぱとは思えないオーラが凄い。

しかも髪の毛とか、個性豊か。女の幹部さんみたいに真っ白な人もいれば俺のように黒い髪の人、緑やら黄色やら青やら、赤い髪の奴までいる。すげえ。

とくに赤・黄色・青の（おそらく幹部の）三人は何の因果か綺麗に並んでいて、一目見た瞬間に「信号機トリオだ」と思った。多分この3人、同じチームだと思う。

アニメとかドラマとかだったら絶対そう。信号機トリオ。

唯一、俺がリラックスして見れる存在かもしれない。頭だけは。頭からは明らかに「幹部ですオーラ」が漂ってるんでリラックスできなけれど。

しかしこの並び順……これ狙って座ってるのかな、と思っているとその3人の中の赤い髪をした男の人と目が合った。

俺を見て少しだけ驚いた顔をしたあと、ウインクされたのでおそらく引きつっているであろう笑顔で返した。余裕ありすぎです赤の人のリラックスできるとか言ってますみませんでした、そんな余裕見せられたら余計緊張します。

つーかやつぱりこの会議室で俺一人だけ浮いてるよこれ。

もう帰りたい、なんだよこれなんだよここ。俺に不向きってレベルじゃねーぞ！

俺はしたつぱが性に合ってるってのに！

緊張でカラカラになった喉を潤すためにさっき持ってきてくれた紅茶を飲めば、普段販売機やコンビニで買っているような紅茶とは比較にならない味がした。

おおっ…もう…なにからなにまで……。

『全員集まってくれたみたいだね』

ここにいるだけでイジメにあっている気分だ。

思わずそんな暗い気持ちになりかけたときに突然声が聞こえ、俺は慌てて声がした方を見る。

するとその声は中心にあるテレビから発せられた音らしく、さっきまで何も映っていなかったテレビ画面にはいつの間にか椅子に座っている一人の男の姿が浮かび上がっていた。

年は40前半か、それを少しいった辺りだろうか。

どこかの社長のような、己に対して相当な自信をもったようなふうに感じられ、椅子に座っていても背筋をピンと伸ばしている。

真っ黒な髪は若々しさを与えつつ、しかし目じりに出来始めている皺のせいかそこまで若いという印象を与えない。見るからに優しそうで、これで一人の女性をエスコートしている姿をみた日にゃ「ジエントルマン」と呼びたくなる、そんな男だ。

とてもとても、悪の組織のボスには見えないし、思えない。

『まず最初に。ここまでの組織が発展し成功してきたのは、他ならぬ君たち組織員のおかげだ。心から感謝しよう』

そしてボスとは思えぬ丁寧な言葉遣いと低姿勢。

思っていた想像上のボス（もっと偉い感じで上から目線、組織の人間？ そんなの駒のひとつさ！ てな感じの人だと思ってた）とはかけ離れている姿に、俺はただ目を丸くしてテレビ画面を見ることしか出来なかった。

ドラマの見すぎだ、俺。



『君たちのおかげで、私たち組織の当初の目的であった計画が一週間後、ついに実行されることになった。そのために君たちには集まってもらったのだよ』

ほほう、当初の目的とな？

……したっぱの関わっていい領分というか、話じゃない気がバリバリする。

もう今すぐここから逃げ出したい、悪いことをしているわけじゃないのに（いや俺は悪の組織の一員なわけだけど！）嫌な汗が背中を伝ってきた。今日汗かいてばっか。

『……D作戦の、決行だ』

D作戦、それはしたっぱにはまったくもって伝わっていない作戦である。

正直何がなんだか分かりません、と思隣りの女幹部の表情を盗み見るけれど、彼女は興味なさそうにボスを見ているだけだった。

大物である、とても俺にはこんなふうになれる気がしない。

『さて、この作戦でのそれぞれの役割分担について説明しよう。詳しいことは後で私直属の部下たちが直接君たちの元へ説明しに行くから、ここでは大まかなことだけを分かってくれればそれでいい。早急に内容を知りたいようならば、この会議の後直接聞きに行つて

も構わないよ』

そうボスは言うにつこりと笑って（笑う姿は善人だ、これで悪の組織のボスだなんて人間は本当に怖いと思わせる）この会議室にいる幹部たちに役割を与える。

その役割というのは基本二人一組らしく、呼ばれる人間は大抵二人一緒だ。

どんどん知らない名前が呼ばれていく中、俺はいつ自分の名前が呼ばれても言いように気分を落ち着かせようと、ひらすら人にはれない程度の深呼吸を繰り返す。

あと、俺のパートナーは多分、俺をここまで連れてきてくれて現任となりに座っている女幹部さんなんだろうな。…いまから胃が痛くなりそうだ。

『イチカ君』

「イエス、ボス！」

思わず腹を手でおさえながら周りを見てみると、どうやら先ほど目の合った赤い髪の男が名前を呼ばれたらしい。

軽い感じに応答しながらボスの言葉に立ち上がって、俺にした時と同じようにウインクをする。

それを咎められない辺り、赤髪はいつもこんな感じなんだろう。…マジかよ。

ちなみにボスが言った名前通りなら、赤髪のウインク幹部はイチカという名らしい。

ボス相手にちゃらけた態度をとれるなんて、なんという図太さを持った人間なんだ。

つーか幹部ってこんなんばっかりなのか。

そしてイチカだけしか呼ばれなかったところを見ると、どうやらあいつは単独の仕事らしい。

…信号機トリオではなかったのか。なんか残念だ。

『君には今回逃げ出した例のポケモンを追ってもらいたい。数は割けないから、単独行動になってしまいが君ならば平気だろう。そのポケモンを捕獲出来次第、D作戦のメンバーとして合流してもらいたい』

「了解ですよボス、ささつと終わらせてきますって」

『期待しているよ』

何コイツ勇者なの？

どうして自分を雇っている相手にこんなに気安い口を叩けるんだ、クビになるとか恐れたりはしないのか。

クビになったらデルビルもらえなくなっちゃうんだぞ！…あ、幹部はもっといいポケモンもらうのか。

デルビルよりいいポケモンなんてまずいなと思うけどな！

どっちにしたっていい地位についてるのにそんな風に振舞えるのは、ある意味怖いものしらずだろう。

俺だったら守りに入っってそんなこと絶対に出来ない。

『次に、マシロ君とサイカ君』

「はい」

「っ、はい！」

そんなことを考えている間にボスに名前を呼ばれて、俺は慌ててガタリと席を立つ。スマートじゃないが仕方ない、俺はしたっばだし。

そんな俺を見て赤毛：イチ力だっけ、そいつがおもしろそうに笑って自分の席に座ったけど正直全然気にならないです。もう笑いものになってもいいからこの場から早く去りたい、それだけだ。

『君たちにはDの誘導をやってもらうことになる』

Dってなんだ。

そう言いたかったが、とてもそれを言い出せる雰囲気ではない。まああとで他の人が説明しに来てくれるらしいからそれまで待とう。どうしても分からなかったら、とっつきにくそうな女幹部（この人マシロっつーのね）に聞くしかない。

『Dのいる場所についてはある程度特定できている、君たちはDをその場所から私たちが用意するD特製の捕獲場所まで誘導してきてほしいんだ』

ほほう？ Dは人間なのかポケモンなのか分からないが、とにかく捕獲第一なのか。

つかDって生き物か。それすら分からなかったぞ。

やはりしたっばはいつでも置いてけぼりだな。これならわざわざ俺をメンバーに入れなくてもよかつたんじゃないか？ なんで俺を入れたのか本当にワケわかんないぞ。

「了解しました、ボス」

「了解です、ボス」

とりあえずマシロ幹部が返事をしたのでこれで終わりなんだろうと、マシロ幹部に続くように俺も答えて椅子に座る。

……じゅ、寿命が縮まったんじゃないだろうかこれだけで……。

俺の後にも次々と幹部やお偉いさんの名前が呼ばれていく様子を見ながら、俺は安堵の息をついてバクバクとなっっている心臓を押さえる。

やっぱり俺には、こついうのは向いていないのだとつくづく思った。

そうして俺一人焦っていた、ボス直々に役割分担されるといふ会議は無事に終わり。

次々と幹部の人たちが部屋を退室していく中、俺もそれに混ざり会議室を出ながらも、やっと終わってくれたことに泣きそうになった。おそらくこの後に詳しい説明をしてくれる人がくるのだろうけれど、それまではこのつかの間の安らぎを受け止めていたい。

出来るならばこのまま何事もなかったようにしたっばの仕事をしていたい。

幹部の中に一人だけしたっばが混ざるなんて、やっぱり無理があるすぎる。

胃潰瘍になったらどうしよう、会社（まあ悪の組織だけど会社でいいだろう）が金出してくれるのだろうか。

もう出世したいとか俺は思っていないんだから、こついう仕事は他のしたっばに任せて俺はいつものようにしたっばのつまらなくてや

りがいのない仕事をしていたい。  
残念ながら、そういうわけにはいかないんだろうけど。

「お疲れさん、大変だったっしょ」  
「っ!？」

このままドンカラスの足に捕まって旅立ちたい、なんて思っている俺の肩を、突然何者かがポンと叩いて声をかけてくる。それに驚き慌てて距離をとってその人物に目を向ければ、その人は俺の突然の行為に目を丸くした後、ごめん驚かせちった？ と首をかしげてと笑った。それに合わせて赤い髪がさらりと揺れる。

「えつと……イチカ、さん」  
「おつ、俺の名前覚えてくれたんだ？ あのボスのときかな、だとしたら物覚えいいなあお前。…んで、初めての会議はどうだった？」  
「…死ぬかと思いました」  
「まあそうだろうな。俺も最初のころは死ぬほど緊張したし」

とてもそうは考えられないんだけど。  
むしろあの余裕絶好調で軽口叩いてた相手が死ぬほど緊張？ 有り得ない。  
そう思いながらも相手は幹部（かあるいはそれ以上）、口答えなど出来るものか。

「はあ」と何ともいえない、おもしろくもない答え方をした俺を、赤髪幹部はそれでもおもしろそうに見てくる。  
…なんだ？ この人。

「でもしたっばからいきなりこの任務に就いたんだろ？ それはつ

まりボスの目をひくようなものを持つてることなんだから、もつと自信もつて調子に乗つてもいいと思うけど？ 俺は」

「いえ、自分なんて…」

「そうやって低い自己評価は必要なーし、もつと自信持つて。な？」

「はあ。ありがとうございます…？」

つかなんでこの人幹部なのにこんなしたっぱの俺に話しかけてくるんだ？

しかもこんなにフレンドリーに。いやこのフレンドリーなところは性格なのかもしれないけど。

偉い人オーラはそのままなのに、フレンドリーに話しかけてくるから色々やりにくい。

まるで同僚に話しかけられているようだ。でも相手は幹部。

幹部つてやっぱり変わった奴ばかりなのだろうか、俺としてはもつと堅苦しくて融通のきかなそうな男（それもこの人よりずつと年寄りのね）を想像してただけ。

さっきのボスといい、どうも俺の想像は裏切られるな。

俺の想像力と発想力がないだけだろうか。それともやっぱりドラマの見すぎか？

……今度から省エネしようかな。テレビを余あまり見ないようにするとか。

電気代節約にもなりそうだし、今ハマってるドラマが終わったら考えてみるか。

「お前の場合、特に自分にある程度の自信もつとけつて。じゃないとパートナーはマシロだからな、潰されるぞ」

「は、はあ……」

マシ口って、たしかあの女幹部のことだ。  
潰されるのか、……え？ 潰される！？ 仲間なのに潰されると  
！？

予想もしなかった言葉にぎよつとなつて、俺はまるで軽い話をする  
ようなテンションで言うイチ力幹部に恐る恐るながらその意味を聞  
く。

「ぐ、具体的には……」

「ん？ ああ、まあなんつつか、あいつはミスしない女だからなあ。  
あいつと組むとどいつもこいつも自信をなくして辞めてくんだよ。  
これまで辞めた幹部もちらほらと」

「……………」

「それじゃなくてもあいつの言葉は辛辣<sup>しんらつ</sup>だし、愛想<sup>あいさう</sup>なんてないし、  
だから、なあ？ 悪口<sup>あくぐち</sup>みたいなのは言いたくないけど、それがあ  
いつだから。お前も気をつけるよ」

「……………はい」

「ミスしたら、罵倒地獄が待ってると思えよ」

……なんとなく、なんとなくではあるのだが……俺がこの計画のメ  
ンバー、尚且つあの人のパートナーに選ばれた理由が分かってきた。  
まだ納得していない部分は多いが、少しだけ。少しだけ……それ  
も嫌な方向に。  
ボス、俺を潰す気ですか。給料泥棒として俺に退職を促してるん  
ですか。

だが俺は辞めない！ デルビルが手に入るその日まで、意地でもかじ  
りついてやる！



「まああんまり気に負うなよ、なんかあつたら助けてやつから」

「あ、ありがとうございますイチ力幹部……」

「いいってことよ。ああ、あとそんな固苦しい呼び方なんてせずに、俺のことはイッチーでいいぜ」

「ちよっ」

幹部にイッチーとか！無理、無理だから！フレンドリーにしてもほ  
どがあるから！

何言い出すんだこの人、と俺は信じられないような目でイチ力幹部  
（絶対にイチ力幹部って呼んでやろう）を見てみると、イチ力幹部  
はそんな俺を見て「な？ な？」とニヤニヤ笑う。

分かってる、この人俺が困ってるの分かってるからかってるよ、最  
悪だ！

いじめだ！したっばいじめだ！訴えてやる！

「ほらほら遠慮せずに、幹部命令だぞ？イッチーって」

「サイカ！だつたわよね。任務の説明を受けるから一緒に来て」

そんな俺に救いの手を差し伸べたのは、先ほど潰されるかも宣告を  
されたマシロ幹部その人だった。

今はこの人が救世主に見える！ありがとう幹部！ありがとうマシロ  
幹部！

俺はマシロ幹部の言葉に大きく頷いて、素早くイチ力幹部の傍から  
離れる。フレンドリーって罪だな！

俺も気をつけよう！

「マシロちゃん、せっかく新しい部下と信頼関係を築こうとしてた  
とこなの」

「気持ち悪いから名前で呼ばないで。それに仕事の邪魔をするよう  
ならさっさとそのバッジを外してどこかへ行つて」

「…ほらな、きつついだろ」

相変わらずつれない女の子、そう言ってイチカ幹部は「またなー」と俺たちに手を振った後、背を向けて俺たちから離れていく。多分、一人で行う任務の説明を受けに行くんだろ。

それをつざつたそんな目で見た後、マシロ幹部は「行くわよ」とイチカ幹部とは反対方向に歩き出した。俺もそれについていく。

この組織、ちょっと個性的な人間が集まりすぎなんじゃないか？  
そう思っただけなら今日このごろである。

## 第20話 青年と会議室（後書き）

第20話までいきました、やっと悪の組織が動いたというところでしよつか。

サイカがあいかわらさずぎゃあぎゃああと心の中で騒いでいるのですが、まあ彼が煩いのはいつものことなので大目に見てくだされば。

## 第21話 青年とインテリ君

マシロという女幹部は、決して美人じゃなかった。

俺から見て、だから他の人から見たら違うのかもしいけど、俺の価値観で見れば彼女の容姿は人並みか少し上くらい。でもなんだろうか、凜とした雰囲気は彼女を見た目以上の美人に感じさせていた。

雰囲気美人、というやつだろうか。

白い髪は雪みたいで透明なイメージを与えるのに、彼女の鋭い目つきや「寄らば斬る！」みたいな雰囲気やらキツめの口調のせいで冷たい印象だ。

おまけにイチカ幹部の言葉を信じるならば、彼女と相棒（あるいは部下）になった人物はもれなくこの組織とサヨナラしているらしい。

つまりどういうことかというところ、俺のマシロ幹部に対する印象はいいものではなかったということだ。

美人とか美人じゃないとかはそんなに重要じゃない（まあ美人の方がいいけどな！）、それよりも問題なのは彼女と共にした人は次々とこの仕事を辞めていくということ。

まるで鎌を持った死神ならぬ雪女。俺がいい感情を持てるはずもなかった。

そんな彼女とともにD作戦の説明を受ける俺。

気分は死刑を待つ執行人、ではなくクビに怯える一社員だ。

「では、説明を始めます」

そういつて説明してくれるらしい白衣を羽織った男（青い髪に眼鏡をしていた、いかにもインテリ系が漂っているがなぜか髪は青。どうしてか青。絵の具かペンキでもぶっかけられたんじゃないかってほどの青）を前に、俺はお先真っ暗な未来に絶望しかけていた。なんか俺も先人に習いこの組織と近い内にお別れしそうである。俺の目標はデルビルをもらった後さようなら悪の組織なんだが、このマシロ幹部と一緒にいたらデルビルをもらうより前にお別れしてしまいそうだ…ああもう、早くも心が折れてきた。

「今回お二人にはD作戦のDと呼ばれるポケモン…つまりダークライの誘導をしていただきます」

そんな俺の様子など気づくはずもなく、説明係もといインテリ君が話し始める。

だがそれは俺のマイナス思考を止めるには十分な内容だった。…あまりにも夢物語のすぎで。

「……ダーク、ライ？」

思わず口に出してしまい慌てて閉じてマシロ幹部を見れば、幹部も知らなかったようで怪訝そうな顔でインテリ君を見ていた。よかった知らないのはしたっぱの俺だけじゃない。

そう思つてインテリ君の方に視線を戻せば、インテリ君は俺たちの反応を予想していたのかなんの反応もせず続きを話し始める。

「はい、ダークライです。そのご様子だと…ご存知のようですね。」

目撃情報はほぼ無し、またその情報はどれも正確ではなく、存在自体が危ぶまれていた『伝説』と呼ばれるポケモンの一体。そのダークライの捕獲こそが、我々の長年の望みなのです」

「…はあ」

そんなことを言われても。いや、悪タイプ好きの俺ですからダークライのことは知ってる。

だがあくまでそれは噂程度のもの、よくてちょこつとだけ本に書かれてあるものを読んだことがあるだけだ。

正直確実に存在しているポケモンかと聞かれても領けない。

他の伝説のポケモンと比べて目撃情報なんてサツパリだからな。まだファイヤーとかフリーザー、サンダーなんていう伝説のポケモンの方が目撃人数はずっと多い。

そんなポケモンの捕獲と言われても、正直実感がわかない。

まるで夢物語を聞かされているみたいだし、宝探しに出ようといわれているみたいだ。

「まあ、何も知らなければその反応でしょう。いきなり伝説と呼ばれるポケモンの捕獲…などと聞かれても頭がついていかないでしょうし」

「でもボスは長年の夢とっていたのだから、前々からチャンスは窺っていたのでしょうか？」

「それはもちろん。ボスはダークライ探しに余念がありませんでしたよ」

ほほう、悪タイプのポケモンを追うとは、ボスの趣味はいいな。うん。

俺はそう思っているんだが、マシロ幹部はといえばどうも納得がい

かないというように顔をしかめた。  
まあこればかりはしょうがないよな、なんかパッとこないという  
か、悪の組織がやることじゃないような気がするし。

しかしマシロ幹部、雰囲気が悪気なので機嫌悪そうに顔をしかめ  
るととても心臓が悪い。

今にも攻撃をしかけられそうな気さえしてくる。  
早くいつもの冷たそうな表情に戻ってくれないか、その方がまだ心  
臓にくるダメージが少ないんで。

「……そのダークライがこの組織になんの利益をもたらすっていう  
の」

「ダークライのみが使えるダークホール、そして眠らせたものを悪  
夢へ陥れる力。ボスは、この能力が欲しいのですよ」

「ああ、なるほど。まあバトルでは有利にたちますもんね」

ダークライに関連する資料は数少ないものの、その中でダークライ  
が使ったとされる技や特性が書かれているものは意外と多い。とい  
うかダークライについて書かれているものはそればかりだ。

そしてその中でいつも注目され資料の中でお約束のように説明され  
るものは、ダークライのみが使えるという「ダークホール」と特性  
「ナイトメア」

実際に見たことはないものの、説明や解説を見ただけで協力的な技や  
特性だっていうことは俺にだって理解出来る。

うんうんと頷けば、説明役の人はくすりと笑って俺を見た。  
おもいつきり馬鹿にされたような気がする。気のせいかな？

「ボスが欲しいのはバトルで有利になれる力ではありませんよ。確実に、自分の利益になるであろう力です。……最近、原因不明の昏睡症状が各地で起こっているのはご存知ですか？」

「昏睡症状？ そんなことニュースでやってたかしら」

「報道規制がされていますからね、まあ一般人は知らなくとも無理はありません。その原因は不明故、混乱を抑えるために今はまだニュースなどでは報道されていませんが政府も医者もバタバタしていますよ。…ですがボスはこの情報を耳にした瞬間、すぐに気がつきました。これがダークライの力によるものだと」

なんかだんだんついていけなくなってきた。

ん？ つまり俺たちが知らないうちになんか昏睡症状になってる人たちがいて、それでそれは他の人が見れば原因不明の病気みたいなもんで騒いでいるけど、ボスは病気じゃなくてダークライの力でこんな状態になったと思ってる、ってことか？

でもそれでダークライをボスが捕まえてどうすんだろ。

ヒーローになりたいとか？ いや悪の組織のボスなのにそれはないか。

じゃあなんだ、普通にダークライが欲しいだけか？

「それで？」

「その昏睡症状を治すにはとあるポケモンの力を借りるか、そのポケモンの羽を使う必要があります。ですがダークライと同じくそのポケモンも伝説と呼ばれている…探すのは困難でしょう。ですがボスはこの事件の前からダークライ捕獲のために極秘で幹部を調査に当たらせおり、そしてその過程でポケモンこそ捕まえられませんでした。羽は手に入れていたのですよ」

したっばの俺が知らないところでなんか伝説のポケモン大発見！み



たいな計画が行われていたらしい。

マシ口幹部も知らなかったようで、だんだんと雰囲気が悪ろしいものになってきている。

このままいつちやうとマジで切られそうです、なにこの人凄く恐ろしい。

幹部の横にいて汗が冷や汗がダラダラ出てきそう。

早くこの雰囲気地獄な説明を終わらせてたくて、俺はしたっぱながらも口を開く。

つまりボスの考えってというのは今の説明を聞いた俺の考えだところだ、

「ボスはそれで金儲けしようってこと、ですか？」

「まあ簡単にいえばそうなります。昏睡症状を治せるものは我々のみ、そして昏睡症状を引き起こすのもまた我々のみ。金儲けなどは言わず、世界を掌握することだって簡単ですよ」

「……はあ」

そりやまた悪の組織らしい考えで。世界征服か、なんか漫画を見ているようだ。

かつて世界征服しようとした悪の組織はどこもまだ青年にもなっていない子供に壊滅されている、そしてこの組織も確実に追い詰められている。

それなのにここで世界征服とは。うーん、とりあえず今は身を潜めてあの正義の味方君をやり過ぎすべきだと思っけど。

そんな俺の考えを読み取ったのか（そうしたら彼はインテリじゃなくてエスパーなんだけど）、インテリ君はまっすぐ俺たちに向けていた視線をそらし、はあとため息をつく。

「本来ならば最近我々の邪魔をする子供の排除をすべきなのですが、  
…残念なことに、時間がないのです」

「時間？」

「ええ。今日から一週間後、その日の夜は新月。……我々の調査では、その日にダーククライは新月島に現れる可能性が限りなく高いのです」

なにその調査、一体どうやって調査したというんだ。あと新月島つてどこ。

もう気分は宝探しに出る子供状態だ、とてもリアルの話とは思えない。

凄くメルヘンチック、でもインテリ君は凄い真面目。俺どうしよう。

「このチャンスを逃せば次はいつになるか……。ですから我々はあの子供を排除するよりも先に、ダーククライの捕獲を優先したいのです。ダーククライさえ手に入れば子供を排除することなど赤子の手を捻るようなもの」

「……本当にダーククライが新月島に出るっていうんなら、しっかりと計画通りにやるわ。けどもしダーククライが現れなかったら貴方たちの調査不足、貴方たちの責任よ。私、ミスするのもされるのも大嫌いな」

「その点についてはご心配なく」

なぜそこまで自信満々に言えるのだろうか。

ハッキリキツパリと言い切ったインテリ君に内心首をかしげつつ、俺は自分が首にならなきゃいいのでそれ以上突っ込まなかった。俺と違ってマシ口幹部はすっげえ不満そうだったけど。

「ところで」

話が終わり、マシロ幹部が部屋も出たので俺もそれに続くところと、そんな俺を呼び止めるようにインテリ君が話し始める。

それに足を止めれば振り返れば、インテリ君は（可哀想にコイツ）という顔で俺を見ていた。

……いや可哀想に、というより同情に溢れていた。なんだこの表情。

「なぜしたつぱであり、尚且つ目立った功績もない貴方がこの作戦の一員になったのか、知っていますか？」

「…いえ」

「でもなんとなく、分かったでしょう？」

あの人といて。

インテリ君の言葉に、俺はまあ、と歯切れの悪い言葉で返事をする。あの人というのは多分というかおそらくというか絶対、マシロ幹部だ。

女の人がひ弱なんていうイメージをぶち壊すような、凄く鋭くてキツツイ人。

「マシロ幹部は素晴らしい腕をお持ちのお方です。ですが完璧に拘

り過ぎるところがある、そしてそれを自分だけではなく他人に求めるところもありまして」

「あー、イチカ幹部からそれとなく聞いています」

「あの人から。あの人はおしゃべりですからね、まあ彼から聞いた情報は合っていると思うてくれて構いません。マシロ幹部は任務ではミスパーフェクト、しかし残念なことにパーフェクトなのは任務だけです」

それは分かる。

任務以外でもパーフェクトならば、あんな冷たい雰囲気を持つてはいないだろう。

そして彼女と任務を共にした人たちも悪の組織を辞めていかない。

「一度でもミスがあれば、それがたとえ他人の犯した失態だとしても絶対に許さない。人格否定までしてきますからね、彼女。私も一度やられました」

「…あ、でも、貴方は辞めなかつたんですね」

そう、目の前にいるインテリ君はたしかにまだこの組織に所属していて、それなりにいい地位っぽいのにについている。

それは潰されなかつたという何よりの証拠。

必ずしも全員がやめたわけではない、それなら打たれ強いと人に言われている俺でも大丈夫かもしれない！

そう希望のように輝いた俺の一筋の道を

「辞めはしませんでしたが入院しました。あとマシロ幹部は私のトラウマですよ、今だつてほら」

鳥肌たってますもん、と白衣をまくり腕を見せてきたインテリ君を

見て俺は泣きそうになった。

道が闇に閉ざされました。

これからそのトラウマと一緒に行動する人になんて事実を言うんですか貴方。

俺のことがお嫌いか。

「何度この説明役を他の人と代わってもらおうとしたことか！でも皆マシロ幹部を恐れて恐れて…本当は私だって、わた、私…！」

「俺も恐れてきましたよ」

「ミスさえしなければっ！ミスさえしなければまだ結構キツイ女の人だなあこの人程度で済むんです！ですが一度ミスをしたら親の仇とでもいうように、…うああああっ！！」

そこまで言うといんてり君は頭をかきむしって悲鳴をあげた。

ムンクの叫びを見ているような絶望を表している顔に、俺も悲鳴をあげたくなった。

良く見ればインテリ君の目に涙までたまっている。そこまでトラウマになることをやられたのかこの人…。

嗚呼駄目だ、どんだん心が挫かれていく。

どうしようデルビル、俺、お前まで辿り着けないかも…。

「はあっ！はあっ！………あ、あなたも大変だとは思いますが頑張ってくださいね、応援しています」

「………はあ」

こんな心に傷を負わされた人に応援されても。

明日には自分もこんな症状を起こすようになっていのかと思うと、非常に退職届を出したくなる。

こんな精神的にキツイ仕事になるのか、なんかこっちまで鬱になり

そう。

インテリ君の話を聞いた俺の頭の中では、ぐらぐらとデルビルと身の安全を乗せた天秤が揺れに揺れる。

ここで退職届を出すべきか、恐怖から目を背けてデルビルに突っ走っていくべきか。

どうすればいい！俺はどうすればいいんだ！

そんな俺の心情などしらず、インテリ君は一度大きな深呼吸をして更に話し始める。

「貴方のデータは拝見しましたが、優秀な成績ではないにしろ上からの指示に対し1つもミスがありませんでした。他の人がミスをしそうな場面でも常にギリギリの線でセーフ、まあいつもギリギリセーフの線にいたので昇進はしなかったようですが」

落ち着きを取り戻してきたインテリ君が、乱れた髪を整える。

しかし一度彼のおんな姿を見てしまった俺にとっては、インテリ君はもはやインテリじゃない。

可哀想な人だ。それも凄く、がつくくらい。凄く可哀想な人だ。

青いペンキみたいな髪も、もう哀愁を漂わせているようにしか見えない。

「その成績が上の人の目についたらしく。本来はこの作戦のマシロ幹部のパートナーはイチカ幹部だったのですが、これ以上幹部を減らしたくないと考えた上の人がミスをしていない貴方をマシロ幹部のパートナーにしたということです」

「…つまり、捨て駒ですか」

なんとなく感づいていたけど。

そういえばインテリ君はおもしろいくらいに目線を逸らした。なんかこの人恨めない性格してる。

「…まあ、その、はっきりと言ってしまえば」

「ですよー」

「で、でもミスさえしなければ大丈夫ですよ！本当に！私はミスをしてしまったせいで、…その、しばらく檻つきの病院で過ごしていたわけですけども！」

「そこまで!?!」

なぜそこへ辿り着いた!?!

インテリ君の言葉に目を大きく見開いてそういえば、インテリ君はテヘへと恥ずかしそうに頭をかいた。

いや違う、そういう反応は違う。

「ちょっと精神が錯乱してしまいました、通報されちゃったんですよ。…あつ！もちろんこの組織のこととは無関係ですし何ももらっていませんよ！ただのイカれちゃった男として檻つきの病院にぶち込まれただけです！」

「……………」

マシロ幹部、貴方一体なにをやったんですか。

インテリ君が必死に「この組織のことで逮捕されたんじゃないんですよ」アピールを聞きながら、俺は泣きたくなかった。

むしろこの組織のことで逮捕された方がよっぽどよかった。

退職届……今日帰ったら書こうかな。  
俺がそう思ったのも無理はない。そうだろう？



## 第21話 青年とインテリ君（後書き）

久しぶりの更新となります、約一ヶ月：近く？

BWもストーリーをクリアしたので、ネタ被りにならないと判断し戻ってきました。いやあ、楽しかったです。

新キャラのインテリ君は萌えキャラを目指した結果です。最初は女の子でいこうとしたんですが、そうするとサイカのまわりは女の子ばかりという状態にイラつときたので男の子にしてみました。書いてから後悔しました、普通に女の子にすればよかった。そうするとサイカがさらに女運を悪くするんですが。

## 第22話 赤髪とピチユー

マシロとしたつぱ君と話をしたあと（まあ主にしたつぱ君相手にだけ）、俺は説明を聞くために一人会議室から離れた研究室まで足を運んでいた。

無駄に広いこの建物はそこまで行くのも一苦労だけ。

俺らの組織はちょっと普通とは違って、悪事を働いている奴以外にも普通に一流会社として勤務している人間もいるのでどうしても広く設計しなくてはならないらしい。

まあどうでもいいやそんなこと。俺は別にここの建物の構造を知りたいわけじゃないし。

今頃したつぱ君とマシロちゃんは説明受けてんだろうな。

あいつらはすぐ近くの部屋で説明受けるんだもん、羨ましい。

俺なんか研究室まで行かなきゃいけないから時間かかるし。

「つかしたつぱ君、いつまでマシロに耐えられるかなあ」

あいつの毒舌に精神状態異常なしで耐えた人物を未だ見たことが無い。

多分したつぱ君も駄目だろう。…かわいそうに。

アレに比べればこの距離くらい、なんでも無いような気がしてきた。本当にかわいそうに。

「ピチユー！」

「おっ」

廃人にならなきゃいいなとしたつぱ君の行く末を案じていると、ポ

ールの中で退屈していたのか腰にセットしていたボールから勝手にピチューが飛び出した。

普通ならばトレーナーが開閉スイッチを押さなければ出て来れないはずなのだが、このピチューはどうしてか自由にボールから出てこれる特技を持つ。

これがなかなか使えるんだよな、特に相手を奇襲するときには。

「一緒にいくか」

小柄なピチューを肩に乗せて、俺は研究室へと歩き出した。

にしても皆がチームを組んでる中一人だけ単独行動つてのは寂しいものだな。おしゃべりなのを自覚してるから尚更なのか、話せる相手が欲しかった。

まあ幹部の連中は俺の話なんて基本スルーなんだけどね。なにあの愛想ないやつら。

迷うほど広い建物と言っても、今回説明を受ける場所である研究室は俺は何度も足を運んだことがある。だからか流石に迷うことなく無事にその場所まで辿り着くことができた。

ただしこれは俺が慣れているからというだけで、他の場所だったら迷っていたかもしれない。

俺たち組織のメンバーは一定の場所しか訪れないからな。普段は建物内で作戦を練って外で活動しているわけだし。

「会議室で説明してくれてたほうが楽だったのにな」

「ピチュピチュ」

ピチュの頭を撫でつつそう愚痴を言う。

せめて俺だけ会議室で説明とかさ。駄目？ まあ駄目だろうね。

そう思いながら研究室のドアを眺める。

研究室はいつも電気でドアがバリケードされていて、パスワードを入れないと感電する仕組みになっている。

だが今は電流が流れていないらしくパスも必要ない状態だ、ってかパスを入れる機械が黒こげ状態になっているので電流を流したくても流せないのだろう。

研究室のドアに流れている電気が大好きな俺のピチュはそのことに落胆し、残念そうに俺の肩に顔をうずめた。

なんともかわいいやつだ。

ぐしゃぐしゃとピチュの頭を撫でつつ、そんなただのドアとなつてしまった研究室のドアを開けて、中に入る。

中には山のような家電製品と、俺に説明するため待機していた顔見知りの研究員が一人。

よお、と手を上げれば研究員もなれた様子で笑う。

一応幹部の方が立場が上だし、あまりなれなれしくは出来ないんだろう。

「で、逃げられたんだって？」

ここで「もつと気楽にいこうぜ、イチーって呼んで（ウィンク付き）」なんて言ってもいいが、そうしたら話が進まなくなるような気がしたので俺はとつと本題に入ることにした。

余計なことをしゃべると本題が進まなくなるのが俺の悪い癖なのだ。：何度人から注意されたことか。

「申し訳ありません」

「いや俺は別に怒ってないけどね。しかしアイツがいないとここも寂しいものだな、なあピチュー」

「ピ」

いつもならば研究室に入った直後、バチバチと嫌そうな顔で電気を体に走らせ、まるで発光しているように見えるポケモンが俺に「てめえ今すぐ出てけ！」みたいな電撃をお見舞いしようとするのだがそれが今日はない。

別に楽しみにしていたわけじゃないが、いつもいつもこの研究室に入れば起こることだったんでそれがないと違和感を感じてしまう。肩に乗っているピチューも、なんだかんだでそんなポケモンと戯れていた（あつちは本気で嫌がっていたが）ので同じように寂しいそうにする。

あーあ、寂しいな。

せつかくの大作戦だというのに、俺一人だけ違う任務だし。俺、ひとりぼっちには嫌いだな。

せめて二人一組にしてくれれば楽しかったのにさ。俺が口閉じてんの苦手なのは幹部連中も上の奴等もしってるのに、あえて単独行動にしやがって。

そんな俺の心を知ってか知らずか、説明役の眼鏡をかけた研究員も困ったように俺を見て笑った。

もういつそお前が俺と組めばいいんじゃない？ そう思ったがそれはどう足掻いても無理だと思っていたので言わなかった。誰か相方がいれば俺ももう少し楽しんでこの任務に取り掛かれるのに。

「そんで、いつ頃逃げられたの？」

「おそらくは昨日の昼間頃かと。この部屋は電気ですドアをバリケードしていたので、そのドアのバリケードを無理やり電気技で相殺させたと我々は考えています。エアスラッシュで破壊を謀った跡もありました」

「なるほど、相殺した後はゴーストタイプお得意、壁のすり抜けで逃げたってわけ。管理能力がなくてなかったってことかな」

それにしてもせっかく捕まえた研究対象を逃がしてしまうとは。

「アイツ」はD作戦には直接の影響はないが、いないよりはいた方がいい。なんたって、錯乱にはもってこいのポケモンだからな。

だからこそボスも再びアイツを捕獲しようとしたんだろう。

「で、逃げた形態は？」

「扇風機が無くなっていたので、おそらくスピコン形態かと。街の扇風機に化けられたら厄介ですね」

「だな。まあアレをポケモンだと誰も気づきはしないだろうが、その分発見が遅れるな。…後で見破るか嗅ぎ分けるを覚えたポケモンを借りたい、いいか？」

「勿論です、上に言っておきます」

途中で扇風機から他のものに化けた可能性も無くはないが、とりあえずは家電製品を探していけば良いだろう。

ならば探す場所はゴミ捨て場、それから使えない家電製品が捨てら

れていそうな裏路地辺りか。

そこら辺にあればすぐに捕獲できるが、扇風機を使わずクーラーのみで過ごしている家の扇風機に化けられたら面倒だ。  
一週間以内に見つけられない場合もある。

「面倒だなあ。アイツ以外じゃ駄目なの？」

「生息地が不明ですので、難しいかと」

「だよなあ。まったく、これだから希少価値の高いポケモンは困る。伝説でもなくしかし普通でもない、希少ってポケモンは面倒だ」

そして希少な分、目を付けられやすい危険も持っている。まあ今回はスピコン形態なのが幸いしてまずポケモンとは思われないだろうくらいいいけど。

これが普通の形態だったならば、ちょっとした注目の的だ。  
ああでもその分誰が捕まえたとか、どこで目撃したとかが分かりやすい分そっちのほうがよかつたかも。  
捕まえられたんならそのトレーナーから盗めばいいだけの話だし。

「フォルムチェンジだなんてやつかいな能力身につけてくれやがって、なあピチュー」

アイツがこの部屋にいないことに対しての寂しさがイラつきへとかわったのか、ビリビリと電気をまとわせ始めている。ピチューの頭を撫でれば、ピチューは途端に嬉しそうにして俺の手に擦り寄った。  
かわいいやつだ、出来れば進化なんてさせたくない。

世の中の連中はピカチュウピカチュウ騒ぐが、その進化前のピチューのかわいいさだって捨てたもんじゃない。

むしろ俺はピチューの方が好きだ、もっと言うとピチューがあんたの系統の中で一番かわいいと思うてる。

「それではポケモンを準備出来次第、連絡します」

「了解、じゃあそれまで俺は部屋で待機してるから、何かあったらそこまで来て」

「はい、出来るだけ迅速に」

「いいよいいよ急がなくて。急かす相方がいるわけじゃないしねー」

それじゃあ、と研究員に手を振って俺は研究室を後にする。

部屋に戻ったら地図である程度の路地裏とゴミ捨て場を調べなければ。

そこにいれば一番楽なんだが、俺に運は向いてくれるかねえ？ ピチューの頭を撫でながら、楽に終わる仕事であることを期待した。

「よし、行くか」

上から届いた見破るの技を覚えているポケモンを受け取った俺は、



地図片手に基地を出る。

もっとも最初は歩きではなく空から路地裏とゴミ捨て場をまわっていくことになる。

さすがにこの広い街を自分の足でしらみつぶしに探していくのは無理だ、それこそ一週間以上かかってしまう。

出来るだけショートカットをして心当たりの場所を潰しつつ、アイツを探さなければ。

ちなみに心当たりのある場所にいない場合は自分の足でやるしかない、というアレな作業になってしまう。

そうなってしまうと何度も言うように面倒だ。すごいイヤ。

「ムクホーク、頼んだぞ」

基地から少し離れたところまで歩くと、俺は腰につけているボールから空を飛ぶ手段として用いているポケモンを呼び出した。

ムクホーク、それが空を飛ぶためにはかかせない俺のポケモンの名だ。

見れば一瞬でひきつけられるほど鶏冠トウガの赤は魅力的で、見た目に誤魔化されそうだがずっと頑丈に出来ている翼は黒と白を混ぜた灰色に近い色だ。

俺よりも身長は低いがそんなことなど関係ないというくらいに力強い翼と鍛えられた足のおかげで、たとえムクホークより倍以上の敵が相手でも力負けはしない。

目つきは鋭く、睨みつけられただけで相手が萎縮することも少なくない、凜猛レイモウとも呼ばれているポケモンだ。

鳥ポケモンでは比較的珍しく好戦的であり、尚且つ他の鳥ポケモンと大きく違うところは群れから離れて一匹で生きていくその生態系

だろうか。

群れで過ごすよりも単独、そして一匹で生きていくための強さも自分で身につける。

ピジョットやオニドリルなどにはマネ出来ない芸当だろう。

まあ群れの中で生きることが駄目ってわけじゃないんだけど。

ボールから出したムクホークの背に乗れば、ムクホークは慣れたように翼をはためかせ空へと飛びたつ。

その時の体が浮くような浮遊感と空を旅できるという素晴らしいさは、こうやってポケモンと共に空を飛んだことのないトレーナーには分からないものだ。

正直、俺は「空を飛ぶ」ことの出来るポケモンを持っていないトレーナーはもつたないなと思う。

こんな素晴らしいものを知らないでいるんだから。

「とりあえず対象の行きそうな場所をしらみつぶしで潰す。それで見つからなかった場合はひたすら見破るをしながら街をうろつくしかないから見つかることを祈ろうな……」

まずはここな、とムクホークに地図を見せて場所を確認させる。

一応俺が指示をして目的の地までナビをする予定だが、一応地図を見せておくに越したことが無い。

何かあった場合には、組織への連絡要員として一匹でも組織の本基地に戻っていけるように。

地図を見たムクホークは場所がある程度理解したのか、問題ないというように風に乗って進みだす。

ちょうど風は追い風、この分ならば早く最初の目的地につくだろう。

目的のアイツはすでにこの街を出ている危険性も無きにしてもあらずだが、その可能性は低いと見ていい。

あんな扇風機みたいなものが空を浮いていたらそれこそニュースになる。

やつも自分の姿が目立つことは分かっているはず、だから人目のつかない場所を移動しながらも決して自分の正体がばれないようなところに隠れているはずだ…。

フォルムチェンジをといても目立つのは同じ。だが特に騒がれていないみたいだしまず目立つところにはいないだろう。

だから路地裏やゴミ捨て場を選んだ、人氣が少なくゴミを漁る人間なんて限られている隠れやすい場所。

もしそこでフォルムチェンジをしらならば扇風機の残骸が残っているはず、だからもしアイツがいなくても何かしらの手がかりがあるんじゃないかと踏んでいる。

けどまあ、可能性が低いといっても完全にゼロじゃないんだから、油断したらマズイよな。

「一応保険として町の外にも監視してくれる奴を派遣してもらおうか…」

夜中にこそこの町を抜け出されるなんてたまったもんじゃない。俺の指示通りに目的地に向かっていくムクホークの背に乗りながら俺はポケギアを取り出した。

監視員として何人のしたつぱをボスが許してくれるか……計画のこともあるし数は少ないだろう。

この町のゲートは全部で四つある、せめてそのゲートを監視できる

人数は欲しいものだ。

組織には無駄に下っ端が多いのだから、せめてそれくらい的人数は用意してくれると願いたい。

慣れた手つきで組織の幹部へと繋がる連絡用の番号をおしなから、俺はため息をついた。

ああ、独り言って辛い。

話す相方が欲しい、今すぐにも。

## 第22話 赤髪とピチユー（後書き）

誰もが予想出来る展開、なのですが今までのイチカの出番が少なかつたのでそれも兼ねて。

イチカの性格はサイカにおちゃめ度とキャラ度をプラスして、騒がしさを引いた感じ です。

次で第一部（と呼ぶことにしました、本来ならば20話程度でこの物語が終わる予定だったんですが）は終わりです、おそらく。

第二部からはD作戦までの七日間の話になります。わあ長い。

どんだけ完結まで長引かせるんだってことになりそうです。なんてこったい。

## 第23話 青年とムクホーク

とりあえず今日のお仕事は終了！そして解散！

ということになったので俺はインテリ君に別れを告げ、ドンカラスの太い足に捕まってポケモンセンターへの空の道を急いでいた。

思ったより遅くなってしまった、もう夕方とも呼べない時間になってきている。

眠い眠いといっていた昼間から随分と時間がたっていたが、あれだけ徹夜したために朝からつきまとっていた眠気も、衝撃的なことを聞かされたおかげでやってくる様子はない。

ドンカラスの足に捕まっつての空を飛ぶは大変危険だから凄いありがたいことだ。

これで寝ぼけて手を離れたら、落下して簡単に死ぬる。

「本当、空を飛ぶつて危険だよな。それでも使つちまうのはやっぱ便利すぎるからなんだけどさあ」

ポケモンセンターへの道のりは歩いていけばだいぶ時間がかかってしまふのだが、回り道をしなくてすむ空を飛ぶを使えばなんとか太陽がギリギリ顔を出している時間帯にたどりつける。

へたに俊足を持つポケモンの背にのるより空から直通したほうがずっと早いのだ。

まあそれはポケモンセンターの周りに妨害となるものがないからで、これがオニドリルの巣が近くにあった……なんてことになる、また違ってくるんだけど。

だが俺の目指すポケモンセンターには、飛んでいって障害となるも

のではない。ありがたいことだ。

しかし、今日は早めに帰るつもりだったのにすっかり遅くなっちゃまったなあ。

…え？ まだ夕方ギリギリに帰れるんだからマシだろう？

いやいやしたつぱは給料安い分、定時に帰れ残業がないという物凄い特典がついてきてましてね。

これで給料までよかつたら俺はしたつぱから意地でも動かないね。実際給料は特典分引かれてる感じだけど。

しかしポケモンセンターには仕事の都合で遅くなるかもしれないということ伝えてあるから苦情を言われたりはしないだろうが、あのおかしなポケモンの食料を買うこととかになったら大幅に時間を食うことになる可能性はなき西もあらずだ。

なんたつて扇風機（偽）、何を食べるか分かったもんじゃない。電力ならランタンがなんとかしてくれるけど。風力で発電してそれを餌にしますとか言われたらどうしようもない。

フワンテでも捕まえようか、という話から始まることになる。

ドンカラスの翼じゃ風力をあげるっていうより、ダメージを与えちゃいそっだし。

あーもう！こういう時、ポケモン図鑑があつたら便利だったんだろうにな！

だけど残念なことに俺は有名な博士からポケモンをもらって旅立つたことはない。従兄弟であるサイカ兄さんは「俺、ちょっとから旅に出てくつから」とか軽いノリでわざわざシンオウまで行って図鑑も

らって旅立ってたけど。

俺には初心者用のポケモンをもらうより早くグラエナ（当時ポチエナ）をゲットしていた状態だったし、これといって旅に出る予定はなかったから初心者用のポケモンもポケモン図鑑をもらわずに今まで過ごしてきたんだ。

今になって、ポケモン図鑑はもらっておくべきだったとマジで思うよ……。

今度サイカ兄さんに貸してもらおうかなポケモン図鑑、そうしたらあの扇風機（偽）の正体もつかめるかも。

「お前もそう思わないかドンカラス？」

そう問えば、ドンカラスはなにかあったのかというように首をかしげた。

ああしまった、こうやって勝手に頭で考えたことを口に出したつもりになってしまつのが俺のどうしようもない癖である。そのせいで「…は？」とか言われることもわりとある。

あと独り言も多いらしい、これも無意識の悪い癖だから気をつけなければ。

ああごめんなんでもないよとドンカラスに言えば、ドンカラスもそうか気にスンナと首をふるふる振る。

その行動でドンカラスの被っている帽子もゆれる、ああかわいらしい。

ドンカラスを見て「何この太ったカラス」なんて言う奴が時々いるが、そんな奴にこの仕草を是非見せてやりたい。



ドンカラスはかっこかわいいんだよ、太ってねーよバーバカ！  
もう行った奴病院行けよ眼科行けよ、ドンカラス舐めんなマジで！

「そう思うだろうドンカラス！」

心の中でそう絶叫してドンカラスに聞いたら、ドンカラスは「なんだやっぱり何かあったんじゃないか」みたいな目で俺を見た。

……………ごめんな、こんな奴がトレーナーで。まじごめん。

でも俺お前のその呆れた目線とかもう慣れちゃったよ、もう少し大人なんだから俺も落ち着くべきだよな。

頑張る、明日から頑張る。今日はもう疲れちゃったから明日からね。

そんな漫才のようなことをしつつ、俺たちは無事夜になる前にポケモンセンターに辿り着くことができた。これもドンカラスのおかげだ。

このままドンカラスを戻さずに連れ歩いても良いんだが、悲しいかなさつきも言った通りドンカラスの評判は決まってるじゃない。

別に俺は構わないんだが、何か言われて悲しむのはドンカラスだ。なので俺は泣く泣くボールに戻して、一人ポケモンセンターの中に入って受付にいるジョーイさんに扇風機（偽）のことを聞くことにしたのである。

そう、そのはずだったのだ。なのに。

受付に行った俺を、なぜかジョーイさんは「少しお時間いただけますでしょうか」と天使の微笑で俺を個室へと通した。

一般人がマズ入らないようなポケモン用の治療薬などが置かれているそこは、誰かが休む部屋というより薬品置き場に近い。

傷薬やなんでも治しがおいてある部屋をキョロキョロと見渡していると、ジョーイさんはこほんとひとつ咳ばらいをして俺を見る。

こ、これってもしや告白ってやつか!?

そんな、俺たちまだ出会ってそんなにたってないのに!でも嬉しい!付き合います!

そう幸せ満開になりかけた俺の瞳に、ジョーイさんの後ろに置かれていた……そう、どこか慣れた家電製品がちらりとつつた。

あれ、とそれを凝視してみれば、それは夜のお供であるここには似つかわしくない扇風機だった。ポロポロで使えなさそうな、だけど俺が愛用していたものと同じ扇風機。

良く見れば前にグラエナがつけてしまった傷も同じ場所にある。…あれ?

「なんで俺の扇風機がこんなところに」

扇風機（偽）を捕まえてから行方が掴めていなかった扇風機（本物）。

何故それがポケモンセンターにあるんだろうかと疑問に思っジョーイさんを見てみれば、ジョーイさんは思わずこっちがうつとりとなるような笑顔で言った。

「その扇風機から、貴方のポケモンが出てきました」

「……は？」

「ですから、扇風機の中から突如出てきたんです」

そう言っただけジョーイさんは「おそらくフォームチェンジの一種でしょうね。今、ロトムにそのような力があるということで学者が何人も研究しているという連絡も入ってきていますから」なんて頭の悪い俺にはさっぱり理解できない言葉と共に、扇風機を捕まえるために使ったダークボールとビリビリと青い電気を流しているポケモンを俺の目の前に置いた。

そのポケモンは電気タイプのほかにゴーストタイプも持っているからか、どこか透明な雰囲気を持ち体重を感じさせない。つーか浮いてる。

オレンジ色の体と、青い電撃のようなものをビリビリと体に流しながらご機嫌よさそうにしているその姿は、昼間ゴーストタイプのポケモンを調べるために読んだ本で見たばかりだ。

そう、このポケモンの正体は、さっきジョーイさんも言っていたが扇風機ではなくロトムだった。

伝説とは言わないし、タマゴを発見した例もある。けれど生息地が未だ掴めず珍しいポケモンと呼ばれているロトム。

だがしかし、姿形は扇風機じゃない。どちらかというとハンガーの方が似てる。

レアだ、ゴーストタイプと電気タイプが好きな俺にとって一度はお目にかかりたかったポケモンだ。

で、そいつがなんだって？

「ふお、ふおるむ…？」

「はい。簡単に説明させていただきますが、環境に合わせてポケモンが姿を変えることをフォルムチェンジと呼びます」

「…はあ」

よく分からん。

そう思った俺の心情を察したのか、ジョーイさんはにっこりと笑って「説明させていただきますね」と優しい言葉をくれた。

天使だ、天使がここにいる！

「たとえばの例をあげるのですから…そうですね、チェリムというポケモンのことはご存知ですか？」

「あ、はい。それなら」

「チェリムは日差しが強い環境にいれば花を開きますけど、それ以外の環境では閉じていることが有名でしょう？ これのことをフォルムチェンジと呼ぶんです。環境に合わせて姿をかえ、己の生活や戦闘をより有利にさせる…そういうことです」

「へえ、なるほど…」

「多くの研究者は今このフォルムチェンジは一体いつ、どんなポケモンに起こるのか研究しているんですよ」

チェリム、と言われて桜みたいな格好をしたポケモンを脳裏に描く。たしか前にチェリムが花開いた時とかの映像が流れてたな。その時は変わったポケモンがいるんだなくらいにしか思っていなかったんだけど…

「…でも、ロトムがフォルムチェンジするなんて、知りませんでしたよ俺」

「まだ研究中の段階なんです。ですから、民間の方には未発表なの

でご存知なくともおかしくありません。ただ、私たち医療に携わるものにはこういった研究段階のポケモンが運ばれてくる可能性が無きにしてもあらずなので、研究段階の情報も入ってくるんですよ」

「はー、凄いですね…」

ジョーイさんってポケモンの治療をしてそれで終わりかと思ってたよ。

ジョーイさんが知らなかったら俺一人で頑張ろうとか思ってたすみませんでした、どんだけおこがましかつたんだよ俺。

しかしそんな大変な仕事にも関わらずいつも笑顔で迎えてくれるジョーイさんは天使だ。

え？ 仕事だから笑ってやってるだけ？

違う悪魔の声よ俺に囁くな！ジョーイさんはいつだって天使なんだよ、エンジェルなんだよ！

「ですから、発表があるまでフォルムチェンジのことは他言無用でお願いします。今回は捕まえた状態がすでにフォルムチェンジ後でしたから特例でお話しましたけれど、普段ならばお話できないことなんです」

「あ、はい、分かりました」

「そういつていただけると安心です。ただ、本当に申し訳ありませんが、万一事も考えて書類にサインをお願いします。…ふふ、そんなに心配なさらずとも誰にもお話されなければただのサインをしてある紙ですから、大丈夫ですよ」

「……………はい」

そう言って手際よく書類を出してくるジョーイさんは、凄い手馴れている。

きっと口トム以外にもこういうことがあったんだろうなあ。でもあ

たふたしてるジョーイさんも見てみたかったかも、絶対かわいいで、もう絶対。

「…あ、ちなみにサインした後他人に話した場合はどうなりますか？」

「捕まります」

「……そうですか」

ジョーイさんはそうにつきりと俺に向かってそう言ったが、残念ながらその時ばかりはジョーイさんの顔が天使には見えなかった。話さないよ。うん、誰にも話すものか。

「またお越しく下さいね」

そんなジョーイさんの天使もビックリな笑顔に見送られ、俺は何とも言えない気持ちでポケモンセンターから出る。

手にはボロボロの扇風機持ちだ、周りの視線が「何コイツ」って言うてるみたいで泣ける。

この荷物ではドンカラスを使って家まで空を飛ぶことも出来ない。なので仕方なく、俺は周りの痛い視線にさらされたまま歩いて家ま

で帰ることとなった。  
泣きたい、もう泣いてもいいはずだ。

「こういう時は一匹、お供を呼ぼう。そうしよう」

こんな目線に一人さらされるのは正直心に痛い。

なので俺は腰に付けてあるダークボールからポケモンを取り出そうとして…

「よう、さっきのしたっぱ君じゃん」

「え？」

上から、つい昼間話したばかりの組織の幹部に声をかけられて動きを止めた。

もう暗くなってしまった空を見上げれば、ムクホークに乗って赤い髪を風になびかせる幹部の姿。

ああイケメンはこうというのがサマになるからムカツク。

この赤い髪にこの声は間違いないだろう。

ムクホークに乗っているためちゃんとは見えないが、誰かは簡単に想像がついた。

「イチカ幹部！」

「外では幹部はやめろって、色々あるだろ」

「え、あ、ああ、すみません。ええと」

「イチチーでいいってイチチーで！」

そうやって俺の前にムクホークと一緒に地面におりてくるイチカ幹部。

ぶわさあっ！みたいな翼の音がしたかと思うと、イチ力幹部は慣れた様子で急降下するムクホークから下りる。なぜ急降下したんだ、もつとゆっくりでいいじゃないか。

ムクホークも急降下しイチ力幹部を戻した後もう一度急上昇し、最後にはイチ力幹部の隣へと翼を休める。

しかもイチ力幹部が俺の前にいるもんだからムクホークも近くにいろってことになる。

ムクホークが俺を鋭い目でギツと見たかと思うと、威嚇なのか低い声で喉をならした。

うわああなんだよそれ目の前になるとムクホーク怖ええええええ！！  
凜猛ポケモンと呼ばれてるだけあって眼力もやべえし、それ以上に圧倒されそうだ。

敵意を向けられたわけじゃないのに、嫌な汗までかいてしまえそう。  
しかしそんな俺のことなど知らないイチ力幹部は「外にいるときは絶対にイチチーって呼べよな」なんて気楽にウィンクをしながら言っただ。

：この人、なんでこんなにウィンクするんだ。好きなのか？ ウィンクがそんなに。

「…………イチ力さん、今から仕事ですか」

「つれないなしたっば君。 …ああ、したっば君って言い方もマズイんだっけか、ええと」

「サイカです」

そっぴゃ俺はイチ力幹部の名前を知ってたけど、幹部は俺の名前を知らないんだっばよな。



初めて会話した時もお互い自己紹介なんてしてなかったような気がするし。

なので自分の名前を改めて言えば、イチ力幹部はうーんと悩んだ顔をしたあと

「サイカ……うん決めた、お前いーちゃんな。まったくいーちゃん  
はつれないなあ！」

「いーちゃん!!!!?」

なんて爆弾発言をかましてくれた。

大人を呼ぶあだ名じゃねえだろそれ！それが許されんのは中学生までだ！なんだそれ！

おつまえふざけんありえねえし絶対にそんな呼び方許されねえし  
！！

そう言えたらどれだけよかったか。

しかし悲しいかな、俺はしたつぱで相手は幹部。この差がその言葉を  
を言えなくする。

これはパワーハラメントだ！訴えて……あれ違う？

「……お、お好きなように、してください……」

「なんだよその凄い哀愁ただよった顔、ひどくないーちゃん」

「ひどいのは、どっちですか……」

こんな大人にいーちゃんだなんて。いーちゃんだなんて！気持ちが悪  
い！

マシロ幹部とどっちがひどいだろう。……マシロ幹部だな、うん。  
あのインテリ君の話の聞く限りは。

痛い視線が嫌で誰か話し相手はほしかったけど、この人は正直いらなかった。

こない方がマシだった。

もう本気で泣くぞ俺はなんて心の中でイチカ幹部を脅していると、イチカ幹部はそんな俺が持っている扇風機を見て「どうしたんだこれ」と話題を変えてきた。

「え？ ああ、これですか。壊れたんです」

「…捨てに行くのか？」

「はあ、まあ。もう使えないでしょうし」

昨日あれだけ攻撃してしまっただ、絶対にもう使えない。

残念ながらこの扇風機は粗大ゴミ行き……いやまてよ、もしかするとロトムに再び入ってもらえば電力も使わずに動くことが出来るんじゃないのか！？

それなんて節約術……！

「いえ、やっぱりもって帰ります！不法投棄はいけないことですからね！」

「……うーわーそれ同じ職場で働いてる奴が言う言葉とはとても思えね……」

何とでも！何とでも言う方がいいさ俺は今貧乏生活に光を見つけたんだから！

そう思っている俺を知らずにイチカ幹部は少しだけ俺を呆れたような目で見て、ムクホークの背を撫でる。

それから少し考えるように顎に手をそえ、ふむと一人納得したのか頷いた。

意味がわからんその行動。

「その扇風機さ、なんで壊れた？」

「いえ、壊れたというか壊されたというか」

「ああ、ポケモンの仕業？」

「まあ、そんなところですよ」

「やんちゃなのがいました。俺はそういうことでここを乗り切ることにした。」

「変にロトムのことを話して逮捕されてはたまらない。逮捕される要因は極力減らしたい！」

「それがたとえ自分の会社の上司であったとしてもだ！」

「ランターンが間違えて電気を流してしまっただろうか？ どうしようかと考えていたんです」

「ふーん…あ、本当だ、コンセントの部分が焼け焦げてる」

「ピンとイチカ幹部が指差したところを見れば、たしかにコンセントの部分がこげていた。」

「なるほど、やはりロトム。お前しかこの扇風機を動かせるものはいないようだ！」

「俺の貧乏生活を脱出する鍵になるかもしれない救世主よ！」

「にしてもそれ重いだろ、乗せてってやろうか？」

「え、いいんですか!？」

「おう、いいよなムクホーク」

「そうイチカ幹部がムクホークに聞けば、ムクホークはギロリと俺を睨んだ。」

…そう考えても、友好的じゃない。

明らかに「お前一人でも帰れんだろ俺の背中に乗せてたまるかよ」みたいな表情だ。ムクホーク怖い。

もしこの視線を無視して「お願いしマース」なんてムクホークの背中に乗ったら、なんか俺だけ落とされそう。

ムクホーク超怖い。

「……いえ、筋肉トレーニングの一環として自分の足で持って帰ります」

「え、いや遠慮しなくても大丈夫だってイッチー」

「イッチーはお願いですからやめてください…！」

「えー、駄目なのかよイッチー。いいニックネームだと思ったんだけど…」

皆いつつも嫌がるんだよな、なんでだろう。

そういつてイチ力幹部は遠い目をする。俺も遠い目をした、他の人にもこんなセンスでニックネームをつけてるのか。

そう思いつつも、ここがチャンスだといわんばかりに俺はイチ力幹部に別れの言葉を告げて一人歩き出した。

そうして帰ってきた俺を待っていたのは大家さんの「あんたんち泥棒が入ったみたいだよ！」という声と、深夜ロトムによって散らかり放題の部屋を調査している警察の人だった。

どう考えても部屋が荒らされているのは泥棒のせいじゃなくてロトムのせいです。

でも言わないっていう誓約書を書いちゃったからいえない。たとえ警察でも言わない、言えない。

ああ俺はもう死にたいよ、死んでもいいだろうか。

## 第23話 青年とムクホーク（後書き）

これにて一章が終わり、次回から二章へと突入します。

ご感想を書いてくださった方、お気に入り登録してくださった方、レビューを書いてくださった方、そしてここまで読んでいただいた方。

本当にお付き合いありがとうございます、こうして一章を終わらせることが出来たのは皆様のおかげだと思っています。

二章からはサイカとキャラたちの関わりを中心に、D作戦に向けての7日間を書いていけたらと思っています。

初期からサイカの脳内で登場している従兄弟もさっさと登場させたいところです。

## 第24話 インテリ君と青年

やはり何事にも挨拶から始めることが基本ですよね、そう思いませんか？

というわけでご挨拶を。私の名前はリーフといいます、D作戦ではサポートに当たりますのでこれから何度かお会いする機会があると思っております。

よろしくお願いしますね、サイカさん。

…え？ 私がインテリに見える、ですか？

ありがとうございます、頭が良い…とはいえないかもしれませんが、一応頭脳担当です。

でもインテリ君なんて呼ばれると照れるんでリーフと呼んでくださいね。

あと一応言っておくのですが、こんな名前ですし一人称は『私』なので間違えてしまうかもしれません。

が！性別は男です。男以外の何者でもありません。

男にしては女々しいだとか、頼りないだとか、そういうことをよく言われますが歴とした男です。

まったく、ひどい言われようですよね。

たしかに普通の男よりは華奢な体ですが…もやしって言われるほどじゃないのに。

失礼がすぎますよ。

まあそんな身体的事情はさておき。

私は所謂「悪の組織」と呼ばれる場所で仕事をしています。

白衣を着て眼鏡をかけて仕事をしているのですが、その姿は皆さん

がよく想像する研究員というところでしょうか。  
そんな感じでイメージしてくださいれば幸いです。

実際のところは研究員ではなく、組織の利益となるような計画を練り、それを実行する幹部の人や下っ端の皆さんのお手伝いをするお仕事をやらせていただいているわけなのですが。

なので昨日D作戦の説明をさせていただいたんですよ、これもひとつのお仕事なので。

さて、私の自己紹介はこれくらいでよろしいでしょうか。

……え、私の髪の毛の色が不自然すぎる？ そんなことありませんよ！

生まれつきこの青い髪だった…と言ってしまつと嘘になりますが、私は気に入っているのです。そういうこと言わないで下さいね！  
凄く傷つきますから！

木漏れ日が優しく草むらを照らし、野生のポケモン達が嬉しそうに駆け回る。

そんな場所に私としたっばでありながらも今回幹部のみが行う作戦に急遽参加することになったサイカさんが佇んでいた。



さすがに草むらには入らず、そこから少しは慣れたところでほのぼのとしているポケモンたちの観察。  
なんですが……

「ひとつ質問いいですかね」

「はい、なんででしょうかサイカさん」

「どうして俺、マシロ幹部ではなく貴方と組んでるんでしょうか？」  
「……………」

理解できない、というようにサイカさんは私を見る。

昨日作戦のことを説明して、さて今日からマシロ幹部と作戦をこなそうって時なのにどうして昨日の説明役がこんなところにいるんだってあからさまに悩んでいる顔です。

しかもマシロ幹部の姿が見えないから余計混乱しているようです。  
サイカさんって感情が顔に出ますね、いやいいんですけど。

しかしこんなにいい天気だというのに、なんでしようこのやるせなさ。

やるせなさの問題は私でもなければサイカさんでもないんですが。

あああもう……！

サイカさんの質問に、私は何も答えられずそつと顔をそらす。

サイカさんの質問はもっともなんです、本来ならばこの場所にいるのは私ではなくマシロ幹部だったはず。

なんたって大掛かりな作戦を行うパートナーなんですから。

そう、マシロ幹部だったはずなのにいいいい！！

「……マシロ幹部が」

「幹部が？」

「幹部が…共に行動するのは作戦開始の時からでいいと。何のために一週間前に作戦の内容を通達したのか分かってないんですよあの入！パートナーとの信頼や連携を高めるために一週間の時間を与えることになってたのに…！」

そう、あの人は何にも分かつちやいない！

私がどんなに恐々とあの人に作戦の説明をしたのか、そしてサイカさんと一緒に一週間行動してくださいとお願いしたか！

それなのにあの人は「嫌よ」の一言で全てを片付けた！何なんですかあの入あのチームワークの無さ！

あの人怖いしもう嫌！

やりきれない怒りを全身を激しく動かすことで表現していると、サイカさんはなんともいえない目で私を見てきて、そっと肩に手を置いた。

…なんででしょう、この痛い子を見ているような目は。

「あ、あー、じゃあ俺たちでとつとと作戦始めちゃいましょう！」

「そ、そうですね！頑張りましょうね！」

今回の作戦は単純明快。まあパートナーとの絆を深めるためなんですから当然なんです。

本日与えられた指令はスロットの景品となるポケモンの捕獲、それだけ。

それだけなのですが、私としては非常に不安なのだ。サイカさんの実力を疑っているわけじゃない、したっばだったとしてもミスがなかった彼の実力はそれなりのものだと分かるから。

問題は…

「ちなみにリーフさんはどのポケモンを使って捕獲をする予定なんですか？」

「……え、ええと」

サイカさんの質問にギクリとする。

そうですね、今回はサイカさんのパートナー私なのでですからポケモンを把握することから始めなくてはいけませんよね！

ええそうですね！そうですね！何でも可笑しいことなんてありません！

ごそごそとポーチから二つのモンスターボールを取り出して、私にっこりと笑った。

残念なことに、その笑顔でサイカさんは遠い目をしたので何かを感じづいてしまったようです。

「この子達です」

「…えっと、中身は」

「プリンとピィです」

「……………ああ」

プリンとピィ、かわいらしくて女子高生の間では話題にならない日がないほどの人気っぷりを誇るポケモンであり、そのかわいさと引き換えなのか攻撃面でも防御面でも目立った部分が無い、むしろ弱い方に分類されてしまう子達だ。

進化すれば能力もグッと伸びるけれど、月の石は高価でなかなか手が出せないしプリンとピッピにするよりも小さくてかわいらしいプリンとピィのままの方がいい。

そういう考えでずるずるきてしまっって、今日になってしまった。

つまり、戦力とはいえないパーティーに。しかも格闘タイプと対戦なんてことになったら目も当てられない、弱点がカバーできない組み合わせ。

それを知っているんだろう、サイカさんは遠かった目をさらに遠くした。

このままいけば未来まで見えてしまうんじゃないだろうかっというに。

「すみません、もともと作戦を練る方面にいたもので。こういうバトル面のこととはてんで駄目なんです」

「え、あ、いえ、大丈夫ですよええもちろん！ちなみに使える技はなんでいらっしやるのでしょうざますか！？」

「ざます…？ ああいえ、ええと、プリンが嘘泣き・願い事・天使のキッス・滅びの歌で、パイの方がアンコール・歌う・アロマセラピー・くすぐるのそれぞれ4つの技です」

そう言ったときのサイカさんの絶望具合といったら。

信じられないといった表情で私を見た後、ボールを見て、また私に視線を戻す。

そしておそろおそろというように口を開いた。

「…攻撃技がない、だと…？」

「て、天使のキッスで混乱させて自滅させるんですよ！」

そもそもプリンもパイも戦闘要員じゃない。

もつといえ、個人的なバトルなんて片手で数えるくらいしかしたことがない。

だから攻撃技の必要なんてないと思っていた私は、今まで二匹に攻

撃技を覚えさせようとも思っていなかった。

だって、まさかマシロ幹部がこんなに融通のきかない人だなんて思っ  
てなかったしそもそも仕事は作戦を考える人間でバトルをする人  
じゃないんですから！

「…頼りにしてます、サイカさん。状態異常の回復と催眠役だけは  
任せてください」

「…サポート、お願いします」

ああ、なんたる失態。

男のくせにかわいいポケモンが好きで、しかもバトルのことなんて  
まるで考えてないって分かったら…そりゃアレですよ、分かって  
ます。

…だから「リッチーはオカマみたいだよな」ってイチカ幹部に言わ  
れるんですよね。

リッチーってなんだそのあだ名そして私に対してオカマってなんだ  
口を閉じるよあの赤毛野郎…！

「っし、いくぞドンカラス！」

それじゃありーフさんは野生のポケモンたちを歌うで眠らせてください。ドンカラスを巻き込んでもいいんで。

そう言つてサイカさんはドンカラス（あまりドンカラスを見たことはないけれど、それでも分かるくらい普通のドンカラスより小さいというか、小柄な感じの子だ）をボールから出して私より先に草むらへと突っ込んでいく。

それに気づいた野生のポケモン達がわれ先にと逃げ出そうとするけれど、それより先に動いたのはサイカさんのドンカラスだった。

「黒い眼差し！」

私の方からはドンカラスの顔は見えないけれど、サイカさんの命令が飛んできた瞬間しつかりとその技を使ったのでしよう。

あれだけ草むらから逃げようとしていたポケモンたちがまるで縛り付けられたように怯えて立ち止まる。

黒い眼差しはバトルなら交代、野生のポケモンならば逃亡を防ぐ技なるほど、だからドンカラスを出したのか。相手を逃がさないようにする技はあまり多くはありません。

故にその効果を持つ技を持っているポケモンも多くは無い。

でも悪タイプや毒・ゴーストのポケモンはどうしてか「黒い眼差し」を覚えるポケモンが多いことが分かっています。

……つまりはトリッキーなんですよね、悪タイプは。一癖も二癖もあるポケモンが多すぎる。

だからこそ対戦相手からは悪タイプはどうしても好かれない。…まあ、それ以外も要因もあるのでしょうか。

「リーフさん！」

「あ、はい！」

サイカさんの戦闘を見てそんなふうに見える、私がぼけっとしてるのが分かったのかサイカさんが私の名前を呼んだ。

せっかくポケモンを足止めしてもらったのにこんなふうには観察ばかりしてはだめだというのに、私のノロマ！

バシン、と気合いを入れるために一度頬を叩いて、私はサイカさんと組んだ作戦通りにボールの開閉スイッチを押した。

「ピイ、歌う！」

ポン、とボールの中から飛び出したかわいいかわいピイに指示をおくる。

バトルなんて凄く久しぶりだからピイは飛び出た後少しだけ戸惑ってしまっただけで、私の指示通りに歌いだす。

この状態だとドンカラスにまで歌が届いてしまうけれど、サイカさんが巻き込んでもいいといったので何か考えがあるんでしょう。

私はバトルの知識なんて皆無なので、サイカさんの作戦通りにするまでです！

ポケモンの「うたう」は人間にも通用してしまう。

さすがにそれはマズイので先ほどこの作戦のためにとってきたカゴの実をかじって、私とサイカさんは眠気をやり過ごす。

ドンカラスの方はカゴの実も食べていないのに、特に問題なく野生のポケモン達に対し熱風を起こしていた。

ピイの歌うが外れたのか、あるいは何か眠りの聞かない特性が…？

「リーフさん、あまり油断してると…！」  
「え？ う、わ！」

これで大丈夫だろうと、サイカさんの言うように油断しているのがマズかった。

バトルに意識を戻せば、眠っていないポケモンたちが飛び掛つてくるところだった。

まだピイの歌が届いていなかったポケモン達なんだろう、眠らされてたまるかというようにピイに襲い掛かろうとしている。

バトルに慣れていないピイが一撃でもくらったら大変です！

ああどうすれば、とそこで思考が真っ白になりまともな指示も出さなくなってしまうた私と違ってサイカさんはその状況を想定していたらしく、ドンカラスに新たななる指令を送った。

「ドンカラス、サポートだ。さきおくり！」

さきおくり…たしか、相手の行動を制限する技だったはずです。

飛び掛られるより早く、ピイと野生のポケモンの間を通り抜けるようにドンカラスが横切った。

それにバランスを崩したのか、野生のポケモンの攻撃はピイに届くことなく、再び態勢が整うまで攻撃できない状況となる。

その結果ドンカラスのその技を受けたポケモンたちはピイが歌い終わるまで技が打てず、そのおかげでほとんどのポケモンがそのまま草むらに倒れこみ眠る形となった。

「リーフさん、そちらは捕獲をお願いします！俺は歌うをはずしたポケモンに！」

「あ、はい…！」



「ドンカラス、熱風！」

根気でなのか眠気を振り払い、ピイに攻撃をしかけようとしたポケモン達がドンカラスの熱風により吹き飛ばされていく。

その鮮やかさと手馴れた様子といったら。

さすがは普段景品用のポケモンを捕まえ組織に献上しているしたっぱさんだ。

慣れた様子でドンカラスに指示を与えているその姿からは、緊張のひとつも見られない。

私も、負けてられないですよねこれは！

「よーしっ、さっそくー！」

眠っているポケモンを問答無用で捕まえていく。

ピイがそれを見て楽しそうにはなる仕草が微笑ましい。やはり進化しないままに限る、ということですよ。

ピイはピイのまま、ププリンはププリンのままが一番です。

この草むらにいたるポケモンは対して強いポケモンではない（らしいです、私はバトル初心者なのでまったく分からないのですが）ので眠り状態にただだけでもスムーズに捕まっていく。

ただ私のピイたとえば相手のレベルが低くても一撃でも食らったらアウトなんでしょう。

レベルも上げてませんし痛い思いをさせたこともほとんどありませんから。

しかしバトルの腕が悪くても、ゲットすることが出来なくワケじゃ

ない。

ボールを投げるのが苦手ではないので、狙いを外すこともなくどんどんとボールにポケモン達をおさめていきながら、僕はその簡単さにまた油断していたのだ。

だから捕獲していないポケモンも後少し……というところで、歌うの効果が切れて目を覚まし始めたポケモンにとっさの行動が出来なかった。

歌うは強制睡眠で、そのため痛みを受けても起きることがないかわりにある程度時間がたてば起きてしまう。

普通はそれを計算に入れて戦うなりゲットするなり逃げたりするのだ。

それをすっかりと、忘れていた。

次々とポケモンを捕まえ、さてあと少しだと思いながらまだ捕まえていないポケモンにボールを投げようとした瞬間、薄く開いた野生のポケモンの目と私の目があい、ボールが手のひらからこぼれた。歌うの効果が、切れたのだ。

とっさにマズイ、とピイと抱きあげて後ずさりすれば、眠らされていたポケモンは眠気を振り切ったのかバツチリと目をあけて私を睨み付けてくる。

「サ、サイカさん！」

「はい、なんででしょう!？」

「野生のポケモンが起きてしまいました！」

「分かりました、ではもう一度歌うの用意を！」

「は、はい!」

腕の中で震えている。ピィに歌うを頼む。けれど怯えているのか、ピィは歌おうとするもそれは小声で野生のポケモンには届かない。その間にも野生のポケモンは私たちにいつ攻撃をしかけようかと機会を窺っていた。

一歩下がれば野生のポケモンも一歩近づく。そんな緊張の中で、バトル経験がほとんどないピィが歌うなんて出来ないし、また同じようにバトル経験がほとんどない私に打開策が浮かぶわけもなく。

「ドンカラス！」

もうどうしようもなくなった私とピィを助けてくれたのは、やっぱり経験豊富なサイカさんだった。

ぐっと姿勢を低くして飛び掛ってきたポケモンが私たちに攻撃する直前に、ドンカラスが横から突進するように体を叩きつける。今度は横切るのではなく、体ごと野生のポケモンへぶつかる。

レベルの差か、油断していたのか、それで野生のポケモンは横へ大きく吹き飛んだ。

「リーフさん！」

「た、助かった…」

それを見て、情けないことに私はへたりと地面に座り込んでしまう。腰が抜けてしまったのだ。

腕の中にあるピィも、脅威が去ったことを分かったのか腕の中で泣き始める。

そんなピイを抱きしめて、私は心の中で力いっぱいマシロ幹部に呪詛の言葉を吐いた。

あなたのせいでこんなことに！

「これで終わらせるぞ！ドンカラス、悪の波動！」

私が心の中でぶつぶつと唱えていても、サイカさんは動じない。

したっばの鏡だ、この実力でしたっばなんて幹部は化物か。マシロ幹部は怪物だけだ。

そして数分後、さっきの私のピンチなどなかったかのように全てのポケモンの捕獲が終わる。

明日は確実に筋肉痛だな…と思いつながら組織に任務遂行の報告を入れ終わる（さすがに足手まといなのは分かっていたのでせめて報告ぐらいは手伝います、とサイカさんをお願いしたのだ）と、ドンカラスのケアをしていたサイカさんが人好きのする笑顔でおつかれさま、と私に声をかけてきた。

正直、この場面だけ見るとサイカさんが凄く善良な市民に見える。しかもたしか…資料を見る限りだと本当に悪の組織の一員かと思ってしまうような仕事内容でしたよね。

ここまで悪の組織が似合わない人も珍しい。

いっその他の仕事に就いたほうが向いているのでは？　と思ったけれどそれはいわない。

そういうことは、余計なお世話っていうものでしょうから。

「お疲れ様です、サイカさん。おかげさまで助かりました」

「なんとか終わりましたね」

「はい。…あ、あと今更なんですけど敬語は必要ありませんよ。サイカさんは今、作戦チームの一員なんですから？」

「え、いや、でも…」

「マシロ幹部ですとか、さすがに幹部相手には敬語は必要でしょうけど私たちみたいな人には普通に接してください。皆わりとそんな感じなんですよ」

そう言うとサイカさんは「そっか、そうなのか」と言って気が抜けたように笑った。

時々敬語以外のものも混じることもあるし、多分敬語が苦手なんでしょう。

まあ僕も子供の頃から敬語を使っているせいか、ところどころ敬語だったりそうじゃないところがあったりして上司としゃべるときは意識してますし。

「じゃあそうさせてもらうよ。あ、あとリーフも敬語じゃなくていいぞ？」

「私のは癖なのでお構いなく。子供の頃からこの口調なんですよ」

敬語が悪いなんてことはないので子供の頃から直すこともなくこのまま。

…まあ子供時代は、このしゃべり方のせいか女みたいだと散々馬鹿

にされ女の子の遊びに混ぜっていたのですが。

「そっか。んで、ピイの様子は大丈夫か？」

「ええ、先ほどまでは怯えていますけど。今はほら、すっかりと」

腕に抱いているピイを見せれば、傷ひとつないピイはにっこりと笑ってサイカさんに手を振った。

自分を助けてくれたポケモンのトレーナーがサイカさんであることを分かってるんだろう。

一生懸命手を振る仕草がかわいらしくて、思わずぎゅゅと抱きしめる。

罪になりそうなほどのかわいさだ、ピイは宇宙からやってきた説があるけどそれもあながち間違いじゃないかもしれない。

だってこんなかわいい子が地球にいるわけがない！

「そっか、よかった」

「はい」

慣れた手つきでサイカさんがピイの頭を撫でる。

それに喜んで笑うピイ、ああかわいらしい！

なんて、仕事が終わりますっかりとほのぼのしていた私は知らなかったのです。

この後、マシロ幹部とサイカさんのコンビに私までもが巻き込まれていくことを。

知っていたら、一目散に逃げたのに。

## 第24話 インテリ君と青年（後書き）

というわけで二部の始まりはインテリ君ことリーフ視点の話でした。せつかく萌えキャラとして作ったんだからとことん萌えを！と思っ  
て書いたのですが、これただのアホや。萌えやない。

最後の台詞から分かるようにD作戦でも出番あります、リーフ。  
バトルでは頼りない印象しか与えられないので、これから汚名返上・  
名誉挽回！…出来たらいいなあ、と。

## 第25話 青年と少女と少年と年長

仕事も終わり今日もドンカラスの足に捕まりながら帰路についていれば、どこからかカア、カアとヤミカラスが鳴く声が聞こえてくる。

今日の仕事は大変だった。

まさかリーフがあんなに…いややめよう、もう過ぎたことだ。あいつ頭脳派らしいし。

でもリーフ、あいつアレでよく悪の組織にいられるなあ。

もはやあの手持ちでは悪の組織に捕まって無理やり働かされてる一般人状態となんら変わりないような気がする。

ボスもビツクリ、あれなんでこの会社に採用しちゃったのかなー？なんて思われちまうぞ！

なんて「したつぱでも一番下にいる」俺が少なくとも「俺よりは立場が上」なりリーフを心配するのもおかしな話か。リーフくらいだとどれくらい給料もらえんのかなあ。

…貯金が出るくらいには、もらえるのか？

そう考えた途端ブルーになった俺に、生ぬるい風が吹き抜けた。

吹いてくる風はまだまだ涼しくならず熱帯夜はこれからも続くというのに、今の季節とは逆に真冬状態な財布の中身のことをいつい思い出してしまい、一気に沈んだ気持ちになる。

どうせ俺にや貯金できるほどの金なんてないさ。他人の心配するよりも自分の将来のことを心配しろって話だよな。

今は若いからどうとでもなってるが、いつまでもこんな生活はして



いられない。

やはりデルビルをもらった後はもう少し肉体労働があってもいいから人様に言える職につくべきだ。

いくら親が元悪の組織（今は自営業）のしたつぱだったからだって、いやでもこの金、金とすさんだ時代の中でいいこともあった、それは電気代無しで扇風機を動かすなんて奇跡としかいえないポケモンを幸運にも手に入れたことだ。

ついでに大家さんがあのボロボロになった部屋を「泥棒が入ったんだね可哀想に」と勘違いしてくれたおかげで修理代を出すこともなくなった。

俺は悪党だ、大家さんに真実を告げなかったとんでもない大悪党だ。ごめん大家さんそれ俺がやったんですでも言えない言ったら追い出される。

この地方に住む父上母上、俺はついに本格的な悪党になってしまいました。あと存在しない泥棒ごめん、まじごめん。最近家賃が滞りがちでごめんなさい、でもこの計画が終わったらボーナスとデルビルが出ると思っんでそれで払いますから！あとデルビルの素晴らしさをお教えしますから！

唯一の救いは、俺の部屋に侵入した奴なんて存在しないんだから泥棒が捕まることがないことだろう。

俺のせいで関係のない人が捕まるとか考えたくないからな。

しかしこれで俺は何段悪党の階段をすつとばしただろうか。

もう純粋な子供の頃には戻れない、ああさようなら綺麗だった俺。悪の組織にいる時点でもう綺麗じゃないか。今更か。

「ははは、純粹にアニメを見て悪の組織を応援していたあの頃に戻りたい…」

子供の頃から正義の味方より悪の…憎めないようなキャラが好きだった。

なんだろう、あと一步のところまで正義の味方に敵わずいつもやられちゃうような、でもときにはそいつらの主役回があつてさ？ それがいい話なんだよ。

正義の味方と共闘するときもあつたり、お前ら本当に敵がよつてくらい優しいときもあつたり。

ああ、あの頃は本当に純粹だった。

そのひとつひとつに一喜一憂してたんだからな、今はどうだ。

「どうせ正義の味方に負けるだろ」とか思つて一喜一憂なんてしない汚れた自分だ。

ああ、あの頃に帰りたい、すげえ戻りたい…！

「でも俺は戻る場所は半壊されたアパートの一室なんですよね」

そんなこと言うなよ、とばかりにドンカラスが鳴いて、俺をアパートの下まで降ろす。

いつもの現実逃避をしているうちにもうおんぼろが更におんぼろになった家についたらしい、昨日片付けしたとはいえ壊れた部分までは直せてないから一室だけ本当におんぼろだ。  
泣きたい。

でも泣けなかった、俺が泣く前に声をかけられたからだ。

「よお、サイカ！」

「おにいちゃん！」  
「ひさしぶり！」

違う意味で、泣きたくなっただけ。

「お前こんな汚ねえところに住んでんのかよ、笑えるな。最高傑作すぎてテレビで放映したくなる」

「お願い俺の傷口を無理やりこじ開けて塩を塗りこまないで、あなたとんだけ口悪いの」

何で来たの、そう思いながら壊れかけた部屋に招待すれば、やってきた面子の中で一番年上に入る（っつーか俺より年上だ）知り合いは爆笑してそう言った。

本当に容赦ない、いやたしかにこの間のトロム事件で俺の部屋は見るも無残に半壊してるけどさあ。

そんな遠慮をしない大人気ない年上に比べて、残りの二人は顔を引きつらせながらも「：そんなことない、よ」と声をそろえていった。明らかに無理をしている声色である、だがそれでも否定してくれた優しい子供たち。

ああもう子供に気を使わせちゃってるよ、俺もう泣きたい。

「あー、まあとりあえず好きなとこ座って」

「好きなとこ座ってってこんな半壊した家に座ったらどうなるか…」  
「ならもう出てけよ。ってか、3人は知り合いだったの?」

子供二人が一緒に来るのはともかく、毒舌を吐いてくれちゃってる男は子供たちと面識なんてなかったはずなんだけど。

この人子供相手でも容赦ないから子供が寄り付かないし。

そう思っていれば、「そこでお前の帰りを待ってたから一緒に待ってただけだそれくらい分かれよアホ」と言われた。もっと優しく言ってくれないかな? マジで。

「ーか分かるわけないだろ、俺はそこまで鋭くないんだよ…!」

だが我慢我慢。ここで喧嘩してたらいつまでも話が進まないのは学習済みだ。

だから作り笑いだろうがなんだろうがとりあえずにつこりと笑う。多分引きつってるだろうけど気にしない、気にしない!

「そっか。ひさしぶり、カイル兄さん。それとこの間ぶりだな、マリン、リク君」

「うん、このあいだぶりだね!」

ちびっこ二人にも挨拶すると、二人は元気良く返事をくれた。

でも何でここに来たんだ、というかなんで俺の家を知ってるんだ?

一番の年長こと、幼い頃からの付き合いであるカイル兄さんが俺の家を知っているのは分かる。

なんたってこの人は俺の従兄弟だからだ。

物心つく前か後かくらいからの付き合いで、俺にとってはもう従兄弟というより兄みたいな存在。

ポチエナのタマゴをくれたのもこの人で、それだけじゃなく何も分からなかった俺にポケモンの知識を教えてくださいたりバトルの手ほどきまでしてくれた。

まあバトルじゃ兄じゃなくて師匠って感じかな。

今まで何度かバトルをしているが、俺がカイム兄さんには一度も勝ったことがない。

というかカイム兄さんはマジおかしいくらい強いから勝てる気がしない。

なんでもシンオウ地方ではそれなりに名前が通っているらしく、非公式ながらシンオウのチャンピオンとも対戦したって話だ。

信じらんねえ、チャンピオンと対戦って。俺にとっては御伽噺か何かと思うレベル。

だがそれが出来るのがカイム兄さんだ。兄さんはなんというか、天から色んなものをもらって生まれた人だと思う。

まず第一に容姿。

ちよつと最近の若者みたいなチャラさがあるけど美形だ、まあ雰囲気もチャラいから好き嫌いがハッキリ分かれる顔なんだけどさ。

それでも顔が整っているかどうか言われれば、整っている。

足も長いしなんつーの？ モデル体系？ 思わず僻みたくなるね、まあ俺は小さい頃から兄さんを知っているんでそんなことしないんだけどね！

べ、別にうらやましくなんて思っていない！まったく！イケメンの何が良いつてんだイケメンは全員ブサイクになっちまえ！  
そして俺がイケメンって呼ばれる時代がくれればいいのに。

第二にバトルセンス。

知識だけじゃなく、どんなトラブルもピンチも不利ですら自分の有利に変えることの出来る運と研ぎ澄まされた勘を持っている。

タイプの相性がどんなに悪くともひっくり返される、少なくとも俺はエスパータイプ相手にグラエナで挑んで何度も負けた。

畜生エスパータイプめ俺の大切なグラエナになんてことを…！おおおおおっ！！次はボコボコにしてやる！

と決意して何度逆にボコボコにされたか。エスパータイプマジでいい加減にしろ。

本来なら悪タイプに不利な相性のくせに生意気だ、エスパータイプのくせに生意気だ。

そして第三に輝かしい功績。

カイル兄さんはそのバトルセンスと容姿を生かして、もうそりゃ俺には目がくらむどころか目がつぶれるくらいの輝かしい功績・経歴をお持ちだ。

悪の組織のしたっぱの俺にはもう理解不能だね、手の届かないものだね。

なに？ マスターランクの優勝記念のリボン？ コンテストってバトル関係ないじゃん。

なに？ ジムの制覇でバッジ8つ獲得どころかそれ以上？ なにそれ夢物語？

そんなもついい加減にしてくれよこの才能マシンが！といたいほどの天才だ。

ただし性格の悪さと口の悪さで結果的にはプラスマイナスゼロであ

る。

この輝かしい3つを帳消しにするほどの性格と口の悪さ、まさに神業。神の業。

神様が人間皆平等にするためにわざとそうしたんじゃないかってくらいだ。

俺は小さい頃から一緒にいるからいい加減慣れてるし、お世辞言わなくて本音をそのまま言ってくれる人だと思えばまあ大丈夫だけど、俺が大人になってからこの人と出会ってたら絶対に苦手だったね、家族補正があるからなんとかなっているものだ。マジで。

そんなカイル兄さんだから、子供二人と並んでいるところを見るのは凄く不自然だ。子供泣かしそう。

たとえ知り合いじゃないと知った後でも、それでも不自然。超不自然。

「マリんにリク君、俺になんか用事か？」

「うん。あ、その前にこれ、お姉ちゃんからって渡されたよ。お兄ちゃん、お姉ちゃんと知り合いだったの？」

知り合い。あれは知り合いと呼べるのだろうか。

むしろ敵対に近い感じだったんだが最終的には和解したし知り合いか？ 知り合いでいいのか？

「え？ あ、うー、まあ知り合いっつーかなんっつーか。まあ、顔見知りってとこか…？」

「ふうん？ あのね、お姉ちゃんがお兄ちゃんに失礼なことしたらって。本当は自分が持つていくべきなんだろうけどあんなことがあったからしばらくは頭冷やすって。はい」

「おう、どうも…」

恐らくは、というかそれしかないがあの勘違いバトルのことだろう。その迷惑料らしい紙袋をマリンから渡されて受け取れば、マリンが持っていたと思えないくらいにはずっしりとしていた。

おお、これは…！

いつも金に困っている状態だからありがたい、恐らく中身は菓子か何かだろうが充分に腹の足しになる。

これで金が入っていたら震えて混乱するところだがそれはないだろう。夢を見すぎだ。

いやあ、しかし食料はありがたい！バトルした甲斐があったといってもいいだろう。

こういうオマケがついているバトルならいつだって大歓迎だ、ありがたやありがたや。

そんなことを俺が思っているだなんて知らないマリンは、それでねと話を続ける。

「用事があるのは私じゃなくてリクくんの方なの」

「へえ？ リク君が？」

そいつは意外だ、てっきりトラブルメーカーのマリンがまた何か引っさげてやってきたと思っていたのに。

いけないいけない、自分の考えだけを正しいと思ってはいけないなと俺は愛想よく子供たちに接しながら思った。

そんな俺を見てカイク兄さんは何か思ったのか、呆れたような目になる。

……はいはい、まともな職につけない男が何子供と仲良くなってん



だ、そういうもはもつといい職場に就いて余裕が出来てからにしろ  
って言うんだろ分かってるよそんなん！

好きで俺から近づいたんじゃないやねえっつーの！むしろ俺は巻き込まれ  
たんだよ！

とはさすがに子供たち本人を前にしては言えない。

「っーかお前、この数日でなんでガキと知り合いになってんだ？  
そういう趣味？」

「これには深い事情があるんだよ、あとそういう趣味じゃないから」  
「お前の事情なんて深くも深刻でもねえだろ、浅くて底なんてすぐ  
見えるくせによ。まだそういう趣味ですって方が深くて深刻だな」

「カイルさん俺をどれだけ落ち込ませたいんだよ！」

いちいちこの人をへこます天才を誰かとめてくれ！

だから彼女も出来ない友人もほぼゼロの将来孤独死まっしぐらな人  
生を歩んでんだよ！

牧場なんか始めたせいで家族から縁を切られるし？ しかもその牧  
場経営はカイル兄さんの腕がからつきしなのか火の車らしいし！  
まあそれを言うとポッコポコに言い返されるから言わないけどな。  
そうさ俺は薄月給の悪の組織のしたっばさ…。

「えーつと、言ってもいい？」

「ん、ああいいよいよリク君、俺に頼みって何？」

むしろこの空気を換えてくれ、と俺は大人ながらに子供に助けを求  
める。

なんとという駄目男。カイル兄さんがそんな俺を鼻で笑った。

「明日の夕方頃、力を貸してほしいんだ」

駄目か？ とリク君は少し不安そうに俺を見た。

ダメっつーか……まだ出会って少ししかたってないし（俺はリク君を何度も目撃して結構前から知ってたけれども）そもそも親しくもないじゃないか俺たち。

それにリク君にはお仲間がいるはずだ、マリ姉とたしかもう一人くらい。

なぜ俺に。

「……なんで、俺？」

「にーちゃんとバトルして、強いつて思ったから」

「サイカが強いとか世の中の終わりだろ」

「カイルさんは本気で黙ってて。…あーいや、俺、リク君に負けたし、強いとは……」

「ぶはっ！」

俺の言葉にカイル兄さんが噴出した。えーえーどうせ負けましたよ俺は負けましたよ子供に。

カイル兄さんからしたら信じられないんでしょうがね、でもしようがないだろこの子正義の味方なんだぞ超強いんだぞしたっばなんてザコなんだ負けるに決まってるだろうが！

とはいえない。なぜなら俺の正体は正義の味方君にはバレていないからだ。

「強いつて！それにバトルしたのはたった一回じゃんか！バトルはその時の運だつてからんでくる、一回勝っただけじゃどっちが強いかなんて言えないつて」

わあ、大人な意見。

一回勝ったらどっちが強いかすぐ決める俺より大人だ。

「それに、俺と仲間だけじゃ人手が足りなくて…」

「人手？ バイトか何かか？」

「そうじゃなくて、もっと大事なこと」

俺にとってはバイトも命綱だぞ、と子供に言っても伝わらないだろう。

なので続きを促せば、リク君はこくりと頷いてこう口にした。

「このあたりに悪いやつらがいるんだ」

そう聞いた瞬間、俺の背中に冷や汗が流れる。

聞かなきゃよかった、頭の中は真っ白だ。え、え、…え？

この町、悪い人たち、それを聞いてでる答えはどう考えても俺と上司たちです。

え、どういうこと？ どういうこと！？

この子が正義の味方君なのは分かっている、分かっているがそんなこと。

俺が作戦に関わってこれから大変なときにそんなひどいことはしないでくれるだろう！？

お願いせめて俺が辞めるまでは手を出さないで！じゃないと俺捕まるから！

「…え、えーと、その悪いやつらってのはどんな…」

どくん、と心臓が煩く鳴る。どうしようもしこいでこの子を倒すことになっても負ける予感しかない。

カイル兄さん俺の味方になってくれ…ねえよなこの人。

俺が悪の組織のしたつぱになった時は「ふうん」で済ませてくれたけどだからといって協力してくれるとは限らない、っつーか一般人はむしろ正義の味方君の協力するだろ！

ああやばい、正義の味方君+カイル兄さんのコンビなんて絶対に無理だ。俺事務所行き確定なんじゃね？

俺のデルビル、俺のデルビルが遠のいていく…！

それどころか人生がどん底に落ちていく…！

いやまで落ち込むな、これはリク君の鎌かけかもしれん。

まだ俺は疑惑の目を向けられているだけかもしれない、おちつけこれは試練だと思え落ち着け俺…！

「悪い奴だよ」

「ど、どんな悪いことをするんだ？ なにか伝説のポケモンを追いかけてたり？」

D作戦とかなんか変な作戦やろうとしてたりする？

……はっ！もしかしてこのリク君はD作戦の情報をすでに手に入れてるんじゃないだろうか。

それでその作戦を阻止してダークライを守り抜きつつ、組織を壊滅させたい。

そのためにD作戦のメンバーにいて、尚且つ引き抜きやすい俺に目をつけたとか！

逮捕されないためなら俺は快く引き抜かれるぞ、デルビルという未練だけを残しながらな！

いずれ金をためてデルビルを捕まえ…られんのか俺。まず仕事を見つけないきゃなんないんだぞオイ…。

金貯めて、まあシンオウまでは波乗りでランタンの背にのって金を温存するとしても、デルビルが野生で出るとい草むらまでは実費。

野宿、は逆にテントとかそういうの買わないといけないから金がかかる、だがトレーナーには無料で宿を貸してくれるポケセンはいつもあいているわけじゃない。

となるとシンオウ滞在にいくら金がかかる？

そもそもデルビルは春夏秋冬いるのか？ 出てくる時間帯は？ ああ野生で出てくる草むらも行く前にしっかりと調べないと。

んでシンオウの気候を調べて服を用意して（極端に暑かったり寒かったりする場合は服を買わねえと）、長旅になる場合にはそれ相応の道具を買つとして、

…金が、たんねえ。

頭で計算してただけで絶望する金額になる。今の俺には出せない金だ。

絶望？ 絶望どころじゃないそんなちっぽけな表現で今の俺の感情を表せるものか！

もう「うわあああああ！！！」とか言つて部屋の中転がりまわりたかった、でも子供もいるしカイク兄さんもいるし止めた。

いきなりやったらそれこそ怪しまれる。

いやもう怪しまれてんだっけ、と混乱しまくつてヒヨコが飛び回っている頭を正常に戻したのは、混乱の原因であったリク君の言葉だった。

「伝説のポケモンっていうかさ、…珍しいポケモンを密漁するやつ

らなんだ。ポケモンハンターってやつ。俺の仲間が言うには、次のターゲットがこの町の近くにいる草むらの捕獲禁止令が出るポケモンだっという話で」

「……………え？ ポケモンハンター？」

「そう。んで、まだ不確定な情報だからジュンサーさんの協力はあんまり期待出来ないらしくてさ」

ポケモンハンター…俺の組織はポケモンの捕獲は何故か条例に乗っかってやってるよな。

どうせゲーセンの景品だから特定のポケモンしか捕まえてないし、禁止令が出るポケモンなんてこのでかい町で景品にしてたらずぐに刑務所行くなのでひっかからないポケモンしか景品にしていな

ということはアレか？ 俺じゃない？ その組織は俺が仕事をして  
いる悪の組織じゃない？

むしろ同業者というか、ライバル？

警察にこっちまで睨まれると面倒だからあまり近づきたくないけど  
うちの組織の基地がある場所まできたら容赦なく潰せって命令が  
下ってる（が俺が実行したことはない、だってポケモンハンターと  
かそういう同業者って隠密に動くから普通に分かん）あの悪のラ  
イバル。

ああ、なんだ。

なんだ、うん、そっか。そっかそっか！

「へえ！ そうなのか！ そりゃ大変だ！」

「それでにいちちゃんに手を貸してもらえたらなって。いい？」

「え？ いや、それは、うーん…」

俺忙しいんだよね、D作戦で。いや残業こそないけどさ。

でもアレじゃん？ この時期に正義の味方君と一緒に行動しているところなんて見られたら…でもこれを断って変に勘ぐられたらなあ。

ここはひとつ「仕事が忙しくて手伝っている暇がない社会人な俺」ということにしておこう！

そうすればリク君も諦めてくれること間違いな

「いいじゃねえかやってやれよ。どうせ残業なくて夕方から暇だろ」「ほんと!？」

なんでバラした!？ なんでバラしたのねえカイル兄さん!？ 察しろよこの雰囲気、もうこの理由で断るの無理になっちゃったじゃん！

「元でもポケモンレンジャーだろ、やってやれよ」

いつの話だよどうして俺に断れない雰囲気を作るのカイル兄さんあんたもう本気で帰れ！

「え、ほんと!？」

「い、いや、レンジャーをやったのは子供の頃っつーかすぐにやめ」

「ならなあおさらだよ！お願いにーちゃん！」

「私からもお願い、サイカお兄ちゃん！」

「…うう…」

ここで断ったら、怪しまれるよなあ。

残念がられるのまでは許容範囲だけど、レンジャーやって残業もない俺が何も手伝わないのは、なあ。

マリンとリク君の目は誤魔化せても、リク君の仲間の目は誤魔化せないかもだ。

いや馬鹿、俺は善良な市民（に見えるだろう男）だ！

善良な市民はそういうのに怖がって非協力的なはず！断つても怪しくない！

「悪いけど、俺は」

「かつてレンジャーとして悪の組織に喧嘩売ったその腕前見せてやれよ」

「だああああもう！！」

それで騒ぎが拡大してクビになったんだよ！

あれはまだ考えも幼稚だからろくに先のことも考えずグラエナと突っ走っちゃって、その結果組織の尻尾は掴んだものの俺自身が組織に逆恨みされて安全のためクビ！

そしてそれから俺の転落人生の始まりなんだよ馬鹿！

しかも俺は騒動を大きくしただけでその後のことは他のレンジャーにまかせっきりの無責任野郎なのに！

「すげー！」

「すごーい！！」

「……もう、どうにでもしてくれ……」

カイル兄さんもそのこと知ってるのになんつー話し方を！

絶対にわざと誤解されるような話し方したたるあんた何をしたいんだ！

「俺も暇だしついてこようかなあ、おもしろいの見れそうだし」



「カイル兄さんいるんじゃ俺のいる意味ないし」  
「あー？ お前が頼まれたんだろ、俺はオマケ」

もうやだこの人。

明日の約束を勝手に取り付けられつつ、俺は最近のついていない日々をやっぱり泣きたくなつた。

最近の俺、本当に運が急降下してる。もともとない運がさらになくなってる。

誰かが俺の運を吸収しているに違いない、誰だそいつ俺の運を返せ！

「じゃあ明日、この時間にまたくるな！」

「じゃあね、お兄ちゃん！」

約束を取り付けられたことに満足して家を出て行く子供二人の背中を見送りながら、俺は明日のことが組織の誰にもバレないといいと心の底から祈った。

あれ、そういえばなんであの二人は俺の家を知ってるんだっけ？

## 第25話 青年と少女と少年と年長（後書き）

新キャラ、サイカの従兄弟のカイムはこの物語でも1・2を争う自己中心的キャラです。そしてこの作品のチートになるかもしれないキャラ。

もともと最初は彼を主人公にしてサイカがサブとして出る牧場話を書こうと思っていたので、ある意味は主人公補正なのか…？

それにしてもサイカより弱いキャラがいなくてもいい作品になってきた。

リーフがなんとかサイカより弱いキャラでいてくれますが彼はバトル要員ではない。悲惨です。

番外編 牧場主とライチユウ（前書き）

半年振りの更新が番外編ですみません。一応本編と繋がりがあるかもしれないお話となっています。

気づいたら最後に更新していたのが去年だなんて笑えない冗談です。

## 番外編 牧場主とライチュウ

この地方の夏は暑い。

人間にもポケモンにも厳しい暑さだろう、特にこの地方でポケモンの牧場を運営している男は暑さにとんと弱かったためその気候にはうんざりとしていた。

まだまだ将来もはつきりせずただ気の向くままに旅をしていた少年の頃にだって、男は自分の暑さへの弱さを熟知して涼しい場所を好んで旅をしたくらいだ。

本来ならばもっと涼しいところで経営することがベストだった。

だが牧場に一番合う立地条件がこの地方だったのだ。この男から言わせればクソ暑いんだよ死ぬ、と悪態がつくほどの地方が。

散々悩んだ結果、男は暑さよりも立地を選んだ。それは自分の夢を優先したためでもあるし、その内慣れるだろうとたかをくくっていたこともあってだ。

だが暑さというものはいつまで経っても慣れることも馴染むこともないらしい。

それは夏が近づけば地獄に来たかのように呻き体調を崩す牧場主に、そんな牧場主のパートナーであるポケモンたちが日夜熱中症になりかける彼の世話をいつまでたってもしていることから分かる。

前よりはマシになってきた、という進歩もなく。夏が来ればもはや当たり前になってきた光景だ。

夏場以外でも牧場にいるポケモンたちに体を冷やしてもらうことはザラにあるし、最近では男と同じく暑さが苦手なポケモンのためにこの間一つの部屋を苦勞して貯めた金で改造したばかり。

ポケモンのために改造したと言いながら牧場主がその部屋に入り浸り同じ牧場の経営者に説教を食らったことも、完成したばかりだというのにすでに数えられないほどである。

だがこれは決して自分のための改造ではない牧場主は胸を張って言えた。

牧場といっても全てのポケモンを放牧して育てているわけではない、中には気候や環境、体調を理由に外に出さずに面倒を見なければならぬポケモンもいる。

そういう特殊なポケモンのためには金をかけて特別な部屋を作らなければならぬのだ。

必要経費である、と彼は唱える。

だが牧場主の経営する牧場は彼が気に入ったポケモンも連れ込んでいるからそれが必要になるのであって、もう一人の経営者としては「必要にさせてるのは自分だわ」ともはや呆れ顔しか出来なかった。金食い虫を作り出しているのは牧場主自身だ。

そんな呆れ顔の経営者を無視し強引に完成させたばかりの（残念なこと）にすでに牧場主の暑さ避難場所になってきている（改造部屋もまた、夏場は氷ポケモンには朝も夜もキツイだろうと考えた男が今まで貯めてきたなけなしの金を使って改造した熱帯が苦手なポケモンの（そして暑さに弱い自分自身の）ための部屋だった。たとえ牧場主が入り浸っていようと、そういう目的で作られた部屋であるのだ。

牧場主はそりゃもう、この部屋を改造するのに労力も時間もかけた。こんなに苦勞することは彼の人生の中でもなかなかないものだった、

くらいには頑張った。  
そしてそれには理由がある。

彼はまるで神から愛されたかのようにありとあらゆる才能に満ち溢れていたが、どうしてか牧場の経営と性格だけは悪魔に悪戯されたといわんばかりにひどいものがあつた。

実際牧場を経営するまで自分の欠点は性格の悪さくらいだと思つていた牧場主も、自分のあまりの運営のへたさに啞然としたものだ。家族から縁を切られてまでも自分の意思を押し通し始めた牧場の軌道に乗らなさは、仕舞いには本人ですら啞然を通り越して笑つしかなかったほどだつたのだ。いや笑いごとではなかつたのだが。

そんな当初から火の車だつた牧場の経営を立て直せたのは彼の諦めない不屈の精神……などでは決してなく、偏ひとえに牧場経営にあつてのパートナーが出来たからだといえる。  
人生のパートナーでない点がミソだ。

成り行きからパートナーとなつた、牧場主と同じように牧場を持つのが夢だつたのだと公言するユカリという女性は実にポケモンの経営が上手かつた。

それは彼女に任せたおかげで牧場の軌道がようやく安定しだしたほどである。

（もっともユカリから言わせれば牧場主の経営の仕方が常に最悪の選択しかしていなかつたのだから軌道が安定するのは当然だということらしいのだが）

牧場主は彼女の登場に大いに舞い上がった。

いつも口について出る毒も5割減つたほどだ、それでも口が悪いとの指摘を受けたので普段の彼の言動の酷さは相当なものだと分かる

のだらう。

そして彼女によって牧場が安定したことをいいことに、牧場主はすぐにユカリに牧場を任せ牧場とは関係のないところで金を稼ぎ出した。

なんで牧場なんてやってんのお前もうそれ辞めて別のことやれよ、と言われんばかりの輝かしい経歴を時にはバトルリーグで、時にはコンテストで、時にはミュージカルで叩き出しただひたすら賞金を稼ぐ。

狙うのは常に金額の高い大会だ、それ以外には出ない。

勿論賞金の高い大会は強豪揃になる、だがそれでも牧場主は常に勝ち抜き賞金を手にしてみせた。

嫉妬さえ馬鹿らしくなるほどの才能。天才だと評価する人間も後を絶たず、実際に牧場より他の仕事に就いたほうがいいと面と向かって言われることさえ多々あった。

もっとも牧場主が欲しいのは経歴より金であったし見ず知らずの人間から褒められるならまだしも将来について口出しされるのは大嫌いだったため、そんな誘いは本人を目の前にして鼻で笑い口の悪い言葉とともに蹴ったのだが。この性格の悪さは牧場が火の車状態であった苦い経験から、ではなく元からである。

自分の仕事にケチを付けられたのだから不愉快に思うのは当たり前だろう、だが牧場主はその怒りを内に留めず3倍にして吐き出す。彼に友人と呼べる人間が希少なのはこれが理由のひとつである。

ある意味では自分の心に素直と呼べるかもしれないが、口から出てくる言葉は悪意に満ち溢れている。

まあそれは置いて。

とにかく牧場主はひたすらに金を稼いだ。

逆にいえば彼にはそれしか出来なかつたのである。牧場を持っていながらそれに手を出せば途端に立ち行かなくなる。

だからこそ牧場の経営には手を出さずひたすら金を稼いで、自分の持つ牧場がよりポケモンにとって快適になるようにとひたすらに努力した。

その結果の一つが先ほど述べた改造部屋なのだ。

その改造部屋に妥協なんてものは存在しない、出来る限りの金をかけてユカリが苦笑するほどの部屋にしたのだ。

牧場主にとってはまさにポケモンたちとの努力の結晶。

その部屋が、この間完成したばかりの金のかかつた部屋が、もの見事に破壊光線にて壁ごとぶち抜かれることになるだろうとは誰が想像したものか。

恋人同士でもない男と女が一緒に暮らすのはどうなのだという主張からユカリは家に帰り、彼自身は牧場でポケモンの世話をしていたのだが、そんな最中突如聞こえた騒音に慌てて音がした場所に駆けつければそこには壊れた改造部屋。

それまでかけた苦労も金も、全てが水の泡になってしまった瞬間を間近で見て、牧場主は自分の顔から表情が消えていくのを感じた。

もしこれが年月がたつて仕方なく壊れたものならば男も諦めがついた。

あるいは牧場にいるポケモンが何かしでかしたのだとしても、まあ諦めがつく。

教育的指導が勿論入れるし、修理代の金はそのポケモン自身の力で



(全額とは言わなくとも)稼いでもらうこととなるが。

だがその全てに当てはまらないとはどういうことだ。能面のような顔は、次第にその惨状を理解して歪み始める。その顔は泣きそう、というより怒りに満ちたものだ。

壊れたのではない、その作ったばかりの一部屋は故意に壊されたのだ。

それを証明するようにバイクのようなものに乗ってさあ今から逃げるぞと言わんばかりの男たちがくりつけている檻には、自分が丹精こめて育てているポケモンたちがぎゅうぎゅうに入れられている。

それはつい最近生まれたばかりの、まだ力もないポケモンたちだ。氷ポケモンであるその子たちは子供ゆえに暑さになれておらず、だからまず第一に避難場所としてあの部屋にいられたのだが。

よもや手袋をせずに檻に入れてはいないことを願いたい、人間の常温で触られたりしたら体温の違いから火傷になることだってありうる、そもそも生まれたばかりのポケモン達は非常にナイーブなポケモンであり、環境の変化に弱いのだ。

それをあんなふうに、しかも高い金を出した改造部屋を壊して！

「ポケモンの窃盗未遂、家の破壊、睡眠妨害……その他もろもろ含めて、慰謝料を請求してやるから覚悟しろ」

窃盗犯。犯罪者。

牧場主はそれに対し度肝を抜かれただ警察に通報することしか出来ない男ではなかった。

いや素人が犯罪者につつかかっては逆に危険というものなのだが、怒りで頭が沸騰したような彼にはそんな正常な判断は下せない。

なんたつて彼は基本的に才能に恵まれた人間であつたので、大抵のことは一人でこなせてしまうのだ。  
額に青筋を浮かばせながら警察に連絡したと同時に、牧場主はいつも持っているモンスターボールからポケモンを呼び出した。

「ライチュウ、10万ボルト！」

これだけ騒ぎを起こしてまさか見つからないとは思っていなかったのだろう。

破壊光線で家の壁をぶち破りバイクで逃げ始めたばかりの男たちは、鬼の形相でポケモンに乗って追いかけてきた牧場主に対し焦ることもなく冷静に対応した。

10万ボルトは男の一人が出したポケモンに受けきれ、そしてそのダメージを確認しようともせず出てきたポケモンに指示が下される。

「ダグトリオ、地震」

「ハッ、格の違いって奴をみせてやれ、地震ごとき避けられるってなあー！」

10万ボルトをダグトリオにヒットさせたライチュウは相手が電気がタイプの苦手とする地面タイプだったことに舌打ちをした後、牧場主に言われた通り地震を避けるべくスピードを上げた。

そしてダグトリオが地震の動作に入る直前に、男たちによって壊されここまで吹き飛んでいた壁の一部へ飛び乗り、そこから戸惑う様子も見せず空中へと高くジャンプする。

そして牧場主が乗っているポケモン……ギャロップもまた地震を避けライチュウを追うように高く高く飛び上がった。

そうしてライチュウとギャロップがジャンプしてから僅かに遅れてダグトリオの地震が炸裂するが、それはすでに空にいるライチュウとギャロップまでには届かない。そのことに今度は男たちは舌打ちをした。

地面を揺るがすほどの地震を避ける術が翼や浮遊だけとは限らない。跳躍力だって使いどころを間違えなければ地震が届かない空へ逃げ切ることが出来るのだ。

今の攻撃で牧場主ごと怪我を負わせるつもりだった男たちは、地面の揺れには滅法強くしてあるバイクを止めて正当とはいえないバトルを真正面から受け止める。

いくら揺れに強くとも、このまま地面技を使い続けていれば足元を掬われ転倒という可能性もあるのだ。

だがギャロップとライチュウは二匹とも地面が苦手なタイプ、空中から降りてきたところを地震で一掃出来るはずだと信じて疑わなかった。

「後悔する時間なんていらねえよな？」

そんな男たちと対峙する牧場主もまた、自分の勝利を疑っていないかった。

地面から離れられないダグトリオにとって空中戦は不利以外の何者でもない。

一応空を飛ぶポケモンへ有効な攻撃もあるのだが、それを使ってこ

ないということはこのダグトリオはその技を覚えていないのだろう。大人しくこちらが地面に降りることを待っている様子からもそれが窺える。

追撃したいのならば追加でポケモンを出してくれればいい。

それなのに男たちは新しいポケモンを出してこない、ということは地面に足をつけたところで大方範囲の広い地震で一掃するつもりなのだ。

地震は敵味方なく巻き込む大技、飛行タイプや浮遊を持ったポケモンなら難なくかわせるのだが、遠距離の攻撃も得意とするギャロップや飛行タイプに天敵の電気タイプであるライチュウがいる以上そういったポケモンは出し辛いのだろう。

電撃も炎も空中にいたとしても放てるのだから。

だから援護はない。その前提があれば何が得策かは自然と見えてくる。

なのでギャロップより跳躍力がないために先に地面へと下りることになるだろうライチュウへ、牧場主は慌てることなく指示を送った。

「そのままの勢いでいくぞ、気合いパンチ」

空中ならばそう簡単に攻撃がくることがないことを利用し、牧場主は攻撃までに若干のチャージが必要な気合いパンチを命じる。

空中にいるライチュウには、地面から離れられないダグトリオはなす術がない。遠距離の攻撃があればあるいは可能だったかもしれないが、その攻撃のほとんどはポケモンが地面に足をついていればという前提がつかだろう。

それは男も分かっているのだろう、ライチュウの気合いパンチから逃れるべく新たな指示を出す。

「穴を掘る！」

男の言葉にダグトリオが地面へと体を沈めた直後、ライチュウの気合いパンチがつい一瞬前までダグトリオがいた場所へと炸裂する。地面を揺るがすような音がするが、それは所詮地面。ダグトリオではない。

避けられたことに気づいたライチュウはすぐさま身を翻すと、長い尾を地面に突き刺した。

ピカチュウの頃から地面に尻尾から電流を流し体内にたまる電気を一定にするという特性を持っているライチュウは、それゆえに多少ならば尻尾を通して地中の動きを察知できる。

いつもやっている行為の中で、いつもと違う気配だけを辿ればいいのだ。

地面の中を掘り進んでいる気配を探ることなど簡単。他のライチュウに出来なくても、このライチュウにとっては手に取るように分かることだった。

「影分身」

空から降ってくるような牧場主の命令に、ダグトリオがどこを掘り進んでいるのか把握し始めたライチュウはその尻尾を離し、その気配からおおよそ出てくる場所を予測しながらも分身を作り出す。

視覚を誤魔化すためのソレは見えなければ意味がない。だから恐らくダグトリオには通じない。

しかし指示をするのはダグトリオではなくトレーナーである男たちだ。

空中をまた脚力を使って飛んでいる影分身もいるため、迂闊に何度も地震を使ってしまうえばライチュウに当たらないどころか余波で自

分たちの足元が掬われかねない。

かといって地面にもぐっているダグトリオをボールに回収することも出来ない。穴を掘るがライチュウに当たらなかつた場合反撃を食らうことも目に見えている。男たちにはどれがライチュウか分からない現状では、なかなか攻撃へと転換しにくい。

ミスリードを狙っている、ということはバトル慣れしている人間ならばすぐに分かる。

だが今回に限っては牧場主の狙いはダグトリオへの指示を不資格なものにすることではなかつた。

ダグトリオをボールに戻すまでは逃げることはしない……くらいには自分のポケモンに執着しているらしく逃げる様子もなくバトルの指示をするトレーナーの頭を鈍らせればそれでいい。

そんな牧場主の企みどおり、影分身に顔をしかめた男たちは焦つたような声でやや不資格な指示を出す。

その瞬間、一瞬ではあるもののライチュウより高く飛び未だに地面に着地していない牧場主のことが、男たちの頭から消えた。

地面タイプが弱点のポケモンが二匹ということで油断していた己の思考に今更ながら後悔し、慌てて他のポケモンを出そうとボールをつけたベルトに手を伸ばした瞬間、

「ド三流、空を飛ぶポケモンの対策をしなかつたことがまず可笑しいんだよ」

突如背後から聞こえた声。

ライチュウに気を取られていた男たちは、ギャロップが空中から降りて自分たちの背後をとつた瞬間を見逃していた。

慌てて後ろを振り向けば、そこには地面に足をつけた凶悪犯のような笑みを浮かべた牧場主と、前足を上げたギャロップが一匹。

「死ね」

ギヤロップがその前足を止まっているバイクに容赦なく叩き付けた瞬間、頭から背中まである炎が爆発的に膨らんだのを男たちは見た。

「で？ この落とし前はとうつけてくれんだよ？ あ？」

警察が来た時には、どちらが加害者でどちらが被害者なのかが非常に分かりづらくなっていた。

もし小さなポケモンたちが牧場主にしがみついて泣いていなければ、「確保！」といわんばかりに牧場主の身柄を拘束していたかもしれない。

それくらいに男たちはしつかりと牧場主に報復されていた。

「クソが死ねよとりあえず身元が分かった瞬間にテメエらの親族親戚近所中にごこのことぶちまけるからな、せいぜい刑務所で親族から憎まれてるよウジ虫野郎共」

そう言いながら男たちの顔をグリグリと足で地面に押し付けている姿は、「あ、傷害罪」と警察に思わせるには充分だったのだ。本人は「正当防衛です、それ以外の何物でもありません」と言っていたが、とてもそうとは思えない。

男たちが自供しなければ牧場主も「ちょっと牢屋で一日お泊りしようか」なコースになっていたに違いない。今回は地震を打たれ身の危険があつたからということとでジュンサーさんの説教だけで済んだが。

だが牧場主にとってはそんなことはどうでもいい。この熱帯夜をあの涼しい部屋無しで過ごすことになつたのだ、彼にとっては死刑宣告以外の何物でもなかつた。

もうなりふり構つていられないとユカリを電話で呼び出し（炎タイプのポケモンもいる牧場で過ごせるとは思えなかつたため世話を代わってもらおうと考えたのだ）、つぎ込んだ金と月日を一瞬にして破壊してくれた男たちへの未だふつつと収まりきらない怒りに地面を蹴りつける。

盗難騒ぎがあつたと言つたからか夜中だというのにユカリは文句一つ言わず急いで仕度してそちらに行くと言つてくれたのだが、牧場主にはそんなことはどうでもよかつた。

頭を占めるのは壊された改造部屋のこととそれに関連する物事だけだ。

「保険金が下りるつつたつて時間がかかるしそれから修理するにしても時間がかかりすぎんだよマジでイラつく」

しかも警察が来る前に男たちから聞き出した話によれば、この男たちは違う地方からわざわざこちらまで出張したらしい。なんでもどこかの組織に入っているとか。



そんな重要なことをペラペラと口にするあたり、下っ端かそこらの人材。

組織に命じられてここを襲ったらしいのに、男たちを痛めつけたところで組織にたいした被害はいかないであろう歯がゆさ。

(…ん？ 下っ端？)

そういえば従兄弟も最近悪の組織の下っ端なんてアルバイトに就いたと言っていないかったか。

たしか従兄弟がいた地方は男たちが口にしてた地方と同じだったはず。

と、いうことはだ。

(ああ、そういうことか。成程？ へえ……)

従兄弟に会いに行くか、と牧場主はその瞬間思いついた。

とにかく組織に痛手を食らわせてやらなければ腹の虫が収まらないが、行き成り行動して従兄弟を犯罪者もしくはニートにしてしまうのは流石に可哀想だという普段はない慈悲が牧場主に芽生えたからである。

再就職先を探すことを手伝う気はさらさらないが、それとなくフォロワーに回って親戚が犯罪者にならないようにするかと考えるくらいには牧場主は従兄弟をかわいがっていた。

それならば悪の組織でアルバイトを言った時に止めていればいいものを。

それに従兄弟が所属する組織とは地方が同じだけで別の組織である可能性も否定できない。

それなのに牧場主の見当違いなさか恨みから大打撃を受けて結果リストラの嵐になれば、間違いなく下っ端の従兄弟はクビになるだろ

う。

どっちにしろとばつちりは従兄弟にいく。悪人なんだからそれが当然といえば当然なのだ。

(ニートになって餓死されちゃさすがに後味わりいな)

というかヘタをうつて親戚から犯罪者が出ると周りがめんどくさい。そう牧場主は強く思った。

だから行こう、と思った。

とりあえず従兄弟の所へ、そしてここよりはまだ涼しい(それでも熱帯夜なのだ)所へ。

改良部屋をぶっ潰してくれた組織たちに仕返しするべく、また身内から犯罪者が出て牧場の経営がまたひどいものになることを避けるべく。

「となりやさつそくユカリと話をつけないとだな」

だがしかし、ふふん、と笑った牧場主から遠く離れたところで、その従兄弟の部屋もまた時を同じくして崩壊していたのだということ。を彼はまだ知らなかった。

番外編 牧場主とライチユウ（後書き）

ギリギリ今週に間に合った！

話を書いていて悩むのは「キャラが話さない」ことです。私が書く  
と心の中だけおしゃべりなキャラ（主にサイカとかサイカとかサイ  
カとか）が多くて困ります。

あと容赦のないキャラが書けない、どうしても情けが出てくる。な  
ぜなんだ。

## 第26話 青年と悪い人たちその1

最近、息つく暇もなくどんどん色々な厄介ごとが舞い込んでいる気がする。

いや違う、気がするじゃない。絶対に舞い込んできてる。絶対に。少し前まではしたっばとして普通に仕事をして一日を終えていたはずなのだ、それなのに最近と来たら毎日が（嬉しくない）イベントの宝庫ときてる！

なんでなんだろうな、マリンと正義の味方君との出会いから始まりここ最近トラブルは毎日のように押し寄せてきてるなんてさあ。

もう仕組みれてるとしか思えない、誰かがドツキり大成功！的な看板を持って現れても納得出来る。

むしろそうであってほしい、それくらいに最近はひどいぞ。この都会にきてから厄介ごとばかりだ。実家に帰りたい。

俺の日常はどこに消えた！最近ハプニング続きでそろそろ体も心も悲鳴を上げそうだ！

俺はただデルビルが欲しいだけなのに！

デルビルが手に入ったらこんな仕事やめてやるっていうのに、どうしてこういう区切りがつきそうなときに限って厄介事が舞い込むんだろうか。

荒波立てさせないでくれよ本当に。こんな状態になっても悪の組織で未だに働く気があるのはデルビルがもらえるからってだけなんだから。マジで。

だってそうだろ？ デルビルは最高だ。

まずなんてったって悪タイプ、もうそれだけでたまらない。

しかも魅力はそれだけじゃないってのがまた！

(一般的にはどうしてか不気味だっって言われてる)夜明け頃に聞ける遠吠えなんて最高だし、チームワークはもうハンパないし、賢いし、デルビルのときはかわいさも目立つのにヘルガーに進化した途端にかっこよくなるあの外見もまた…！

「サイカ、意味もなく百面相すんな」

「してないって」

してたかもだけど。

リク君と約束をした次の日、悲しいかな当たり前のごとく残業無しの夕方までの仕事で終わった俺は(マシロ幹部は今日も来なかった)のでリーフが錯乱してた。もうお前仕事を辞めてマシロ幹部がいない場所で養生したほうがいいんじゃないか。「約束忘れてました、行けません。今流行りのてへぺろで許してちょ」なんて最低のことをするより早く従兄弟のお兄様に連れられて空を飛んでいた。

いや今の言い方は可笑しいか。これじゃ俺が自力で空を飛んでいるようだ。

詳しく言えば、いつものようにドンカラスの足に捕まって空を飛んでいた。

俺の前にはオオスバメに乗ってるリク君の姿、エアームドに乗っているお兄様の姿が見える。

いや、見えるっつーか……どんと豆粒になっていくというか……

あああ速いです速えよ二人ともお願い待ってねえ待って待てやコラ！！

レベルの差を理解してくれ二人とも俺を連れ出したんなら置いていくなよ！何考えてるんだよ！

こっちは見失わないようにするのに精一杯だ！だいたいポケモンの背中に乗っているお前らと違って俺は己の腕力でドンカラスに運んでもらってんだぞ！？

スピードもそこまで出せないの分かれよ！

正義の味方君は子供だからともかく従兄弟のアンタは！分かって！

「リ、リク君の残りの仲間は！？ アクアとか、今日は一緒じゃないのか！？」

距離が離れているから質問するにも大声だ。疲れる。

仕事をした後くらい休みを下さい、そんなに難しい仕事じゃなかったのはたしかだけど疲れてないと思ったら大違いなんだからなお前ら。

俺は旅をしたこともなければ鍛えているわけでもない（悪党だけど）一般人だ、そこらへんにいる男だ。

だからそこを分かってくれよ頼むから、俺に合わせるとは言わないから頭の片隅で俺があたふたしていることを認識しておいて！本当においていかれるから！

そしたら置いてったお前たちが後から俺がないのに気づいて「なんでついてこないんだ」って怒るんだろ！？

理不尽すぎるだろそれ！

「俺の仲間は違うルート！二手に分かれよつて！」  
「へえ、それはそれは！」

「つーかそういう作戦とか聞いてないよ俺！多分お兄様も聞いてない！仲間内で仲良しもいいけどそこに俺も入れてください。俺は悪いやつを捕まえる（大事なこととしてその捕まえるやつは俺じゃない）ってことしか聞いてないんだぞ、そのための作戦なんて何も聞いてないんだぞ。」

「しかも二手に分かれたつーことは今の俺の辛い状況を分かってくれる人間もいないってことか！」

「アクア、マリンの姉よ、こんなときこそお前がきつと必要だったのに！」

「シスコンでちよつとアレなのはともかく、昨日の手土産からおそろく気遣いは出来ただろうに！」

「だが現実はこちらである。」

「くそ、なんて意思疎通の出来ていないパーティだ。」

「どうするよ俺、と考えてふとエアームドに乗っている最年長を思い出す。」

「そうだ、こっちには旅慣れしている人間がいるじゃないか！なんかこういうハプニングになったに違いない、となればさっそく意見を聞こう！」

「リク君の作戦を聞いていなくとも個人的に何か企てているのかもしれない！」

「カイル兄さんはなんか策あんの！？」

「あー？ 策なんていらねえよ、なんとでもなんだろ」

「もうやだこのパーティ。」

目的地付近に到達し地面に降りたときには、俺の腕はもう悲鳴を上げていた。

腕だけじゃない、肩もだ。これ、今はいいとして歳をとったらどうしようか。

でもドンカラス以外の空を飛べるポケモンを探すにしたってなあ…

…サザンドラか。

どうしよう、あいつに食い殺されるなら本望かもしれない。いや嘘だ、さすがに俺だって寿命で死にたい。頭から食われるのは遠慮したい。

でもサザンドラ自体は超欲しいんだけどな。

長時間ドンカラスに捕まっていたせいですっかりと固まってしまった肩や腕の筋肉をほぐして痛みを無くそうとせわしなく動かしながらそんな現実逃避に近いことを考えていれば、まったく疲労のない二人はさっさと先を歩いていく。

なんていうかさあ。

俺なんてもう、いてもいなくても変わらないんじゃないか？



「この辺りだつて」

「ああそう。んでサイカ、お前は遅い。ちんたら歩くな」

後ろからついていけば年長からそんなお叱りを受ける。

正直言つて殴りたいが、殴ったら最終的にこつちがヒドイ目に合うのは分かりきつているので抑える。

この暴君め！誰かに痛い目に合わされる！

自分が攻撃に出れないのがひどく情けないけど。

「腕と肩が痛いからそんなにスタコラ歩かれると困るんだけど」

だがせめてもの嫌味返し、と言葉に皮肉を込めてみた。

…あれ、これ皮肉になつてる？

案の定、従兄弟様はハンツと俺の皮肉を鼻で笑つてさらに嫌味で返してきた。

「だらしねえな、それでも大人か」

「腕が干切れそうなほどの速度を出させたのは誰だよ…！」

見事なカウンター、いやミラーコート。

ああそうだよ子供である正義の味方君が超元気な中俺一人だけがヒイヒイ言ってるのは情けないっいたらありやしねえよ！

精神的ダメージだこれ、結構きたぞ！

ああもうやだこのメンバー！

正義の味方君と二人きりでも辛かったかもしれないが、この人を含めての3人行動も非常にキツイ。

口から出る言葉が毒ばかりだからな。

その毒が少しでも正義の味方君にいかないよう（なんたつて正義の

味方君は子供だ。たとえ敵対しているとはいえ、あの人の相手をさせるのはいくらなんでも可哀想だ。俺が壁になれるよう頑張っているんだが、その壁はもう毒素によってドロドロに溶かされているよ。うだよ……むしろもうメンバーチェンジ。

アクアともう一人の仲間と俺の方がよか……いや、それでは正義の味方君があまりにも可哀想、か。

まさに袋小路。こうなることは始めから決まっていたかのようだ。

「まあなんだ、帰ったらゆっくり休めよ」と言うように鳴いて唯一俺を労わってくれるドンカラスだけが今の俺の味方である。

正義の味方君は悪党退治に急いでるし、従兄弟様は俺を気遣う気なんてカケラもないだろうし。

まああれだよ、俺の仕事を先考えたら二人からあんまりな扱いを受けるのも分かるけど。

ところで従兄弟様、正義の味方君はともかくアンタは俺が悪の組織の一員だって知ってるじゃんか。

扱いうんたらはともかく、なんであんたは俺に対してそこまで強気でいられるの？ 俺悪人なんだけど。

普通は怖がられる立場の人間なんだけど。なんでこんなに格下に見られてるんだよ俺……！

そうだよ俺は悪い男なんだよ。つうか犯罪者。この人といると自分がそんなことやってるの忘れそうになるけど。（相手が極悪人すぎ  
て）

だが思い出せ俺はしたっぱ！悪人だ！

そんな犯罪者がヘコヘコ媚を売ってていいのかって思わないのか？  
かけらくらいはしたっぱとしてのプライドがあるんじゃないのか？

いつまでもヒエラルキーの下層にいたっていいことないだろ、もつと強気になれ俺！

今こそこの状況を打破するときなんじゃないか！

「んで、この辺りにハンターが来るのは間違いないわけだ」

「仲間が調べてくれたから、間違いないはず」

「んじゃあ来たらバトルに持ち込めばいいな。サイカも異存はねえだろ？」

「あ、ああ！もちろん！」

正義の味方君と従兄弟様が話し合っているのを聞きながら俺は決意を固める。

いつまでもこのままではいけない、ドンカラスたちに申し訳ない。

それにリーダー以外の命令を聞かないグラエナが俺を主人として認めてくれているというのに、こんなヘコヘコしすぎていたらいつか従兄弟>俺となって俺の命令を聞かなくなってしまう…！

それだけは阻止しなければならぬ。断固として！

だからさっきの言葉を撤回して飛び膝蹴り並の威力のものを食らわせてやるうと口を開き

「つまり待ち伏せて殺す、だ。これでいいな」

「殺す！？いやよくないよくない！捕まえるんだろ、なんでそんな発想が物騒なんだよ！？」

その決意が一言で一瞬で吹き飛んだ、何言ってるんだこの男は。

慌てて従兄弟様から正義の味方君を引き離す。

子供の前でよくもまあそんな言葉が言えるものだと思いつければ、フンと鼻で笑われる。

マナーも道徳も常識もねえなこの野郎！

「第一このくらいで驚くことはねえだろ。なあ？」

「殺す…はないと思う…」

非常識人間の言葉に、俺に引つ張られて距離をとった正義の味方君はドン引きしながらそう言う。

いくら最近の若者が結構キツめな言葉を使うとはいえ、リク君はまだ10歳くらいなのだ、そういう発言なんてドラマの中くらいしか聞いたことがないだろう。

俺も日常生活で聞くことなんかまずないけどな！

したっばって、雑談とかで話す内容が実は日常話とかそんなのばかりなので。わりかし穏健というか、仕方なくやってる人も多い仕事だから。

「ほら引いてるリク君が引いてる！分かるかこの外道！子供の前になんてことを！」

「瀕死にさせることを殺すと置き換えただけだろ、ウザったらしい」

「瀕死もねえよ！普通にお縄につかせればいいだけだろ！これだから彼女の一人も出来な」

「あ？」

「ごめんなんでもないでも殺しはいけないって俺は思うんだ」

つうかなんでこんな言い合いにならなきゃいけないんだ、俺ら何しにきたんだっけ？

もう俺ら馬鹿みたいじゃん、なんてため息をついた瞬間

「サイコキネシス」

そんな言葉が聞こえ、俺たちの動きは見事に封じられたのである。

……ほら、俺らもつ本当に馬鹿じゃんか!!

## 第26話 青年と悪い人たちその1（後書き）

2話連続で更新したかった…！

が無理でした。近い内に載せられたらなと思います。話の内容まるで進んでないしね…今回は導入部分です。最近そればっか。

とりあえず放置していた分はこれとポケスク2話分で補…えたでしようか？

次回は皆大好きエスパータイプです、エスパーの優遇っぷりにはハシカチを噛み締めるほどですよ。

あとツイッターなるものをはじめました。やり方分からなくて四苦八苦ですが。

皆やってるからマネしたくなるお年頃です。

## 第27話 青年と悪い人たちその2

「くっそ、油断した！」

突然サイコネシスで動きを奪われた体は、己の意思に反してピクリとも動かない。

なんとか口と目は動かせるが、腕や足はピクリとも動かない。

それは俺だけじゃなく、サイコネシスを受けた他の二人も似たような状況だった。

正義の味方君は突然の攻撃に目を吊り上げ周りを睨み、従兄弟様にいたっては……いや、俺は何も見なかった。

幸いなのは俺が出していたポケモンがドンカラスだったってことだろう。

なんたってサイコネシスは問答無用で無効化だ。

だがその唯一悪タイプでエスパー技が効かなかったドンカラスも、俺がこんな状態で目の前の敵に集中するべきか俺を心配するべきかで迷っている状態だった。

優しい子だもんなあドンカラス！でも今は敵に集中していいんだ！俺の心配をしてくれなくても大丈夫だから！

「ドンカラス、敵を探して……」

「や、その必要はねえ」

口は動くのでドンカラスに指示は送れる。

どこに敵がいるか分からない状態では何も出来ない！とドンカラスに偵察の指示を送ろうとすると、それに対しカイルさんが待ったを

かけた。

「は！？いや兄さん、でもな」

「さっきの技名、それなりにハッキリ聞こえてきただろ。それにサ  
イコキネシスで俺たちの動きを封じるにはそれなりに距離が近くね  
えと無理だ、ここまで完璧なら余計にな。つまり、敵は近い場所に  
いる。だからドンカラスを遠くへやるな、対抗手段がなくなる」

「ああ、そっか」

カイク兄さんの言葉に納得して声を出したのはリク君だ。

「うーん、俺も兄さんの言葉に納得したいのは山々なんだが…」

「じゃあなんでそいつらは出てこないんだ？俺たちの動きを封じ  
たなら追撃やらなにやらがあるじゃんか。近距離にいるんだろ？」

「馬鹿か。お前も知っているだろうが、俺たちが捕まえようとして  
いる奴等の目的を」

「そりゃ、ポケモンの密漁…あ」

「大馬鹿野郎、気づくのがおせえ」

なるほどポケモンの密漁を行うなら、その前に騒動はなるべく起こ  
したくない。

なぜなら気配に敏感な野生のポケモンたちは、それに反応して散り  
散りに逃げてしまふ可能性があるからだ。

声だけならさほど警戒はされない、なぜならば人間よりよほど大き  
な声で鳴くポケモンはいたるところにいるからだ。

むしろ反応されるのは、振動の方。

大概大柄なポケモンは体重が重く、歩くたびに振動がある。

そしてそういうポケモンは小さなポケモンたちにとって天敵となる  
可能性が高い。



だから小さな体をしたポケモンたちは身を守るため、振動を感じる  
とすぐに逃げてしまうのだ。

群れで逃げるよりも小さな体を生かしてバラバラに行動し、後々決  
めた場所で落ち合う。そしてまた群れとして行動する。

だからこそ、ポケモンを大量に捕まえるときには振動は厳禁。

密漁とまではいかないが、景品確保のためにポケモンの大量捕獲を  
やったことのある俺もそこを気をつけて仕事をしている。

「なるほど、だからサイコネシスで動きを封じるだけですんでる  
んだな」

ポケモンを大量捕獲するまでへたに騒ぎが起きないように。  
だけどそれは逆をいえば密漁後は何をされるか分からないってこと  
だ。

今は優先順位が密漁より低いだけ。

ならその低いうちにこのサイコネシスから抜け出さないとマズイ。  
密猟者が帰ってくるより前にこのサイコネシスを解かないと！

「恐らく今技を放ったポケモンを置いて、トレーナーは密猟の方の  
準備をしているはずだ。トレーナーの動きさえ封じられればボール  
の中にいるポケモンなんて脅威でもなんでもないからな」

「…あれ、でも俺のドンカラスは、」

「こっちのポケモンもロクに見ないでやったんだろ。飛行タイプの  
ポケモンでも短時間ならサイコネシスで動きを封じられる、たと  
え相性が悪くてもだ。俺のエアームドだって現に動けねえだろ」

「いやでもそんな」

ポケモンを見もせずサイコネシスかけて安心して場を離れるなんてマネ、したつぱでもしねえよ。  
ドンカラスやバルジーナで空を移動する可能性だってあるわけだろ、むしろ低くないはずだ。

こればかりは従弟様の推理は間違っていると指摘すれば、従弟様は「はあ」とあからさまにため息をついて俺を見た。

何故か、呆れたような目で。

「…お前、悪タイプがメジャーっていう妄想はいい加減やめろこつたな」

「はあ!?!」

妄想つて。あんた妄想つて!!

いきなり何を言うのかと顔をしかめれば、従兄弟様はやれやれというように言葉を続ける。

「悪タイプ使いのトレーナーは滅多にいねえよ。エキスパートと呼ばれる人間でもある四天王3人は確かに有名だが、それだけだろ。悪タイプ専門のジムもない、研究発表されたポケモンの説明では負の部分が目立つ、そしてポケモン自体も悪知恵が働く奴等ばかり、あげくにトレーナーは高い技術が求められる。力押しは出来ねえし、何よりクセが強すぎて使い辛い」

「はあああああ!!!? ちょ、悪タイプの悪口はいい加減にしろよな!!!」

「悪口じゃねえよ、真実だ。んじゃお前、イタコやら海パン野郎やら鳥使いやら専門のポケモン使いの中で、悪タイプを見たことあんのかよ」

それはないけど!!!

いやでもここまで言われる筋合いはないはずだ。  
確かに有名どころは四天王のみだし、ジムはない。だが他の部分は認めないぞ絶対に…！

愛好家はいたるところにいるんだよ！

悪タイプと一緒に目立つのがそんなに好きじゃないだけで！ いたるところに！ いるの！

「ないだろ。それだけ手が出しにくいってことだ。そんなポケモンを持つトレーナーはまずいない、だからトレーナーは警戒せずにサイコネシスだけを命じてこの場をさっさと離れたんだよ」

「納得できない！ 悪タイプはマイナーじゃないメジャーだ！」

「メジャーになりたかったら専門のジムがあつてエキスパートの四天王がいて、尚且つサイキッカーなんて専門トレーナーがいるエスパイタイプくらいになつてから言え」

「うわあああああ！！！！」

「煩い。あんまり煩いとトレーナーが戻ってくるだろうが」

最悪だ。

じんわりと目が熱くなってきた。泣きそう。

まさかエスパーに劣っている宣言をされる日がくるなんて思わなかった。

何がいけないんだ悪タイプの。

相手の裏をかいて作戦を練る楽しさ、相手を翻弄し尚且つこちらが有利に立つための瞬時の計算、トリッキーな技をいかに上手く使うか。

それが楽しいんじゃないか！ なんて面倒な子扱いされなきゃいけないんだよ！ 否定されなきゃいけないんだよ！

ポケモンバトルの醍醐味はそれだろうが！ 楽に勝てるとか意味ねえんだよおもしろくねえんだよ汗水たらして一緒に勝ってこそだろうが！

そもそもエスパータイプに劣ってるって言われること自体が許せない！

悪タイプはエスパータイプに有利、つまりはエスパータイプに勝ってるってことなのに！

こんな、こんな！ こん、こんな、こ、ここここここ

「もう我慢ならない！！ ドンカラス！ 俺のボール右から二番目と三番目！」

「ついでに俺のボールもだ。一番左」

「あ、俺も！真ん中二つ！」

許せない！ エスパー許せない！

なんか引いてる（何でだよ！ お前は悔しくないのか！！？）ドンカラスに命じて、腰につけているボールの開閉スイッチを嘴で押してもらい、ポケモンを呼び出す。

おそらく俺たちの行動を封じているエスパータイプは見張りをさせられてるんだろう。

サイコネシスをしている最中はどうせ他のことが出来ないからな！ ドンカラスが何やっても俺たちの動きを封じている以上手出しは出来ないだろうよ！

でも俺は容赦しない！

だからボールから出てきたグラエナとヤミラミにも容赦ない指示を飛ばす！

「グラエナ、ヤミラミ、嗅ぎ分けると見破るでこのサイコネシスをやってるポケモンの場所を探れ！見つけ次第キッツイのをお見舞いしてやれ！」

「ユレイドル、ミラーコートだ！」

「ボスゴドラ、メタルバースト」

俺がそう命じたと同時に、ドンカラスによってボールから呼び出されたラグラージとユレイドルに兄さんとリク君も技を命じる。

悪タイプじゃなくてもちゃんと対抗技持つてるのか。てかさういう使い方もありなのか。

つーか兄さんのボスゴドラはともかくリク君ユレイドル持つてるんだ。渋いよポケモンが。

出てきた瞬間に封じられた二匹にポケモンは、しかしバツチリと技を発動させる。

多分出てくる前から何を指示されるのか分かっていたんだ。ボールから出てきてサイコネシスで動きを封じられるまでには若干のタイムラグがある、それを利用した攻撃。

しかも俺のグラエナとヤミラミが走り出してすぐにミラーコートとメタルバーストが発動なんてタイミングなもんだから、いくらなんでも早すぎだろと内心文句を言う。

走り出したグラエナたちはすぐに目視できなくなってしまったが、数秒の間で大きな音と振動が響く。

その途端体が自由になり、勝敗が分かった。大方相手は油断でもしてたんだろつよ。

「つとつ」

いきなりサイコネシスが解かれて体がぐらついてしまい、咄嗟ではあるものの膝をついてしまう。

リク君も「あたっ！」と尻餅をついたし、カイク兄さんは……あれ、この人グラリともしてねえ。なにこの人。

実はサイキネかかってなかったんじゃないかねえのとか思い始めていると、ドンカラスがそんな俺の背中を翼で優しく摩ってくれた。

ああ、やっぱりエスパタイプより劣っているなんて嘘だ。

悪タイプのポケモンはこんなに優しい子たちなんだから。

「さてと。どうするよ」

さっそく自由になった体をほぐすように動かし始めれば、カイク兄さんが凶悪な顔で笑いながらそう言う。

あ、若干リク君が引いて俺の背中に隠れた。イイヨイイヨ、この人怖いから隠れてイイヨ。俺は少しは慣れてるから大丈夫。壁になれる。

「どうするって?」

「動きは封じられてても気絶まではさせられなかったのは、叫び声の届く距離なんて限られてるからなんだよ。だが振動は違う。もともとポケモンは音より振動に敏感なんだ。今の攻撃で恐らく密猟者たちが来るぞ」

「なら、戦うしかないよ」

兄さんの言葉に対し、俺の背中から顔を出したリク君は自信満々に言っただけからエンペルトを呼び出す。

無鉄砲な……と思うのだが、無理とは思えないだけの実力をリク君は持っているもんだからその言葉に不安は感じない。

感じはしない、が。

「問題はそいつらが何人いるか、だよな」

「ああ。負ける気はないが数が多けりや多いだけ厄介だからな。ここはいつそ、分かれて行動するのもありだな」

「え、マジで」

実力者のリク君や兄さんはともかく俺はどうすんだよそれ！

密猟者一人ならともかく何人とも相手できるとは到底思えない。一人、一人しか受け付けられません！

「アクアたちは反対側から攻めるって言った。挟み撃ちって出来るかな」

「やめとけ、挟み撃ちにするんならもつと綿密な計画がいる。それよりさつさと密猟者を撃破していけばいい」

「そんな力任せな！ここはアクアたちと合流すべきだろ！」

だって撃破とか無理無理無理、どっちかと一緒に行動しないと無理だって！

それにアクアたちは密猟者がポケモンを捕獲するところを狙って不意打ちに出るつもりだったんだろ（と、思う。別行動ってなると他に理由が思いつかないしな。多分俺たちはその際に逃げにでた密猟者たちの相手をする係。…計画聞いてないから多分だけどな！）。こんなことになった以上その計画はもう出来ないが、かといって力押しでなんとかなるってわけが…。

「相手の実力も分からないのに」

無理だ、と言いかけて、ずるずると何かを引きずるような音に気づく。

何事かと音がした方向を見れば、そこにはブーピッグを引きずって

やってくる俺たちのポケモンの姿が。  
あ、グラエナが嬉しそうに尻尾を振った。ヤミラミも手を振っている。

ああかわいい！ ……じゃなくて！

「いや、いけるだろ。あのブーピッグがいい例だ。相手のポケモンのレベルはそこまで高くない」

そりゃー斉攻撃のせいだろうよ。

その俺のツッコミは、見事に無視された。



## 第27話 青年と悪い人たちその2（後書き）

悪タイプのポケモンたちの図鑑説明を見る限り、あの世界で悪タイプのポケモンを好んで使うトレーナーは少ないんじゃないかなあとゴーストもですが、なんか一部のポケモンの図鑑説明怖すぎです。あんな説明されたら普通ゲットしようと思わなくなるんじゃないや……泣ける。

なので悪タイプ舐めプのような話になりました。書いてて自分の心にクリティカルヒットです。なぜ専門ジムがないのさ悪タイプ……。次回作では悪タイプを専門にするジムと普通のトレーナーが出ますように！ギャンブラー辺りが悪タイプ専門になっただっていいはず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4721g/>

---

悪の道奮闘記

2011年12月11日16時53分発行